

令和6年度

ティーチングポートフォリオ

神戸常盤大学

神戸常盤大学短期大学部

# 目 次

## 頁数

1. 保健科学部 医療検査学科 . . . . . 1～53
2. 保健科学部 診療放射線学科 . . . . . 54～102
3. 保健科学部 口腔保健学科 . . . . . 103～144
4. 保健科学部 看護学科 . . . . . 145～203
5. 教育学部 こども教育学科 . . . . . 204～261
6. 短期大学部 看護学科通信制課程 . . . . . 262～271

## ティーチング・ポートフォリオ

教員名	坂本秀生	所属学科	医療検査学科	職名	教授
クラス担任	学科長	クラブ顧問	なし		
委嘱委員・職務	運営委員会、学長会議、PCR検査センター責任者				

### 1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課（網掛け部分は外部公表しない）科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
○臨床検査入門	M	1	前期	必修	講義	対面	82
○医学概論	M	1	前期	必修	講義	対面	82
○検査機器総論	M	1	前期	必修	講義	対面	82
○分子細胞生物学	M	2	前期	選択	講義	対面	67
○遺伝子工学	M	3	前期	選択	講義	対面	53
○国際保健医療活動Ⅰ	M	4	前期	必修	講義	遠隔	79
○国際保健医療活動Ⅰ	N	4	前期	必修	講義	遠隔	83
○国際保健医療活動Ⅰ	R	4	前期	必修	講義	遠隔	65
○国際保健医療活動Ⅰ	O	4	前期	選択	演習	対面	60
○先進医学検査学	M	3	前期	選択	講義	対面	78
医療英語	M	2	前期	必修	講義	対面	87
国際保健医療活動Ⅱ	M	3/4	前期	選択	演習	対面	4
○隣地実習	M	3	後期	必須	実習	対面	89
○遺伝学	M	1	後期	必修	講義	対面	82
○文献講読	M	3	後期	選択	演習	対面	50
○総合医学検査特論	M	4	後期	選択	講義	対面	71
○総合医学検査演習	M	4	後期	必修	演習	対面	84
○卒業研究	M	4	後期	必修	演習	対面	81

### (2)準正課、正課外の教育活動

- ・ 成績下位学生へ国家試験対策の指導
- ・ 国際学会発表者に採択された学生指導
- ・ 大学院進学を目指す学生の進路指導

### 2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

学生が自ら考える力を養い、学生が自身の良い点に気づき成長できる教育。

3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングや ICT 活用等の工夫点について）

- ・ 学生が復習を行いやすくなるよう、授業で用いたスライド資料を PDF として manaba に掲載し、自己学習を行いやすくした。
- ・ 学生が面談に訪れた際には、良い点を聞き出して褒め、その後にもっとよくなるためにお、改善して欲しい点を指導する。

4. 今年度における教育方法改善の取り組み

上記を継続できるよう、学生面談を通して学生達の意見を反映し改善を継続。

5. 今年度の学生による授業評価より

遺伝子工学は前年度授業評価の総合は3.9であった。学生のコメントに資料の事前送付希望があり、今年度は事前配布した。その効果もあったのか今年度の総合は4.3となり、科目責任者を務める全科目で4.1以上となり、総合的に授業評価は良くなった。

学生からのコメントも、難しい内容について例を出して理解しやすく説明があり良かった。教科書の掲載ページと共に説明あり復習しやすかった、などの意見があった。

6. 今年度の成果

授業前に配布を行った効果が出て、授業も学生の関心が高まる工夫した成果がでたと言える。

7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

次年度も学生が理解しやすく、関心持つ授業を継続する。

8. 社会的活動等

日本臨床検査学教育協議会の理事長として、臨床検査学教育において全国の取り纏めを行った。

日本臨床化学会の理事として、国際交流委員会を取りまとめ、IFCC eJournal へ英文で投稿した。

日本臨床衛生検査技師会国際 WG の一員として、臨床検査技師の国際化事業に協力した。

日本医療検査科学会 POC 技術委員会副委員長として、POC コーディネータ更新セミナーを実施。

9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・ 授業における配布資料

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	林 伸英	所属学科	医療検査学科	職名	教授
クラス担任	2 学年 A クラス	クラブ顧問	なし		
委嘱委員・職務	遺伝子組換え実験安全委員長、臨地実習委員長、学内実習安全委員長				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
○臨床化学検査学Ⅰ	M	2	前期	必修	講義	対面	91
○臨床化学検査学Ⅱ	M	2	後期	必修	講義	対面	85
○検査管理総論	M	2	後期	必修	講義	対面	86
○臨床化学検査学実習Ⅰ	M	2	後期	必修	実習	対面と一部遠隔	89
○臨床化学検査学実習Ⅱ	M	3	後期	必修	実習	対面と一部遠隔	92
臨床検査入門	M	1	前期	必修	講義	対面	82
医学概論	M	1	前期	必修	講義	対面	82
卒業研究	M	4	通年	必修	演習	対面	5
大学道場ミニゼミ A		1	前期	選択	演習	対面	7
総合医学検査演習	M	4	後期	必修	講義	対面	77
総合医学検査特論	M	4	後期	必修	演習	対面	73
臨地実習	M	3	後期	必修	実習	対面	91
技能習得到達度評価	M	3	後期	必修	演習	対面	90
臨床技術入門	R	1	後期	必修	講義	対面	85

(2)準正課、正課外の教育活動

- ・ 国試対策等
- ・ 臨地実習における運用と学生指導（感染防止・病院でのマナー・挨拶）
- ・ 就職支援活動として履歴書および小論文対策指導

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

現在の臨床検査技師は、患者さんへの対応のみならず、組織でのチームワーク力と総合力、チーム医療での他職種スタッフとのコミュニケーション力が求められる。このような能力は即備わるもの

ではなく学生時代から徐々に積み上げていかなければならない。従って、実習や演習を通して臨床現場に適応できる技術者としての適性を育み、実践力を育成したい。

### 3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングや ICT 活用等の工夫点について）

臨床化学検査学実習Ⅱでは、臨床化学検査学実習Ⅰに引き続き実習をした最後にグループワークを実施した。manaba のプロジェクトを利用し、学生同士の意見交換が遠隔で実際の対面と同等のやり取り、まとめたプレゼン等を提出がさせた。提出後には課題の模範解答を示し、自分たちの考え方が正しかったがわかるようにした。

### 4. 今年度における教育方法改善の取り組み

#### ・ 授業進行の工夫（臨床化学検査学Ⅰ・Ⅱ）

授業内容がそれぞれ 30 回の授業では収まりきれないため、授業の進行速度を早くする必要があるが、授業中に学生がラインマーカーやコメントの書き組みに集中すると内容が頭に入っていない。この対策として、教科書を PDF 化しラインマーカーや注釈を書き入れた資料を事前に manaba で提示し、学生が事前に書き写し、周辺部を読むことで予習を促進するようにした。

#### ・ わかりやすい授業の工夫（臨床化学検査学・検査管理総論）

PowerPoint を活用し、視覚的にわかりやすく、興味を引くプレゼンテーションを導入した。

#### ・ 国試対策の強化（臨床化学検査学・検査管理総論）

manaba 上で国試の過去問の重要なポイント抽出し、毎回の授業で簡単な小テストを実施した。

#### ・ 実習での学習支援（臨床化学検査学実習Ⅰ・Ⅱ）

①実習に関連する講義②実習の具体的な操作③実際の実習の 3 段階で実施した。①と②は manaba 上で遠隔（YouTube）で実施し、「自分のペースで」「じっくり」「何度も」「わかりやすい」ように工夫した。

#### ・ レポート指導の改善

レポートの記述ポイントを明確にするため雛形（テンプレート）を配付した。提出後に教員が評価・コメントを記入し、フィードバックを実施した。

#### ・ 専門知識の活用

認定臨床化学者（平成 17 年取得）として、臨床化学の専門的知識を授業に活用した。

認定臨床化学・免疫化学精度保証管理検査技師（平成 29 年取得）として、精度管理に関する専門的知識を検査管理総論の授業に反映させた。

### 5. 今年度の学生による授業評価より

- ・ 検査管理総論の授業について、学生から「国試に出たところを反映してくれるので助かる」との意見があり、「国試で覚えておくべきこと」を明確にした点が好評であった。
- ・ 臨床化学検査学の授業では、「書き込んだ教科書 PDF を公開してくれたこと」「マーカーを引く場

所が決められていたことで、大切なポイントが分かりやすかったこと」「小テストの計算問題の解き方を解説してくれたこと」など、学習の効率化や理解の助けになった点が評価された。

- 臨床化学検査学実習では、manaba 上での遠隔（YouTube）による事前学習について「事前に予習することで授業がスムーズに進んだ」「あらかじめ動画を見て実習に臨めたのでよかった」との意見があり、授業前の学習環境を整えたことが効果的であったと考えられる。さらに、「質問に対して丁寧に答えてくれた」「レポートの量が適切で、書くべきことが明確だったため、取り組みやすかった」「授業中に先生が見回ってくれたので質問しやすかった」「実習中にレポートを書くことができ、早く帰れるのが良かった」など、実習環境や学習のしやすさに関する肯定的な意見も多く寄せられた。特に、複数の実習が重なる時期において「他の実習科目では発表が重なり負担が大きかったが、本実習は課題形式で班ごとにじっくり考える時間があり、余裕を持って取り組めた」との意見があり、学生にとって受け入れやすい実習形態であったと評価できる。一方で、「試薬をもう少し分けて各班で使えるようにしてほしい」との要望があったが、この要望に応えることよりも、班同士のコミュニケーションを促し、学生自身が試薬を効率的に使用する工夫をするよう指導することが重要であると考えられる。大学道場ミニゼミでは、異なる学科の学生 7 名を対象に実施し、「生徒と先生の距離が近く、受けやすい授業だった」「勉強になることが多かった」との意見が寄せられた。学生同士の交流を深める機会となり、気軽に自分の考えを話し、他者の意見に耳を傾ける貴重な経験になったと考えられる。

## 6. 今年度の成果

- 検査管理総論については、新カリキュラムにおいて 2 年次後期の 8 回授業に再編成された。本教科が対象とするすべての臨床検査に共通する、正確かつ迅速な検査結果報告のための必要最小限の考え方を網羅しつつ、RI（放射性同位元素）と ISO15189 の内容をコンパクトにまとめて盛り込んだ。
- 臨床化学検査学実習では、終了時間が遅くなることが何度かあったが、manaba 上での遠隔実施を取り入れることで、定時に終了できるようになった。これにより、時間内にレポート作成や課題の回答を完了できる環境を整備できたほか、教員が学生の疑問点を解説する時間を確保できたことは、学生にとって有意義な機会となったと考えられる。
- 臨地実習については、臨床検査技師学校養成所指定規則の改正に伴い、本学では今年度より新カリキュラムによる臨地実習を適用した。実習期間は従来の 40 日間から 60 日間に延長され、実習施設での「必ず実施させる行為」や「必ず見学させる行為」が新たに設定された。加えて、衛生検査所および健診センターでの見学実習も実施し、より幅広い実習を提供した。

## 7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

- 臨床化学検査学実習において、「試薬をもう少し分けて各班で使えるようにしてほしい」という意見が複数寄せられた。しかし、教員が試薬を小分けにする対応を取るのではなく、学生自身が試薬を効率的に活用できるよう、班同士でコミュニケーションを取りながら工夫することが重要である。そのため、次年度に向けて、学生が主体的に考え、適切に試薬を分配できるよう促す解説を行うことに努める。

- ・ 新しい臨地実習の運用に関しては、臨地実習施設と協議を重ねながら、プログラムの作成や「臨地実習の記録」の更新を進める。さらに、評価入力の方法についても、より使いやすい形に改善することで、実習運営の円滑化を図る。

#### 8. 社会的活動等

- ・ 認定臨床化学者
- ・ 認定臨床化学・免疫化学精度保証管理検査技師
- ・ 生物試料分析科学会 評議員
- ・ 日本臨床検査医学会 功労会員

#### 9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・ manaba 上の授業における資料等、小テスト

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	米田 孝司	所属学科	医療検査学科	職名	教授
クラス担任	M4	クラブ顧問	なし		
委嘱委員・職務	危機管理委員長、ときわ教育推進機委員、国試対策委員長				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
○生化学Ⅰ	M	1	後期	必修	講義	対面	84
○生化学Ⅱ	M	2	前期	必修	講義	対面	86
○生化学	R	1	後期	必修	講義	対面	90
○栄養学	M	2	後期	必修	講義	対面	80
○栄養学	N	1	後期	必修	講義	対面	96
○薬理学	M	3	後期	必修	講義	対面	93
○薬理学	N	2	前期	必修	講義	対面	96
○輸血移植検査学実習	M	3	後期	必修	実技	対面	93
大学道場 mini-ゼミ A	基盤	1	前期	選択	演習	対面	6
科学技術論	基盤	1	後期	選択	演習	対面	14
医学検査サプリメント演習Ⅱ	M	4	前期	選択	演習	対面	81
総合医学検査演習	M	4	後期	必修	演習	対面	84
総合医学検査特論	M	4	後期	選択	演習	対面	71
卒業研究	M	4	通年	必修	実技	対面	81
技能修得到達度評価	M	3	後期	必修	実技	対面	90
臨地実習	M	3	後期	必修	実技	対面	82

(2)準正課、正課外の教育活動

- ・ 国試対策
- ・ 入試問題の作成と添削
- ・ 下位学生への学習支援

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

専門科目では、医療従事者及び臨床検査技師を養成するために、医療や分析の知識・技能の習得とともに、医療現場で対応できる実践力と倫理感をもった学生を養成する。特に、医療職になるには優しさ、

厳しさ、適応力、そして知識が必要である。知識だけを詰め込むだけでは良くない。病院では、チーム医療が重要になり、その一員として考え実践できるコミュニケーション力と実行力を育成したい。基盤科目では、大学の学修、研究の楽しさや考察力を培うことを理念とする。

### 3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングや ICT 活用等の工夫点について）

- ・ 座学は教科書と国試関連を中心にして iPad を用いて、分かりやすく、興味をもち、将来に繋がるような内容に工夫した。
- ・ 輸血検査実習では、グループ毎に異なる試料(ABO 血液型や交差試験など)を作製して、座学で学んだ内容を実践して、毎回最終的に発表して討論を行う時間を設定した。
- ・ 実習前には前回のレポート復習と今回の予習をさせ、実習後にはレポート提出により能力判定をする。また、最後に技能試験及び筆記試験による確認を行った。

### 4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・ 毎回の授業最後にその授業内の国家試験に関係する小テスト問題の解説を実施した。
- ・ 演習では、質問の多い内容を中心に解説して充実させるようにした。
- ・ 特論などの授業内容では、manaba を活用して、試験問題のみと正答・解説を記載したものを提出して事後学修に役立てた。

### 5. 今年度の学生による授業評価より

- ・ 担当科目の総合評価平均が 4.4 であったので比較的理解しやすい教育であったと思う。
- ・ 今年度は意識をして全体的にスピードを遅くしながら内容が多くならないように絞って講義したので「丁度良いスピード」という意見があり、今後も同じような内容で繰り返す予定である。
- ・ 栄養学の看護は「栄養学に関する国家試験問題を毎回提示してくれるのでモチベーションが高くなった」という意見があり、今後も少し国家試験を意識した説明にするつもりである。ただ「しゃべっている学生を注意してほしい」との意見があり意識しようと思う。前の席半分は誰も座らない。
- ・ 実習においては、内容が多く(試験管法・カラム法・スライド法を同時並行)、難しい内容であったと感じたが、大学の間輸血検査の失敗を経験して実感して反省する事も大事なので前向きに進める。特に「消去法が座学で習っていなかったのが困難」との意見があったが、分からない学生は実習後に質問させているので、もっと積極的に質問させようと思う。来年度からは座学でも教える。
- ・ 全般的に学生自身の学習時間が短めであったので課題の在り方について考えていきたい。

### 6. 今年度の成果

- ・ 「大学道場 mini ゼミ A」では総合評価 5.0 であったので、研究の楽しさや将来自分がする仕事との関わりを感じて興味を感じたのではないだろうか。1年生の時点で臨床検査関連に興味を抱くことは重要であり他の授業への波及効果も含め非常良かったと思う。

- ・ 国家試験対策として実施していた事が後半(特に、繰り返して国試過去問が 100%になるまで実施)に効果が表れ、ほぼ国試 100%合格になったと思うので続ける。

#### 7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

- ・ 次年度からは科目が変わる(放射線の生化学がなくなり、輸血移植検査学の座学が入る)が、基本的に配布資料や講義形式等に変更しないつもりである。従来と同様に国試問題と重要課題を色分けして教科書に下線を引く。
- ・ 実習においては、出来るだけ楽しくもあり、丁寧かつ厳しさを学べる授業にしたい。

#### 8. 社会的活動等

- ・ 今年度は大学教育に専念したかったので学会活動や研究などはあまりしていなかったが、次年度は研究も踏まえて学会活動を少し再開したいと思う。

#### 9. 根拠資料 (資料名のみ)

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・ 授業における配布、配信資料等
- ・ テスト問題

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	堀江 修	所属学科	医療検査学科	職名	教授
クラス担任	1年生Aクラス	クラブ顧問	なし		
委嘱委員・職務	入試委員会・M科代表、紀要委員会・委員、学生委員会・委員				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課（網掛け部分は外部公表しない）科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
○生理学 I	M	1	前期	必修	講義	対面	88
○血液検査学 I	M	2	前期	必修	講義	対面	86
○血液検査学実習 I	M	3	前期	必修	実習	対面	93
○労働衛生学 II	M	4	前期	選択必修	講義	対面	58
○生理学 II	M	1	後期	必修	講義	対面	87
○血液検査学 II	M	2	後期	必修	講義	対面	89
○血液検査学実習 II	M	3	後期	必修	実習	対面	93
○生理学	R	1	後期	必修	講義	対面	142
○環境生理学	M	2	後期	選択必修	講義	対面	80
卒業研究	M	4	通年	選択必修	演習	対面	81
総合医学検査特論	M	4	後期	必修	講義	対面	71
総合医学検査演習	M	4	後期	必修	演習	対面	84
臨地実習	M	3	後期	必修	実習	対面	91

(2)準正課、正課外の教育活動

- ・ 国家試験対策
- ・ 入学前課題の添削と出題

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

専門科目では、科学的思考と協調性を身に着けた臨床検査技師を育てるために、新しい概念の臨床検査技術を開発したり、柔軟に取り入れれたりすることができる学生を養成する。基本に即した臨床検査の知識・技能の習得とともに、臨床現場で対応できる実践力と職業倫理をもった学生を育てる。特に、演習科目では、チーム医療の一員として考え実践できるコミュニケーション力と実行力を育成したい。また地域保健や国際保健分野で活躍できる人物に育てたい。基盤科目では、大学

の学修、研究の基盤である言語力・英語力、表現力の基礎を培うことを理念とする。

### 3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）

- ・ 授業毎にプリントを準備し、課題をその中に盛り込んだり、課題だけのプリントを單元ごとに配布し自己学習、自宅学習を促している。
- ・ 実習前には1時間程度の項目に関連した授業を行い、理解を深めさせた。レポート評価、筆記試験評価、実習項目に関する研究発表評価、顕微鏡実践テストによる評価などを取り入れて、一方向実習にならないように工夫している。
- ・ 血液検査学実習では臨床現場で臨床検査技師が取り組む採血実習を強化して行い、嚴重注意のもと学生間で採血を実施している。
- ・ 実習前には臨床現場で起こりえる針刺し事故、そしてその事故や普段の操作で起こりえる感染に対して十分な講義を行っている。また、事故が起こってしまった場合の対策も講義している。

### 4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・ 前年度の学生による授業評価では、相変わらず声が聞こえにくいという意見が見られた。そのため、今年度は授業時に必ずマイクを使用し、聞こえやすいように工夫した。
- ・ 多色を使ったカラースライド、カラープリントは一部学生に色を3色ぐらいに抑えるようにとの意見があったが、自分の講義スライドの大きな特徴ととらえているので改善するつもりはない。もちろん、わかりやすいという意見もある。
- ・ 授業前にプリントがそろっていないことが多いという評価があり、プリントを事前準備することは今年度の第一改善事項にあげたい。
- ・ 例年講義毎に配布しているプリントを使用した問題を作成し、学内外で解かせていたが、今年度はその頻度が低かった。授業時間内でしっかり時間を設けて解かせたい。

### 5. 今年度の学生による授業評価より

- ・ 今年度も「生理学Ⅰ・Ⅱ」において、声が聞こえにくいという意見が多数見られた。特に文末がわかりにくいとのことだったので、来年度はマイクを使用し、文末まではっきり発声することを心がけたい。
- ・ 「血液検査学Ⅰ・Ⅱ」においても声が聞こえにくいという意見が見られた。マイクの効果と多少学生側の慣れもあり、それほどの指摘とはならなかった。
- ・ R科「生理学」でカラー多色刷りのプリントを使用していたが、わかりやすいという意見とわかりにくいという意見が分かれた。色使いの基準を統一することでさらにわかりやすいプリントとしたい。
- ・ 実習系の授業においては、概ね高評価をとることができた。レポートをもっとよく見てほしいという意見があるが、レポート判読に時間をかけすぎると全体の授業が破綻する可能性があるため、効

率よくレポート判読することを心がけたい。

- ・ 前期「労働衛生学Ⅱ」・後期「環境生理学」の学生自身の学習時間がかかなり短めであった。授業内容と課題の在り方について考えていきたい。

## 6. 今年度の成果

- ・ R科「生理学」の授業ではプリントの在り方（色使い）で意見がわかれたので、一方的に多色の色使いをやめることはしない。
- ・ 「血液検査学実習Ⅱ」において、臨床検査の基本操作である採血が怖くなくなったという意見が見られ、大きな成果と考えている。

## 7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

- ・ 実習系科目では良い評価であるといって手をゆるめず、効率の良いレポート判読を行いたい。
- ・ 「血液検査学実習」では、採血が苦手ではない学生や得意である学生が増えるようていねいな指導を心がけたい。
- ・ どの教科においても声が聞き取りにくいという意見が見られるため、授業の途中で発声や反応に関して振り返りたい。
- ・ 授業のまとめプリントをさらにわかりやすく改訂したい。

## 8. 社会的活動等

- ・ 神戸大学で「環境学入門」に関する講演を行った。

## 9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・ 授業における配布資料

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	新谷 路子	所属学科	医療検査学科	職名	教授
クラス担任	1年	クラブ顧問			
委嘱委員・職務	自己点検・評価委員会・委員長、ときわ教育推進機構、教務委員、 保護者のためのオープンキャンパス委員				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課（網掛け部分は外部公表しない）科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
○解剖組織学	M	1	後期	必修	講義	対面	85
○病理学	M	2	前期	必修	講義	対面	88
○一般検査学	M	2	前期	必修	講義	対面	87
○一般検査学実習	M	2	後期	必修	実習	対面	86
大学道場 mini ゼミ A	基盤	1	前期	選択	演習	対面	6
人体のふしぎ	基盤	1	前期	選択	講義	対面	162
臨床技術入門	R	1	後期	必修	講義	対面	89
技能修得到達度評価	M	3	後期	必修	実習	対面	90
検体採取安全管理演習	M	3	後期	必修	演習	対面	91
IPW 論	M	3	前期	必修	講義	遠隔	92
IPW 論	N	3	前期	必修	講義	遠隔	93
文献講読	M	3	後期	選択	演習	対面	51
医療コミュニケーション演習	M	4	前期	必修	演習	対面	81
卒業研究	M	4	通年	必修	演習	対面	81
総合医学検査演習	M	4	後期	必修	演習	対面	84
総合医学検査特論	M	4	後期	選択	講義	対面	71

(2)準正課、正課外の教育活動

- ・国家試験対策（解剖組織学、病理学、一般検査学）
- ・卒研ゼミ生への就職活動支援

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

「人体のふしぎ」や「解剖組織学」などの科目を通し、人として、また医療人としての倫理観を育成する。「病理学」や「一般検査学」等の科目では、臨床検査技師として十分な技術や知識の修得を目指す。

さらに、「IPW 論」や「医療コミュニケーション演習」などの科目を通して、他者、他職種との協働を理解し、実践できる医療人を育成する。

### 3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングや ICT 活用等の工夫点について）

- ・検査の理解を進めるため、学生が自ら検査用パンフレットを作成し、その発表を行っている。これにより、検査を受ける患者さんの立場から検査を見ることに繋げている。
- ・授業内容の定着のため、ワークシートを作成し配布している。
- ・「医療コミュニケーション」の授業では、学生が患者および臨床検査技師役となったロールプレイ学習を行っている。

### 4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・聞くだけの授業にならないよう、書き込み式の講義プリントを作成した。また、授業内容に関連した国家試験の過去問題を提示し、学生が興味を持てるよう促した。
- ・授業項目の中で、特に重要な点を強調するように意識した。

### 5. 今年度の学生による授業評価より

- ・講義科目の総合評価ポイントは、ほぼ 4.3 であった。一般検査学実習や医療コミュニケーション演習、文献講読など、実技や発表を行うスタイルの授業ではより評価ポイントが高くなった。
- ・学生からのコメントは、「ワークシートがあったので、復習がしやすいと感じた。また定着もしやすいと感じた」。「出てくるイラストや説明が簡潔でわかりやすい。(解剖組織学)」。「医療人として大切なことを学ぶことができた。実際に患者や臨床検査技師になりきるロールプレイを行うことで、より理解が深まった。(医療コミュニケーション)」等のコメントがあった。
- ・改善を要する点として、「ワークシートの解答が欲しい。(一般検査学)」。「たまに話すのが早い時がある。(解剖組織学)」等のコメントがあった。

#### ・今年度の成果

- ・「解剖組織学」や「病理学」は、伝えたい内容を図示することや表に纏めることにより理解しやすくなると考え、配布資料に手書きイラストや表を入れ、内容量も多くなり過ぎないようにしたところ、総合評価は 4.3 であり、ある程度効果はあったと考える。
- ・「一般検査学」、「一般検査学実習」の総合評価が、昨年と比べてそれぞれ 0.3 ポイント上昇したことは、学生が身近な検査である尿検査の意義や重要性を理解し実習を楽しめた結果ではないかと考える。

### 6. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

- ・例年一部の学生から「ワークシートの解答が欲しい」という意見が出るが、ワークシートの内容は教科書や配布プリントに載っており、解答がない問題を解く力を養うために解答は渡していない。しかし、

授業時間内にポイント解説を行うなど、学生の要望に応え、学習意欲が低下しないように努めていく。

- ・話し方が早くなならないよう、講義内容・分量を見極める。

## 7. 社会的活動等

- ・神戸総合医療専門学校・非常勤講師「解剖学」

## 8. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・ 授業における配布資料（ワークシート、提出用課題プリント）
- ・ Manaba に掲載した資料

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	味木 和喜子	所属学科	医療検査学科	職名	教授
クラス担任	-		クラブ顧問	-	
委嘱委員・職務	健康保健センター長				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課（網掛け部分は外部公表しない）科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
○公衆衛生学Ⅰ	M	1	前期	必修	講義	対面	84
○公衆衛生学Ⅱ	M	1	後期	必修	講義	対面	83
○保健医療福祉総論	M	2	前期	必修	講義	対面	87
○臨床病態学Ⅰ（病因・病態）	M	3	前期	必修	講義	対面	93
○臨床病態学Ⅱ（病態解析）	M	3	後期	必修	講義	対面	91
○臨床病態学Ⅲ（発展）	M	4	前期	必修	講義	対面と一部遠隔	79
技術習得到達度評価	M	3	後期	必修	実習	対面	90
卒業研究	M	4	通年	必修	演習	対面	81
総合医学検査演習	M	4	後期	必修	演習	対面	84
総合医学検査特論	M	4	後期	選択	講義	対面	71
○公衆衛生学	N	1	後期	必修	講義	対面	98
○保健医療福祉総論	N	3	前期	必修	講義	対面	84
○医学総論	R	1	前期	必修	講義	対面	90
○腫瘍学	R	2	前期	必修	講義	対面	98

(2)準正課、正課外の教育活動

- ・国家試験対策（公衆衛生学、臨床病態学）
- ・卒業研究ゼミ学生に対する進学・就職活動の支援（履歴書、小論文、面接対策指導）

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

公衆衛生の向上に寄与することは、全ての医療従事者の使命である。医療従事者は、常に地域社会に

対して深い関心を持ち、あらゆる関係者と連携・協同する姿勢を持つことが不可欠である。

ときわコンピテンシーのうち、「知性」と「専門性」はもちろんのこと、学びを日常生活と関連づけて多面的に捉える「感性」と、学びを実践し地域社会に広める「市民性」を特に育てていく。

### 3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングや ICT 活用等の工夫点について）

- ・ 予習・復習を効果的に行えるよう、授業資料と課題を前日までに manaba に掲載し、課題の確認と質問への回答を次回授業の最初に行う授業形式を確立した。これにより、課題をきちんと提出した学生は全員定期試験に合格した。
- ・ 公衆衛生学・保健医療福祉総論では、学んだことに基づいて各自が、毎回、「実践計画」を立て実践し、その取組状況を自己評価することを課題とし、その成果を定期試験の自由記載で評価した。

### 4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・ 初年度であり、学生からできる限り意見を聴きながら、授業と試験を実施した。学生からの意見は、中間調査や授業評価以外に、毎回の授業の課題に意見欄を設け、次回授業までに検討した。さらにチューター担当学生、卒業研究担当学生、質問などで来室した学生等からも積極的に聞き取り、意見交換した。
- ・ 「大学コンソーシアムひょうご神戸」からの FD・SD セミナー等については、授業や会議が重ならない限り、積極的に参加した。
- ・ 関連分野について最新の知見を得るため、厚生労働省（感染症対策等）・兵庫県（特定健診等）・神戸市（自殺対策等）・県医師会（災害医療他多数）・長田区医師会（保健医療介護フォーラム等）等が開催する各種講習会に参加し、授業等に反映している。

### 5. 今年度の学生による授業評価より

- ・ 前期は自転車操業で、教科書中心になり、「教科書のマーカーが見えづらい」「教科書の切り替えが早かった」「マーカーを引いた PDF を提供してほしい」などの意見があった。PowerPoint スライドが準備できた授業では、「スライドを用いた説明がわかりやすい」と評価が変わった。
- ・ 前期前半は、課題のフィードバックが遅れ気味になっていたが、毎回、フィードバックできるようになってからは「毎回の授業で予習復習ができる仕組みになっている」「授業後にアンケートを記入することで、質問等に次回の授業で回答していただけたので、より学びにつながり良かった」等、好意的な意見となった。

### 6. 今年度の成果

- ・ 授業と課題（提示、評価、フィードバック）と定期試験について、一定の流れを整理できた。
- ・ 医療検査学科の国家試験対策として、出題基準と過去問に沿って「公衆衛生学」のまとめ（28 頁）を作成した。国試での 6 割以上の得点を目指し、特論と補講を実施した。自己採点での平均点は

70.6 点で、坂本学科長によると 7 割を超えたのは初めてとのことであった。

#### 7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

- ・ 前期の授業（特に臨床病態学）は、十分な資料ができていないため、まずは要点を示すスライドを準備する。次に「穴埋め」など、学生が授業に能動的に参加できる工夫を取り入れていく。
- ・ 教室の形態（学生の人数に対して広すぎる等）によって、manaba による出席確認だけでは不備が認められたため、座席指定や点呼等を検討する。

#### 8. 社会的活動等

- ・ 兵庫県立大学環境人間学部「公衆衛生学」15 講義のうち 5 講義を担当
- ・ 当学の健康ふれあいフェスタにおいて、医療検査学科の学生を支援するとともに、長田区保健福祉部による慢性閉塞性肺疾患（COPD）予防活動に、長田区医師会会員として協力した。

#### 9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・ 授業における配布、配信資料等

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	布引 治	所属学科	医療検査学科	職名	教授
クラス担任	M3B	クラブ顧問	なし		
委嘱委員・職務	広報誌委員会委員長、遺伝子組換え実験安全委員会委員、学科広報委員、細胞検査士養成委員会委員				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
大学道場 mini ゼミ B	EMRON	1	後期	選択	講義	対面	9
臨床検査入門	M	1	前期	必修	講義	対面	87
組織学実習	M	2	前期	必修	実習	対面	96
○病理検査学	M	2	後期	必修	講義	対面	85
○病理検査学実習 I	M	2	後期	必修	実習	対面	88
○細胞検査学	M	3	前期	必修	講義	対面	93
○細胞検査学演習	M	3	後期	選択	演習	対面	32
総合医学検査演習	M	4	後期	必修	演習	対面	84
総合医学検査特論	M	4	後期	選択	演習	対面	71
○細胞検査学特論 I	M	4	前期	選択	演習	対面	12
卒業研究	M	4	通年	必修	演習	対面	81
臨地実習	M	3	後期	必修	演習	対面	83

(2)準正課、正課外の教育活動

- ・ なし

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

人のための人になれる人材教育を目指す。大学で学んだことに自信を持ち、社会インフラの一員として活躍できる学生に育てる。

3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングや ICT 活用等の工夫点について）

臨床現場で仕事に直結する材料（症例や具体的な患者様の臨床情報）を学びながら、技術指導を行う。現場の最新情報を取り入れる。国家試験はどのように問われるのか解説を行う。適時 QR コードを用いたアンケートフォームを使い、学生の理解具合を確認しながら授業を進行する。

#### 4. 今年度における教育方法改善の取り組み

細胞診教育成果向上を目的に、わかりやすい内容のサブテキストを作成した。過去問題集の解説本を作成し理解を深めた。

#### 5. 今年度の学生による授業評価より

「スケッチすることで内容理解を深めることができた」「国試問題をたくさん解く形式が効率的でかつ着目すべき点や特徴を覚えやすくて良かった」など概ね良好な評価が得られたとみる。

#### 6. 今年度の成果

総合評価の点数が高い科目が多く、目標とする学修成果を見極めることが概ねできた。細胞検査士試験は今回も100%全員合格、全国成績トップの高い合格率を維持できた。

#### 7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

- ・学生コメントをみると「レポート採点基準はどうなっているか」が寄せられていた。次年度はこれらの透明性について改善していきたい。具体的には採点基準の明確化など検討している。
- ・3、4年次科目では適時QRコードを用いたアンケートフォームを使い、学生の理解度を確認しながら授業を行っているが、さらに進めていきたい。
- ・教材資料を学生が検索しやすいようにナンバリングや索引を作ってみるなど工夫を心がけたい。
- ・学科FD研修会にて得た知見で「学生の学修場所の確保」があった。次年度では自分なりの解決策を模索する予定。
- ・FDセミナーに参加し、良さそうなアイデアは積極的に取り入れていきたい。

#### 8. 社会的活動等

日本臨床細胞学会評議員、同学会細胞検査士委員会委員、日本臨床細胞学会近畿連合会理事、兵庫県臨床細胞学会理事、兵庫県細胞検査士会理事、医療関連サービスマーク制度調査指導員（(財)医療関連サービス振興会）、臨床検査センター精度管理責任者への助言活動など。

#### 9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価調査

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	鈴木高史	所属学科	医療検査学科	職名	教授
クラス担任	3年生		クラブ顧問		
委嘱委員・職務	国際交流センター・センター長 ライフサイエンス研究センター・センター長				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課（網掛け部分は外部公表しない）科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
○国際理解	基盤	1	前期	選択	講義	対面	65
科学技術論	基盤	1	後期	選択	講義	対面	14
一般検査学	M	2	前期	必修	講義	対面	77
○医動物学実習	M	2	前期	必修	実習	対面	89
○公衆衛生学実習	M	1	後期	必修	実習	対面	83
医療英語	M	2	前期	必修	講義	対面	80
免疫検査学実習	M	3	前期	必修	実習	対面	93
国際保健医療活動Ⅰ	M	4	前期	必修	講義	遠隔	78
○国際保健医療活動Ⅱ	M	3, 4	前期	選択	講義	対面	7
○国際保健医療活動Ⅱ	N	3, 4	前期	選択	講義	対面	1
○国際保健医療活動Ⅱ	R	3, 4	前期	選択	講義	対面	4
卒業研究	M	4	通年	必修	演習	対面	81
総合医学検査演習	M	4	後期	必修	講義	対面	84
臨床検査学演習	M	3	後期	必修	演習	対面	85
○分子感染制御学演習	M	3	前期	選択	演習	対面	11
総合医学検査特論	M	4	後期	選択	講義	対面	71

(2)準正課、正課外の教育活動

- ・ 国試対策
- ・ ネパール交換研修でのネパール人学生の受け入れ
- ・ English Room の実施

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

- ・ 基盤科目では、自ら考える力の育成に重点を置く。
- ・ 専門科目では、基礎的知識とともに、臨床現場で対応できる技能の習得に重点を置く。
- ・ 全体を通じて、コミュニケーション力・プレゼンテーション力の向上を図る。

3. **教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングや ICT 活用等の工夫点について）**
  - ・ 担当科目では動画を適宜用いたパワーポイントによる授業を実施し、学生が理解しやすいように心がけた。また授業用資料を印刷物として渡すことにより、学生が復習を行う際に行いやすいようにした。さらに専門科目では小テストを毎回行うことにより、知識の定着を図った。
  - ・ 実習、演習科目では、学生による発表の時間を設定し、コミュニケーション力、プレゼンテーション力の向上に努めた。
  
4. **今年度における教育方法改善の取り組み**
  - ・ 前年度の学生による授業評価では、小テストの実施が知識定着に役立ったとの意見が見られた。そのため、今年度も専門科目の授業時には毎回の授業で小テストを実施して知識の定着度の把握に努めた。
  - ・ 「上級バイオ技術者」資格を取得（2025年1月）し、より専門的な知識を習得し、授業に反映するように努めた。
  
5. **今年度の学生による授業評価より**
  - ・ オムニバス形式で実施の「科学技術論」の科目においては、学科ごとに評価が分かれた。これは学生の興味対象が異なると考えられるため、ある程度はやむを得ないと考えられた。
  - ・ 実習・演習の授業においては、概ね高評価をとることができた。
  - ・ 今年度に限らないが、全般的に学生自身の学習時間が短めであった。予習復習を促す課題の在り方について検討していきたい。
  
6. **今年度の成果**
  - ・ 専門科目の講義科目では「講義を行う⇒小テスト、次回の講義の最初に前回小テストの解説」という授業形式を確立してきた。これにより定期試験で不合格となる学生数は数名に留まり、基礎学力の定着に効果があったと考えられる。
  - ・ ネパール交換研修（ネパール人学生受け入れ）では、GCC メンバー全員で入念な準備を行い、また全学的なサポートを受け、その成果として当該学生達から非常に高い評価を得ることができた。
  - ・ Benjamin 先生と協議を行い、English Room を GCC として企画・実行した結果、参加学生より、英語力向上に有用であったと、高い評価を得ることができた。
  
7. **今年度の課題と次年度に向けた改善策**
  - ・ 複数名が担当する授業では、（小テスト、ミニレポートなどの形式等を含めた）科目としての統一性の確保が必要であると思われた。次年度は授業実施前のミーティング等を通して、これの確保に努めたい。

- ・ Aクラス、Bクラスごとに隔週で開講する実習科目に対する課題・レポートで、後から開講するクラスの方が有利だという指摘があった。実際には内容理解で評価しているので、特段の有利不利は無いが、この点について明確にしながら、課題・レポートを出すように心がけたい。

## 8. 社会的活動等

大学コンソーシアムひょうご神戸 国際交流委員会 委員

## 9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・ 授業における配布、配信資料等
- ・ アンケート等

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	大澤 佳代	所属学科	医療検査学科	職名	教授
クラス担任	4年Bクラス	クラブ顧問	なし		
委嘱委員・職務	個人情報保護委員長、教育研究推進センター副センター長、すこラボ委員、卒業研究委員長				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
大学道場ゼミ B	M・N	1	後期	選択	対面	講義	4
○微生物検査学 I	M	2	前期	必修	対面	講義	100
○微生物検査学実習 II	M	3	前期	必修	対面	実習	93
医療安全	M	3	前期	必修	対面	講義	91
医療安全	N	3	前期	必修	対面	講義	92
○微生物検査学実習 I	M	2	後期	必修	対面	実習	93
○微生物検査学 II	M	2	後期	必修	対面	講義	98
○感染制御学	M	3	後期	必修	対面	講義	102
IPW(多職種連携)論	R	3	後期	必修	対面	講義	76
IPW(多職種連携)論	O	3	後期	必修	対面	講義	66
技能到達度評価 AB	M	3	後期	必修	対面	講義	90
検体採取安全管理演習	M	3	後期	必修	対面	講義	91
総合医学検査特論	M	4	後期	必修	対面	講義	71
総合医学検査演習	M	4	後期	必修	対面	講義	84
卒業研究	M	4	後期	必修	対面		81

(2)準正課、正課外の教育活動

- ・ 神戸大学医学部保健学科学生に対し講義・実習を行っている。
2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）
- 担当科目の講義・実習内容を各学年の進度に合わせて見やすく、わかりやすくを心がけて構築する。
3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングや ICT 活用等の工夫点について）
- ・ 各科目における微生物学に対する興味を導くとともに、国家試験対策へつながるように意識した内容とする。
4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・ 微生物検査学 I は昨年の講義スピードが速いということから調整したため、スピードの速さに関するコメントはなかったものの、「黒板が見えにくい」という指摘があり、来年度はなるべくスライドへコメントを入れていくようにする。
5. 今年度の学生による授業評価より
- ・ 微生物検査学 I では「黒板が見えにくい」が何件かあった。教室が長細いため、工夫する必要がある。
  - ・ 微生物検査学実習 I・II では学生にマイクを渡していたため、教員の声が聞き取りにくいとの指摘があった。
  - ・ 微生物検査学 I・II、感染制御学では小テストがあったためなどが「講義内容が感染制御から外れて微生物学である」との意見があった。
  - ・ 感染制御学では教室が狭いという意見があった。
6. 今年度の成果
- ・ 微生物検査学実習 II は新カリでの初めての实習ということで、色々と戸惑う部分があったものの、学生からの評価は極めてよく、実習 I も新カリで最初の実習のときよりもデモンストレーションがよかったなどポイントがアップしたことは評価できる。
  - ・ 微生物検査学 II は昨年度までと講義内容を変えなかったものの、ポイントアップとなった。小テストなどの対応に評価が良かったものと考えられる。
7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策
- ・ 今年度の課題は黒板の使い方に注意することが挙げられるため、内容を精査し必要な講義内容をスライドへ移行できるよう、また、ゆっくりと講義ができるようにバランスをとっていく。
  - ・ 感染制御学の講義室は狭いため、できれば変更していただけるとありがたい。
8. 社会的活動等
- ・ 神戸大学大学院保健学研究科客員教授（兼担）
9. 根拠資料（資料名のみ）
- ・ 学生による授業評価

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	伊藤 洋志	所属学科	医療検査学科	職名	教授
クラス担任	M2B	クラブ顧問	なし		
委嘱委員・職務	就職委員長（M科）、臨地実習副委員長（M科）、 研究倫理委員長、ライフサイエンス研究センター委員				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課（網掛け部分は外部公表しない）科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
○検査入門実習	M	1	前期	必修	実習	対面	83
基礎分析実習	M	1	後期	必修	実習	対面	84
公衆衛生学実習	M	1	後期	必修	実習	対面	83
○免疫学	M	2	前期	必修	講義	対面	85
○免疫検査学	M	2	後期	必修	講義	対面	86
○免疫検査学実習	M	3	前期	必修	実習	対面	93
○医療安全	M	3	前期	必修	講義	対面	92
○医療安全	N	3	前期	必修	講義	対面	92
分子感染 制御学演習	M	3	前期	選択必修	演習	対面	11
○検体採取安全管理 演習	M	3	後期	必修	演習	対面	91
技能修得到達度評価	M	3	後期	必修	実習	対面	90
卒業研究	M	4	通年	必修	演習	対面	81
総合医学検査演習	M	4	後期	必修	演習	対面	84
総合医学検査特論	M	4	後期	選択	講義	対面	71

(2)準正課、正課外の教育活動

- ・ 国試対策学習の支援（模擬試験問題の解説授業等の動画提供を含む）
- ・ 臨地実習における運用と学生指導（医療安全・感染防止対策、情報管理・守秘義務、病院での接遇等）
- ・ 学生の就職活動支援として、キャリア・パスに関するガイダンス、履歴書・志望理由書等の応募書類や小論文等の添削指導、採用試験を想定した模擬面接指導
- ・ 臨床検査技師学校養成所指定規則の一部改正に伴い、臨床検査技師に追加された「タスク・シフト／シェア」業務に関する授業の履修が2024年度から国家試験受験資格の要件に加わった。改正前のカリキュラムの課程にある在学生を対象とした厚生労働大臣指定講習会の学内開催に中心的に取り組んだ。

## 2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

専門基礎科目では、多様な専門科目を学修する上で必要となる医学・医療における知識・技術を修得し、多様な現場で実施される臨床検査を遂行できる学生を養成する。DPにある「医療検査に必要な基礎知識および基本的な専門知識、医療検査の実践に必要な基本的技術」を修得するために、実習や演習を通して確かな実践力を有した臨床検査技師を育成したい。また、そのための教育法は、将来、業界を牽引し得るような潜在能力を備えた学生の存在を想定し、ときに発展的な内容も取り入れて視野を広げ、さまざまな成長の契機を与えるものでありたい。

## 3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）

- ・「検査入門実習」、「免疫検査学実習」ではシラバスに記載のアクティブ・ラーニングの要素として「ICT活用の自主学習支援」をあげているとおり、各回の実習内容の要点を解説した予習動画を活用した。特に器具や装置の取り扱い方法など技術的な解説を効果的に行えるよう、教員が実演するシーンを多く取り入れた。「検査入門実習」では、基礎知識や基本的な専門知識の到達度を測る定期試験とは別に、授業の最終回で実技試験を行い、基本的な技術の到達度を測った。
- ・「免疫学」、「免疫検査学」では対面授業時のパソコン画面を録画した授業動画ファイルを One Drive にアップロードし、学生が manaba より復習のために視聴できるようにした。また、「免疫検査学実習」の内容に関連するシーンを編集した動画ファイルを同授業の予習動画として活用した。

## 4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・前年度の「医療安全（M・N科）」は一部を除いて多くが遠隔授業であったが、定期試験が筆記試験であったことに対して不満の声が授業評価で寄せられていた。遠隔授業はコロナ禍や外部講師の事情で行っていた経緯があったが、今年度は遠隔とすべき事情は解消されたため、全て対面で行った。その結果、今年度は特に遠隔から対面となった授業について、授業評価では「面白かった」、「楽しかった」などの好意的な意見が寄せられた。
- ・臨床検査技師学校養成所指定規則の一部が改正され、2022年度入学生より新たなカリキュラムの適用によって臨床検査技師に追加された「タスク・シフト／シェア」業務に関する授業「検体採取安全管理演習（M3・後期）」が今年度から初開講となった。「(2)準正課」で記載した「厚生労働大臣指定講習会」で提供される動画資料などは現職技師向けのレベルで作成されているが、学生を対象とした同講習会を学内開催した経験から学生向けの指導法を意識して取り組み、この初めての授業を立ち上げることができた。
- ・日本臨床検査学教育協議会の臨床免疫学分科会に所属し、国試出題領域のひとつである「免疫検査学」の教育について、副会長を務めつつ全国の養成校の教員と意見交換している。2024年8月に開催された定例会議では、臨床検査技師学校養成所指定規則の一部改正に伴う新たなカリキュラムの運用状況や課題解決のための取り組みなどについて、各校の情報を共有した。参考にして、

本学の教育にも有用で適用できるものは今後取り入れていきたい。

## 5. 今年度の学生による授業評価より

「免疫学（2年前期）」、「免疫検査学（2年後期）」、および「免疫検査学実習（3年前期）」の授業評価で概ね共通する意見として「資料ページが多すぎる」、そのため却って「何が重要かわからない」、「試験対策に苦勞する」などが寄せられた。これは、定期試験に合格という短期的な目的で資料を閲覧する学生と、国家試験に合格、さらには学問の修得に必要な情報という視点で資料を提供する教員との考え方の乖離と思われる。これらの資料は、4年間の学びの総復習となる「総合医学検査特論（4年後期）」の担当授業での再利用を念頭に作成している。総復習においては、学生にとって初見の資料より過去に目にしたことがある資料の方が効果的と思われるからである。実際、口頭ではあるが、国家試験を終えた4年生からは資料が有用であったとの意見をいただいている。授業評価の意見に即して資料の情報量を削減することは、定期試験の得点上昇に繋がる可能性はあるものの、それは学問の修得に意欲的な学生のさらなる発展の機会の喪失となり、また4年次に期待する学力水準に到達し得ないなど大局的には学生の不利益となる可能性が大きく、考えていない。資料中には随所に「基礎」「発展」「国試」等の区分を示し、「何が重要か」に既に対応しているが、今後はさらに構成や表現法などを工夫したい。

## 6. 今年度の成果

- ・ 就職委員として学生の就職活動に関する個人指導を担当した4年生15名について、全員年度内に就職内定または大学院入試に合格し、卒業するとともに、臨床検査技師国家試験にも合格した。
- ・ (2)準正課で記載した「タスク・シフト／シェア」に関する厚生労働大臣指定講習会の学内開催に取り組んだ結果、対象となる旧カリキュラム課程の在学学生90名の全員が受講し、修了した。

## 7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

manabaを介して各種動画（実技編・講義編）や小テスト・例題とその解説PDF等を公開する取り組みについて、「免疫検査学実習」の授業評価では「予習復習がしやすかった」など、好意的な意見が寄せられた。しかし、「免疫学」、「免疫検査学」、「免疫検査学実習」の定期試験の得点を見る限り、効果は限定的と思われた。次年度は、授業で学んだ内容が定期試験ひいては国家試験でどう問われるかなどを学生がさらに理解し、要点を押さえた学習ができるような取り組みをさらに推進したい。

## 8. 社会的活動等

- ・ 京都大学医学部人間健康科学科非常勤講師：「生体防御学」および「免疫学Ⅰ」授業各1回
- ・ 日本臨床検査学教育協議会臨床免疫学分科会副会長
- ・ 日本臨床検査学教育協議会機関誌「臨床検査学教育」編集委員
- ・ 臨床検査支援協会学術講演会開催委員会委員

- ・ 臨床検査技師国家試験問題集（2026 年度版）および、第 71 回臨床検査技師国家試験解答・解説執筆中（分担）（出版社の方針により著者非公開につき、詳細は割愛）

## 9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・ 授業における配布資料、および manaba 上に公開する授業資料等
- ・ 受講生の「タスク・シフト／シェアに関する厚生労働大臣指定講習」修了証
- ・ 京都大学非常勤講師 委嘱状（令和 6 年度 前期・後期）
- ・ 日本臨床検査学教育協議会 編集委員会委員名簿（令和 5-6 年度）
- ・ 日本臨床検査学教育協議会 科目別分科会会員名簿（令和 6 年度）
- ・ 臨床検査支援協会学術講演会開催委員会報告書（兼議事録）
- ・ 臨床検査技師国家試験問題集執筆依頼状

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	浦 みどり	所属学科	医療検査学科	職名	准教授
クラス担任	無し	クラブ顧問	無し		
委嘱委員・職務	入試委員, 国際交流センター委員, 就職委員				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
○生理機能検査学Ⅰ（循環器）	M	2	前期	必修	講義	対面	94
○生理機能検査学実習Ⅱ	M	3	前期	必修	実習	対面	97
生理機能検査学Ⅱ（神経系）	M	2	前期	必修	講義	対面	92
臨床検査入門	M	1	前期	必修	講義	対面	82
国際理解	基盤	1	前期	選択	講義	対面	65
医療英語	M	2	前期	必修	講義	対面	87
○生理機能検査学実習Ⅰ	M	2	後期	必修	実習	対面	94
○診療画像検査学Ⅱ（超音波）	R	2	後期	必修	講義	対面	90
歯科臨床検査学総論	O	2	後期	必修	講義	対面	67
技能修得到達度評価	M	3	後期	必修	実習	対面	90
臨地実習	M	3	後期	必修	実習	対面	83
総合医学検査特論	M	4	後期	選択	講義	対面	71
総合医学検査演習	M	4	後期	選択	演習	対面	84
文献購読	M	3	後期	選択	講義	対面	51
大学道場 mini ゼミ B	基盤	1	後期	必修	演習	対面	10
まなぶる？ときわびとⅡ	基盤	1	後期	必修	演習	対面	393
卒業研究	M	4	通年	必修	演習	対面	81

(2)準正課、正課外の教育活動

- ・ 国試対策：過去問・模試の分析に基づくオリジナル問題の作成と解説（M科・R科）
- ・ 就職支援・進路相談：履歴書や小論文の添削と面接対策を学生の要望に応じて無制限に実施
- ・ 実技指導：超音波技術指導（医療人・研究者としての倫理観、責任感、接遇など人間性の醸成）
- ・ 卒研：研究開始から論文、倫理等の指導および Student assistant としての指導，生活・就活指導
- ・ オープンキャンパス等での生徒指導、保護者対応等、社会人としてのマナー指導
- ・ 技能修得到達度実技試験：心電図検査と肺機能検査の実技指導と患者（家族を含む）対応
- ・ 国際交流に関する個別説明等，心電図検定試験に向けての助言と学習支援

- ・ゼミ生・チューター学生（保護者を含む）との数多くの面談、メール相談、電話相談（成績、メンタル、悩み、実習、アルバイト、その他）
- ・ネパール交換研修生派遣プログラム：アクティビティ、病院引率・通訳、超音波検査実技指導研修
- ・臨地実習先訪問（引率・巡回・就活等に関連する情報収集）、オープンキャンパス、保護者会など。

## 2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

- ・考える・失敗を恐れず実践する・人にもデータにも誠実に向き合い続ける人。
- ・高い技術を持った温かみのある医療人・職業人の育成を目指しているが、まずは「挨拶」が目標。

※チューター：2名退学 どんなに手のかかる学生でも身を切られる思い。卒業させたいが適性見極め。

## 3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み等の工夫点について）

- ・アクティブ・ラーニングは自分の役割に基づき、各々の立場で議論を深めていくため、結果的にクラス全体が盛り上がるなど効果的だった。中間アンケート等を含め、授業評価も全て高評価で、「楽しかった」「他人の考えも知ることが出来た」等明るいコメントが並んだ。専門科目の座学では、毎授業の終わりに国試問題をアレンジしたクイズで復習し、加えて小テストと解説を実施した。授業評価でも「分かりやすい、勉強に取り組みやすい、楽しい」など高評価に繋がった。コミュニケーションの進展により自然と挨拶や質問に来る学生が増えるなど、授業以外への好影響も見られた。一方で意欲の低い学生にはいずれも届きづらく、不本意ながら来年度は的を絞る必要がある。
- ・実習中に接遇や挨拶、自分が出来ることから始めてみるよう言ってみたが、これまでで最も質の高い実習が出来ているグループがいくつも現れた。人と向き合う仕事の楽しさや難しさ、倫理観について自分なりに考え実践していく姿は美しい。この真摯な姿勢がクラス全体、学年全体、延いては大学全体に波及して欲しいが、惨憺たる1年目からは想像もできないほど、人間性の成長に関する教育効果（尺度が無いため主観にすぎないが）を実感した。少数の学生でも諦めずに今後も働きかけ、持っているものを引き出していく。肝心の試験もレポートも全体的に実に芳しくない。しかし点数以外の成長も見つめ、伸ばしていくことで、自ら考える力を養う学びの本質に繋がりたい。

## 4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・問題点や要望を対象学生へ直接フィードバックするため、小テストの機会を活用してアンケートを実施し積極的に意見を吸い上げた。改善策は次の授業で提案し、誤りの多かった問題は補足資料を用意して解説を強化し、学生のニーズに応える形で丁寧に答えた結果、上位層の成績（特にレポートや試験の記述内容の質）は大きく向上した。また上述の通り、授業や資料の分かりやすさに加え、定期試験に向けて復習のしやすさや取り組みやすさを意識した体系的な授業の組み立てが奏功したようで、昨年度の後期に好評だった毎回のクイズと複数回の小テストの実施を続け、さらに今年度は小テストの解説講義を入れたことで、学習効果（特に意欲）が高まったと感じる。限られた時間内で最大の効果が発揮できるよう、今後もポイントを絞った効果的な授業内容になるよう厳選していく。聞いていない様子の学生は一定数いるが、せめて全体の1/4の学生に伝えよう目指した

結果、アンケートで「実は聞いています！」と返ってきた。これは聞いている証拠である。いろいろ気にしない方が良さそうだ。業務のためオンライン視聴に切り替えざるを得なかった残念なセミナーや学会は、興味深い画像や動画を何度も見直せるメリットがあり、今後も動画の供覧や自身の体験談と共に興味を引く授業を展開するよう努める。

## 5. 今年度の学生による授業評価より

- ・ 全体的に高評価（全項目学科平均以上）で、前年度の反省点は概ね改善されたと考えられる。
- ・ 昨年度「マイクの音量が小さかった」科目では、どの項目も 1.0 ポイント以上評価が上がり、「聞きやすい話し方だった」は、単独で受け持つ科目で 4.45-4.8（学科平均 4.2）と、全ての科目で特に高評価を得た項目の一つとなった。毎回マイクの状態を聞いて確認した他、教室の環境が適切だったことも重要な要素であり、良好な学習環境で授業をさせて頂けたことに感謝している。
- ・ 前述の通り、授業の分かりやすさ、説明の明確さ、配付資料の見やすさ・授業のスピードの適切さ等のコメントのほか、特に小テストやクイズを実施した事で重要な点が明確になったこと、またそれらの解説に対する好意的なコメントが数多く見られ、これらの科目への興味と学習意欲や、修得したい（修得出来た）という実感が評価やコメントに表れたと思われる。一方通行になりやすい専門科目の座学で苦手意識を低減し、高い意欲を引き出すことに繋がった。課題は成績下位層の、何事にも興味を示していない学生で、試行錯誤しかない。座学では「1. 授業以外に学修した時間」がやや低めだが**授業時間内に集中して取り組む**ことを強く推奨しており、選択科目では毎回の学習成果の出来が優れていることが多く、上記の助言を実行している結果とも言える。但し、定期試験の結果が芳しくない専門科目では自己学習で補う必要があり、課題を出す必要性も出てきた。
- ・ 授業評価は「高評価＝真に良質な授業」とは限らない。評価に振り回されないよう注意が必要である。全入時代に顧客確保にむけた「支持率」\*の指標とならないよう、毅然とした態度で厳正な評価を全うしていくことが学生の利益になる。（※ 日経新聞 2024 年 4 月 14 日社会面「揺れた天秤 ～法廷から～」）

## 6. 今年度の成果

- ・ 昨年度の授業評価アンケートの結果が悪かった科目で、大幅な改善が見られた。
- ・ M 科・R 科の国試対策：M 国試の臨床生理学の得点率は 76.4%と良好で、今後も分野教員と協力して上位を目指す。卒研と絡めた国試対策がモチベーションと成績の向上に繋がり、ゼミ仲間で行き交う習慣が国試対策にも繋がった。ちなみに我がゼミ生 4 名の同分野の得点率は 83.7%、全科目では 80.9%と、並みいるゼミのトップレベルまで駆け上がった。特筆すべきは 4 年次スタート前から成績不振で面談を繰り返していた学生も、ゼミ生と一緒に勉強し始めて成績が大きく伸びた点だ。合格すれば横一線とは言え、一人も脱落せずゼミや勉学に励み、教え合い高め合いながら全員で立派な結果を残したことは素晴らしい。ゼミ生は全員国試前に内定獲得、うち 3 名は第一志望（初回受験で内定）。SA として 3 年次生の実習でも活躍しており、授業評価では「先輩のサポートが良かった」など下級生からも好評だった。いずれも私の成果ではないのだが、身内の自慢話である。
- ・ ゼミ生以外の就活支援も全般的に良好で、（第一目標の）年内内定や第一志望内定者も多く、国試後

の内定状況も上々である。当然とは言え「内定後の国試落ちで不採用」がいなかったことは重要な成果であり、就職委員会の皆様や学科教員のご協力の賜物である。一部の「自分から来ない学生」には手が届きにくいことが課題だったが、無理に私一人で担当せず、ゼミ教員に様子を伺うなど学科や事務の方々と連携・協力した方が、学生にとってもストレスなく取り組めるようである。次年度は「ゆるさ」を持って学生が求める進路指導と支援を見つけていく。

- ・ ネパール海外交換研修：2名の研修生に来て頂いたが、タイトながらも非常に有意義な時間となった。特に昨年度の派遣団学生たちが常に協力して2人をもてなすなど、素晴らしい活躍をしてくれたお陰で、大学や高校の将来にとっても意義深い研修となったと思う。医師の研修生への超音波検査実技研修は非常に喜ばれた。確かな技術は国境を越えて多くの人を救えることを確認し合えた。今後も国内外問わず、医療技術を必要とするところへ積極的に出向き、自己研鑽にも繋げていく。
- ・ 私自身の成果ではないが、「心電図検定」に合格した学生の体験談は大きな反響があり、各学年から心電図検定に関する相談が相次いでいる。実際、謝恩会にて4年次生からも3級合格の報告があり、臨地実習先の技師長へもお礼と共に報告した。どんな分野でも、努力する学生への支援を強化し、国試に留まらずクラス全体で向上心や挑戦する気持ちを今後も高めていきたい。
- ・ 入試業務：試験監督等は常に集中して問題なく取り組むことが出来た。今後も事前準備を怠らず、イレギュラーなことや不明な点は、その都度責任者の先生方にお伺いして滞りなく進めていく。

## 7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

### 【今年度の課題と改善策】

#### 1. 正課：座学・実習

- ・ 下位層へのアプローチ：モチベーションの低さは個人により原因が異なるため個別対応を考える。

#### 2. 準正課

- ・ R科国試対策：画像問題の強化が必要。最新の問題傾向を分析し類似問題を作成して繰り返しやる。
- ・ 検定受験希望者向けの特別講義や超音波検査を希望する学生の特別実技指導など、技術に強い卒業生を輩出したいという願望は持ち続けているが、不公平にならないよう、またリカレント教育も意識しながら検討したい。学生時代の挑戦は将来に繋がるため、積極的に奨励し支援を続ける。

## 8. 社会的活動等

- ・ 公開講座：神戸常盤大学地域医療センター主催、日本胎児心臓病学会：臨床検査技師による新たなタスクシフトに関する検討、厚生労働大臣指定講習会（タスク・シフト/シェア）実務委員。

## 9. 根拠資料(資料名のみ)

シラバス、授業評価アンケート、授業・実習の配付資料(毎回の補足資料)、配信資料、定期試験(追再試)・小テスト問題(複数回)、SA学生のアンケート結果、卒業研究発表・卒業論文など。

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	今西麻樹子	所属学科	医療検査学科	職名	講師
クラス担任	なし	クラブ顧問	バドミントン部（副顧問） 弓道同好会（顧問・休部中）		
委嘱委員・職務	教務委員、SD 委員				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1) 正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
○生理機能検査学Ⅱ	2	2	前期	必修	講義	対面	92
○生理機能検査学Ⅲ	2	2	後期	必修	講義	対面	88
生理機能検査学実習Ⅰ	2	2	後期	必修	実習	対面	93
一般検査学実習	2	2	後期	必修	実習	対面	86
生理機能検査学実習Ⅱ	3	3	前期	必修	実習	対面	97
生理機能検査学演習	3	3	後期	必修	演習	対面	98
臨床検査学演習	3	3	後期	必修	演習	対面	90
検体採取安全管理演習	3	3	後期	必修	演習	対面	91
○医療コミュニケーション	4	4	前期	必修	講義	対面	77
対人援助技術演習	2	2	前期	選択	演習	対面	96

(2) 準正課、正課外の教育活動

- ・ 国試対策等
- ・ 就職支援活動としてゼミ生の履歴書および小論文対策指導

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

臨床検査技師としての知識や技術だけでなく、患者への対応はもちろん、チーム医療として他職種スタッフとのコミュニケーション能力などの総合的なスキルを養い、自分の役割を遂行できる柔軟性と協調性を持つ学生を育成したい。

3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）

- ・ M4「医療コミュニケーション」では、臨床現場でのさまざまな患者とのやりとりを想定し、ほとん

ど、またはまったく話したことがない同級生と、できるだけ積極的にコミュニケーションを取れるようペアを決めている。

- ・ M3「生理機能検査学実習Ⅱ」では、実習内容がそのまま現場で活かされるため、実際の検査の流れに沿って実習を行えるようにしている。
  - ・ M2「生理機能検査学Ⅱ」「生理機能検査学Ⅲ」では、前回の授業内容を復習してもらうことを目的として、成績に反映することを周知した上で、manabaの小テスト機能を利用して小テストを実施している。
4. 今年度における教育方法改善の取り組み
- ・ 前年度の学生による「医療コミュニケーション」の授業評価では「ABクラスの交流の機会が増えて、授業前よりコミュニケーション能力も身についた」「初対面の人と話す機会が多くあり、自分のコミュニケーション力が試されたため非常に良かった」との意見がみられたため、昨年度と同様、ロールプレイ時に、同じクラスの学生同士がペアにならないよう配慮した上で、毎回くじ引きでペアを決定した。
  - ・ 「生理機能検査学実習Ⅱ」では、SAとして実習指導を行うゼミ学生が、同じレベルで指導および説明を行えるようにした。
  - ・ 前期のM2「生理機能検査学Ⅱ」での授業評価の意見を受け、後期のM2「生理機能検査学Ⅲ」では、基礎知識として頭に入れてもらいたい語句などを穴埋め形式にし、線を引く箇所を減らした。また、学生が自身のタブレット上で書き込みができるように、授業開始までに授業レジュメをmanabaにアップロードした。
5. 今年度の学生による授業評価より
- ・ 「医療コミュニケーション」において、学生から「実際に患者や臨床検査技師になりきるロールプレイを行うことで、より理解が深まった。」「医療人として大切なことを学ぶことができた。」「先生の経験談などを交えて、話していてとてもわかりやすかった。」「臨地実習前に知りたかったことが多かった。」との意見がみられた。
  - ・ 「生理機能検査学実習Ⅱ」において、卒研ゼミ学生にSAとして実習指導をしてもらったため、学生から「4年生の先輩方がサポートして下さったことがすごくよかったです!」「4年生がいてくれたのですぐに質問できてよかった」「隣に先輩がいてくれたことで理解が追いつかないということがなかったです。とてもいい実習になったと思います。」との意見がみられた。
  - ・ 「生理機能検査学Ⅱ」において、「レジュメにイラスト等が多くて分かりやすかった。」との意見がある一方、「何色がどの意味なのかを先に説明して欲しかった。」「プリントに線を引くことだけに集中してしまい、先生の話聞くことが出来なため、予め線を引いたプリントだとより授業の理解が深まると思いました。」との意見もあった。
  - ・ 「生理機能検査学Ⅲ」において、「スライドがイラストも多く、完結で分かりやすかった。」「pdfとしてmanabaにあげられているのが良いと思った。穴抜き方式なのが良いと思った。」との意見があった。

## 6. 今年度の成果

- ・ 前期の M2「生理機能検査学Ⅱ」での授業評価の意見を受け、後期の M2「生理機能検査学Ⅲ」では、基礎知識として頭に入れてもらいたい語句などを穴埋め形式にし、線を引く箇所を減らした。また、学生が自身のタブレット上で書き込みができるように、授業開始までに授業レジュメを manaba にアップロードした。同一科目ではないものの、受講学生は同じであり、授業評価では授業方法の評価が 4.36 から 4.51 に向上した。

## 7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

- ・ 「医療コミュニケーション」では、実際の臨床現場で起こり得るケースをより具体的に設定し、ロールプレイのシナリオを強化する。
- ・ 「生理機能検査学Ⅱ」のレジュメを、基礎知識として頭に入れてもらいたい語句などを穴埋め形式にし、授業前までに manaba にアップロードする。

## 8. 社会的活動等

- ・ なし

## 9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・ manaba 上の授業における小テスト
- ・ 授業における配布、配信資料等

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	澁谷 雪子	所属学科	医療検査学科	職名	講師
クラス担任		クラブ顧問		バドミントン部顧問、フットサル部副顧問、器楽ボランティア部顧問	
委嘱委員・職務	就職委員、国試対策委員、神戸常盤地域交流センター委員、神戸常盤大学健康保険センター委員、FAST 等企画運営ユニット委員、保護者のためのオープンキャンパス委員				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課（網掛け部分は外部公表しない）科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
検査入門実習	M	1	前期	必修	実習	対面	83
まなぶる>ときわびと I	全	1	前期	必修	演習	対面	399
まなぶる>ときわびと II	全	1	後期	必修	演習	対面	393
臨床化学検査学実習 I	M	2	後期	必修	実習	対面	88
地域との協働 B	全	2	通年	選択	演習	対面	16
臨床化学検査学実習 II	M	3	前期	必修	実習	対面	91
薬理学	M	3	後期	必修	講義	対面	91
技能修得到達度評価	M	3	後期	必修	実習	対面	89
医学検査サプリメント演習 II	M	4	前期	選択	演習	対面	81
総合医学検査演習	M	4	後期	必修	演習	対面	84
総合医学検査特論	M	4	後期	選択	講義	対面	76
卒業研究	M	4	通年	必修	演習	対面	81

(2)準正課、正課外の教育活動

- ・ 国試対策：補習、学生指導
- ・ 就職支援：小論文、履歴書添削、面接練習

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

自ら考え行動する学生、対人能力を身につけた学生を養成する。

専門科目では、基礎を身につけ、その基礎を応用できる学生を養成する。

基盤教育では、学生自身が将来を考える、あらゆる場面で対応ができる学生を養成する。

3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングや ICT 活用等の工夫点について）

- ・グループでの取り組み（課題の相互チェック、意見の共有など）を実施した。
- ・授業前に事前確認動画を配信した。

#### 4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・ 臨床化学検査学実習 I ・ 臨床化学検査学実習 II
  - ① 実習前に予習動画を配信し、実習では、学生が自ら考えて行動できる環境を設けた。
  - ② 小テストを毎回実施し、基礎を身につける機会を設けた。
  - ③ 測定結果から検査時に何が起きているかを考えるグループ課題を実施し、実習で学んだ基礎を応用する機会を設けた。
- ・ 薬理学
  - ① ドリル（確認プリント）を毎回作成、配布し、薬物動態、薬理の基礎を覚える機会を設けた。
  - ② 検査値と薬の関係について、添付文書・教科書を基に調べるワークと実施し、自ら学んでいく機会を設けた。
- ・ 地域との協働 B
  - ① 少子化・高齢化について、討論を行い、学生自身が将来について考え、地域社会とどう協働していく必要があるかを考える機会を設けた。
  - ② 合宿、集団生活で起こりえることを事前に考えさせ、あらゆる場面で対応できる準備をする機会を設けた。
- ・ 特に実習、演習
 

実習、演習では、レポート・課題作成の時間をとり、質問しやすい環境を設けた。
- ・ 就職支援
  - ① 課題（文章作成）の確認を学生が相互に行い、相手・自身の文章力、表現力を向上させる時間を設けた。
  - ② 各自、予習してきた内容をグループ内で共有し、自分の考えを伝える機会を設けた。

#### 5. 今年度の学生による授業評価より

臨床化学検査学実習 I ・ II では、事前に予習動画を配信、レポートは報告すべきポイントを示して雛形を配布している。学生のコメント欄には、「事前に予習をするので、授業がスムーズに進んでよかった」「臨床化学において、押さえるポイントが実習・レポート・課題にまとまっていると感じた」との意見があった。

薬理学で実施した検査値と薬の関係を調べるワークに関して、学生のコメント欄には「検査値をもとに薬について調べることで実際にどのように使うかをイメージできた点」がよかったと記されていた。

#### 6. 今年度の成果

学生が調べた、考えた、まとめたと感じることのできる授業を実施している。授業評価のコメント欄には、「貴重な経験ができた」（地域との協働 B）、「イメージできた」（薬理学）など学生が学んでいると

感じていると思われる前向きなコメントがあった。

#### 7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

実習では試薬、器具は班・個人ごとに用意をしておらず、実験台（約10名）ごとに用意をしている。1つの試薬をどのように効率よく、協力して使用するのかを考えてもらうためであるが、学生は「実験台に1つは少ない」と感じたようであった。

これは、目的をしっかりと説明できていなかったためだと考えている。次年度は、他の授業も含め、目的を説明し、学生に「なんで？」と思わせないように取り組んでいく。

#### 8. 社会的活動等

「兵庫県臨床検査技師会」理事（2024年5月まで）

#### 9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・ 授業における配布、配信資料等

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	砂見愛子	所属学科	医療検査学科	職名	講師
クラス担任			クラブ顧問		
委嘱委員・職務	臨地実習委員 就職委員 ハラスメント防止対策委員 学内実習安全委員会				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課（網掛け部分は外部公表しない）科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
生理機能検査学実習Ⅰ	M	2	後期	必修	実習	対面	94
○画像検査学	M	3	前期	必須	講義	対面	104
生理機能検査学実習Ⅱ	M	3	前期	必修	実習	対面	97
○生理機能検査学演習	M	3	後期	必修	演習	対面	100
技能修得到達度評価	M	3	後期	必修	演習	対面	90
検体採取安全管理演習	M	3	後期	必修	演習	対面	91
卒業研究	M	4	通年	必修	演習	対面	81
総合医学検査演習	M	4	後期	必修	演習	対面	84
総合医学検査特論	M	4	後期	必修	講義	対面	71
臨床技術入門	R	1	後期	必修	講義	対面	89
臨床検査総論	N	2	前期	選択	講義	対面	84
人体のふしぎ	基盤	1	前期	選択	講義	対面	162
まなぶる・ときわびと	基盤	1	前期	必修	演習	対面	396

(2)準正課、正課外の教育活動

- ・ 診療放射線技術学演習Ⅰ・Ⅱ(R4 通年)の模試問題作成および解説授業を担当
- ・ 就職委員としての履歴書等の指導および模擬面接等の指導
- ・ 臨地実習委員としての実習先提出書類等の指導
- ・ 入学前教育での在校生のスライド作成等の指導およびファシリテーター

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

本専門科目においては、医療人としての責務を自覚し、実務および患者に対して誠実に向き合うことのできる人材の育成を目的とする。

検査技術に関する原理を深く理解し、検査結果の妥当性を適切に判断するとともに、得られた結果から患者の病態を的確に評価し、次に必要とされる検査および治療について論理的に考察し、主体的に行動できる臨床検査技師の育成に努める。

そのため、臨床経験を通じて培った技術および思考を講義や実習を通じて体系的に教授し、高度な専門性と実践力を兼ね備えた臨床検査技師の養成を使命とする。

### 3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングや ICT 活用等の工夫点について）

- ・ 「画像検査学」では講義内容の復習および知識の定着を目的として、各回の講義内容の国試問題を宿題として配布し、小分野終了ごとに manaba での小テストを実施した。
- ・ 「生理機能検査学演習」では、初回に演習の中心となる心電図の判読について復習講義を行い、演習の予習として症例の心電図を配布し、事前にじっくり取り組むことで演習の充実を目指した。また、主体的に演習に取り組めるように、症例ごとにそのポイントとなる事項について学生に口頭で答えさせた。
- ・ 実習では初回に生理機能検査は患者様の病気の診断・治療に関わる重要な検査であり、結果が検査者の知識・技量に依存するため特に責任重大であることを十分に伝えた。また、得られた結果から患者の病態を推測し、次に必要な情報を考え検査を組み立てる力が必要であることも伝えた。また、自分が被検者となることで、検査を受ける患者の気持ちを知り、接遇についても考える機会を設けた。
- ・ 「生理機能検査学実習Ⅱ」では主体的に実習に取り組めるように事前課題を配布し、実習開始時に事前課題の内容から小テストを実施し、必要最低限の知識の確認を行った。また、スチューデント・アシスタントである卒業研究生（4年生5名）の教育を手厚く行うことで、ピアラーニング効果での実習の充実をはかった。
- ・ 「生理機能検査学実習Ⅰ」では主体的に実習に取り組めるように事前課題を配布し、実習開始時に事前課題の内容から小テストを実施し、必要最低限の知識の確認を行った。また、最終実習日には知識の整理と定着を目的として、実習内容の重要項目についての総復習を行った。
- ・ 「総合医学検査特論」では近年の国試出題傾向を分析し、超音波画像問題を中心とした復習・対策を実施した。特に過去の模試等の問題も取り入れることで、学生が触れる画像数の充実をはかった。
- ・ 他学科の科目である「臨床検査総論」「臨床技術入門」等は、臨床検査と各専門職の関わりを理解しやすいように講義を実施した。イラストや簡単な症例を取り入れることで、学生がイメージしやすい内容の充実をはかった。

### 4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・ 「画像検査学」は初年度であったが、平行して実施している「生理機能検査学実習Ⅱ」とリンクするように進度・内容の調整を行った。
- ・ 「生理機能検査学演習」の前年度成績は、学生の基礎事項習得が不十分であったことが問題であっ

た。その改善策として、今年度は各症例の判読前に基礎事項確認の問題に取り組ませることで、症例判読へとスムーズに進めるように設計した。

- ・ 実習の前年度成績は、学生の超音波画像判読について解剖学的な知識と各断面の理解が乏しいことが問題であった。その改善策として、今年度は超音波断面像に関するわかりやすいイラストを盛り込んだ事前学習資料を用意し配布、実習中にも何度も触れるようにした。また、必ず覚えるべき断面像については、実習での描出・レポート・小テスト・定期試験等を通して何度も扱い、知識の定着をはかった。
- ・ 今年度の卒業研究生には超音波習得のカリキュラムを実施することにより、前年度と比べチューデント・アシスタントとして入る実習での各自のパフォーマンス向上をはかった。

## 5. 今年度の学生による授業評価より

- ・ 「画像検査学」では、各回配布の問題はレジメプリントを復習し、自分で解答を導き出すことを狙いとしていたため、解答は最終回に振り返り講義中に公開した。しかし、「解答をもう少し早く教えてほしい」という声があったため、次年度は小分野ごとに公開することを予定している。
- ・ 「生理機能検査学演習」では、「レジメがわかりやすく、理解しやすい」や「丁寧で理解が深まった」との声をいただき、次年度も検査結果がなぜそうなるのかという機序について触れながら丁寧な授業を心がけたい。また、「スピードが速い分野があり追いつけなかった」との声があった。本演習は生理機能検査学総まとめの位置づけであるため、非常に多数の疾患を取り扱った。そのため、全履修生の理解を待ってから進めるという形はとれなかった。次年度は少し内容を絞って、じっくりと取り組める構成にしたい。
- ・ 「生理機能検査学実習Ⅱ」では「4年生の先輩のサポートがすごくよかった」などの声が多数あり、卒業研究生への手厚い指導が効果的であったと考える。次年度も履修生のコメントをフィードバックできるような形式を整え、より充実した実習となるように工夫したい。
- ・ 「生理機能検査学実習Ⅰ」では「学生に対して教員が少ない」との声があった。こちらは後期であり、卒業研究生のチューデント・アシスタントもいないため、基本は履修生が自分たちで考えて実習を進められるように構成している。しかし、何をすべきか理解できていない学生が一部であるが存在しているため、やるべきことがわかりやすいように実習書や指導に工夫が必要であると考え

## 6. 今年度の成果

- ・ 「生理機能検査学演習」では、基礎事項の確認にも力を入れた結果、定期試験では、平均点 62 点と前年度より 8 ポイント向上した。
- ・ 「生理機能検査学実習Ⅱ」では、チューデント・アシスタントへの指導の充実と超音波画像に関するわかりやすいイラスト資料を用いた解説にも力を入れた。その結果、定期試験では平均点 66 点と前年度より 19 ポイント向上した。
- ・ 「生理機能検査学実習Ⅰ」では、必ず覚えるべき断面像について、実習での描出・レポート・小テ

スト・定期試験等を通して何度も扱い、知識の定着をはかった。その結果、定期試験では平均点 50 点と前年度より 3 ポイント向上した。

#### 7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

- ・ 「画像検査学」では、各回配布の問題につき「解答をもう少し早く教えてほしい」という声があったため、次年度は小分野ごとの公開を予定している。
- ・ 「生理機能検査学演習」では、「スピードが速い分野があり追いつけなかった」との声があったため、次年度は少し内容を絞って、じっくりと取り組める構成を予定している。
- ・ 「生理機能検査学実習Ⅰ」では「学生に対して教員が少ない」との声があったため、履修生が自分たちで考えて実習を進められるように、やるべきことがわかりやすいような実習書の改定や指導の工夫を考えている。

#### 8. 社会的活動等

#### 9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・ 授業における配布、配信資料等
- ・ 定期試験、国試対策試験等

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	澤村 暢	所属学科	医療検査学科	職名	講師
クラス担任			クラブ顧問	イムノヘマトロジー部	
委嘱委員・職務	国家試験対策委員会（副委員長）、臨地実習委員会委員 自己点検・評価委員会委員、図書委員会委員 ライフサイエンスセンター委員				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課（網掛け部分は外部公表しない）科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
血液検査学 I	M	2	前期	必修	実習	対面	86
血液検査学実習 I	M	3	前期	必修	実習	対面	93
血液検査学実習 II	M	3	後期	必修	実習	対面	94
医動物学実習	M	2	前期	必修	実習	対面	89
○技能修得到達度評価	M	3	後期	必修	演習	対面	90
検体採取安全管理学演習	M	3	後期	必修	対面	対面	91
臨地実習	M	3	後期	必修	実技	対面	82
○医学検査 サプリメント演習 II	M	4	前期	選択	演習	対面	81
総合医学検査特論	M	4	後期	選択	対面	対面	71
総合医学検査演習	M	4	後期	必修	対面	対面	84
卒業研究	M	4	後期	必修	演習	対面	81
歯科臨床検査総論	O	2	後期	必修	対面	対面	67

(2)準正課、正課外の教育活動

- ・ 国試対策の補習
- ・ 臨地実習認定証授与式のプランニング
- ・ 卒業研究担当学生に対する就職活動の指導

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

- ・ 臨床現場を意識した医療人の育成。

患者ファーストを基本に、学生に患者の立場を尊重し、思いやりを持って接することの重要性を伝える。知識や技術だけでなく、協調性や倫理観、実践的な能力を身につけさせることを重視する。最終的には、現場で即戦力となり、患者に信頼される医療人として一步を踏み出せるようサポートする。

3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングや ICT 活用等の工夫点について）
  - ・ 3年次の血液検査学実習では、患者の立場を実体験させ重みのある実習を行う。
  - ・ 自身で採血した検体を使用することによって、より真剣に検査、実習に取り組み、データの考察を行えるよう仕向ける。
  - ・ 2年次の医動物学実習では、私が経験した症例を紹介することで、実際の検査業務をイメージさせ職業観を植え付ける。
  
4. 今年度における教育方法改善の取り組み
  - ・ 一部の实習項目を演習に変え、3年生の過密スケジュールによる負担の軽減を実施。
  - ・ 1201実習室のプロジェクター、OHCの更新を行い、昨年度批判の多かったハード面を改善
  - ・ レポート返却時に時間を取り、解説を行うことで理解を深め、自身のレポートを振り返る時間を設ける。
  
5. 今年度の学生による授業評価より
  - ・ 概ね良好であるが、実習科目以外の学習時間が少ない。
  - ・ レポートの評価は公表してほしいとのコメントがあった。
  
6. 今年度の成果
  - ・ 1201実習室のハード面を良くしたため、以前のような批判的なコメントは無くなった。
  
7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策
  - ・ レポートの評価は公表していないため、今後評価をレポートに記載し返却する。
  - ・ 座学の科目では、小テストなどを課して授業以外の学修を習慣付ける。
  
8. 社会的活動等
  - ・ 兵庫県臨床検査技師会 理事 公益事業部長
  - ・ 臨床検査教育協議会 評議員
  - ・ 関西大学生命化学部非常勤講師
  - ・ 厚労省指定「タスクシフト／シェア」講習会 実務委員
  - ・ 兵庫県精度管理専門委員
  
9. 根拠資料（資料名のみ）
  - ・ シラバス
  - ・ 学生による授業評価

教員名	溝越 祐志	所属学科	医療検査学科	職名	講師
クラス担任	なし	クラブ顧問	なし		
委嘱委員・職務	入試委員、教務委員、学内実習安全委員、ライフサイエンス研究センター				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課（網掛け部分は外部公表しない）科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
検査入門実習	M	1	前期	必修	実習	対面	83
○基礎分析実習	M	1	後期	必修	実習	対面	84
公衆衛生学実習	M	1	後期	必修	実習	対面	83
免疫検査学実習	M	3	前期	必修	実習	対面	93
遺伝子・染色体検査学実習	M	3	前期	必修	実習	対面	94
技能修得到達度評価	M	3	後期	必修	実習	対面	90
文献講読	M	3	後期	選択	講義	対面	51
分子感染制御学演習	M	3	前期	選択	演習	対面	11
臨地実習	M	3	後期	必修	実習	対面	91
総合医学検査特論	M	4	後期	選択	講義	対面	71
総合医学検査演習	M	4	後期	必修	演習	対面	84
卒業研究	M	4	通年	必修	演習	対面	81
医学概論	R	1	後期	必修	講義	対面	90
○臨床検査総論	N	2	前期	選択	講義	対面	84
いのちと共生	基盤	1	前期	選択	講義	遠隔	140
まなぶる▶ときわびとII	基盤	1	後期	必修	演習	対面	393

(2)準正課、正課外の教育活動

- ・ 入学前課題の出題と添削

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

1 年生には考察力や応用力よりも、基礎知識や基本技術、レポートの書き方など基礎項目を修得することに対するウェイトを上げ、基礎土台の構築を助けることを重視する。また、課題の自己管理を評価するため、実習では課題点数を高め設定している。一方で、高学年に対しては、レポートでの考察力

はもちろんのこと、発展形の授業では授業内容を固定化せず、最新の研究を模して授業を展開することで、医療の発展に貢献できるよう、学生が自ら課題を発見し、解決策を考え、学び続ける力を育成する。卒業研究や分子感染制御学演習では特に、自己研鑽に繋がる「知」に対する好奇心、欲求の大切さについて、学生に教授したいと考えている。

### 3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）

- ・実習科目では、予習として実技操作の動画や説明動画を作成し、行うことをあらかじめイメージさせるようにした。
- ・授業後に学生の質問に答えるように、授業終了後も質問者がいなくなるまで、教室に留まるようにした。
- ・講義科目では、学生が継続的に勉学を行うことおよび、定期テスト時の勉強負担を減らす目的で毎回講義の最初に小テストを設定した。
- ・演習科目では実験結果をまとめ発表させる場を設けた。その際に、学生だけでなく教員からも質問を行うことで、学生に学術発表に似た雰囲気を体験する場を設けた。

### 4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・実習の主担当が変更となった科目では、実習項目の変更に伴い、授業資料や予習動画を新たに整備し直した。
- ・昨年の授業評価に対する対策をいくつか改善した。以下列挙する。
  - 実験器具が足りず、順番に使うための待ち時間があったこと。 → 実習内容を見直し、実験器具による待ち時間が少なるように改善した。
  - 教科書の線引きが少しはやいです。」「授業の進行速度が少し速くて、ついていけないときがありました。 → 1年生対象の公衆衛生学での意見であった。他の学年のペースに慣れていたため、今年度は、教科書の線引き、説明を丁寧に行うように努めた。言葉を省略せず、少しずつ段階を踏んだ説明をするように心がけた。

### 5. 今年度の学生による授業評価より

「基礎分析実習」の科目においては、この授業でよいと思った点は「器具の正しい使い方を学べたこと」の意見がでた。1年生の最初の授業で基礎的な器具の使用方法を教授するのが目的の授業のため、目的に沿ったコメントが得られたことは評価できる。一方で、「見にくい。前の席なのに見にくいので、見やすくしてほしい」という改善コメントがあがった。こちらが用意したスライドの問題か、モニターなどの設備の問題かが区別できないが、スライドの文字の大きさを含め、改善を行う予定である。

「医学概論（旧 公衆衛生学）」の科目においては、良かった点として「毎回小テストがあったので復習がしやすかった。」「溝越先生の授業がわかりやすかった」「スライドの内容が簡単に纏められてい

て見やすかったです。」などの意見があった。2人の教員で担当している科目のため、どちらの教員に対する評価かがわからないが、前年度に続いて、小テストに対する好意的な意見が認められたため、今後でも継続して行っていきたい。改善点のコメントとしては「指定席にすれば、もっといい環境下で講義に取り組むことができるとおもいます。」という意見があったが、指定席については他の抗議でも実施しておらず、この授業のみで出てきた意見であるため、来年度も同様の意見が出るかを見てから、改善するかを判断する予定である。

「臨床検査総論」では「お二人の先生の内容は、基本的な知識の部分から教えて頂き、理解をしやすかったです。看護と医療検査の知識はかけ離れたものではなく、繋がっていて、臨床検査の意識も含めて看護の知識の理解を深めることの必要性を感じた。」「授業資料がお二方ともすごく見やすかったです。」というコメントがよせられ、資料については一定の評価を得ているものと思う。ただし、否定的なコメントとして、「プリントの色が多くてポイントが少し分かりにくいところです。でもカラフルでモチベがあがります。」「小テストのやり方を変えた方がいいと思う。」という意見があった。プリントの色については、資料の見直しを図る予定である。小テストについては、看護学科の学生にとっては、選択科目で小テストを課される、負担が大きいために出た意見であると思う。また、教室の大きさからどうしても密になってしまうため、隣の人の解答が見えてしまうという欠点もあるため、来年度からは小テストを廃止し、演習問題の課題提出式に変更する予定である。

## 6. 今年度の成果

今年度の大きな成果としては、学生の性質が変化しつつあることを感じ取れたことである。授業評価は昨年より全体的に低下した（昨年総合評価平均 4.5 → 本年度 4.4）。学生の理解度が低下しているが、授業形式の調整が追いついていないことが原因と考えられる。来年度以降は、より簡素で明確な目的や課題を設定した授業形式に変えていく必要がある。

## 7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

各授業評価のコメントに対する改善策は「今年度の学生による授業評価より」の項目に記載している。以下、本年度私自身が強く感じた改善点について記す。

この数年で学生のレベルの乖離が進んでいる。全ての学生が理解できるように、課題設定の単純化や、高校レベルの内容も説明する資料作りが必要になってくると考えている。来年度は、定期テストの解答分析を活用し、学生のつまずきやすいポイントを重点的に補足する授業形式へと改善する。

## 8. 社会的活動等

高校生への臨床検査技師職種の紹介による、臨床検査啓蒙活動を5回実施した。

## 9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
  - ・ 授業における配布、配信資料等

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	佐野 太亮	所属学科	医療検査学科	職名	講師
クラス担任		クラブ顧問		病理部 (顧問)	
委嘱委員・職務	国試対策委員、就職委員、卒業研究委員、細胞検査士養成課程委員、地域交流センター、LS細胞病理研究ユニット				

1. 教育の責任 (教育活動の範囲、担当科目)

(1) 正課 (網掛け部分は外部公表しない) 科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
検査入門実習	M	1	前期	必修	実習	対面	82
まなぶる▶ときわびとⅠ	基盤	1	前期	必修	演習	対面	396
まなぶる▶ときわびとⅡ	基盤	1	後期	必修	演習	対面	393
情報基礎	M	1	前期	必修	講義	対面	82
組織学実習	M	2	前期	必修	実習	対面	87
病理検査学	M	2	後期	必修	講義	対面	85
病理検査学実習Ⅰ	M	2	後期	必修	実習	対面	88
病理検査学実習Ⅱ	M	3	前期	必修	実習	対面	93
細胞検査学演習	M	3	後期	選択	演習	対面	32
細胞検査学特論Ⅰ	M	3	前期	選択必修	講義	対面	12
細胞検査学特論Ⅱ							
技能到達度評価 AB	M	3	後期	必修	実習	対面	90
総合医学検査特論	M	4	後期	選択	講義	対面	71
総合医学検査演習	M	4	後期	必修	演習	対面	84
卒業研究	M	4	通年	必修	演習	対面	81

(2) 準正課、正課外の教育活動

- ・ 国試対策
- ・ 就活履歴書添削と小論文の添削指導
- ・ 細胞検査士養成課程の学生へのスクリーニング及び同定のレクチャー

2. 教育の理念 (育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念)

専門科目では、主体的に学ぶ姿勢を持ち積極的に授業へ参加する学生を養成したい。そのために、専門基礎科目では、疑問を持ったときに自ら考え、調べる能力の基礎を構築する必要がある。

教員の役割としては、ただ単に分かりやすい授業を目指すというだけではなく、学生が疑問を持ち、興味がそそられる要素も取り入れる必要があると考える。

### 3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）

- ・ 講義では配布プリントを穴埋め形式にし、学生に考えながら授業を受けてもらえるようにした。
- ・ 実習では、学生が事前に講義動画を視聴させることで、実習に対する予習を行うように工夫した。また授業開始時には manaba 上のドリルを行い、実習に対する知識を確認し、ただ単に手を動かすだけの実習を行うのではなく、自ら考えながら実習が行えるように工夫した。さらに本年度は、レポートについても教科書の丸写しにならないように、定期試験で使えるような形でまとめることを学生に意識させた。
- ・ 演習科目では、授業で学んだことを発表する時間を設け、自分が学んだことまたは疑問に思ったことを調べるように工夫した。

### 4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・ 前年度の学生による授業評価では、実習で時間内に終わらないとの意見が見られた。そのため、今年度は、実習の間に説明を加えるなど、実習時間内に終わるように努めた。
- ・ 授業前に行っている小テストでは、その授業科目だけではなく、基礎科目の問題を取り入れ、復習できるように改善した。

### 5. 今年度の学生による授業評価より

「情報基礎」では大学生活で使用する Microsoft のソフトの使い方を学ぶことができ、良かったという意見が見られた。「組織学実習」ではレポートの評価が明確であった点や事前学習を行うことに対しての良い意見が見られた一方で使用している標本の染色性の低下についての意見が見られた。

### 6. 今年度の成果

- ・ 病理検査学実習Ⅱについては主担当が変更となったが、授業評価では昨年度から評価が落ちることがなかった。また、その他の科目についても学科平均よりも高い評価を得た。
- ・ 細胞検査士認定資格試験対策として、9 カ月にわたり指導した結果、一次試験、二次試験ともに100%の合格率となった。
- ・ 国試対策では補習等、成績下位層への対策を行った結果、合格率が96.3%と9割を超える合格率となった。

### 7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

「臨床病理検査学実習Ⅱ」では、教員が伝えた内容と一部の学生の理解に少し乖離がある点が見られたため、次年度以降では乖離がないように努めたい。また、「組織学実習」「病理検査学実

習Ⅰ」「病理検査学」ではその回の主担当が入れ替わる形式をとっており、教員の授業形式に学生が戸惑う点が見られたため、次年度以降は授業の最初に授業形態についての説明を加える必要があると感じた。

#### 8. 社会的活動等

- ・ 「子宮の日（子宮頸がん検診啓発活動）」での配布活動や学生発表の引率
- ・ 「健康ふれあい健康フェスタ」での学生サポート

#### 9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・ 授業における配布、配信資料等

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	梶山 和樹	所属学科	医療検査学科	職名	助教
クラス担任		クラブ顧問	病理部（副顧問）		
委嘱委員・職務	国試対策委員会、入試委員会、学生委員会、学内実習安全委員会				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課（網掛け部分は外部公表しない）科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
検査入門実習	M	1	前期	必修	実習	対面	82
まなぶる▶ときわびとⅠ	基盤	1	前期	必修	演習	対面	396
まなぶる▶ときわびとⅡ	基盤	1	後期	必修	演習	対面	393
組織学実習	M	2	前期	必修	実習	対面	87
病理検査学	M	2	後期	必修	講義	対面	85
病理検査学実習Ⅰ	M	2	後期	必修	実習	対面	88
病理検査学実習Ⅱ	M	3	前期	必修	実習	対面	93
細胞検査学演習	M	3	後期	選択	演習	対面	32
細胞検査学特論Ⅰ	M	3	前期	選択必修	講義	対面	12
細胞検査学特論Ⅱ							
技能到達度評価 AB	M	3	後期	必修	実習	対面	90
総合医学検査特論	M	4	後期	選択	講義	対面	71
総合医学検査演習	M	4	後期	必修	演習	対面	84
卒業研究	M	4	通年	必修	演習	対面	81

(2)準正課、正課外の教育活動

- ・ 国試対策にて補習を実施
- ・ 入学前教育におけるファシリテーター
- ・ 細胞検査士養成課程の学生へのスクリーニング及び同定のレクチャー

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

大学教育では学生が能動的に授業に参加する姿勢が重要であり、これは高等学校までに行ってきた授業との相違点であると考えます。また、このような能動的な大学教育を通して、社会に出た後も自ら進んで学び、向上できるような学生の育成に尽力します。

### 3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）

- ・顕微鏡を用いた実習ではどうしても観察者が観察したものを他者に伝えることが難しい。（説明したい部分を示す等）そこで、バーチャルスライドを用いた授業を一部導入したところ、学生同士がディスプレイを共有できるため、ディスカッションが活発化した印象を受けた。次年度はさらにバーチャルスライドの導入を行っていききたい。
- ・本年度は Notion の共有データベースにて試験対策用の知識を整理した。初年度ということで格納されているデータ量が少なく、想定していた利用数はなかったものの、一定数の利用があった。次年度はさらなるデータ拡充を図り充実したデータベースにしていきたい。
- ・細胞検査士養成課程にて、顕微鏡カメラを用いた鏡検画像の比較方法を共有し、教員不在でも学生同士で討論ができる環境を整えた。

### 4. 今年度における教育方法改善の取り組み

実習レポートの参考文献には、教員が作成した資料を多用している例が見られた。そこで、講義の中で資料による解説と共に、教科書にアンダーラインを引くなど、どこに記載があるかを強調した。

### 5. 今年度の学生による授業評価より

講義の授業においても実演や資料を用いて視覚的に提示することで学生が「分かりやすい」「楽しい」と感じていることを実感した。可能であればこのような体系を授業に組み込んでいきたい。一方で実習において、レポートの採点基準についての疑義があった。次年度ではレポートの採点基準を文書にて公開するとともに、例として作成したレポートも配布し評価の明確化と学生の理解促進を図りたい。

### 6. 今年度の成果

細胞検査士養成課程で顕微鏡カメラを使用したディスカッションの在り方を共有し、学生同士が画像を見比べながら討論できる環境を整えた。その結果、細胞検査士認定試験にて一次試験・二次試験共に全員合格することが出来た。

### 7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

実習レポートの書き方について、次年度ではレポートの採点基準を文書にて公開するとともに、例として作成したレポートも配布し評価の明確化と学生の理解促進を図りたい。

### 8. 社会的活動等

### 9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス、学生による授業評価、授業における配布、配信資料等

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	對間博之	所属学科	診療放射線学科	職名	教授
クラス担任	なし	クラブ顧問	なし		
委嘱委員・職務	学科長 運営委員会 委員 学長室会議 委員 放射線安全委員会 委員				

1. 教育の責任（教育活動の範囲，担当科目）

(1)正課（網掛け部分は外部公表しない）科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
放射線科学概論	R	1	前期	必修	講義	講義	87
人体のふしぎ	基盤	1	前期	選択	講義	講義	159
○基礎科学演習	R	1	後期	必修	講義	対面	87
○核医学検査技術学Ⅰ	R	2	前期	必修	講義	講義	85
○核医学検査技術学Ⅱ	R	2	後期	必修	講義	講義	80
○核医学検査機器学	R	3	前期	必修	講義	講義	82
○核医学機能解析学	R	3	前期	必修	講義	講義	81
○放射線安全管理学	R	3	前期	必修	講義	講義	81
○放射線安全管理学実習	R	3	後期	必修	実習	実習	82
関係法規	R	3	前期	必修	講義	講義	81
医療安全管理学	R	3	前期	必修	講義	講義	82
○臨床実習	R	3	後期	必修	実習	実習	83
○臨床基礎実習	R	3	後期	必修	実習	実習	83
○IPW（多職種連携）論	R	3	後期	必修	講義	講義	81
医療文献読解	R	4	前期	必修	講義	講義	10
○診療放射線技術学総合演習Ⅰ	R	4	前期	選択	演習	演習	84
○診療放射線技術学総合演習Ⅱ	R	4	前期	必修	演習	演習	84
○卒業研究	R	4	前期	必修	演習	演習	69

(2)準正課，正課外の教育活動

- ・ 国試対策に関する個別指導
- ・ 臨床実習病院への訪問
- ・ 就職に関する医療機関への訪問

- ・ 大学院進学希望者への指導
- ・ 卒業研究指導学生（7名）に対する研究発表指導
- ・ 就職活動の支援（志願理由書等の添削，面接指導）
- ・ 入学前課題の立案，調整
- ・ 休学学生のフォローならびに健康管理センター等とのカンファレンス
- ・ 診療放射線技師教育施設協議会との協議
- ・ 学術団体ならびに職能団体との協議
- ・ 診療放射線技師法改定に伴う告示研修の学内実施
- ・ リカレント教育の立ち上げ

## 2. 教育の理念（育てたい学生像，教育のあり方，教育への信念）

医療専門職における教育は，大学の4年間にとどまらず，その後のキャリアにおいても継続的な学びが求められる。大学の教育では，医療人として必要な基礎知識・技術・態度を修得させるとともに，将来にわたって自らの力で成長できる素地と発想力を持った学生を育成することを目指している。

学部教育においては，教員が教授すべき内容と，学生自身が主体的に考えるべき内容の区分とバランスを適切に保つことが重要である。また，学生の特性や理解度に応じて，両者のバランスを調整する必要がある。そのため，教育の実施にあたっては，学生一人ひとりの状況を把握するための洞察力を養い，それぞれの理解度に応じた教育手法について考え続けていくことが求められる。

このような理念のもと，個別の成長を促し，医療専門職としての使命を果たせる人材を育てていきたい。

## 3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策，取り組み，アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）

- ・ 学修効果を高めるために，事前資料における予習を重視し，反転授業を積極的に組み入れる。
- ・ 講義中に近隣学生と意見交換や自ら考える時間を設け，能動的な学修を促す。
- ・ 一部講義では成績等を考慮したチームを構築し，チームメンバーと協働する力を養う。

## 4. 今年度における教育方法改善の取り組み

本学科では，第2次カリキュラムの導入に伴い，新設科目「基礎科学演習」を開設した。この科目では，学術的な文章の記述方法や論理的思考の基本を学ぶために実際に模擬実験データを用いてレポートを作成する演習形式を採用した。また，近年，学生の授業に対する集中力の低下が問題となっている。本学では1限が90分であるがその間，集中力を維持することが困難である学生が見受けられるため，30分×3クールという発想にて授業の進め，集中力の維持を図ることができた。今後も教育方法の改善に取り組み，学生がより充実した学びを得られる環境づくりを進めていく。

## 5. 今年度の学生による授業評価より

主要担当科目においては，毎授業の冒頭に相当時間を利用して学生へのフィードバックを実施し

た。授業内での不明点や誤解が生じた内容については、訂正や追加の説明を行い、理解の定着を図った。また、授業終了後に実施する課題に記載されている要望についてもリアルタイムに対応することで、科目終了後の授業評価として顕在化する大きな問題はなかった。ただし、マイクの使用忘れなどの指摘はあったので注意したい。また、講義資料をデジタルデータで提供しているが、印刷物を配布してほしいとの要望もあった。しかしながら、iPadなどのデバイスで閲覧する学生も増えているため、ペーパーレス化の意義について学生に十分説明し、理解を促したいと考えている。

## 6. 今年度の成果

穴埋め形式にした事前学修資料を用いて反転授業を行うことで、一定の学修効果が認められた。また、授業後の課題提出時の意見聴取を継続して実施することで、学生の理解度を把握するとともに学生の理解にあったフィードバックが実施できた。なお、国家試験関連科目においては、グループワークなどを取り入れ、新たな学修法を試みたことで高い国家試験合格率を得ることができた。さらにリカレント教育の一環として、子育て世代を対象としたセミナーを実施し、学生のキャリア形成にも役立った。

## 7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

新たなカリキュラムの導入に伴い、1年次の専門基礎科目の開講時期が前倒しになっており、基盤科目から専門基礎科目へのスムーズな移行には、これまで以上にリメディアル教育の充実が必要である。しかしながら、各リメディアル科目の履修については、学生個々の学力を測定する機会が少なく、必要な学生に必要な量のリメディアル教育が提供できているか判別が難しかった。そこでリメディアル科目の履修について、定期的に試験を実施することで、過不足のないリメディアル科目の運用を試みたい。また、国家試験の出題基準が変更になり、専門基礎ならびに専門領域の配分が変更になった。今後は、今年度の出題内容を精査し、授業内容に落とし込んで新たな出題基準に沿った指導を実施したい。

## 8. 社会的活動等

学術団体等で以下の役員、委員等を務めた。

日本核医学専門技師認定機構 理事長

アジア核医学技術学会 監事

The Asian Society of Nuclear Medicine Technology Steering committee member

日本放射線技術学会 代議員

教育委員会 副委員長

教育委員会 アジア放射線教育支援班 副委員長

放射線防護委員会 委員

日本核医学技術学会 評議員

理事

日本核医学会

表彰選考小委員会 委員長  
表彰データベース作成小委員会 委員長  
ホームページ管理小委員会 委員長  
日中核医学交流委員会 委員  
経営戦略・将来計画委員会 委員  
第24回日本核医学会春季大会 講師

その他

医療技術等国際展開推進事業

ラオスにおける放射線医療機器の品質・安全管理技術の向上を目的とした技術研修 講師

厚生労働科学研究費補助金

地域医療基盤開発推進研究事業 「放射線診療の発展に対応する放射線防護の基準策定のための研究」 研究協力者

J-RIME JAPAN DRLs

核医学プロジェクトメンバー

神戸大学大学院保健学研究科

保健学倫理委員会 委員

## 9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・ 授業における配布、配信資料等

### ティーチング・ポートフォリオ

教員名	今井 方丈	所属学科	診療放射線学科	職名	教授
クラス担任	4年 担任 B	クラブ顧問			
委嘱委員・職務	・ R 科就職委員会 委員				

## 1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課（網掛け部分は外部公表しない）科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
大学道場 miniゼミ A	基盤	1	前期	選択	実習	対面	16
○臨床技術入門	R	1	後期	必修	演習	対面	89
○画像診断学 I（頭部、頸部、脊髄）	R	3	前期	必修	講義	対面	87
○画像診断学 II（胸部、心大血管、消化器等）	R	3	前期	必修	講義	対面	87
○医用画像工学	R	2	後期	必修	講義	対面	90
○医用画像工学実習	R	3	前期	必修	実習 座学	対面	84

医療安全管理学	R	3	前期	必修	講義	対面	85
医療安全管理学実習	R	3	後期	必修	実習	対面	85
臨床実習	R	3	後期	必修	実習	対面	83
臨床基礎実習	R	3	後期	必修	演習	対面	87
○災害医療学	R	4	前期	選択	講義	対面	6
診療放射線技術学総合演習 I	R	4	前期	選択	演習	対面	23
診療放射線技術学総合演習 II	R	4	後期	必修	演習	対面	84
卒業研究	R	4	前後期	必修	演習	対面	69

## (2) 準正課、正課外の教育活動

- ・ 死亡時画像診断（講師依頼・授業資料作成・出欠管理・試験問題作成・試験監督・採点）
- ・ 放射線写真学（出欠管理・授業補助・試験監督）
- ・ Early Exposure 企画・交渉・引率（兵庫県立災害医療センター，診療放射線学科1年生全員）
- ・ 国家試験対策（担当学生への学習方針指導）
- ・ 国家試験対策（補習授業の実施）
- ・ 国家試験模擬試験問題作成（医用画像情報学および画像工学，数回分）
- ・ 臨床実習施設への訪問、巡回指導 [8名担当]（神大病院，神戸百年記念病院）
- ・ 臨床実習ノート（報告書）のチェックと報告の聞き取り [8名担当]（3クール末）
- ・ 就職に関する履歴書や小論文の添削
- ・ 就職活動の指導として模擬面接
- ・ 高校への出張講義
- ・ 令和7年国家試験受験者対象 厚生労働省告示研修
- ・ 医用画像工学の補習授業（一部，高校数学のリメディアル）
- ・ オープンキャンパスにおける個別相談

## 2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

- ・ 国家試験を目標にした目先の教育ではなく，基礎知識・基礎技術をしっかり備え，変革著しい放射線診療に対応出来得る診療放射線技師を目指せる人材を育てたい。
- ・ また，自身で問題点を認識，抽出し，その解決に向けて考え，行動できる人材に育てたい。
- ・ 一方，医療人として社会に貢献する人間に相応しい人間力豊かな人材に育てたい。

## 3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）

- ・ 教員がまとめた資料は提供せず，自分で学習し，自分でまとめるよう指導している。但し，限られた授業時間を有効に利用するため，スライド資料を提供し，書き写すだけの時間を減らし，その時間を見聞きに充てている。

- ・ 小テストや課題を与え、復習することを重視し、知識の定着を促すよう心掛けた。
- ・ 自身で振り返りが出来るように、期末試験の問題と採点後の回答用紙を返却することになっている。小テストも同様である。
- ・ 基礎に関する補習を実施。（一部、高校数学のリメディアルを含む）
- ・ 質問に来る学生には、即、答を示すのではなく、出来るだけ自分で解決でき、同様の問題には今後自ら対応できるように、少々の時間を掛けようとも、順に解きほどこせるようにしている。

#### 4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・ 基本的な項目、重要な項目については、より時間を掛け、丁寧な説明を心掛けた。

#### 5. 今年度の学生による授業評価より

難しい科目の1つである「医用画像工学」において、「小テストがよかった」「ゆっくり話す。授業のスピードがよかった」「分かり易かった」との意見が自由記述で散見され、昨年度より効果が上がった感がある。

#### 6. 今年度の成果

今年度は私が担務する正課および準正課、正課外の教育活動や社会活動等において、一年かけて feed out できるようにすることが最重点項目であったが、概ね良好であった。引き続き、非常勤で担務するもの以外の項目は、順当に引き継ぎは完了した。

#### 7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

国試模擬試験において、基礎的な知識が定着していないが故に点数が伸びない学生が一定数いる。彼らへは基礎的な知識の定着を目的とした国試対策を強化するの必要を感じた。次年度は、国試対策の一環としてリメディアル教育（復習授業）を行う予定である。

#### 8. 社会的活動等

- ・ 兵庫県教育委員会 兵庫県公立学校職員(会計年度任用職員) 兵庫県立福崎高等学校（特別非常勤講師）
- ・ 全国診療放射線技師教育施設協議会 連絡代表者
- ・ 日本放射線技術学会 学術推進員
- ・ FAR 会 [Fellowship for Advancement of Radiology (放射線医学の進展のための専門家集団の会)] 世話人
- ・ 関西 CT 技術シンポジウム 顧問

9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	谷口英明	所属学科	診療放射線学科	職名	特任教授
クラス担任	なし	クラブ顧問	なし		
委嘱委員・職務	広報委員会・委員				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課（網掛け部分は外部公表しない）科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
○コミュニケーション論	MNE 基盤	1~3	前期	選択	講義	対面	60名
○コミュニケーション論	R	1	前期	必修	講義	対面	89名
○コミュニケーション論	O	1	前期	必修	講義	対面	72名
○芸術文化論	全科 基盤	1~4	前期	選択	講義	対面	89名
○医療コミュニケーション	R	1	後期	選択	演習	対面	66名

(2)準正課、正課外の教育活動

入学前課題の出題とレポートへのフィードバック

常盤女子高校女子教育セミナーでの講演（3回）

学科FDで「学生とのコミュニケーション」をテーマに講義

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

コミュニケーション能力とプレゼンテーション能力の向上。

基盤教育では対人コミュニケーションがしっかりと実践できる人材を育てること。また、学生のプレゼン力の不足を痛感、向上のためのスキル指導。

演習科目では具体的にチームでのコミュニケーション能力を養う訓練を実行する。

明るく、爽やかな印象を持つ人材育成。

3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活

#### 用等の工夫点について)

- ・ コミュニケーション論では少人数グループ単位で着席し、毎回グループメンバーを変える（毎回席位置も変わる）ことにより、多くの人間と交流することや、常に新鮮な雰囲気の中で授業をうけられる環境を作る。グループディスカッションや発表することにより、人前でのスピーチ能力やプレゼン力を養成する。

時々、映像を使用して視覚から学ぶことで、より理解を深める。

#### 4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・ 定期試験を実施しない講義科目のコミュニケーション論については、授業内での発表やレポートの機会を増やし、学生の発言力の向上を目指した。
- ・ 90分の講義では、どうしても学生の集中力がなくなる時間が出てくるため、そのタイミングで気分転換をする。具体的には「頭の体操」「雑学プレゼン」「コミュニケーションの損得」など授業内容とはいったん離れた短い話をする事で集中力が戻ってきた。
- ・ 演習科目の医療コミュニケーションでは毎回、グループでのディスカッションやグループで考える作業を多く取り入れ、チームでの行動を重視する意識をさらに高めた。

#### 5. 今年度の学生による授業評価より

今年度もコミュニケーション論と医療コミュニケーションでは「毎回、席やグループメンバーが変わり、話したことのない人たちと多くの交流ができて楽しかった」というコメントを多数いただいた。席の位置やグループ構成も授業環境では大切であることを確信した。

「とても聞きやすい講義である」という意見も多かった。教員の話し方は大変重要な要素だと思う。できるだけ、滑舌良く、間を生かし、張りのある声を意識することで学生の理解力に影響を与えると考える。

#### 6. 今年度の成果

年々、学生の発表とプレゼンのスキルが向上していると思う。経験を重ねることにより、学生自身からスキルが向上したという報告が増えた。

R科のコミュニケーション論は時間割と人数の関係でA・Bクラス別に講義を行っているが、学生からクラス合同のほうが、より多くの人と交流ができるため合同での授業が良いとの意見がこれまでもあった。比較的人数の少ないO科については今年度からA・B合同クラスでの授業をすることになった。より多数の人材交流という点で大いに成果があった

#### 7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

コミュニケーション論では授業以外の学習時間が非常に少ないため、つぎの授業への準備やレポートも少し増やすこととしたい。

#### 8. 社会的活動等

スポーツ分野の著名人と各地で講演活動。

阪神タイガース・アーカイブプロジェクト（球団 100 周年にむけて）イベント司会や OB インタビューなどへの取り組み。

サンテレビ アナウンススクールにおいて定期的に学生を指導。

## 9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・ 授業における配布、配信資料等

### ティーチング・ポートフォリオ

教員名	山崎麻由美	所属学科	診療放射線学科	職名	教授
クラス担任	1 年主担任	クラブ顧問	なし		
委嘱委員・職務	入試委員会（副委員長）、ときわ教育推進委員会、図書委員会、ハラスメント防止対策委員会、学修支援 TG				

## 1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課（網掛け部分は外部公表しない）科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
○英語コミュニケーション I	基盤	1	前期	必修	演習	対面	265
○医療英語	M	2	前期	必修	演習	対面	87
○英語コミュニケーション II	基盤	1	後期	必修	演習	対面	155
○医療英語	R	2	後期	必修	演習	対面	81
大学道場 mini ゼミ B	基盤	1	後期	選択	演習	対面	75
臨床基礎実習	R	3	後期	必修	実習	対面	83
放射線技術学総合演習 II	R	4	後期	必修	演習	対面	79
卒業研究	R	4	通年	必修	演習	対面	69
診療放射線技術学総合演習 I	R						79

### (2)準正課、正課外の教育活動

- ・ 入学前課題の出題と添削
- ・ 学生の国際学会発表への個別指導
- ・ 大学院進学希望者への個別指導

- ・英語関連の検定試験受検指導

## 2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

卒業の単位を取るために授業を受けるのではなく、将来を見据えて自分なりの目的をもって取り組める学生を育てたい。また知識を得る過程に自分なりの工夫をこらすことができ、自らの学修スタイルを身につけることができる学生を育てていきたい。

## 3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングや ICT 活用等の工夫点について）

- ・英語が苦手な学生が多いので、まずは苦手意識を取り除くことを心掛けた。その上で、全員が授業に参加できるように、授業前の課題や授業後の課題に取り組むように工夫をした。
- ・毎時間、授業開始後に復習の小テストを行い、前回の授業の確認を行った。
- ・インプットのみでなく、アウトプットもできるように授業時間内ではグループワークで英語のプレゼンテーションに取り組ませた。
- ・学生が授業外で取り組む課題を提出した。その手段として manaba を多く利用した。①「小テスト」を用いて毎回予習と復習の課題をだした ②「レポート」から授業時間外に図書館で graded readers を2冊読んでレポートを書くという課題を出した。
- ・専門の「医療英語」では学生の理解が進むように学科の専門教員の講義も組み込んだ。専門教員の担当講義は、学生が学ぶモチベーションをあげることに役立った。

## 4. 今年度における教育方法改善の取り組み

どの授業においても、自己学習時間が少ないのが課題であり、改善したい点である。取り組みとしては、事前学習をチェックすることを実施しているが、学生個人の差が大きい。

## 5. 今年度の学生による授業評価より

- ・「レポート」から授業時間外に図書館で graded readers を2冊読んでレポートを書くという課題を出した。学生の感想として「英語の本を読んだことがなかったので、不安だったが、達成感があった」「今度はずっと難しい本に挑戦したい」という前向きなコメントが多数あった。
- ・manaba の課題が簡単すぎるという指摘があった。機能上の限界もあるが、できるだけ事前事後の学習に役立つような課題を出題していく。
- ・「授業のスピードが速すぎる」という指摘があった。今後は学生の反応を見ながら授業を進めていきたい。

## 6. 今年度の成果

- ・英語科目で予習・復習の課外学習を徹底したため、「自分自身の評価（学習時間と授業に積極的に参加したか）」がいずれの授業でもわずかながらだが、向上した

- ・入学前課題でアンケートを実施した。回答数は多くなかったが、今後の改善に役立てることができ  
る。

## 7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

- ・正課：・授業外での学習時間を増やすことが課題である。個別に指導することには限界があるので、  
グループワークを利用して、学生同士で課題の評価までする仕組みを考えたい。
- ・入学した学生に対して基礎科目「物理」「化学」「生物」「数学」の習熟度をはかり、専門の  
学修に必要な知識がついているかどうかの確認を行う。
- ・準正課：大学院進学希望の学生の指導だけでなく、海外研修へ参加する学生や検定試験を受ける  
学生の指導も積極的に行いたい。
- ・正課外：アンケートをもとに入学前課題の効果検証を行う。

## 8. 社会的活動等

なし

## 9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・ 授業における配布・配信資料等

### ティーチング・ポートフォリオ

教員名	高久圭二	所属学科	診療放射線学科	職名	教授
クラス担任	2年Aクラス担任	クラブ顧問	天文部(主)、ベクレル同好会(主)、 手話点字同好会(主)		
委嘱委員・職務	放射線安全委員会委員長、紀要委員会、教育研究センター、国試対策委員会、 学研委員				

## 1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課（網掛け部分は外部公表しない）科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講 時期	科目の種類	科目の形態	授業 形態	受講 者数
○放射線科学概論	R	1	前期	必須	講義	対面	89
○物理学	M	1	前期	選択必須	講義	対面	82

○暮らしの中の物理学	基盤	1	前期	選択	講義	対面	29
○大学道場 miniゼミ A	基盤	1	前期	選択	演習	対面	24
○放射線取扱概論	R	1	前期	必須	講義	対面	40
○放射線物理学 II	R	2	前期	必須	講義	対面	86
○放射線計測学	R	2	前期	必須	講義	対面	86
関係法規	R	3	前期	必須	講義	対面	84
○放射線物理学 I	R	1	前期	必須	講義	対面	89
○放射線物理学 II	R	1	後期	必須	講義	対面	89
○放射線計測学実習	R	2	後期	必須	実習	対面	88
放射線安全管理学	R	3	前期	必須	講義	対面	85
○科学技術論	基盤	1	後期	選択	講義	対面	14
臨床基礎実習	R	3	後期	必須	実習	対面	87
卒業研究	R	4	通年	必須	演習	対面	69
診療放射線技術学総合演習 I	R	4	前期	選択	講義	対面	
診療放射線技術学総合演習 II	R	4	後期	必須	講義	対面	84

## (2) 準正課、正課外の教育活動

- ・ 国試対策
- ・ 入学前課題の出題と回答
- ・ 放射線取扱主任者試験対策講座
- ・ 福島県浜通り研修

## 2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

教育は一方向ではなく、双方向でなければならないので、学生の反応を重視し、フィードバックを大切にしたい。

専門科目では、診療放射線技師を養成するために、放射線物理学や放射線計測学の知識の習得とともに、概念をイメージでき、将来患者さんに説明できる実践力と職業倫理をもった学生を養成する。特に、実習科目では、科学的実験事実に基づいたデータから、真実を導き出すプロセスの経験をしてもらい、さらに疑問を持つ能力を育成したい。

基盤科目では、実験を経験してもらうことにより、科学の楽しさと疑問を持つ能力を理念とする。

## 3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングや ICT 活用等の工夫点について）

- ・ 百聞は一見に如かずをモットーとし、実験を取り入れる授業や、スライドにアニメーションを

ふんだんに取り入れた。また、疑問を持つ能力を養うためと双方向の教育を心がけるため、授業後のレポート課題と感想質問のコーナーを設け、授業開始の最初に質問に答えるようにしている。

#### 4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・前年度の学生による授業評価では、実験や、スライドにアニメーションを取り入れることの評価が高かった。そのため、今年度は、さらに実験やアニメーションを取り入れた授業に努めた。
- ・演習では、学生自ら問題を説明するようにし、概念を理解するようにした。
- ・授業時間外の学修では、manaba を活用しミニレポート提出を行い、学生からの質問や疑問に回答し、双方向のやり取りに努めた。
- ・今年度は、さらに実験やアニメーションを取り入れた授業に努めたので、物理に対する苦手意識がなくなった等の感想を得た。
- ・授業の最初に前回の復習と、質問に対する回答を行うことによって、理解が深まったとの感想を得た。

#### 5. 今年度の学生による授業評価より

「授業スライドをマナバ上に載せてくださっていたおかげで、復習がしやすかったこと」「授業の初めに毎回小テストがあるので前授業の復習がしやすい。プレテストもいい復習の機会になった。」「早めにプレテスト問題配ってくれて嬉しかったです」「2 講義に一度くらいのペースでプレテストを下さったので、復習がしやすかったです。ありがとうございました。」

など、授業改善した効果が表れていた。

#### 6. 今年度の成果

- ・国試対策では、昨年度自分の卒研生で取り入れたグループ学修を全クラスに導入することにより、自主学習する効果があらわれたこともあり、4月から6月にかけての基礎作りを行うことができた。国試の合格率は、高かったが、年度による変動も考慮する必要がある。
- ・放射線取扱概論の授業を始めたことにより、合格者を二桁にすることができた。

#### 7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

過年度生は、卒業延期になる割合が大きいのので、過年度生専用の基礎学力をつけさせる講義を新設したいと考える。

#### 8. 社会的活動等

- ・福島県浜通り研修では大阪大学主催の活動に実行委員として活動した。
- ・天文部の顧問として、KITでの天体観測会を企画した。当日曇ってしまったが、ミニプラネタリウムを学生が行ってくれた。
- ・大学祭では天文同好会の出し物のサポートを行った。

## 9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・ 授業における配布、配信資料等
- ・ ホームページ、トピックボックス

### ティーチング・ポートフォリオ

教員名	南 利明	所属学科	診療放射線学科	職名	教授
クラス担任	4年	クラブ顧問	なし		
委嘱委員・職務	学生委員会・委員長 就職委員会・委員長 臨床実習委員会・オブザーバー 学生向け告示研修実施担当（R6年度のみ）				

## 1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課（網掛け部分は外部公表しない）科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
放射線技術学概論	R	1	前期	必須	講義	対面	
○放射線治療物理学	R	2	後期	必須	講義		94
○放射線治療機器学	R	2	後期	必須	講義		91
臨地実習	R	3	後期	必須	実習		
○医療安全管理学	R	3	前期	必須	講義		85
○放射線治療技術学1	R	3	前期	必須	講義		87
○放射線治療技術学2	R	3	前期	必須	講義		90
○放射線治療計測学	R	3	前期	必須	講義		87
○医療文献読解	R	4	前期	必須	講義		66
○医療安全管理学実習	R	3	後期	必須	実習		85
IPW	R	3	前期		講義		
放射線安全管理学	R	3	前期	必須	講義		

臨床基礎実習	R	3	後期	必須	実習		87
画像診断機器学実習 2	R	3	前期	必須	実習	対面	88
医療経済経営学	R	3	前期	選択	講義		
放射線技術学総合演習 1	R	4	前期	選択	演習		
放射線技術学総合演習 2	R	4	後期	必須	演習		
先進医学・技術学	R	4	前期	選択	講義		47

## (2)準正課、正課外の教育活動

- ・ 国家試験対策など
  - ・ 採用試験対策でエントリーシート添削や面接指導
  - ・ 入学前課題出題と添削
  - ・ 高校進路説明会参加
  - ・ 学生就職希望聞き取りと求人施設調査など
  - ・ 臨床実習施設開拓、受け入れ調査など
  - ・ 学生向け告示研修実施担当（備品消耗品購入、実施計画、研修実施）
2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）
- ・ 患者中心の医療、チーム医療を考えることのできる医療技術者（社会人）の育成
  - ・ 広い視野を持ち、向上心と興味に溢れ、設定した目標に向け行動できる大人（研究者）に！
3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングや ICT 活用等の工夫点について）
- ・ 学内における学習の集大成として国家試験合格は当然のことであるが、意見、考えの出力、と修正を学生自ら活発に行えることを目指した卒業研究にも重きをおいている。これに到達するための基礎的、専門的知識の習得には、可能な限りの実習や体験、アクティブラーニングを実行できる環境や資材機材の整備をこれからも継続していく必要がある。
4. 今年度における教育方法改善の取り組み
- ・ 国家試験対策にて過去問題の解説のみならずこれまでの授業での学習内容を反復し知識の定着を目指した。授業に出席した学生には効果的であったが、授業内容の反復は新規性に欠ける点は否めないため魅力的に感じる学生減少し出席率も当然低下。学生の自己主張と受け止めるべきなのか？
5. 今年度の学生による授業評価より
- ・ 評価が上がる工夫、対策は積極的に取り入れていきたい。  
専門科目は難易度も高く学生評価は低い傾向にあるが、評価を上げるために難易度を下げると国試レベルに到達しない恐れもある。

## 6. 今年度の成果

- 今年度2期生が卒業しデータの蓄積が始まった。評価数値データは今後の傾向把握、改善対策に活用していきたい。多くの科目で2期生の学力水準の低迷が叫ばれていたが、国家試験までにはかなり持ち上げることができたのではないだろうか。

## 7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

- 年々学生の学力低下傾向を感じる。臨床実習施設からの評価にも散見される。具体的な方策は今現在見出せていない。永遠の課題となるのかも。

## 8. 社会的活動等

就職委員長として1期生就職施設、大阪方面医療施設への訪問活動

## 9. 根拠資料（資料名のみ）

- シラバス
- 学生による授業評価

### ティーチング・ポートフォリオ

教員名	関 雅幸	所属学科	診療放射線学科	職名	准教授
クラス担任	無	クラブ顧問	野球部		
委嘱委員・職務	教務委員会委員、個人情報保護委員会委員、危機管理（災害）委員会委員、自己点検・評価委員会委員、情報インフラ整備ユニット委員長、診療放射線学科学生研究委員会委員長				

## 1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課（網掛け部分は外部公表しない）科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
○情報科学概論	M	1	前期	必修	講義	対面	83
○医療工学	M	1	前期	必修	講義	対面	84
○医用工学Ⅰ（電気工学）	R	1	前期	必修	講義	対面	89
○医用工学実習	R	2	前期	必修	実習	対面	85
診療放射線技術学総合演習Ⅰ	R	4	前期	選択	演習	対面	79
○プログラミング入門	基盤	1	後期	選択	演習	対面	40
○医療工学実習	M	1	後期	必修	実習	対面	83
○ロボティクス演習	M	3	後期	選択	演習	対面	14
○医用工学Ⅱ（電子工学）	R	1	後期	必修	講義	対面	89

臨床基礎実習	R	3	後期	必修	実習	対面	87
総合医学検査特論	M	4	後期	選択	講義	対面	71
診療放射線技術学総合演習Ⅱ	R	4	後期	必修	演習	対面	84
総合医学検査演習	M	4	後期	必修	演習	対面	84
大学道場 mini ゼミ B	基盤	1	後期	選択	演習	対面と一部遠隔	6
卒業研究	R	4	通年	必修	演習	対面	69
卒業研究	M	4	通年	必修	演習	対面	81

## (2) 準正課、正課外の教育活動

- ・ 国試対策の補習

### 2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

論理的思考力を持ち、問題解決のための行動を自ら起こすことができる学生を育成したい。

### 3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングや ICT 活用等の工夫点について）

- ・ 講義においては、

1. 授業で使用するスライド内の重要な用語等を伏せ字にした状態のものをプリントし、授業中はただ聞くだけでなく、大事な用語を書き込む形にしている。
2. プリントには余白が多くなるようにスライドの図を配置し、メモを取れるようにしている。
3. プリントは可能な限り翌週以降の分を配布し、予習が行いやすいようにしている。
4. CPU、RAM、抵抗、トランジスタ等授業の中で出てくるものの実物をできるだけ見せている。

・ 実習では学生ができるだけ自分で問題点を解決できるように、考えている際はこちらから声をかけないようにして、グループ内で相談したり、他のグループの学生に聞きに行くことを見守るようにしている。

### 4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・ 4年生に対して1年次の医用工学Ⅰ、医用工学Ⅱで渡した復習用プリントをカッコ抜きのかきかきしたものを作成し、答えが書いてあるものとないものを配布し、自習できるようにした。
- ・ 国試対策の模試において、図を作成する際に標準的なツールではなく、国試冊子に用いている LaTeX で利用できる、Tikz というツールで作成するようにした。慣れるには時間が必要だが、マスターすれば少しのアレンジでいろいろきれいな図を作成できる。将来的には効率を上げることができると考えている。

### 5. 今年度の学生による授業評価より

講義では"国試の問題の演習があったことです。"や"ちよくちよく国試の問題を解いたりがあって、理解するのにとてもよかった。"など、実際の国試でどのように出題されているか例を出している点を評価されているコメントがあったが、"授業のスピードがもうちょっと速めにしてほしい"や"授業のスピードに波がある。"などのコメントもあった。

実習・演習系では"難しい内容の実習が多く理解できなかった点もあった。しかし実際に機器を用いて実験を行うことで、授業で学んだ内容のイメージが正確なものになったためよかった。"、"実習振り返りメモは考察を書く際に役立ちました。"や、"あと1人先生が欲しい。先生2人では質問対応に間に合っていない。"などのコメントがあった。

## 6. 今年度の成果

臨床検査技師国家試験において担当科目の、学生の得点率は約7割、診療放射線技師国家試験において担当科目の、学生の得点率は約4割であった。臨床検査技師国家試験での値は例年になく良いものだったが、診療放射線技師国家試験での値は厳しいものであった。ここ数年の傾向に見られる計算問題を解けるようになることを主眼に置いて指導を行ったが、そのような計算問題はあまり出題されなかった。

## 7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

昨年からのものが改善できていないが、医療工学関連の教材用の図が不足しており、これは作成のための時間を捻出できていないこともあるが、効率よく図を作成するためのツールの使い方について習熟が充分でないことも挙げられる。次年度は更なる習熟に向けて取り組んでいきたい。

## 8. 社会的活動等

特になし

## 9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・ 授業における配布資料等

### ティーチング・ポートフォリオ

教員名	伊藤 彰	所属学科	診療放射線学科	職名	准教授
クラス担任	R 4A	クラブ顧問	天文部 副顧問		
委嘱委員・職務	入試委員会 ときわ教育推進機構 情報インフラ整備ユニット				

## 1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課（網掛け部分は外部公表しない）科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
データサイエンス基礎	基盤	1	前期	選択	講義	対面	89
応用数学	基盤	1	前期	必修	講義	対面	89

科学技術論	基盤	1	前期	必修	講義	対面	7
地域との協働 B	基盤	2	通年	選択	演習	対面	16
まなぶる>ときわびと II	基盤	1	後期	必修	演習	対面	393
基礎科学演習 AB	基盤	1	後期	必修	演習	対面	89
医療情報学	R	2	前期	必修	講義	対面	85
医療英語 AB	R	2	後期	必修	講義	対面	89
医用画像工学実習	R	2	前期	必修	実習	対面	84
医療安全管理学実習 AB	R	3	後期	必修	実習	対面	85
臨床基礎実習	R	3	後期	必修	実習	対面	87
臨床実習	R	3	後期	必修	実習	対面	87
メディカルデータサイエンス	R	4	前期	選択	講義	対面	7
医療文献読解	R	4	前期	必修	講義	対面	66
診療放射線技術学総合演習 I	R	4	前期	選択	演習	対面	79
診療放射線技術学総合演習 II	R	4	後期	必修	演習	対面	79
卒業研究	R	4	通年	必修	演習	対面	69

## (2)準正課、正課外の教育活動

- ・入学前課題(数学)の出題、レポートへのコメント
- ・就職試験対策として、履歴書の作成指導および、小論の添削指導
- ・担任外の休学中の学生への連絡窓口

## 2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

画像検査機器に高度な数理科学が応用される中で、医用画像の専門家である診療放射線技師は新しい技術を正しく用いて臨床で有用な画像を提供する責務がある。そのために数理的な原理を理解し、原理から筋道を立てて論理的に考えることができる学生を養成する。

## 3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングや ICT 活用等の工夫点について）

抽象的な数理概念を理解するためにインタラクティブグラフやシミュレーションを用いて可視化し、学生の手で確認することで具体から抽象への橋渡しを行った。

## 4. 今年度における教育方法改善の取り組み

今年度から担当することになった「応用数学」では、遠隔授業と対面での演習を組み合わせるハイブリッド方式で実施した。従来は遠隔授業のみである。

## 5. 今年度の学生による授業評価より

「データサイエンス基礎」では、遠隔授業で動画を用いて学習したのち、対面で演習する方式が評価された。遠隔で理解できなかった点が対面での演習で理解できるようになったとのことである。

「医療情報学」では国試問題を題材に授業を実施した点が評価された。

「メディカルデータサイエンス」では、よく理解できたとのコメントがあった。

## 6. 今年度の成果

遠隔授業と対面での演習を組み合わせたハイブリッド方式は、学生同士の相談や教員への質問のしやすさが利点である。遠隔のみでは分からないまま進んでいってしまう場合があり、対面でフォローアップすることで学習成果が上がった。

## 7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

担当科目が大きく変わったことで授業を一から組み立て直すことになった。数学系科目では遠隔授業の学習成果の低さが課題だったが、ハイブリッド方式で改善できたと考える。次年度は対面での演習をさらに増やし数学的リテラシの底上げを図る

## 8. 社会的活動等

「第29回 肺がんCT 検診認定技師 認定試験」実行委員として参加

「第30回 肺がんCT 検診認定技師 認定試験」実行委員として参加

## 9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス

### 学生による授業評価ティーチング・ポートフォリオ

教員名	木村 英理	所属学科	診療放射線学科	職名	准教授
クラス担任	2年A・Bクラス	クラブ顧問	ベクレル部		
委嘱委員・職務	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ R科臨床実習委員会委員長</li> <li>・ 教務委員</li> <li>・ 健康管理センター委員</li> </ul>				

## 1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
○画像診断機器学実習Ⅱ	R	3	前期	必修	実習	対面	78
まなぶるⅠ			前期	必修	演習	対面	30
診療放射線技術学概論	R	1	前期	必修	講義	対面	
診療放射線技術学総合演習Ⅰ	R	4	前期	選択	演習	対面	
○画像診断機器学実習Ⅰ	R	2	後期	必修	実習	対面	88
○X線撮影技術学Ⅲ（CT）	R	2	後期	必修	講義	対面	92
○救急医学概論	R	3	後期	必修	講義	対面	86
臨床基礎実習	R	3	後期	必修	演習	対面	87

臨床実習	R	3	後期	必修	実習	対面	
診療放射線技術学総合演習Ⅱ	R	4	後期	必修	演習	対面	84
臨床技術入門	R	1	後期	必修	講義	対面	89
医療安全管理学実習	R	3	後期	必修	実習	対面	85
卒業研究	R	4	前後期	必修	演習	対面	7

## (2) 準正課、正課外の教育活動

- ・ 国家試験対策
- ・ R科時間割の作成および調整
- ・ 臨床実習配属に関する調整
- ・ 臨床実習に関連する書類作成
- ・ 臨床実習先に提出する履歴書等の添削
- ・ 臨床実習への訪問、巡回指導  
(京都大学医学部附属病院、済生会吹田病院、関西ろうさい病院、市立伊丹病院、兵庫医科大学附属病院、神戸赤十字病院、県立がんセンター、赤穂市民病院、公立豊岡病院、など)
- ・ 就職に関する履歴書や小論文の添削
- ・ 入学前課題の出題と添削
- ・ 高校への出張講義
- ・ 心身の不調を訴える学生の対応

## 2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

- ・ 診療放射線技師として大学病院等で勤務していた経験だけでなく、私自身が大病を患い放射線治療を受けた患者としての経験もふまえ、医療を提供する専門職業人としての立場、そして医療を受ける患者としての立場の双方の視点から、高度な専門知識や技術のみならず、高い倫理観とそれを支える人に寄り添う心についても養うことを理念とする。
- ・ 本学科の教育理念である、いのちに対する温かい眼差しと高い倫理観を備え、放射線技術学における専門的な知識と技術を持ち、社会に貢献できる専門職業人の育成に向け、①将来医療従事者として社会に貢献する者として必要な素養や人間性、②高度な専門知識や技術の修得について、我々教員が指導するだけでなく、学生自身が自主的に学び自らの努力を持って修得することを目標とする。

## 3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）

- ・ ①について、挨拶や身だしなみ、実習科目における態度、言葉遣いなどについて、細やかに声がけ

を行い、「自分がどうありたいか」ではなく「自分が（患者さんや他の医療従事者から）どのように見られ評価されるのか」を考えさせるよう指導を行った。

- ・ ②について、学生自身が自主的に学び自らの努力を持って修得してもらえよう、この科目や内容がどのように必要なかを予め説明することで、学修する目的や意義を明確にさせた。また、授業スライドには臨床画像や動画を多く用い、色合いやフォント等にも注意することで視覚的にも理解ができるよう工夫を行った。

#### 4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・ 昨年度、主担当科目の評価は学科平均よりも高い評価を超えており、臨床実習や模擬試験、国家試験等で授業資料が好評であることから、現状維持としている。

#### 5. 今年度の学生による授業評価より

- ・ できるだけ学生に興味を持ってもらえよう、また、理解してもらえようように授業の補助教材としてスライド資料、まとめプリント、動画資料、そして過去問を公開している。わかりやすかったというコメントや総合評価についても学科平均よりも高い評価を得られた一方で、補助教材の公開のしすぎは、欠席や居眠り、授業を集中して聞かない、後から配信される動画を見ればなんとかなるなどの受講態度の悪化など、学生自身が疑問や探究心を持ち、自らの努力を持って理解すべき貴重な学修の機会を奪ってしまったのではないかと考えている。
- ・ また、配布資料について、講義資料は貴重な知的財産であり、これを安易に配布しすぎる、また、学生も安易に求めることについてどこまで応えなければならないのか、授業評価やコメントについて疑問を感じる。
- ・ 例年と比較して、定期試験までに配布資料や動画を適切に利用できていない（準備不足）学生が非常に目立った。自分で学習できない学生が増えてきていることを実感しており、今後は定期試験の準備を補習といった形で強制的にさせるべきか判断に苦慮している。

#### 6. 今年度の成果

- ・ 昨年度同様、主担当科目の評価は学科平均よりも高い評価を超えており、臨床実習や模擬試験、国家試験等で授業資料が好評であった。
- ・ 卒業研究において、7名を指導。7名の興味や自主性を尊重しつつ、3つの研究テーマについて研究指導、および成果発表を行った。
- ・ 研究室に配属された学生全員が、2年連続卒業、国試合格に導いた。

#### 7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

- ・ 昨年度、そして今年度においても、主担当科目の評価は学科平均よりも高い評価を超えており、臨床実習や模擬試験、国家試験等で授業資料が好評であることから、現状維持としている。
- ・ 国家試験において出題傾向や最新技術が出題されていることから、実習内容については、従来の基

本的な項目を押さえつつ、国家試験の出題傾向等も踏まえ柔軟に対応していく。

- ・ 2年生の担任として、出席率や学修度、また心身の不調もふまえて学生に対して十分な指導が行えなかったことは反省すべき点である。2年生は次年度に臨床実習を控える重要な学年であり、学修のみならず、態度・素養、心身の状況なども含めた学生指導が必要である。このような指導に対して、教員間の理解が得られるようコミュニケーションの手法等にも配慮し、診療放射線技師を育成することを主眼に置いた適切な指導を行っていききたい。
- ・ 障害学生の支援を申し出ている学生がおり、学生に合わせた適切な支援ができるよう、学科としてどのような支援が可能か、また、その必要性についても教員間で議論し、推進していききたい。
- ・ 今年度心理学系大学院（人間社会研究科人間学専攻）を修了し、社会心理学をベースとした知見を授業や学生指導にも反映させていききたい。

## 8. 社会的活動等

- ・ 公益社団法人 日本放射線技術学会 放射線防護部会 委員
- ・ 公益社団法人 日本放射線技師会 検査説明委員会 委員
- ・ 日本診療放射線学教育学会 理事
- ・ 日本診療放射線学教育学会 ダイバーシティ委員長
- ・ 日本診療放射線学教育学会 広報副委員長
- ・ 第19回日本診療放射線学教育学会学術大会 大会長
- ・ 公益社団法人 日本放射線技術学会 市民公開講座企画（令和6（2024）年度科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果公开发表（B）24HP0018）
- ・ 公益社団法人 日本放射線技術学会 第3回“伝わる”医療被ばく相談実践セミナー 講師
- ・ 原子力規制人材育成事業：放射線リスクをマルチスケールで判断できる人材養成プログラム 講師（動画コンテンツ2本）
- ・ 公益社団法人 日本放射線技術学会 中部支部 第59回乳房画像研究会 講師
- ・ 第1回日本放射線医療技術学術大会 学術企画18 学術企画19 企画 司会 講師
- ・ 書籍執筆 2冊（オーム社 2026年版 診療放射線技師国家試験 合格!Myテキスト、金原出版 放射線健康リスク科学 基礎知識図解ノート）

## 9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・ 補助教材用動画など

### ティーチング・ポートフォリオ

教員名	倉本 卓	所属学科	診療放射線学科	職名	准教授
クラス担任	R3 学年	クラブ顧問	キャップボトルサークル		

委嘱委員・職務	広報誌委員会副委員長，教務委員会委員，すこラボ（健康生活研究所）委員，国家試験対策委員会委員長，学科内学生研究委員会委員，保護者のためのオープンキャンパス
---------	---

## 1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

### (1) 正課（網掛け部分は外部公表しない）科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
診療放射線技術学概論	R	1	前期	必修	講義	対面	89
○X線撮影技術学Ⅰ（一般撮影）	R	2	前期	必修	講義	対面	98
○X線撮影技術学Ⅱ（透視・造影検査）	R	2	後期	必修	講義	対面	89
○画像解剖学	R	3	前期	必修	講義	対面	85
○画像解剖学演習 A	R	3	前期	必修	演習	対面	44
○画像解剖学演習 B	R	3	前期	必修	演習	対面	40
医療安全管理学	R	3	後期	必修	講義	対面	72
○診療画像技術学実習	R	3	前期	必修	実習	対面	85
医療安全管理学実習	R	3	後期	必修	実習	対面	72
臨床基礎実習	R	3	後期	必修	実習	対面	87
臨床実習	R	3	後期	必修	実習	対面	72
IPW（多職種連携）論	O	3	後期	必修	講義	対面	66
診療放射線技術学総合演習Ⅰ	R	4	前期	選択	講義	対面	67
○先進医学・技術学	R	4	前期	選択	講義	対面	47
診療放射線技術学総合演習Ⅱ	R	4	後期	必修	講義	対面	84
卒業研究	R	4	通年	必修	実技	対面	69

### (2) 準正課、正課外の教育活動

- ・ 国試対策委員長としてスキームの作成とその対応
- ・ 臨床実習病院への訪問と学生指導
- ・ 就職進学希望者への教育指導
- ・ 卒業研究指導学生への外部学会での研究発表指導
- ・ 就職試験対策として，応募書類，小論文の添削，および面接指導
- ・ 法人主催「福島スタディーツアー」の引率及び事前事後の学習指導
- ・ 環境省ぐるぐるプロジェクトのラジエーションカレッジ団体向けセミナーの学内運営と対応
- ・ 3年次学生担任としての教育指導

- ・入学前課題の出題と添削
- ・高校への出張講義
- ・職能団体・学会と協議

## 2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

私が担当している科目の全て専門科目である。そのため、講義科目では、なぜこの科目の学習をするのか、臨床に出たときにこの知識がどのように活かされるのかなど、常に「what, why, how」を意識させることを目標としている。その上で、講義科目で学習する内容についての知識・技能の習得とともに、教育現場で対応できる実践力と職業倫理をもった学生の養成を目指している。また、実習・演習科目では、チームで取り組むことの重要性を意識させつつ、その中で個人として何ができるのか、何をすべきかを考え実践させることを目標としている。最後に、医療職として常に多くのことに疑問を持ち自身で学び続けることの重要性に、学生が自分自身で気づけるようになることも目指している。

## 3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングや ICT 活用等の工夫点について）

- ・2年次科目では、毎回の講義時に小テストを実施し、継続した学習と復習の習慣を身につけさせることを意識させた。
- ・3年次学生では、自身の得意不得意に合わせて自ら学習に取り組めるように、サブテキストの紹介や講義資料以外の追加資料の提供などを個別に実施した。
- ・演習科目では、アクティブ・ラーニング型のサブスクリプションサービスの教材を導入し、自らのペースで学習することを意識させた。また、演習科目時間以外にも、登校などの移動時や、自宅においても、学習に取り組めるよう工夫した。
- ・実習科目では、実習前に各項目の狙いと予習内容を的確に伝え、実習参加時に必要な知識を明確に示した。実習終了時には、実習を総括し、各項目の復習と実習と通じて、教員が気が付いた点などを指摘し、実習を振り返り学習できる仕組みを取り入れた。
- ・4年次学生では、卒業研究を通し、実問解決能力を磨くことを意識した。また、研究者倫理の教育を実施し、その重要性を学ばせた。テーマ選びについては、社会的問題点やニーズを、国策やトレンドを踏まえて考えることの重要性を説いた。更に、卒研発表・外部学会発表等を通じて、情報を発信することの重要性を教えた。

## 4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・前年度の学生による授業評価では、「資料の文字が小さい」や「資料数が多い」などの意見が見られた。文字を大きくすること、資料数を少なくすることは、学習効果を低下する可能性があると考え、小さくしか表示できない資料には情報の出展元を追記したり、配布資料には重要度を3段階程度に分けて、その重要度を講義内で示したりなどの対応を実施した。それら、前年度に受けた学生による授業評価で指摘された事項について改善を行った結果、「この授業で改善すべきだと思った点」として

指摘された事項はほとんどなくなった。

- ・講義中にリアルタイムで学生の声を投影スライド中に表示させるアプリを多くの講義で使用した。それにより、恥ずかしくて質問ができない学生や、もう少し詳しく教えてほしい、のような声を拾い上げ、講義中にすぐに活かすことができた。この導入は多くの学生から「この授業でよいと思った点」として評価を受けることができた。
- ・講義では、可能な限り5分前に予定範囲の説明を終え、最後に本日の講義内でまず先に覚えてほしいことを復唱することを意識した。それにより、講義ごとのキーポイントを意識させ、効果的な復習につなげることができたと考える。

## 5. 今年度の学生による授業評価より

- ・科目責任者として勤めた科目の「学生による授業評価調査」は、ほとんどの科目において総合評価が学科平均点以上の評価を受けることができた。
- ・学生による授業評価調査における、「この授業でよいと思った点」に関して、ほぼすべての科目において、本当に多くのコメントいただくことができた。
- ・科目責任者として勤めた4年次選択科目「先進医学・技術学」で、総合評価4.9と非常に高い評価を得た。これは、普段の講義であまり伝えられなかった、本分野の研究や技術を学ぶ重要性を伝えることができたと感じている。

## 6. 今年度の成果

- ・研究室配属学生の就職希望に対し、学習指導を実施した。その結果、多くの学生が希望する施設へ就職が決まった。特に大学病院には3名の就職が決まった。
- ・研究室配属学生の卒業研において、指導を実施した。その結果、公益社団法人日本放射線技術学会第68回近畿支部学術大会において2演題、第34回兵庫県放射線技師会学術大会において1演題、第12回全国大学交流夏季研修会において2演題（English）について指導学生が研究発表を行った。
- ・国家試験対策において、主に担当する国家試験科目『エックス線撮影技術学』の指導を実施した。その結果、国家試験対策として実施した3回の外部模試において、エックス線撮影技術学の科目において、本学の平均正答率が3回全てで全国平均よりも高い値を示した。
- ・国家試験対策において委員長を務め、対策の全指揮と学生との対話面談を実施した。現段階で国家試験受験者のほとんどが合格点に達することができるまで学習支援を行うことができた。

## 7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

- ・科目担当者を務めた科目において、履修者全員が単位修得につながるものが叶わなかった。安易な単位修得を促すことは不要であると思うが、国家試験に必要な知識が備わっているかどうかを十分に見極め、学生の個性や成績を見極めることが必要であると認識している。次年度は、このバランスを考慮し、学生のやる気と可能性を向上させるような指導を実践したい。
- ・国家試験対策では、国家試験受験対象者全員を国家試験受験に向かわせることが叶わなかった。次年

度は少しでも多くの学生を国家試験受験に向かわせることができるような対策の実施を検討したい。

## 8. 社会的活動等

- ・県内2つの高校（兵庫県立夢野台高等学校，市立伊丹高等学校）において，大学説明会の講師を務めた。
- ・診療放射線学科の学生と共に，東日本大震災の様子やそれに伴う課題などを学習する福島スタディーツアーを実施した。
- ・神戸常盤大学 すこラボ（健康生活研究所）令和6年度第2回ついでに健康チェックにおいて，市民対象の講演と，骨密度測定を行った。
- ・2024 KOBE TOKIWA 健康ふれあいフェスタにおいて，福島スタディーツアーの学習内容に関する発表（学生発表：2件）を行った。
  
- ・第80回日本放射線技術学会総会学術大会において，研究発表（主研究：1件，共同研究：2件）を行った。
- ・Korean Society of Radiological Science Conference (KSRSC) において，研究発表（主研究：1件，共同研究：1件）を行った。
- ・関西地区CR研究会 第83回定例会において，招待講演を行った。
- ・第13回日韓大学交流夏期研修会において，研究発表（研究室学生研究：2件）を行った。
- ・Asia-Oceania Congress on Medical Physics(AOCMP) 研究発表（主研究：1件，共同研究：2件）を行った。
- ・日本放射線技術学会第68回近畿支部学術大会 一般研究発表，一般撮影2（臨床・画質）のセッションにおいて，座長を務めた。
- ・日本放射線技術学会第68回近畿支部学術大会 において，研究発表（研究室学生研究：2件）を行った。
- ・第69回近畿支部学術大会 において，研究発表（研究室学生研究：1件）を行った。
  
- ・学会等における役員等は以下の通り
- ・日本放射線技術学会 総務委員会 委員
- ・日本放射線技術学会，総務委員会総会運営小委員会 委員
- ・九州医用画像コミュニティ 世話人
- ・関西地区CR研究会 幹事
- ・公益社団法人 兵庫県放射線技師会 学術委員
- ・第34回兵庫県放射線技師会学術大会 実行委員
- ・第69回近畿支部学術大会 実行委員
- ・第19回日本診療放射線学教育学会学術集会 実行委員
- ・全国診療放射線技師教育施設協議会 連絡代表者

9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・ 授業における配布、配信資料等
- ・ テスト問題
- ・ 学会 H. P. 及び抄録集

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	金本雅行	所属学科	診療放射線学科	職名	講師
クラス担任	3年生A組	クラブ顧問			
委嘱委員・職務	入試委員会・臨地実習委員会				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課（網掛け部分は外部公表しない）科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
応用数学	R	1年	前期	必修	講義	ハイブリッド	89
放射線科学概論	R	1年	前期	必修	講義	対面	89
まなぶるときわびとII	全学科	1年	後期	必修	講義	対面	393
放射線生物学I	R	1年	後期	必修	講義	対面	87
放射線生物学II	R	2年	後期	必修	講義	対面	81
○診療画像検査学I (MRI)	R	2年	後期	必修	講義	対面	81
放射線計測学実習	R	2年	後期	必修	実習	対面	88
放射線治療機器学	R	2年	後期	必修	講義	対面	85
医療安全管理学	R	3年	前期	必修	講義	対面	85
診療画像技術学実習	R	3年	前期	必修	実習	対面	84
医療安全管理学実習	R	3年	後期	必修	実習	対面	81
臨床基礎実習	R	3年	後期	必修	実習	対面	87
臨床実習	R	3年	後期	必修	実習	対面	83
医療文献読解	R	4年	前期	必修	講義	対面	66
診療放射線技術学総合演習I	R	4年	前期	選択	演習	対面	79
診療放射線技術学総合演習II	R	4年	後期	必修	演習	対面	79

(2)準正課、正課外の教育活動

- ・ 国試対策
- ・ 臨床実習病院への訪問と学生指導
- ・ 就職試験対策として、応募書類、小論文の添削、および面接指導
- ・ 法人主催「福島スタディーツアー」の引率及び学習指導
- ・ 3年次学生担任としての教育指導
- ・ 入学前教育の参加（オンライン）による指導
- ・ 高校生対象オープンキャンパスの開催

## 2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

私が担当する科目は、基礎的な内容から専門的な内容まで幅広く含まれている。基礎科目では、単なる知識の習得にとどまらず、それが臨床現場でどのように活用されるのかを具体的な事例を交えながら指導している。専門科目では、適切な検査を行うために必要な知識・技術を身につけるだけでなく、臨床現場でどのような判断が求められるのかを考えられる力を養うことを目標としている。実習・演習科目では、医療現場におけるチーム医療の重要性を理解させるとともに、チームの中で自分が果たすべき役割を意識しながら行動できるよう指導している。最終的には、知識と技術の習得に加え、現場で即戦力となる実践力と、患者やチームメンバーとの関わりにおいて求められる職業倫理を兼ね備えた人材の育成を目指している。

## 3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）

臨床現場での経験や臨床画像の解説を、撮像技術や病態と併せて講義することで、学生が早い段階から問題意識を持てるよう促した。

## 4. 今年度における教育方法改善の取り組み

本年度は、科目担当の初年度であったため、授業スタイルの確立と資料作成に取り組んだ。また、授業内容の理解度を確認するため、毎回の授業後に小テストを実施した。

## 5. 今年度の学生による授業評価より

診療画像検査学Ⅰ（MRI）について内容は難しいが、授業を聞いてMRIに対する興味を持つことができ学習意欲が出たとの好意的な意見があった。

## 6. 今年度の成果

4年生に対して「診療画像検査学（MRI）」の科目において独自の講義資料を基にした国家試験対策指導をした結果、外部模試では全国平均を上回り、国家試験では該当科目の正解率は約75%を示した。

7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

今年度は、講義の進行が早い、スライドの文字が小さい、小テストの時間を解説込みで授業内に収めてほしいといった意見があった。次年度は、講義の進行を調整し、スライドの視認性を向上させる。また、小テストの時間配分を見直し、解説を含めても無理なく進行できるよう改善する。

8. 社会的活動等

- ・神戸常盤大学市民公開講座において「医療における放射線の役割」のタイトルで講演した。
- ・県内2つの高校（兵庫県立明石南高校，市立伊丹高校）において大学説明会の講師を務めた。
- ・第1回日本放射線医療技術学術大会（沖縄県）において一般演題口述MRI画質評価において座長を務めた。

9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・シラバス
- ・学生による授業評価
- ・授業における配布、配信資料等

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	島田 隆史	所属学科	診療放射線学科	職名	講師
クラス担任	2年生 (B)		クラブ顧問	—	
委嘱委員・職務	教務委員、放射線安全委員会、臨地実習委員会（副委員長） 学修支援タスクグループ				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課（網掛け部分は外部公表しない）科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
情報基礎	R	1	前期	必修	演習	対面 遠隔	86
まなぶる▶ ときわびとII	基盤	1	後期	必修	演習	対面	393
臨床技術入門	R	1	後期	必修	講義	対面	87
画像診断機器学I	R	2	前期	必修	講義	対面	86
画像診断機器学II	R	2	前期	必修	講義	対面	86
画像診断機器学 実習I	R	2	後期	必修	実習	対面	82

診療画像検査学 I (MR)	R	2	後期	必修	講義	対面	82
画像診断学 I	R	3	前期	必修	講義	対面	84
画像診断学 II	R	3	前期	必修	講義	対面	83
画像診断機器学 実習 II	R	3	前期	必修	実習	対面	81
画像検査学	M	3	前期	必修	講義	対面	103
画像解剖学演習	R	3	前期	必修	演習	対面	81
臨床基礎実習	R	3	後期	必修	実習	対面	83
臨床実習	R	3	後期	必修	実習	対面	83
診療放射線技術学 総合演習 I	R	4	前期	選択	演習	対面	79
診療放射線技術学 総合演習 II	R	4	後期	必修	演習	対面	85
卒業研究	R	4	通年	必修	演習	対面	69

## (2) 準正課、正課外の教育活動

- ・ 国家試験対策（診療画像検査学の講義・補習授業）
- ・ 国家試験模擬試験問題作成（診療画像検査学・エックス線撮影機器学・医療安全管理学）
- ・ 臨床実習配属に関する施設間調整・関連書類作成・学生履歴書の添削（18名）
- ・ 臨床実習指導者会議（7月/3月）の立案・調整
- ・ 臨床実習病院への事前訪問、巡回指導（6施設10回訪問）
- ・ 卒業研究指導学生（3名）に対する研究発表指導・補助
- ・ 就職に関する履歴書や小論文の添削
- ・ 神戸常盤大学2025年度生対象オンラインワークショップへの参加
- ・ R科入学前教育の課題立案・調整
- ・ 高校への出張授業（高砂南高等学校、飾磨高等学校）
- ・ 神戸常盤大学公開講座の講師

## 2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

専門科目においては、診療放射線技師として大学病院等で勤務した経験をふまえ、現在学習している内容が、臨床に出たときにどのように利活用されているのかを理解させることを目標としている。また、放射線医学領域における検査や治療は、患者にとってどのような利益・不利益を生むのかを、常に意識させることを目指す。医療専門職として、基礎的な知識や理解が最低限必要であるだけでなく、卒後も継続して学習する必要があるという意識付けを促し、将来、地域社会で活躍できる人材に

教育することを理念とする。

### 3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）

- ・2年次科目では、毎回の講義毎に小テストを実施し、その日学習した内容を定着させるとともに、理解が不十分である部分を認識できるように意識して作成した。
- ・3年次科目では、臨床実習に行く学生として必要な知識や技量を明確に伝えるとともに、臨床実習に向けて精神的な準備を含めて、学生個々に応じた指導を行うように努めた。
- ・実習科目では、対話型とし、学生に質問を繰り返し行い、考える時間を多く取ることを意識した。また、実習終了時には気づいた点や改善した方が良い事項について、その場で学生にフィードバックするように努めた。
- ・国家試験対策では、診療画像検査学(MR)の内容を細分化し、それぞれ重点的に解答・解説を繰り返すことで知識の定着に努めた。

### 4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・本年度より授業を開始しているため、過去の科目アンケート結果を参考にした。「資料の文字が小さい」や「資料枚数が多い」などの意見が多いことを参考にし、配布資料の文字を大きくし、重要なスライドが明確にわかるように作成した。
- ・科目授業では国家試験に向けての意識付けを行うため、国家試験問題を配布資料の中に入れて授業を構成した。

### 5. 今年度の学生による授業評価より

- ・学生による授業評価調査において、オムニバスまたは複数の教員が担当している科目の自由記述で、わかりやすかったと名指しでコメントをいただくことが出来た。
- ・複数の教員が担当している科目において、「配布資料の統一性が無くわかりにくい」とのコメントをいただいたので、来年度はその点に考慮し配布資料の作成を行う。

### 6. 今年度の成果

- ・筆頭著者として論文を発表した。*Utility of Thin-slice Fat-suppressed Single-shot T2-weighted MR Imaging with Deep Learning Image Reconstruction as a Protocol for Evaluating the Pancreas; Magn Reson Med Sci. mrms.mp.2024-0017. doi:10.2463.*
- ・筆頭著者として論文を発表した。*Development of respiratory motion-resolved hepatobiliary phase cine-magnetic resonance imaging for stereotactic body radiotherapy in liver tumor; Sci Rep. 2024 Dec 28;14(1):31347. doi: 10.1038.*
- ・日本放射線技術学会近畿部会夏季セミナーにて講師を務めた。
- ・第52回日本磁気共鳴医学会大会(JSMRM2024)にて共同演者として3演題の発表を行った。

- ・第34回兵庫県放射線技師会学術大会にて共同演者として発表を行った。
- ・国家試験対策において、主に担当した国家試験科目「診療画像検査学」の指導を通年で実施した。その結果、国家試験直前に実施した外部模試において、平均正答率が全国平均よりも高い結果となった。

7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

- ・今年度は、4年次生への国家試験対策を受けて、理解が十分でないと思われる内容について下学年への講義に反映させた。来年度も継続することで、一貫した科目学習度を達成したい。
- ・臨床実習において、1名が実習途中で中止との苦渋の決断をした。臨床実習に行く上での、医療人としての人間性や素養について再教育を徹底していきたい。

8. 社会的活動等

- ・第1回日本放射線医療技術大会（JCRTM2024）にてMRI「解析」セッションの座長を務めた。
- ・令和6年度近畿地域診療放射線技師会学術大会においてランチョンセミナーの座長を務めた。
- ・兵庫県技師会主催 第17回臨床学術講演会にて座長を務めた。
- ・2024年度後期神戸常盤大学公開講座（CTとMRIはどう使い分けてるの？）の講師を務めた。
- ・兵庫県放射線技師会 学術委員
- ・磁気共鳴専門技術者認定機構認定研究会 神戸MRの会 世話人
- ・神戸大学大学院医学研究科内科系講座放射線診断学 非常勤講師

9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・シラバス
- ・学生による授業評価
- ・授業における配布、配信資料等

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	長谷川大輔	所属学科	診療放射線学科	職名	講師
クラス担任	1年A組	クラブ顧問			
委嘱委員・職務	就職委員、国際交流センター、地域交流センターA				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課（網掛け部分は外部公表しない）科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
まなぶるときわびとII	全学科	1	後期	必修	演習	対面	

国際理解	全学科	1	前期	選択	講義	対面	
国際保健医療活動Ⅰ	全学科	1	前期	必修	講義	遠隔	
国際保健医療活動Ⅱ	全学科	3-4	前期	選択	研修	対面	4
放射化学Ⅰ	R	1	後期	必修	講義	対面	90
放射化学Ⅱ	R	2	前期	必修	講義	対面	86
放射線安全管理学実習	R	3	後期	必修	演習	対面	85
核医学検査機器学	R	3	前期	必修	講義	対面	85
核医学機能解析学	R	3	前期	必修	講義	対面	85
核医学検査技術学Ⅰ	R	2	前期	必修	講義	対面	91
放射線取扱概論	R	1-4	後期	選択	講義	対面	40
基礎科学演習	R	1	後期	必修	演習	対面	89
先端医学・技術学	R	4	前期	選択	講義	対面	47
臨床実習	R	3	後期	必修	演習	対面	
臨床基礎実習	R	3	後期	必修	演習	対面	87
診療放射線技術学総合演習Ⅰ	R	4	前期	選択	講義	対面	
診療放射線技術学総合演習Ⅱ	R	4	後期	必修	講義	対面	84
卒業研究	R	4	後期	必修	演習	対面	69

## (2) 準正課、正課外の教育活動

- ・ 国家試験対策
- ・ 第一種放射線取扱主任者試験対策

## 2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

- ・ 育てたい学生像

相手のことを考えることができる学生

異文化理解を深め、国際的な視野を持つ学生

- ・ 教育のあり方

インタラクティブな学習環境を提供し、学生参加型の授業を行う

1対1の対話を重視し、個々の学生に適した個別最適な指導を行う

- ・ 教育への信念

愛情と情熱が教育を支える

探求心と批判的思考の育成

## 3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）

- ・インタラクティブな学習環境のため、講義にグループ学習・ディスカッションを取り入れている。
- ・授業の最初の5分間で、経験談や時事ネタなど国際的な内容を織り交ぜている。

#### 4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・「放射化学Ⅰ・Ⅱ」では授業資料の難解な場所（例えば数式や用語など）をさらに分かりやすい表現に変えた。また、講義後の練習問題数を全範囲から出題するようにし、学生が理解していない分野を把握できるように改善した。
- ・「核医学検査機器学」「核医学機能解析学」では、授業資料を大幅に修正し、今までよりもより深い知識が習得できるような資料に作り替えた。

#### 5. 今年度の学生による授業評価より

- ・主に担当した「放射化学Ⅰ・Ⅱ」の科目では「講義資料・授業内容がとても分かりやすかった」とのコメントが多くみられた。低評価として「教室が狭かった」という意見があったが、授業内容における低評価は一つもなかった。
- ・「核医学検査機器学」「核医学機能解析学」においても「授業が分かりやすかった」「R科の先生の中で一番分かりやすい」など多くの高評価のコメントをもらった。
- ・今年度より開始された「基礎科学演習」では、「教員によって内容が違った」など、教員側での情報共有が不十分だった点もみうけられた。

#### 6. 今年度の成果

- ・今年度の「放射化学Ⅰ」の定期試験の結果は74.7点と昨年度に比べて約6点上昇した。本結果には様々な因子が関与していると思われるが、授業資料の改善効果もあったのではないかと推察する。
- ・また、今年度の国家試験科目「核医学診療技術学」では、本学の平均点が東京のある私立大学よりも高い結果を残した。しかし科目の平均点は6割強であるため、今後更なる強化が必要である。

#### 7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

- ・国家試験の出題基準が本年度より変更され、「放射化学」は問題数が8問から3問に減少し、これまでよりもウェイトが低下した。一方「核医学診療技術学」の出題内容は近年難化傾向であり、先端的な内容など難易度の高い内容も出題された。このため、次年度における国家試験対策として、基礎的な内容だけでなく、先端的な内容も含め今年度以上に幅広く知識を提供する必要があると考える。
- ・「放射化学」については、問題数は減少したものの、第一種放射線取扱主任者試験において必須科目であり、従来通り講義を行う予定である。
- ・「基礎科学演習」は次年度2回目になるため、1回目における授業資料の不備の修正や、他教員との授業内容の整合性をチェックする必要がある。

#### 8. 社会的活動等

- ・日本核医学専門技師認定機構 事務局
- ・日本核医学技術学会 評議員
- ・日本核医学技術学会 標準化推進小委員会
- ・日本核医学技術学会 近畿支部幹事
- ・アジア核医学技術学会 理事
- ・日本放射線技術学会アジア放射線技術教育支援特別委員サポート員 ラオス研修にて講演
- ・日本診療放射線学教育学会 実行委員および実行委員長
- ・日本放射線技術学会近畿支部にて講演
- ・高知県はりまやミーティングにて講演
- ・兵庫県放射線技師会学術大会での卒研生の発表
- ・Journal of Radiological Physics and Technology の査読 2 編
- ・神戸常盤健康フェスタにおける診療放射線学科ブースの企画・運営
- ・

## 9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価

### ティーチング・ポートフォリオ

教員名	寶部真也	所属学科	診療放射線学科	職名	助教
クラス担任	1 年生 B クラス		クラブ顧問		
委嘱委員・職務	研究倫理委員会、国家試験対策委員、国際交流センター				

## 1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課（網掛け部分は外部公表しない）科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
まなぶるときわびと I	全学	1	前期	必修	演習	対面	
基礎科学演習	R	1	後期	必修	演習	対面	89
放射線計測学実習	R	2	後期	必修	実習	対面	88
医療英語	R	2	後期	必修	講義	対面	89
医用画像工学	R	2	後期	必修	講義	対面	90
医用画像工学実習	R	3	前期	必修	実習	対面	84
臨床基礎実習	R	3	後期	必修	実習	対面	87
医療文献読解	R	4	前期	必修	講義	対面	66

診療放射線技術学総合演習Ⅱ	R	4	後期	必修	講義/演習	対面	84
卒業研究	R	4	後期	必修	演習	対面	69

## (2)準正課、正課外の教育活動

### ・ 国家試験対策

→国家試験対策の対策講義の日程調整を行い、効果的に国家試験対策を受講できるようにした。学生が国家試験に直結する重要事項を整理したオリジナル資料を作成・配布し、各分野の要点について丁寧に解説を行うことで、学生の得点力向上を図った。

### ・ 高校での出前授業

→放射線に対する関心を高めてもらうことを目的として、高校生を対象に診療放射線技師の役割や放射線に関する基礎知識についての授業を実施し、医療分野への理解と興味の喚起に努めた。

### ・ 卒業研究の補助

→研究室外の共同研究を行っている学生に対して、実験の補助や抄録の作成のアドバイス、発表スライドの添削を行った。

### ・ 就職活動の支援

→エントリーシート作成の援助や模擬面接を行い学生の就職活動支援を行った。

### ・ 卒後教育(リカレント教育)

→ライフ×キャリアサポートプロジェクト 第1回 ときわ子育て"縁"カウンタ  
卒後教育(リカレント教育)と地域貢献の一環として子育て世代の 医療専門職【診療放射線技師等】を対象とし、リスキリングセミナーを行った。

### ・ 国際交流センター

→ネパールからの交換留学生受け入れに際し、本学の診療放射線学科の説明を行った。また日本の病院見学に付き添い通訳・解説を行った。

## 2. 教育の理念(育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念)

私は、学生一人ひとりの個性や可能性を尊重し、自ら学び、考え、行動できる力を育む教育を実践したいと考えている。特に診療放射線技師を目指す学生には、専門知識や技術だけでなく、論理的思考力や問題解決能力を養い、将来の医療現場において主体的に活躍できる力を身につけてほしいと願っている。

そのために、学生が自らの興味を深め、自発的に学問に取り組めるような環境づくりを重視する。知識の詰め込みに留まらず、それが臨床現場でどのように活用され、どのように患者の利益につながるのかを理解できるよう、実践的な視点を取り入れた教育を行う。また、学生の理解度や特性に応じたきめ細かな指導を心がけ、個々の強みを伸ばし、苦手な点は丁寧にフォローすることで、学生自身が自信を持って成長できるよう支援する。

教育とは、教える側が一方向的に知識を与えるものではなく、共に学び、共に成長する双方向的な営みで

あると考える。私自身も絶えず学び続ける姿勢を持ち、学生とともに知の探求を深めていく。そして、教育・研究活動を通じて、社会に貢献できる診療放射線技師を育成し、医療の質の向上に寄与したいと考えている。

### 3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）

学生が主体的に学び、論理的に考え、実践に応用する力を養うため、国家試験対策ではグループワークによる「教え合い」を行い、問題作成や解説・議論を通じて、知識の定着とともに思考力・説明力の向上を図った。また、基礎科学演習では学生同士のレポート査読を行い、批判的思考や表現力を育成した。加えて、学生の理解度や特性に応じた個別指導に努め、面談や学習状況の把握を通じて、安心して学べる環境を整えた。さらに、Google フォームによる演習を活用し、苦手分野を可視化した上で重点的な指導を行い、学習効率と意欲の向上を図った。

今後も、これらの経験を基に、学生の力を最大限に引き出す教育を実践していきたいと考えている。

### 4. 今年度における教育方法改善の取り組み

今年度より教員として教育に携わっており、大きな改善は少ないが、授業運営の中で工夫を試みた。当初は学生に対して全体的に意見を求めていたが、反応が得られにくかったため、教室内を巡回し、個別に声をかける形に変更した。その結果、学生から講義に対する意見やフィードバックを得やすくなり、理解度の把握や授業改善に繋げることができた。今後も、こうした工夫を積み重ね、教育の質の向上に努めていきたい。

### 5. 今年度の学生による授業評価より

今年度の学生による授業評価では、「先生が巡回してくれるためわからない時に聞きやすく、パソコンが苦手でも置いていかれない」とのコメントが寄せられた。授業中に教室を巡回し、個別に声をかける工夫が、学生の不安を軽減し、理解の支援に繋がっていることを実感できた。こうした取り組みの効果を今後も踏まえながら、教育の質向上に努めていきたい。

### 6. 今年度の成果

- ・共同研究を行った学生の発表が第68回近畿支部学術大会 論文化推薦研究発表に選定された。
- ・国家試験対策を実施した画像工学においては、国家試験本番で7割以上の正答率を記録し、対策の効果が具体的な成果として表れた。今後も、学生の理解を深める取り組みを継続し、より高い成果に繋がっていききたい

### 7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

今年度は教員としての経験が浅く、授業運営において試行錯誤が続いた点が課題であった。特に学生の理解度を把握し、学習支援へ繋げる取り組みには更なる工夫が必要と感じた。次年度は、定期的な理

解度の確認や小テストの実施を通じて、学生の習熟度に応じた指導を行い、学びをより確実なものとしたい。

## 8. 社会的活動等

### ・高校の出前授業

→御影高校（2023年5月13日）、西宮東高校（2024年12月12日）

にて、診療放射線技師の業務や放射線の特徴に関する授業を実施した。

### ・卒後教育(リカレント教育)

→ライフ×キャリアサポートプロジェクト 第1回 ときわ子育て"縁"カウンタ

卒後教育（リカレント教育）と地域貢献の一環として子育て世代の医療専門職【診療放射線技師等】を対象とし、リスクリングセミナーを行った。

### ・日本学術振興会 科学研究費助成事業 基盤研究 C

→基盤研究 C「誤飲・誤嚥時 X 線検査における検出精度向上検討と X 線画像データベースの構築」の研究協力者として外部資金を取得。

### ・日本学術振興会 科学研究費助成事業 若手研究

→若手研究「口内法 X 線撮影における撮影線量の最適化に向けた自動画像解析法の開発」の研究代表者として外部資金を取得。

### ・全国歯科大学・歯学部附属病院診療放射線技師連絡協議会の役員就任

→全国の歯科大学および歯科を有する大学の附属病院や一般総合病院に勤務している診療放射線技師、診療放射線技師を養成する教育機関に勤務する教官の職能団体において役員を務める。

## 9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・ 授業における配布、配信資料等

### ティーチング・ポートフォリオ

教員名	市川 尚	所属学科	診療放射線学科	職名	助教
クラス担任	4年生 B クラス	クラブ顧問	なし		
委嘱委員・職務	入試委員会、地域交流センターボランティア事業部、SD 委員会、国家試験対策委員会、臨地実習委員会				

## 1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
基礎科学演習	R	1	前期	必修	演習	対面	89
まなぶる I	R	1	前期	必修	演習	対面	
放射線取扱概論	R	1-4	前期	自由	講義	対面	40
放射線計測学	R	2	前期	必修	講義	対面	86
放射線計測学実習	R	2	後期	必修	実習	対面	88
放射線安全管理学	R	3	前期	必修	講義	対面	85
画像解剖学演習	R	3	前期	必修	演習	対面	84
医療安全管理学	R	3	前期	必修	講義	対面	85
関係法規	R	3	前期	必修	講義	対面	84
放射線安全管理学実習	R	3	後期	必修	実習	対面	86
医療安全管理学実習	R	3	後期	必修	実習	対面	85
臨床基礎実習	R	3	後期	必修	演習	対面	87
総合演習 II	R	4	後期	必修	演習	対面	84

## (2) 準正課、正課外の教育活動

### ・ 委員会業務

#### ① 入試委員

主にオープンキャンパスの企画・運営を担当しており、参加者は教員よりも大学生とのふれあいに対して高い満足感を示すことから、学生主体のオープンキャンパスができるよう業務配置を行った。また、体験型のイベントに対する満足度が高いことから、新たに 3D 画像作成体験や技師の業務を体験するコーナーを作成した。

#### ② 国家試験対策委員

副委員長として、効果的な国家試験対策の策定および効果検証を主に行った。具体的には、3 年次からの早期国家試験対策のシステム構築や週 2 回のグループワークの実施、夏季特別対策、少人数制の授業による効果的な学習システムの構築などを行った。

#### ③ SD 委員

教育歴の浅い教員が多くいることから、学科内 FD 研修会の開催数を増加させた。今年度は計 8 回の FD 研修を実施した。

#### ④ 地域交流センターボランティア事業部

主に福島スタディツアーの担当を行っており、今年度はツアー前および後に教育目的のグループワークを実施することで、ツアーで学んだことの定着を狙った。また、常盤健康ふれあいフェスタにて 2 演題のポスター発表を実施した。

#### ⑤ 臨地実習委員会

主に臨床基礎実習の企画・運営を担当しており、今年度はシステム構築のためのマニュアル策定に注

力した。

・**入学前教育への参加**

→本学入学が内定した高校生に対して実施したオンラインでの入学前教育に参加し、入学前の不安解消やモチベーションの向上に努めた。

・**高校での出前授業**

→放射線に対する興味を持ってもらう事を目的に、高校生に対して放射線技師の業務や放射線の知識に対する授業を実施した。

・**学会発表の実施**

→ゼミの学生に対して、学会発表の登録や発表に関する指導を行い、全4演題の学会発表を実施した。

・**就職試験の小論文指導**

→ゼミの学生に対して、小論文の添削指導を行い臨床施設の採用に貢献した。

・**就職試験のエントリーシート作成指導**

→ゼミの学生に対して、エントリーシートの添削指導を行い臨床施設の採用に貢献した。

・**ぐるぐるプロジェクト**

→環境省が実施する「ぐるぐるプロジェクト」の参加者募集や会場の設定などを実施し、学生が参加できる環境を整えている。ぐるぐるプロジェクトは、放射線に対する風評をなくすために正しい知識を身に着けるための活動であり、診療放射線技師を目指す立場としても非常に重要な知識を得ることができる。

・**TOKIWA ふれあい健康フェスタ**

→地域の方々に対して、本学に診療放射線学科があることや、放射線に興味を持ってもらうことを目的に、健康フェスタにてX線画像を用いたシルエットクイズや、乳がんのセルフチェックに関するイベントを実施した。

・**兵庫県技師会 生涯教育委員**

→タスクシフトに伴い、大学にて医療安全に関する新たな授業を立ち上げる必要があったことから、臨床現場とのつながりが深いという利点と生涯教育委員としての利点を活用し、学内でのタスクシフトにかかる実習内容の企画・運営を行った。

・**第一種放射線取扱主任者試験対策**

→第一種放射線取扱主任者試験は、合格率20%程度と高難易度の試験であるが、診療放射線技師の国家試験内容と一部重複しており、保有していると就職時、就職後にメリットとなることから、試験合格のための対策授業を実施している。

## 2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

診療放射線技師にとって、放射線を理解することは非常に重要であるが、そのためには物理学や数学などの知識が必要不可欠である。学生時代の私は、それらの知識を深く備えておらず、講義終了後に教員に稚拙な質問を何度も繰り返したことを覚えている。その甲斐あって、放射線の知識が深まり、国家試験にも合格することができた。学生の知識を深めることは教員の大きな目的の一つであるが、私の経験上、学生が質問しやすい環境を整え、寄り添うように接することが学生の理解度向上に結びつくと考え

えている。よって、私は学生に対して寄り添える教育を心掛けることを通して、学生の理解度を高めることを目標としている。

診療放射線技師として臨床で働くと、業務をこなすだけでなく臨床現場での業務改善が求められる。しかし、問題解決能力が無ければ業務改善には至らない。よって私は、主体的に学び、考え、行動できるような学生を育成したいと考えている。そのために、授業内で自ら考えたり、自主的に行動したりするような機会を作り、問題解決能力が養えるような授業を展開したい。また、臨床での経験が豊富であるという強みを活かし、臨床と学問を関連させた授業を展開することで、学生の知識を臨床にリンクさせると共に、応用力を備えてもらいたい。

診療放射線技師として社会に貢献するためには、コミュニケーション能力も求められる。コミュニケーションは、患者に対するものだけでなく、医療従事者に対しても必要不可欠である。その際、人の話を聞くことや人に自分の意見を伝えること、人の意見を受け入れる姿勢などが求められる。よって、これらの能力を備え、患者の病気を見つけたり治療したりするだけでなく、心のケアができるようなコミュニケーション能力を有した学生を輩出したい。そのために、授業内で学生同士がコミュニケーションを取る機会や、プレゼンテーションを行う機会を作るなどの工夫を強く意識したい。

診療放射線技師の業務は医療に欠かせない重要な役割を担うが、それに加えて技術は時代と共に急速に進化している。従来撮影に数十秒を要した頭部 CT 検査は今や 1 秒以内で撮影可能となった。また、AI 技術の発展により MRI 画像から CT 画像を作成することも可能となり、応用性がさらに広がっている。これからの診療放射線技師には、技術の急速な進化に対応することが求められており、その土台を築く立場である教員が担う役割は非常に大きい。そのため、学術的な知識の教授や学会活動への参加、研究活動に積極的に参加してもらうことで、質の高い診療放射線技師を社会に輩出すると共に、社会貢献および医療の質向上につながるよう強い志を持って教壇に立ちたい。

### 3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングや ICT 活用等の工夫点について）

- ・ 演習の授業では教員からの説明を最小限にし、学生が主体的に演習できる時間を増やすことを意識した。また少人数のグループを作り、分からないことがあればグループで相談できるような環境を整えた。その際、教員も教室を歩き回り、分からないことがあれば気軽に質問できるような環境作りを意識した。
- ・ 実習前に、考察に必要な基礎知識を伝え、実習後の考察をグループ内で行うことにより、自分で考える能力や、自分の意見を伝える能力が養える工夫を行っている。
- ・ 演習授業後には、学生ごとにテーマを与え、そのテーマに対して 1 分間でプレゼンする機会を設けることで、自分で資料をまとめる能力や、人に伝える能力が養える工夫を行っている。
- ・ 体験型学習によって理解を深めることを目的に、放射線の可視化に関する動画教材や、スマホでレントゲン撮影を模擬できるような教材を作成している。
- ・ 臨床経験が豊富という強みを生かし、臨床の画像や動画を多く取り入れた授業を行っている。

#### 4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・ 授業で伝えた内容を復習テストで確認することで、学生の理解度を確保している。
- ・ 学生に授業のペースや改善点などを聞き、学生主体の授業ができるよう意識している。
- ・ 座学と実臨床の知識をリンクさせることで、臨床で活躍できる診療放射線技師養成を目指している。
- ・ 2025年3月、博士号（保健学）を取得し、より専門的な知識を習得し、授業に反映させると共に、研究の観点からの教育指導に活用している。

#### 5. 今年度の学生による授業評価より

自身が授業の過半数を担当した科目が「放射線安全管理学」のみであり、それ以外の科目は他教員に対する評価が強く反映されることから、今回は放射線安全管理学に対する授業評価について述べる。学生自身を除く全ての項目において、学生からの評価は学科平均よりも高値を示した。また、放射線安全管理学は令和6年度に初めて自身が主体で授業を実施したが、令和5年度の当該科目の授業評価と比較して、全項目において令和6年度のほうが高い学生評価を示した。このことから、自身の目指す学生主体の授業を行えていると考える。

#### 6. 今年度の成果

前述した通り、今年度は初めて「放射線安全管理学」をメイン教員として担当した。国家試験と臨床を意識した授業を実施することができ、4年次に実施する国家試験対策と関連させた内容を教えることができた。4年次の総合演習IIの授業では、語呂合わせやキーワードなどを用いて知識が頭に入りやすい工夫を行うと共に、学生の意見を反映させた授業に取り組んだ。その結果、3回の全国統一模擬試験全てにおいて、「放射線安全管理学」は全国の平均点よりも高い得点率を取得できた。また、国家試験の自己採点における平均点も7点と国家試験合格基準である6点を超えることができた。

ゼミの活動では、金沢大学合同研究会、兵庫県放射線技師会学術大会、近畿放射線技術学会学術大会などでゼミ生による発表を計4演題実施した。学生の研究意欲向上や貴重な経験をする場の提供につながったと考えている。

#### 7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

今年度は3年生に対して自身が主体となって放射線安全管理学を担当した。次年度はそれらの学生に対して国家試験対策を実施するため、3年次の授業がうまくリンクして得点率を高められることができるように授業に取り組みたい。

今年度は国家試験対策委員の副委員長を担当し、全国平均を上回る国家試験合格率となった。次年度は卒業率を高めながら国家試験合格率を維持できるよう、面談回数を増やしたり、個々の学生に対するアプローチを強化することに取り組むたい。

#### 8. 社会的活動等

- ・ 高校の出前授業

→六甲アイランド高校（2023年9月15日）、県立星稜高校（2023年10月20日）

にて、診療放射線技師の業務や放射線の特徴に関する授業を実施した。

・TOKIWA ふれあい健康フェスタ

→地域の方々に対して、本学に診療放射線学科があることや、放射線に興味を持ってもらうことを目的に、健康フェスタにてX線画像を用いたシルエットクイズや、乳がんのセルフチェックに関するイベントを実施した。

・福島スタディツアー

→診療放射線学科の学生と共に、東日本大震災の様子やそれに伴う課題などを学習する活動を実施した。阪神淡路大震災を経験した神戸の大学という立場から、放射線に関する職業を目指す立場から、震災や原発事故に関して情報交換を行うと共に地域貢献を目指しており、活動内容をTOKIWA ふれあい健康フェスタにて報告した。

・日本学術振興会 科学研究費助成事業 基盤研究 C

→基盤研究 C「内視鏡医を対象とした線量計一体型放射線防護眼鏡の開発」の研究協力者として外部資金を取得。本研究は、水晶体の被ばく線量を低減させると同時に、水晶体被ばく線量を測定可能な放射線防護眼鏡を開発することを目的としている。現在、基礎検討が終了し、開発した眼鏡を実際の臨床現場で使用するための準備中である。

・厚生労働科学研究費補助金 地域医療基盤開発推進研究事業

→厚生労働科学研究費補助金 地域医療基盤開発推進研究事業「放射線診療の発展に対応する放射線防護の 基準策定のための研究」の研究分担課題「放射線診療の国際基準とのハーモナイゼーションに関する研究」に関する研究協力者として活動している。主に国際放射線防護委員会の公表している「医療被ばく」への介入環境と日本の介入環境の違いを調査しており、現在日本に適した「医療被ばく」への介入環境の策定を目標に活動している。

・兵庫県放射線技師会 生涯教育委員

→技師会の委員として、診療放射線技師の法律改正に伴う告示研修に関する指導および準備を行っている。来年度より大学での学習が求められる告示研修に関する授業・実習内容の構築を行っている。

9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・ Researchmap
- ・ 模擬試験・国家試験解析資料

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	後藤 聡汰	所属学科	診療放射線学科	職名	助教
クラス担任	B	3年	クラブ顧問	なし	

委嘱委員・職務	FAST 委員 R 科 学研委員 R 科 学生委員 R 科 就職委員
---------	---

## 1. 教育の責任（教育活動の範囲，担当科目）

### (1)正課（網掛け部分は外部公表しない）科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
まなぶる▶ときわびと I	全学	1	前期	必修	演習	対面	
放射線取扱概論	R	1	後期	必修	講義	対面	40
基礎科学演習	R	1	後期	必修	演習	対面	89
放射線計測学	R	2	前期	必修	講義	対面	86
放射線計測学実習	R	2	後期	必修	実習	対面	88
放射線治療物理学	R	2	後期	必修	講義	対面	94
診療画像技術学実習	R	3	前期	必修	実習	対面	84
医療安全管理学	R	3	前期	必修	講義	対面	85
放射線治療計測学	R	3	前期	必修	講義	対面	
医療安全管理学実習	R	3	後期	必修	実習	対面	85
臨床基礎実習	R	3	後期	必修	実習	対面	87
臨床実習	R	3	後期	必修	実習	対面	
医療文献読解	R	4	前期	必修	講義	対面	66
診療放射線技術学総合演習 I	R	4	前期	必修	演習	対面	87
診療放射線技術学総合演習 II	R	4	後期	必修	講義/演習	対面	84
卒業研究	R	4	後期	必修	演習	対面	69

### (2)準正課，正課外の教育活動

#### ・資格(放射線取扱主任者第一種)取得の支援

診療放射線学科の学生が将来就職する際に重要な資格の一つである「放射線取扱主任者 第一種」の指導を行った。2023 年度までは個別指導が中心であったが，2024 年度には「放射線取扱概論」の講義が開設され，より多くの学生への指導が可能となった。講義に加えて，個別の質問対応や学習相談，夏休み中の教室確保なども行い，学習に適した環境整備に努めた。今年度は 4 年生 2 名，3 年生 6 名，2 年生 2 名の合計 10 名が合格し，昨年度の約 2 倍の合格者数となった。

#### ・研究室学生の国家試験指導および就職指導

本年度より初めて卒業研究生を受け持ち、研究室一期生の指導に多くの時間と労力を注いだ。指導学生は4名であった。

国家試験指導では、4月の模試で最下位に近い成績であった学生に対して、苦手科目の確認や勉強法の共有、定期的な面談を重ねることで継続的に支援した。このような指導が奏功し、研究室学生全員が卒業および国家試験合格を達成することができた。

就職活動については、求人情報の整理、志望病院への問い合わせ支援、エントリーシート添削、面接対策などを実施した。模試成績から学業優先が必要な学生もあり、就職指導の開始時期が遅れた結果、3月末時点では全員の内定獲得には至らなかったが、必要なサポートは適切に行えたと考えている。今後も引き続き、内定獲得に向けた支援を継続していく。

### ・学生の奨学金のサポート

3年生の学生から、民間財団の給付型奨学金への応募に関する相談があり、申請書類の添削や小論文の推敲を通じて支援を行った。小論文はA4用紙5枚相当と分量が多く、合計4回にわたり添削とコメントを行った。惜しくも採択には至らなかったが、今後も意欲ある学生への支援を継続していきたいと考えている。

## 2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

自分自身で考えて行動するという能力を有する学生の養成を目指す。目の前の作業を行うという単純な業務はAIに代替されつつあることで、現在は質の高い検査及び治療を実行するために考えて行動できる診療放射線技師が求められている。得られた知識や技能をそのまま覚えるのではなく、理解し自分なりに咀嚼してもらえるように、講義や実習では答えのあることを投げかけるのではなく、答えが一樣ではないことを考えてもらう機会を増やした。例えば、放射線を計測する実習の中で、「なぜ放射線を計測することは実習になるか、なぜ一円玉の重さをはかることは実習にならないのか」という考えを問うてみた。今はスマホが身近にあり、疑問の答えがすぐに見つかる世の中だからこそ、自身で考えを持ち熟考する、疑問を解決するという能力が必要になっていると考える。その考えに対して説得力を持たせるための、論理展開や根拠を出すということも重要である。論理的思考力を向上させるためにも、定期試験の形式も記述問題を置く出題し、勉強した知識をロジックとして身につけられているかをジャッジした。学生の若いうちに、効率の良い国家試験勉強や、就職活動の面接対策にも波及していくと思うため、自活能力を育む機会を設けていきたい。

## 3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）

教育の方法については、「学生自身に考える機会を多く与えること」を基本方針とし、受動的な学びから能動的な学びへと転換を図るよう取り組んでいる。放射線計測学実習では、単なる測定技術の習得にとどまらず、「なぜ放射線を測定する必要があるのか」や「診療放射線技師はボタンを押すだけでよいのではないか」といった答えのない問いをレポートで書かせて、自らの専門性を言語化し、考察する力を

育成することに力を入れた。また、放射線治療物理学および放射線計測学では、定期試験に記述問題を取り入れ、単に用語を暗記するのではなく、物理現象を深く理解し、言葉で説明できるよう促した。講義資料においても、可能な限りイラストや図を多用することで、視覚的に理解しやすい環境を整え、特に物理に苦手意識をもつ学生に配慮した工夫を行っている。

4年生の国家試験対策科目である診療放射線技術学総合演習IIでは、講義後に資料を全てTeamsにアップロードするとともに、各回の試験解説を録画し、計6回分の動画を提供することで、学生が自分のペースで復習できる環境を整備した。こうした取り組みの結果、文系出身者が多い本学ではあるが、全国模試の「放射線物理学」および「放射線計測学」の成績が初めて全国平均を上回るという成果が得られた。

#### 4. 今年度における教育方法改善の取り組み

今年度においては、前年に「講義のスピードが速い」との学生からのフィードバックを受け、重要な内容やスライドに十分な時間をかけて丁寧に説明することを意識して講義を行った。また、学生が自宅でも復習しやすいよう、講義資料のアップロードに加え、講義の録画データを提供することで、学習環境の整備に努めた。

さらに、難解な物理概念や計測原理については、ホワイトボードに図を描いて解説することを積極的に取り入れ、スライドだけに頼らない視覚的な理解の促進を図った。これにより、講義のテンポと内容のバランスが改善され、学生の理解度向上につながったと考えている。

#### 5. 今年度の学生による授業評価より

放射線治療に関する担当科目「放射線治療計測学」及び「放射線治療物理学」では、学科平均よりも少し低い学生評価であった。原因としては、文系出身の学生が多い中で、理系的考えが求められる物理や放射線計測の講義であり、理解しづらいという背景があると考えられる。またテストも記述形式が多かったことで、ほか科目と比べて平均点が結果的に低かったということも要因として考えられる。さらに講義の内容も広く、理解することが多い講義内容であることがあげられる。これらの科目は、放射線物理や放射線化学、放射線計測などの科目内容と重複する箇所が多々あるが、講義前にこれらの知識が完全には定着していなかったことも講義を行う上で難しかったポイントとなった。しかしながら去年と比べて、学生評価の各項目は0.4ポイント増加しており、学生にコミットした講義内容を行えて来ていると思うため、基本方針は変えずに、より分かりやすく勉強意欲の湧く講義づくりを心がけていく。

実習関連の講義はおおむね評価は高かった。放射線計測学実習は実習内容を一新し、よりわかりやすく、何より学生が楽しみながら原理を学べる講義を心がけた。放射線計測は学生理解度が低かったのだが、講義の総復習を実習の初めに一時間かけて丁寧にレクチャーした。講義資料やホワイトボードで図を用いて説明し、視覚的にわかるような説明を交えてことでアンケートでも丁寧に指導してもらえてよかったという結果をいくつかもらった。

#### 6. 今年度の成果

### ・学術活動の支援

研究室学生に対して、2件の口頭発表を経験させた。

#### CT撮影の医療被ばく実測への適用を目指した小型リアルタイムOSL線量計の開発

中原嶺奈, 後藤聡汰, 前田達哉, 林裕晃, 高久圭二

第68回日本放射線技術学会近畿支部学術大会 2024年11月30日

#### CT検査における医療被ばく実測が可能なリアルタイムOSL線量計の開発

内山知樹, 後藤聡汰, 前田達哉, 林裕晃, 高久圭二

第34回兵庫県放射線技師会学術大会 2024年11月

### ・研究室学生の就職活動支援

3名に対して、就職活動の支援を行い

県立尼崎病院非常勤職員、関西労災病院産休代替枠、ときわ病院正規職員の内定をもらった。

### ・研究室学生の国家試験指導

研究室学生の国家試験指導を行った。4月の模試では成績が最下位近くであったが、指導を継続し、最終的には中間の成績となり、研究室学生全員の国家試験の合格を達成した。

### ・放射線物理学及び放射線計測学の国家試験対策指導

4年生に対して上記科目の指導を行った。4月の模試ではどちらも平均点が4.8であったが、国家試験本番では合格点である6点を超えることができ、適切に講義が行えた。

## 7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

今年は多くの時間を要して、学生の個別対応を行った。来年からは、研究やその他の業務への時間を確保できるように、国家試験対策の効果を落とすことなく、私自身の負担を減らせるように業務の効率化を図りたい。具体的には、講義資料及び解説を全て録画データとして保存し、学生に開示することで、録画データをベースに学生が勉強できるような環境を整備していく。E-learningと連携させて、学生が動画データをチェックしたかの確認をし、さらに小テスト機能なども併設することで、環境を構築していく。

## 8. 社会的活動等

### ・高校の出張授業

鈴蘭台高校(2024年5月13日)、県立星稜高校(2024年11月16日)にて、診療放射線技師の業務と放射線に関する模擬授業を実施した。

## ・研究助成

研究テーマについて、研究代表者 2 件、共同研究者件の研究助成の 1 件の採択を受けた。

1. CT 画像から解析した X 線の入射方向情報を援用した患者表面線量分布の決定アルゴリズム  
日本学術振興会 科学研究費助成事業 若手研究 2024 年 4 月 - 2026 年 3 月
2. 医療被曝に対する国民の自衛意識向上を目指した X 線 CT 検査の被ばく線量実測法の開発  
公益財団法人 日本科学協会 笹川科学研究助成 学術研究部門 2024 年 4 月 - 2025 年 2 月  
HP:  
<https://www.jss.or.jp/ikusei/sasakawa/old/2024.html>
3. 光子計数型 X 線撮影による被写体の定量分析技術の開発と骨強度の定量指標の導出  
日本学術振興会 科学研究費助成事業 基盤研究(B) 2024 年 4 月 - 2027 年 3 月

## ・産業財産権

研究課題の内容に関して、特許出願 2 件(うち 1 件本学より)を行った。

1. 特願 2024-087445 放射線検出器
2. 特願 2024-000808 C T 撮影に用いる放射線遮蔽体の性能評価方法

## 9. 根拠資料 (資料名のみ)

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・ 授業における配布, 配信資料等
- ・ 診療放射線技師国家試験対策 模試結果
- ・ Research map
- ・

## ティーチング・ポートフォリオ

教員名	吉田幸恵	所属学科	口腔保健学科	職名	教授
クラス担任	なし	クラブ顧問	なし		
委嘱委員・職務	口腔保健学科長、運営委員会委員、学長会議委員、口腔保健研究センター委員、入試委員会委員、口腔保健学科臨地実習委員会委員				

### 1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課（網掛け部分は外部公表しない）科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
健康スポーツ科学1	基礎	1	前期	選択	講義	遠隔	283
○歯科衛生士論I	○	1	前期	必修	講義	対面	73
○栄養指導	○	2	前期	必修	講義	対面	64
子どもの食と栄養	○	2	後期	選択	講義	対面	62
研究方法論	○	3	後期	必修	講義	対面	67
○子どもの歯と健康	E	3	後期	選択	講義	対面	50

(2)準正課、正課外の教育活動

特になし

### 2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

歯科衛生士の受験資格取得を目指すことはもとより、学士として最低限のコミュニケーションスキルや問題解決能力、自己管理能力などを身につける教育を目指します。

### 3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）

- ・毎時間、学習の目標を示し、到達の程度をレポートや小テスト等で可視化できるようにしている。
- ・学び始めの科目においては、細かい小さな質問にも回答し、学習上の自己管理能力の向上を支援している。
- ・観察や体験、視聴覚教材等を用いて、理解を容易にすると共に問題解決能力の向上を図っている。

### 4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・授業中の練習問題の実施  
昨年、観察・体験学習を実施して学びが深まったと評価されたので、今年度はさらに学習した内容について授業中に例題を提示し、それに学生が解答し発表する方法を取り入れた。

- ・授業用スライドの変更

昨年までは、1枚のスライドに複数の要点を入れ込んだが、1スライド1要点と変更した。

## 5. 今年度の学生による授業評価より

- ・「歯科衛生士論1」では、毎時間、質問の機会を設け、全てに回答したので、理解が深まったとの意見が多く見られた。質問をしていない学生にも確認や反復の学習となり学習効果があったと考える。

また、スライドもポイントを絞ったものに変更したところ総合評価が0.1ポイント高くなった。

- ・「子どもの歯と健康」では、体験学習を加えたことにより、参加型の授業で楽しかったとか、自分の口の中を実際に見ながら学べてよかったとの意見が多数見られた。授業中の練習問題の実施は、学修した内容を理解できる良い方法であったと考える。
- ・「栄養指導」では、ポイントを絞った授業スライドに変更したところ、スライドやレジメが分かりやすかった、見やすかったと評価され、授業方法は0.3ポイント、総合評価は0.2ポイント高くなった。

## 6. 今年度の成果

主たる科目において(責任者科目)、スライドが分かりやすい、見やすくなったとの自由記述が見られた。

## 7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

昨年同様、授業時間外の学習時間を増やす工夫を講じたい。

## 8. 社会的活動等

- ・「日本歯科衛生学会」において学会長を務める。
- ・「日本健康体力栄養学会」において副会長を務める。
- ・「日本口腔ケア学会」において評議員を務める。
- ・「日本栄養・食糧学会近畿支部」において参与を務める。
- ・「神戸市歯科口腔保健推進懇話会」において委員を務める。
- ・ 徳島大学

## 9. 根拠資料(資料名のみ)

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・ 授業における配布、配信資料等

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	江崎ひろみ	所属学科	口腔保健学科	職名	教授
クラス担任	2年B	クラブ顧問			
委嘱委員・職務	紀要委員会・委員 ハラスメント防止対策委員会・副委員長（相談員を兼ねる） 口腔保健学科 臨地実習委員会・副委員長				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課（網掛け部分は外部公表しない）科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
○学びの基礎	○	1	前期	必修	講義	対面	72
歯科衛生士論 1	○	1	前期	必修	講義	対面	73
歯科診療の補助論	○	1	前期	必修	講義	対面	73
歯科診療の補助演習	○	1	後期	必修	演習	対面	76
○対人援助論	R	1	後期	必修	講義	対面	89
○対人援助技術演習 M2	M	2	前期	選択必修	講義演習	対面	83
○歯科衛生士論Ⅱ	○	2	前期	必修	講義	対面	65
○医療面接	○	2	後期	必修	講義	対面	67
○子どもの食と栄養	○	2	後期	選択	講義	対面	62
○オーラルリハビリテーション論	○	3	前期	必修	講義	対面	66
○オーラルリハビリテーション演習	○	3	後期	必修	演習	対面	65
○高齢者歯科学	○	3	後期	必修	講義	対面	66
研究方法論	○	3	前期	必修	講義	対面	67
I PW論	○	3	前期	必修	講義	対面	66
早期臨地実習	○	1	前期	必修	実習	対面	
基礎臨地実習	○	2	後期	必修	実習	対面	
応用臨地実習	○	3	前期	必修	実習	対面	
発展臨地実習	○	3	後期	必修	実習	対面	

(2)準正課、正課外の教育活動

- ・ 学生生活相談面談指導、保護者面談

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

医療専門職としての知識・技術の習得とともに、臨床現場で対応できる実践力と人の命を守る医療倫理観をもった学生を養成する。

### 3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）

- ・ 成人期の学生には、普段気づきにくい、あるいは気づかない高齢者や幼児の特性に目を向け、具体的な検査・診療場面における安全への配慮、安楽への配慮を考慮してもらった。
- ・ 対面授業・演習では、ペアワーク、グループワークでの意見交換、小さな疑似体験のなかで気づきを引き出す。
- ・ 実践的な技術となるよう検査室・診療室など狭小空間での車いす操作、難聴・視野狭窄患者体験を組み合わせで行なった。体験する中で、対象（患者とその家族）特性の理解を深め、普段気づきにくい危険予測力を醸成するような授業の仕掛けづくりをおこなった。

### 4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・ 授業時に複数回の小テストを実施して知識の定着度の把握に努めた。
- ・ 毎授業後、出席票をもちいて学生コメントを収集し、次の授業冒頭で学生からの質問や疑問、気づきをパワポスライドで共有した。双方向のやりとりにくわえ、他学生の意見や気づきの発見に繋がりを、思考の深まりがあったとの学生コメントが多くあった。
- ・ 実習記録方法、学びの視点を明確にした記録用紙の仕掛け作りを実践した。実習後レポートの質的記述的分析から、学生の学びを明らかにし、記録

### 5. 今年度の学生による授業評価より

- ・ 対面授業・演習では、ペアワーク、グループワークでの意見交換を行い、他者から「自分にとって新しい考え方・発想を得る」ことが出来た学生も多かったようである。一方で、普段かかわりの少ない学生との話し合いは苦手とする学生も一定数存在しており、コミュニケーション技術力を高める演習授業であることの理解を促すファシリテートが必要である。
- ・ 單元ごとに小テストを行なうことで、繰り返し学習と知識の定着が出来たといった意見が多かった。
- ・ 生活体験に即した知識は気づきが多く、興味深く学ぶ学生が多くあった。しかし概論、理論といった抽象度の高い学習内容は、言語的理解度が低い学生にとっては難しかったようである。
- ・ 今年度の国試問題においても摂食嚥下リハに関する出題範囲は多く、専門知識の教授と定着の工夫が必要である。

### 6. 今年度の成果

教育活動を振り返り、学生の学びの明確化、教育方途の改善策を検討し公表した。

- ・ 模擬患者を活用した歯科衛生過程の実習における歯科衛生学生の学び―実習後レポートの計量テキスト分析より―神戸常盤大学紀要 Vol.18, pp.37-48, 2025
- ・ 地域歯科保健活動を志向した子育て支援施設実習の学び（第1報）―学生が捉えた子育て期の保護者のヘルスニーズ―第32回日本健康体力栄養学会大会抄録集 p 46

## 7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

- ・ 授業外学修としては30分未満・30分から1時間が大半を占めており、課題量としてはやや少ないと考えるが、振り返りレポート、終講テストで医療専門職としての自身の考えが論述できるようにしていく。

## 8. 社会的活動等

- ・ 日本健康体力栄養学会 理事
- ・ 公益社団法人日本歯科衛生士会 令和5年度認定歯科衛生士セミナー「生活習慣病予防（特定保健指導－食生活改善指導担当者研修）コース」講師
- ・ 日本摂食嚥下リハビリテーション学会認定士
- ・ 日本認知症予防学会 認知症予防専門士
- ・ 神戸市オーラルフレイルチェック事業協力

## 9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・ 授業における配布、配信資料等
- ・ Manaba 授業コンテンツ、テスト問題
- ・ 認定士研修修得単位数

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	福田昌代	所属学科	口腔保健学科	職名	教授
クラス担任	3年A	クラブ顧問	なし		
委嘱委員・職務	運営委員会 委員 ときわ教育推進機構 委員 教務委員会 委員長 口腔保健学科 国家試験対策委員会 委員長 口腔保健学科 就職委員会 委員 口腔保健学科 臨地実習委員会 委員 FAST 等企画運営ユニット 委員 神戸常盤大学歯科診療所（はあみる）医薬品安全管理責任者				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課（網掛け部分は外部公表しない）科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
○大学道場 mini ゼミ A	基盤	1	前期	選択	演習	対面	144
○大学道場 mini ゼミ B	基盤	1	後期	選択	演習	対面	100
○口腔健康支援総論	○	1.	前期	必修	講義	対面	73
○口腔健康支援各論	○	1.	後期	必修	講義	対面	74
口腔衛生管理演習	○	2	前期	必修	演習	対面	65
ライフステージ別口腔健康支援演習	○	2	後期	必修	演習	対面	65
口腔の構造と機能	○	2	前期	必修	講義	対面	66
早期臨地実習	○	1	前期	必修	実習	対面	72
基礎臨地実習	○	2	後期	必修	実習	対面	65
応用臨地実習	○	3	前期	必修	実習	対面	62
発展臨地実習	○	3	後期	必修	実習	対面	62
○健康教育法	○	3	後期	必修	演習	対面	65

(2)準正課、正課外の教育活動

- ・短大既卒生の国家試験対策模擬試験の実施

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

歯科衛生士として社会で活躍できる人材を育成する。そのため、1年生から口腔保健に関する基礎的な知識や技術を修得し、歯科衛生士になるという自覚と責任を講義、演習、実習を通じて身につけることができるように工夫した方法で教育を行う。また、患者さんとのコミュニケーションの基礎となる対

人コミュニケーションの方法を修得できるようにグループワーク等を行い、他者との関わり方を学ぶ。授業から実習の中で、歯科衛生過程を基準とした考え方を習得し、様々な患者さんや対象者に対応できる能力を養う。

最終学年では国家試験合格に向けての学修方法を伝え、全員が歯科衛生士の資格取得できるように指導する。

### 3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングや ICT 活用等の工夫点について）

- ・1年次の科目では、基礎的な知識の修得を目的とするため、講義資料として冊子を配布し、予習・復習がしやすい方法での授業を実施している。
- ・コミュニケーションの練習と他者の意見を聞く力を養うため、授業内でグループワークの機会を設定している。
- ・模擬試験の実施、個別学習指導、ポートフォリオの活用、学生の家庭との連携することなどで国家試験全員合格を目指す。

### 4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・1年生の口腔健康支援総論ならびに口腔健康支援各論は歯科衛生士業務の基礎的な科目であるため、例年授業ではまとめ冊子を配布し、その冊子をベースに授業を進めている。毎年学生にはその冊子での授業進行が好評である。内容については、教本のバージョンに合わせて毎年マイナーチェンジを行い、より分かりやすい冊子になるように努めている。
- ・3年生の授業である健康教育法の授業では、4年次の健康教育の実践の臨地実習に向けて小学生へのプレゼンテーション原稿と媒体を作成した。来年度の実習のイメージを持たせ、小学生にわかりやすい授業内容構築のため、初めにプリシードプロシードモデルを用いて対象学年の将来のQOLに関わる目標を設定し、その目標に向けてどのような内容で授業を構成することが必要かなどをグループで検討させた。臨地実習での経験も重なり、短大時に比べて授業時間数は減少しているにも関わらず、クオリティーの高い内容のものが完成した。これを小学生にわかりやすく提示し、少しでも口腔健康の維持・向上に貢献できるように4年次の実習につなげる予定である。
- ・昨年評価の低かったライフステージ別口腔健康管理演習では、歯科衛生過程を用いたライフステージ別の例題について、各症例に対してすべて模範解答を提示した。

### 5. 今年度の学生による授業評価より

- ・1年生の授業では、例年通りの高評価であった。学生から「冊子がすごく分かりやすくまとめられていて、復習するときに便利でした。」「冊子が配られてそれに記入していく形式がわかりやすかった。記入するときに待ってくれたからありがたかった」などの意見があがったことから、引き続きこの方法を継続したい。「書くスピードが速かった」という意見が1件あったため、できるだけ学生の記入ペースに合わせながら授業を進めるように努める。

- ・大学道場 mini ゼミは各学科の先生方がゼミを行っている。選択時に自分の興味のあるゼミを希望して選択するため、例年高評価の授業となった。

## 6. 今年度の成果

- ・口腔健康支援総論・各論は、毎年高い評価を得ている。
- ・昨年課題にあげ授業内容を見直したライフステージ別口腔健康管理演習は、昨年に比べて0.4ポイント評価が増加したことから、今年度の方法を継続させつつ、より高評価につながる改善法を検討したい。
- ・オーラルフレイル関連の研究に成果として、ISDHにて「Relationship between Oral Function and Physical Fitness of Aged 75 and over in Community-dwelling」について発表した。第19回歯科衛生学会にて「地域在住後期高齢者のオーラルフレイルと体力との関係」について発表した。

## 7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

- ・口腔健康支援各論では、定期試験の平均点は今年度の方が高く、不合格者が少なかったにもかかわらず再試験の不合格者が昨年より増加した。学生が再試験に向けての学習準備ができていなかったことが原因であると考え。そこで、次年度は試験のフィードバックを行い、学習法を指導したい。
- ・国家試験について、次年度は大学1期生が初めて卒業することから、全員合格できるように早期から対策を講じる。

## 8. 社会的活動等

- ・令和6年度神戸市オーラルフレイル事業委託に伴う、オーラルフレイルチェックの企画・実施
- ・令和6年度神戸市歯科衛生士オーラルフレイル研修会の企画・講師
- ・第6回 関西口腔ケアフォーラム「災害時における口腔ケア」座長

## 9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・ 授業における配布、配信資料等
- ・ 定期試験問題
- ・ 授業スライド
- ・ 神戸市事業委託資料

## ティーチング・ポートフォリオ

教員名	八木孝和	所属学科	口腔保健学科	職名	教授
クラス担任	3年生		クラブ顧問		
委嘱委員・職務	口腔保健研究センター・副委員長、口腔保健学科就職委員会・委員長、自己点検・評価委員会・委員、神戸常盤大学歯科診療所歯科放射線機器安全管理担当				

### 1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課（網掛け部分は外部公表しない）科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
人体の構造と機能	○	1	前期	必修	講義	対面	72
○口腔の構造と機能	○	2	前期	必修	講義	対面	66
○ワークキャリアプランニング	○	2	後期	必須	講義	対面	65
○研究方法論 I	○	1	後期	必修	講義	対面	67
○インターンシップ	○	2	前期	必修	講義	対面	30
○矯正歯科学	○	2	後期	必須	講義	対面	68
健康スポーツ科学 I	E,M,O,R,N	1	前期	必須	講義	遠隔	283
放射線治療技術学 I	R	2	前期	必須	講義	対面	72
IPW（多職種連携）論	R	3	後期	必須	講義	対面	76
成育系歯科診療補助演習	○	2	前期	必須	演習	対面	66
早期臨地実習	○	1	前期	必修	実習	対面	72
基礎臨地実習	○	2	後期	必修	実習	対面	63
応用臨地実習	○	2	前期	必修	実習	対面	62
発展臨地実習	○	2	後期	必修	実習	対面	62

### (2)準正課、正課外の教育活動

- ・ 就職面接指導
- ・ 就職対策としての小論文・履歴書の添削指導
- ・ 入学前課題の出題と評価
- ・ 本学歯科診療所での学生指導
- ・ FAST メンバーとして、本学の市民救命講習のインストラクターを務めた。
- ・ 歯科診療所での教育指導

### 2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

- ・ 育てたい学生像：歯科衛生士として歯科医療に携わることに関心のある学生
- ・ 医療に真摯に取り組める姿勢を培いたい。

3. 教育の方法(2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングや ICT 活用等の工夫点について)
  - ・ICT を利用して事前もしくは当日に問題提起し、学生自身に考える授業を組み入れている。
4. 今年度における教育方法改善の取り組み
  - ・授業や試験問題に積極的に国家試験形式を取り入れ、試験傾向になれるとともに、間違った問題に対する気づきを増やすようにした。
  - ・アクティブ・ラーニングを取り入れ、知識教育授業でもグループディスカッションを多めに取り入れた。
  - ・希望者には定期試験直後に問題解説を実施するようにした。
5. 今年度の学生による授業評価より
  - ・全般的に学生の自身の学修時間が短めで、学修意欲があがらないようであった。勉強の仕方が分からない学生も多く、高等教育ではあるが、引き続き、授業内容と課題の在り方について考えていきたい。
6. 今年度の成果
  - ・歯科衛生学のテキスト編集に参加。
  - ・昨年度からワークキャリアプランニング、今年度からインターンシップという授業科目を実施し、口腔保健学科のキャリア教育に取り組むことができた。
7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策
  - ・昨年度同様、学生の自主学習時間が低く、「課題をやる意味が見いだせない」「授業が難しくてわからない」といった意見や、課題そのものを出さない学生が散見された。学生の大学授業に対するリテラシーの低さを感じてはいるが、授業の内容を絞りよりアクティブに学生が参加できる授業に変えていく予定である。
8. 社会的活動等
  - ・ 日本大学歯科衛生教育協議会 理事
  - ・ 近畿北陸歯科衛生士教育協議会 理事
  - ・ 日本顎口腔機能学会 評議員
  - ・ JDAT 長田区歯科医師会担当
  - ・ 市民救急救命インストラクター (本学 FAST メンバー) : 雲雀ヶ丘中学及び本学での講習
  - ・ 神戸常盤大学歯科診療所を通じた歯科診療
  - ・ 長田区歯科医師会との活動 : 長田区保健医療介護フォーラム等
  - ・ 本学新入生への歯科健診

## 9. 根拠資料(資料名のみ)

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・ 授業における配布、配信資料等
- ・ 歯科診療所 HP
- ・ テスト問題、小テスト問題
- ・ 学会 HP
- ・ 歯科医師会 HP
- ・ 歯科衛生学矯正歯科テキスト

### ティーチング・ポートフォリオ

教員名	柳田 学	所属学科	口腔保健学科	職名	教授
クラス担任	3年B組	クラブ顧問	なし		
委嘱委員・職務	口腔保健研究センター・センター長、SD委員会・副委員長、学科就職委員会委員				

## 1. 教育の責任(教育活動の範囲、担当科目)

### (1)正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
○人体の構造と機能	○	1	前期	必修	講義	対面	72
○薬理学	○	2	前期	必修	講義	対面	65
○歯科保存学	○	2	前期	必修	講義	対面	65
○全身の健康と口腔科学	○	1	後期	必修	講義	対面	73
○子どもの歯科学	○	2	後期	必修	講義	対面	68
口腔の構造と機能	○	2	前期	必修	講義	対面	65
微生物学・免疫学	○	1	後期	必修	講義	対面	73
研究方法論	○	3	後期	必修	講義	対面	62
機能再建系歯科診療補助演習	○	2	後期	必修	演習	対面	64
成育系歯科診療補助演習	○	3	前期	必修	演習	対面	66
早期臨地実習	○	1	前期	必修	演習	対面	72
基礎臨地実習	○	2	後期	必修	演習	対面	63
応用臨地実習	○	3	前期	必修	演習	対面	62
発展臨地実習	○	3	後期	必修	演習	対面	62

※臨地実習は授業評価調査なし

### (2)準正課、正課外の教育活動

なし

## 2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

担当科目は基礎医学、臨床歯科学に関することが多いため、歯科衛生士が具備すべき最低限の歯科医学の知識、技能を習得し、臨床現場で対応できる実践力を持った学生を育成する。また、教科書内容に止まらず、知識、臨床現場、患者といった点をつなげるような講義（全身の健康と口腔科学）で、一人でも高い見識を持った歯科衛生士を養成したいと考えている。

## 3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングや ICT 活用等の工夫点について）

・広く浅い学習ではなく、日々の歯科臨床において重点をおくべき項目について、深く学習するよう指導している。

・「全身の健康と口腔科学」においては最新の学術知見、歯科医学を取り巻く環境の変化や歴史的背景を詳説して、高齢者・中年層の患者の背景をなす事象に目を向けさせるよう考慮している。

## 4. 今年度における教育方法改善の取り組み

今年度入職のため、次年度以降改善していきたい。アクティブラーニングについては、来年度以降取り入れていきたい。

## 5. 今年度の学生による授業評価より

分野Ⅱ～Ⅴについて、1年生前期科目である「人体の構造と機能」について、学科平均より低かった。これは、時期的に基盤教育科目が多い中、全身解剖学と生理学の難解で専門的な内容であるため、他の基盤科目と比較して学生からの評価が低かったと筆者は考えている。これに対して、2年生科目では総じて学科平均並みの評価であったのは、歯科衛生士となるための専門教育科目の講義内容や、知識習得にそれ相当の努力が必要であると学生自身が認識している（1年生前期と比較して）ためと思われる。

## 6. 今年度の成果

昨年度との比較ができないため、客観的に示すことが可能な指標はない。研究方法論において、口腔保健学科の学生を医療検査学科の研究発表に参加させたのは、学科として初めての試みとして良かったと思われる。

## 7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

歯科保存学は、内容が多岐に渡るにもかかわらず週1コマであり、講義内容はかなり詰め込んだものとなった。しかし、他の講義準備との兼ね合いで十分に吟味できないまま、講義に望まざるを得なかった。次年度は、今年度の反省を踏まえ、講義内容を修正・改善する。また、総じて学生の自己学習が不足しているため、講義後、家庭学習の課題供与を予定している。

## 8. 社会的活動等

神戸常盤大学歯科診療所にて毎週金曜日(10時～18時)および月1～2回月曜日に歯科診療に従事  
公開講座において講演(3月8日)

神戸市委託事業 健口トレーニング事業への従事

大学新入生の歯科健診、神戸常盤女子高(1～3年生) 歯科健診に従事

神戸市歯周病健診、オーラルフレイル健診に従事

## 9. 根拠資料(資料名のみ)

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・ 授業における配布、配信資料等
- ・ 試験問題

### ティーチング・ポートフォリオ

教員名	森谷徳文	所属学科	口腔保健学科	職名	教授
クラス担任	1年責任者, 1A		クラブ顧問		
委嘱委員・職務	学生委員会, 研究倫理委員会, 隣地実習委員会, 口腔保健研究センター, 神戸常盤大学歯科診療所(はあみる)副所長(学内責任者)				

## 1. 教育の責任(教育活動の範囲、担当科目)

(1)正課 (網掛け部分は外部公表しない) 科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
○病理学	○	2	前期	必修	講義	対面	65
○口腔外科学・歯科麻酔学	○	2	前期	必修	講義	対面	64
○生化学・栄養学	○	1	後期	必修	講義	対面	73
○歯科理工学	○	1	後期	必修	講義	対面	73
医療英語 IIA	○	2	後期	必修	演習	対面	31
医療英語 IIB	○	2	後期	必修	演習	対面	31
機能再建系歯科診療補助演習	○	2	後期	必修	演習	対面	66
○大学道場 miniゼミ A	全	1	前期	選択必修	演習	対面	10
○大学道場 miniゼミ B	全	1	後期	選択必修	演習	対面	6

(2)準正課、正課外の教育活動

- ・ 国試対策
  - ・ 研究方法論
2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）
- ・ 最低限、国家試験に合格するレベルの知識を習得する。
  - ・ 卒後、歯科衛生士としての活躍を継続できる。
3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングや ICT 活用等の工夫点について）
- ・ 講義前の予習として、動画配信
  - ・ 講義の予習・復習として、講義スライドを PDF で配布
  - ・ 講義の復習として、manaba 上での小テストの実施
4. 今年度における教育方法改善の取り組み
- ・ 講義前の予習として、動画配信
  - ・ 講義の予習・復習として、講義スライドを PDF で配布
  - ・ 講義の復習として、manaba 上での小テストを講義後に実施
  - ・ 日本口腔外科学会専門医・指導医，日本口腔科学会認定医・指導医，国際口腔顎顔面外科専門医の資格を取得・更新し，より専門的な知識を習得し，授業および臨地実習等に反映している。
5. 今年度の学生による授業評価より
- ・ これまでの年度と同様に全般的に学生自身の学習時間が短めであった。授業内容と課題の在り方について再度考えていきたい。
6. 今年度の成果
- これまでの年度は、講義中の声が聞き取りづらいとの意見が散見されたが、今年度はその意見は認められなかった。
7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策
- ・ 学生自身の学習時間を長くするために、次年度は小テストの方法をより分かりやすくする。
8. 社会的活動等
- ・ 企業の歯科検診
  - ・ 企業のホームページへ、コラムの提供
  - ・ 歯科診療所において地域歯科治療活動
  - ・ 外部の歯科診療所における地域歯科治療活動

- ・ 第6回関西口腔ケアフォーラムの大会長

## 9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・ 授業における配布、配信資料等
- ・ テスト問題

### ティーチング・ポートフォリオ

教員名	高橋由希子	所属学科	口腔保健学科	職名	教授
クラス担任	3年Bクラス	クラブ顧問	特記事項なし		
委嘱委員・職務	すこラボ副センター長、口腔保健研究センターセンター委員 神戸常盤大学歯科診療所副責任者、口腔保健学科臨地実習委員会委員長 就職委員会委員				

## 1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課（網掛け部分は外部公表しない）科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
○オーラルヘルスマネジメント	口腔保健	3	後期	必修	講義	対面	66
○歯科予防処置論	〃	1	後期	必修	講義	対面	74
○歯周疾患処置演習Ⅰ	〃	2	後期	必修	演習	対面	66
○歯周疾患処置演習Ⅱ	〃	3	前期	必修	演習	対面	66
研究方法論	〃	3	後期	必修	講義	対面	67
歯科予防処置演習Ⅱ	〃	2	前期	必修	演習	対面	65
歯科予防処置演習Ⅲ	〃	2	前期	必修	演習	対面	65
早期臨地実習	〃	1	前期	必修	実習	対面	72
基礎臨地実習	〃	2	後期	必修	実習	対面	63
応用臨地実習	〃	3	前期	必修	実習	対面	62
発展臨地実習	〃	3	後期	必修	実習	対面	62

### (2)準正課、正課外の教育活動

- ・ 臨地実習ガイダンスでの指導（1，2，3年）
- ・ すこラボでの地域貢献時の学生ボランティアの指導
- ・ KICCより依頼で行った外国人の健康支援ボランティアの指導
- ・ 学内歯科診療所での患者管理

## 2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

- ・「保健科学部は建学の精神の下、“いのち”に対する知性と感性および豊かな人間性と高い倫理観を身につけた医療専門職の育成を目指す」
- ・上記の保健科学部の教育理念を基本として、いのちに対する温かく豊かな感性と高い倫理観を持ち、口腔の健康を通して、人々の健康で豊かな生活実現を支援できる確かな医療技術と学識を兼ね備え、地域社会に加え国際的にも活躍できる専門職業人を育成する。

## 3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングや ICT 活用等の工夫点について）

- ・実習前には、事前指導をオンデマンド形式で動画配信を行い、自主学習を行う。
- ・様々な症例を提示し、単純な症例から複雑な症例へとレベルを上げて、歯科衛生過程を患者に実際に使用できるよう、具体的に個別指導を行う。
- ・医療現場を想定した相互実習を行い、学内歯科診療所で患者や保護者に対して実践を行う。
- ・そのためには教員側が継続的な臨床を行うことが必須である。

## 4. 今年度における教育方法改善の取り組み

学生自身の授業以外に学修した時間はいつも評定が低い（ほぼ自己学習を行わない）ため、講義は1週以上前から講義スライドをマナバにあげ、事前に講義内容を予習できるように準備した。

演習については初回で全ての資料を配布し、今後のスケジュールを詳細に説明し、事前に資料を確認するように促した。

結果「スライドを用いて詳しく説明して下さったので理解しやすかったです。」との意見があった。

## 5. 今年度の学生による授業評価より

演習に対する意見は以下のようなものが挙げられた。

「先生が回ってくださって一人一人にアドバイスをしてくださったのでそのアドバイスをもとに練習することが出来た。」「丁寧に説明して下さったので分かりやすかった。」「自分のところに回ってこなかったら教えてもらえない場合がある。」

以上より、演習では全員にアドバイスを行ったが、学生によっては不足していることが認められた。自分から教員に指導を求める学生はわかりやすいが、今後はそうではない学生への声掛けを今まで以上に十分に行うようにする。

## 6. 今年度の成果

以下の通り、歯周疾患処置演習 I はすべての点で高評価を得た。

	学生自身	授業内容	授業方法	学習成果	総合評価
2023	3.6	4.1	4.0	4.0	4.1
2024	3.8	4.5	4.6	4.5	4.6

この演習は、歯科衛生士の根源ともいえる歯科予防処置の歯石除去についての内容で、卒後必ず求められる技術・知識である。

この演習は、歯周疾患処置演習Ⅱ、臨地実習という積み上げ式の流れとなっている。

そのため、歯周疾患処置演習Ⅱの教育に工夫を行い、臨地実習のモチベーションの向上につながるよう指導したい。

## 7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

昨年は、四大になり、初めての臨地実習（保護者参加型実習）であった。

臨地実習前の歯周疾患処置演習Ⅱの演習内容の着地点について不明な点も多かった。

来年度は、外部の臨地実習および保護者参加型実習に合わせた歯科衛生過程の展開およびポイントを絞った技術指導や患者対応指導を行う予定である。

## 8. 社会的活動等

日本歯周病学会の理事

日本歯周病学会の歯科衛生士関連委員会に所属、認定歯科衛生士の審査員

日本歯周病学会から派遣にて日本歯科衛生士会（奈良県歯科衛生士会）で講演

日本歯周病学会の学会あり方委員会・委員

歯科衛生学シリーズ 歯周病学 第2版 編集委員

日本歯科衛生士会 生涯研修委員会・委員

日本歯科衛生学会・編集委員

日本歯科衛生教育学会・編集委員

医歯薬出版「歯周病学」の編集委員

## 9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・ 授業における配布、配信資料等
- ・ 試験問題

## ティーチング・ポートフォリオ

教員名	山城 圭介	所属学科	口腔保健学科	職名	教授
クラス担任	2年A組		クラブ顧問	なし	
委嘱委員・職務	保護者のためのオープンキャンパス委員長，臨地実習委員会副委員長，入試委員会委員，神戸常盤大学歯科診療所委員，ときわ教育推進機構機構員				

### 1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

#### (1) 正課（網掛け部分は外部公表しない）科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
○微生物学・免疫学	○	1	後期	必修	講義	対面	72
人体のふしぎ	MNORE	1	前期	選択必修	講義	対面	159
健康科学総論	N	1	前期	必修	講義	対面	96
早期見学実習	○	1	前期	必修	実習	対面	72
○歯科補綴学	○	2	前期	必修	講義	対面	63
歯科保存学	○	2	前期	必修	講義	対面	64
○公衆衛生学	○	2	前期	必修	講義	対面	64
○医療英語 II	○	2	後期	必修	演習	対面	64
機能再建系歯科診療補助演習	○	2	後期	必修	演習	対面	64
IPW 論	MNORE	3	後期	必修	講義	対面	66
歯周疾患処置演習 II	○	3	前期	必修	演習	対面	66
応用臨地実習	○	3	前期	必修	実習	対面	62
発展臨地実習	○	3	後期	必修	実習	対面	62
研究方法論	○	3	後期	必修	実習	対面	62
国際保健医療活動 I	MNRO	3	前期	選択	講義	遠隔	79

#### (2) 準正課、正課外の教育活動

- ・ 入学前課題の出題と添削
- ・ 歯科診療所において実習時の指導
- ・ 国試対策

### 2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

- ・ 全学科の学生に対しては，口腔の健康が全身の健康に関わることを理解できる学生を養成する。
- ・ 本学科の学生に対しては，専門基礎分野では，歯科衛生士として必要な知識を習得するだけでなく，国際的な歯科医療の進歩に対応しうるための基礎知識や環境に基づいた論理的思考を身に付けさせる。専門分野では，歯科診療や口腔疾患予防に関する専門的な知識，技術を習得させる。特に，

歯科診療所においては、実際の患者を治療している際に実習の一環として診療補助等を行い、専門職業人としてのプロフェッショナリズムを習得させる。

### 3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングや ICT 活用等の工夫点について）

- ・ 授業プリントを配布し、内容を要約しやすいよう工夫した。
- ・ 教科指導法では、manaba を用いた事前学習課題を設定し、自主学習を行わせる。
- ・ 授業後にも manaba を用いた小テストを行い、授業の理解度を確認するようにした。
- ・ 授業時間では、Mentimeter というソフトを用いて、スマホでのアンケートの回答や意見を述べさせるなど、双方向の授業を行った。学生の意見や、現在の理解度をリアルタイムで確認できた。
- ・ 授業のスライドの PDF ファイルを manaba 上にアップし、学生の復習、試験対策に用いられるようにした。
- ・ 演習では、行う内容について事前に動画撮影したものを、manaba 上にアップし、学生が演習前に確認できるようにした。

### 4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・ 前年度の学生による授業評価では、授業プリントを配布してほしいとの意見があった。そのため、授業内容を要約できるよう、穴埋めのプリントを作成、配布した。
- ・ 復習のためスライドの PDF が見たいとの意見があったため作成、manaba 上にアップした。
- ・ 臨床で使用する器具などは教科書の図のみではわかりにくいと考え、実物を閲覧できるよう準備し、授業内に学生に実際に触ってもらえる機会を設けた。
- ・ 静止スライドのみならず、なるべく動画を授業スライド内に含めるようにし、学生が飽きないよう工夫した。

### 5. 今年度の学生による授業評価より

- ・ 模型を触って学ぶことができ深く理解できたとの意見があった。
- ・ プリントがあったことや、説明がわかりやすかったとの意見があった。
- ・ 動画で見ることでより理解が深まったとの意見があった。

### 6. 今年度の成果

- ・ 授業の工夫などは概ね達成できたと考える。

### 7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

- ・ 真面目に授業を受ける学生は現在の方法で概ね問題ないと考える。
- ・ モチベーションが低い、もしくは理解度が低い学生に対して、どのような授業を行うべきかは今後とも検討が必要である。授業のレベルを低くするだけでは、優秀な学生にとって大学の授業が退屈でつ

まらないものと思われる。

・大学生になり、高校生と異なる生活環境になるため、学習意欲が極端に低下する学生が見られる。アルバイトや友達と遊ぶことがメインとなり、授業の出席がおろそかになったり、試験対策ができなかったり、単位の習得ができなかったりする学生が一定数見られる。個人の教員の努力だけではいかんともしがたいと考える。リメディアル教育のシステムを大学全体で整え、学修の継続が危ういと思われる学生に対しては、早期にアラートが発せられるようにし、しかるべき部門でフォローできるようにすべきと考える。

## 8. 社会的活動等

- ・長田区のハッピーむし歯予防事業に参加し、長田区の小学生のう蝕罹患率が減少するよう、協議・対策を行った。
- ・兵庫県歯科衛生士会卒後研究プログラムにおいて「歯科衛生士が担う口腔保健学の発展」と題した講演をおこなった。
- ・岡山大学歯周病態学分野同門会にて「少子高齢化社会における口腔保健学の意義」と題した講演を行った。
- ・太陽冊子にて企業歯科検診を行った。
- ・「病院歯科介護研究会」の理事を務める。
- ・「近畿・中国・四国口腔衛生学会」の常任幹事を務める。
- ・「全国大学歯科衛生士教育協議会」の研究委員を務める。

## 9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・ 授業における配布、配信資料等
- ・ 抄録等

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	上原弘美	所属学科	口腔保健学科	職名	准教授
クラス担任	1年生Bクラス	クラブ顧問	なし		
委嘱委員・職務	入試委員会委員長およびアドミッションオフィサー・運営委員会委員 ・危機管理（災害）委員会・臨地実習委員会委員・歯科診療所委員・歯科診療 所医療安全管理責任者				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
○医療安全	○	2	後	必修	講義	対面	63
○歯科臨床検査総論	○	2	後	必修	講義	対面	65
○I PW論	○	3	後	必修	講義	対面	66
早期臨地実習	○	1	前	必修	実習	対面	72
応用臨地実習	○	3	前	必修	実習	対面	62
発展臨地実習	○	3	後	必修	実習	対面	62
まなぶるⅠ	基盤	1	前	必修	演習	対面	399
まなぶるⅡ	基盤	1	後	必修	演習	対面	393
大学道場 miniゼミA	基盤	1	前	必修	演習	対面	8
大学道場 miniゼミB	基盤	1	後	必修	演習	対面	8
いのちと共生	基盤	1	前	選択必修	講義	遠隔	141
放射線治療技術学Ⅰ	R	3	前	必修	講義	対面	87
I PW論	R	3	後	必修	講義	対面	81

(2)準正課、正課外の教育活動

- ・ オープンキャンパス・母校訪問等入試全般にかかわる学生への指導

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

- ・ 医療職としての自覚と責務を持ち、チーム医療の一員として活躍できる、実践力を持った歯科衛生士の育成
- ・ 国家資格取得後も、継続学習の必要性を認識し、生涯自己研鑽できる力を身に付けさせる
- ・ 物事を考える力、自分の意見を持ちそれをまとめる力、自身の意見を他者に伝える力を持った歯科衛生士を育てたい。

3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングや ICT 活

#### 用等の工夫点について)

- ・ 医療職としての自覚を育むために、「命を守る責務」について、臨床の事例を交えながら繰り返し講義した。
- ・ 自身で考え、意見を持ち、他者へ伝える力を育むために、グループワークを取り入れ、他者の意見を聞く機会、自分の考えをまとめ他者にわかりやすく伝える機会を授業に取り入れた。

#### 4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・ 臨地実習の振り返りでは、グループワークののち、プレゼンテーションを行うことで、個々人の学習を深めるとともに、臨床現場での最新の知識を学生間で共有することができた。
- ・ 授業評価では、「学生への質問や意見への対応が十分になされていた」の項目が高くはないので、毎回の授業では、適宜学生へ、質問がないか？と投げかけるように心がけた。

#### 5. 今年度の学生による授業評価より

- ・ 大学道場 mini ゼミは、他学科の学生にとっても口腔への興味を持てるよう、学生の疑問に答える形で初回の授業は進めた。また、健康への意識を高めるために口腔内写真を撮影・プリントアウトして自身の口腔内の現状（歯列や歯肉・歯牙の健康状態）を確認してもらい、ケア方法について伝授した。最終講義ではそれぞれの学生が興味を持って調べた事柄についてパワーポイントを作成して発表してもらった。学生からは、少人数であったため、緊張せず発表でき、良い経験になったとのコメントが見られた。

#### 6. 今年度の成果

- ・ 今年度より担当することとなった科目「まなぶるⅠ」「まなぶるⅡ」では、初年次教育として、大学生としての学びの基礎を教授する科目であり、普段関わることのない他学科の学生を含め、1年生の学習に向かう姿勢を目の当たりにすることができ大変有意義な時間であった。中にはグループワークへの参加が難しい学生もおり、チューターとしてどのような態度で、また声掛けで個々の学生と関わるべきかについて考える機会となった。担当したチームの学生たちは、欠席も少なく活発な意見交換ができていた班が多かった。教員が適切なアプローチをすることで、学生の授業へのモチベーションを高めるとともに継続させることができると思った。

#### 7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

- ・ 今年度の課題として挙げていた「学生への質問や意見への対応」については、今年度も評価が低かった。改善策としては、授業が一方通行にならないよう学生の意見をできるだけ拾い上げ、授業内容に反映できるように心がける。
- ・ 今年度新たに開講した「IPW 論」では、他学科多職種の先生がたからオムニバス形式でご講義いただいた。医療職種の中での歯科衛生士の役割について、また多職種連携の重要性を学生たちに理解させる授業内容になるよう次年度も授業内容を精査して臨みたい。また、「IPW 論」に続く「IPW

演習」科目が今年度から開講される。より具体的な、臨床に即した内容になるよう準備を整えたい。

## 8. 社会的活動等

- ・兵庫県歯科衛生士連盟 会長
- ・日本歯科衛生士連盟 評議員
- ・(公社)日本歯科衛生士会「歯科衛生士の研修指導者・臨床実地指導者講習会」企画運営委員会委員  
ならびに講習会のタスクフォース
- ・阪神シニアカレッジ健康学科1年生・3年生 講師
- ・非常勤講師  
兵庫県立総合衛生学院 看護学科定時制  
兵庫県立総合衛生学院 歯科衛生学科  
神戸市医師会看護専門学校
- ・高大連携授業 兵庫県立福崎高校
- ・垂水区歯科医師会例会 講師「高齢者の口腔健康管理を継続することの必要性について  
～神戸掖済会病院における活動報告第3報より～」

## 9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・ 授業における配布、配信資料等
- ・ テスト問題

### ティーチング・ポートフォリオ

教員名	澤田 美佐緒	所属学科	口腔保健学科	職名	講師
クラス担任	3年Bクラス	クラブ顧問	なし		
委嘱委員・職務	図書委員会委員、個人情報保護委員会委員、就職委員会委員 臨地実習委員会委員				

## 1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課（網掛け部分は外部公表しない）科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
○発展臨地実習	○	3	後期	必修	実習	対面	62
○機能再建系歯科診療補助演習	○	2	後期	必修	演習	対面	63
歯科診療の補助演習	○	1	後期	必修	演習	対面	76

オーラルリハビリテーション論	○	3	前期	必修	講義	対面	66
オーラルリハビリテーション演習	○	3	後期	必修	演習	対面	65
生育系歯科診療補助演習	○	3	前期	必修	演習	対面	66
早期臨地実習	○	1	前期	必修	実習	対面	72
基礎臨地実習	○	2	後期	必修	実習	対面	63
応用臨地実習	○	3	前期	必修	実習	対面	62
研究方法論	○	3	後期	必修	講義	対面	67

## (2) 準正課、正課外の教育活動

- ・ 就職に関する支援、個別指導

### (ア) 実習や学習に関する相談、支援

## 2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

歯科診療補助系の演習科目では、1年次で感染予防に対する基本的な知識や技術、身だしなみの整え方、歯科用チェアの扱い方の基礎など医療人としての心構えと態度とともに身に付けさせ、次年度以降の学びへとつなげる。2年次では、う蝕治療の各診療の流れに沿った器具機材の取り扱い方法と補助業務に関する知識や技術を深めるとともに、患者への配慮を考えらえるような学生を養成する。3年次の摂食嚥下障害者に対応する科目では、歯科衛生士が食支援関わる意義を理解した上で支援方法を考える基礎を学ばせたい。また、臨地実習科目では、小児から高齢者までを対象とした臨地・臨床の場面で、対象の口腔衛生状態の向上だけでなく、食支援も含めた口腔健康管理を実践できる人材を育成したい。

## 3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）

- (イ) 1年次の演習では、基本的な技術を繰り返し学ぶ機会を持つことで、単に技術だけでなく、その根拠とともに身に付けられるようにした。
- (ウ) 2年次の演習では、歯科医師による各項目の説明動画を事前に配信し、各自で予習ができるようにした。また、授業毎に小テストを実施して、学生自身が理解の程度を図れるようにした。
- (エ) 3年次臨地実習では、学生により実習する領域が異なるものがあったが、実習後の振り返りで様々な領域で実習をした学生を混合してグループを編成し、意見交換することで相互に学びを共有できるようにした。

## 4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- (オ) 授業後のレポートは次の授業時に返却し、その際に理解不足と考えられる部分には説明を加え、以降の授業に活かせるようにした。

- ・ 機能再建系歯科診療補助演習では、平行して実施される臨地実習において見学する場面が多い項目を先にするなど、実際の場面と照らし合わせて理解を深められるように授業の順番を変更した。

## 5. 今年度の学生による授業評価より

- ・ 機能再建系歯科診療補助演習では、歯科医師から説明があることで、診療の流れの理解ができたとの意見があった。今後も歯科医師教員、歯科衛生士教員がそれぞれの分野を担当することで、歯科衛生士の役割に対する理解を促したい。
- ・ 歯科診療の補助では、詳しい説明により理解できた、指導教員が4人と多いため質問しやすかったとの意見がある一方で、教員により説明が違ったため戸惑ったとの訴えもあった。事前に説明内容を十分にすり合わせて齟齬がないように改善したい。

## 6. 今年度の成果

- ・ 「機能再建系歯科診療補助演習」では、授業の順番を見直したこともあり、授業評価について昨年に比べ学生の学習時間と総合評価が0.4上昇した。また、定期試験では、平均71.4点と昨年より3.4点向上した。

## 7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

- ・ 学内の演習については、授業内で学生が不明な点について質問しやすい環境を作るなどして、その場で課題解決できるようにしていく。
- ・ 臨地実習では、学生が各実習の目的を明確にできるよう事前の指導内容を見直す。できるだけ、指示を待つのではなく、学生自身が能動的に行動できる方法を講じていきたい。

## 8. 社会的活動等

- ・ 高大連携授業（明石南高等学校）
- ・ 花屋敷栄光園 職員研修会講師（高齢者施設）
- ・ 太成学院大学歯科衛生専門学校 非常勤講師
- ・ 神戸常盤大学歯科診療所における歯科衛生士業務

## 9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・ 授業における配布、配信資料等
- ・ テスト問題

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	破魔幸枝	所属学科	口腔保健学科	職名	講師
クラス担任	3年	クラブ顧問	なし		
委嘱委員・職務	就職委員会副委員長、国家試験対策委員会副委員長、臨地実習委員会委員、保護者のためのオープンキャンパス委員、神戸常盤大学歯科診療所委員、神戸常盤大学歯科診療所医療機器安全管理担当・医療機器情報管理担当				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課（網掛け部分は外部公表しない）科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
○歯科予防処置演習Ⅰ	○	1	後期	必修	演習	対面	71
○歯科予防処置演習Ⅱ	○	2	前期	必修	演習	対面	64
○歯科予防処置演習Ⅲ	○	2	前期	必修	演習	対面	64
○子どもの心理学	○	2	後期	選択	講義	対面	62
○キャリアパスⅠ	○	3	前期	選択	講義	対面	35
歯科予防処置論	○	1	後期	必修	講義	対面	71
ワークキャリアプランニング	○	2	後期	必修	講義	対面	63
歯周疾患処置演習Ⅰ	○	2	後期	必修	演習	対面	64
医療面接	○	2	後期	必修	講義	対面	65
歯周疾患処置演習Ⅱ	○	3	前期	必修	演習	対面	66
研究方法論	○	3	後期	必修	実習	対面	67
早期臨地実習	○	1	前期	必修	実習	対面	72
基礎臨地実習	○	2	後期	必修	実習	対面	63
応用臨地実習	○	3	前期	必修	実習	対面	62
発展臨地実習	○	3	後期	必修	実習	対面	62

(2)準正課、正課外の教育活動

- ・ 歯科予防処置のスキルアップのための補講
- ・ 歯科診療所施設における診療時の学生指導

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

豊かな感性を磨き、自己決定の力を備え、多様化する社会のなかで幸福を感じられる人生を歩めるよう育成する。また、医療人の倫理観を育て、真実を探求する力が十分に形成される学修に努める。

3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）

- ・ 演習では、グループ・ペアでの準備・実習の実施・整理は能動的な行動を重要視し、多くの気づきや体験を促す。失敗についても問題解決に真摯に向き合えるような環境を整える。また、達成感を味わえる場面を設けるように工夫する。
- ・ 演習ではもとより、講義の時も、医療人としての倫理観に則った根拠を必ず説明するようにする。
- ・ 医療職としてのアセスメントスキルを磨くため、探求する心を育つよう「楽しさ」「面白さ」を伝える。

#### 4. 今年度における教育方法改善の取り組み

「キャリアコンサルタント」国家資格取得後、講習会の参加

「ワーキングキャリアプランニング」キャリア教育授業および就職活動など、教育や指導に活かすため、専門的な知識・スキルを修得し、今後の学生支援に活用する。

演習では、3年生SAによる学習を取り入れることで、相互の学習効果を期待した。

「医療面接」では、毎回学生に授業感想を記入させて、学修への希望・要望などを確認した。

#### 5. 今年度の学生による授業評価より

「歯科予防処置論」「医療面接」「子どもの心理学」において、歯科予防処置論は3年前から導入した課題であるが、次年度も事後学習の課題は継続する予定と考えている。

演習科目では、「教員が多く見てくれた」が毎年記載があり、学生自身の教員への支援の表れであると考えられる。教員の関わりを求められていることが反映されていた。技術的なスキルを習得する演習では限られた時間の中で個々への対応が求められ、アクティブラーニング活用も含めて検討が必要である。

#### 6. 今年度の成果

国家試験対策において、今年度の全国平均は91%、過去最低となっていた。全国平均が年々下がっているなか、本学科、今年度は卒業生がなく現役生の受験はなかった。しかしながら、前年までの高い合格率の継続を目指し、さらなる国家試験対策は常盤モデルとして効果を上げていきたいと考える。

キャリア教育科目において、4.1～4.4と他の科目委に比べ学生評価が低く、授業展開の工夫が求められる。学生の自己意識改革を目標とする授業だが、学生のモチベーションが個々に異なるため展開が難しい。

「歯科予防処置論」「歯科予防処置演習Ⅱ」では、スライドの改善を図った結果、学生からの評価に「見やすかった」「わかりやすかった」が複数あったので改善の効果はあったと捉えている。

#### 7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

「歯科予防処置演習Ⅱ」において、クラス交代の授業順に偏りがあることの見解が昨年度あったため、どちらにも配慮した対応が必要であり、事前の説明などの工夫が重要であると感じ改善した。

その結果、学生からの自由記述も「わかりやすい」など高評価であった。

ICT 活用を演習や実習などで授業展開していく。レポート課題では評価を意識する学生の記載から授業に求める真実を認識するのは難しい。そこで、レポート課題とは別に ICT を活用することで学生からの視点を得られるようにする。

実習においては、事前指導を対面方式で早期におこない、各実習の目的・目標を理解した施設実習が行えるよう準備期間を設け、さらに実習直前の事前指導をおこない、入念な支援をおこなう。

## 8. 社会的活動等

公益社団法人 兵庫県歯科衛生士会 基礎研修委員会理事  
令和 6 年度卒後研修必修プログラム（兵庫県歯科衛生士会） 講師

## 9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・ 授業における配布、配信資料等
- ・ 兵庫県歯科衛生士会名簿、年間行事予定表
- ・ 定期試験、小テスト問題
- ・ 国家試験対策委員会総括

### ティーチング・ポートフォリオ

教員名	中村 美紀	所属学科	口腔保健学科	職名	講師
クラス担任	2年Aクラス	クラブ顧問	なし		
委嘱委員・職務	地域交流センターボランティア事業部、すこラボ研究所 臨地実習委員会、国試対策委員会				

## 1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課（網掛け部分は外部公表しない）科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
○早期臨地実習	○	1年	前期	実習	必修	対面	72
歯科診療の補助演習	○	1年	後期	演習	必修	対面	76
地域との協働 B	全	2年	前期	演習	選択	対面	16
○子ども学	○	2年	後期	講義	選択	対面	63
子どもの歯科学	○	2年	後期	講義	必修	対面	68

歯科矯正学	○	2年	後期	講義	必修	対面	68
機能系歯科診療補助演習	○	2年	後期	演習	必修	対面	66
基礎臨地実習	○	2年	後期	実習	必修	対面	63
○成育系歯科診療補助演習	○	3年	前期	演習	必修	対面	66
オーラルリハビリテーション論	○	3年	前期	講義	必修	対面	66
キャリアパスI	○	3年	前期	演習	選択	対面	35
応用臨地実習	○	3年	前期	実習	必修	対面	
研究方法論	○	3年	後期	講義	必修	対面	67
オーラルリハビリテーション演習	○	3年	後期	演習	必修	対面	65
発展臨地実習	○	3年	後期	実習	必修	対面	62
子どもの歯と健康	E	3年	後期	講義	選択必修	対面	50

## (2)準正課、正課外の教育活動

- ・学内歯科診療所における臨地実習生への指導
- ・地域交流におけるボランティア学生の引率、および指導

## 2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

いのちに対する温かく豊かな感性と高い倫理観を持ち、口腔の健康を通して、人々の健康で豊かな生活実現を支援できる確かな医療技術と学識を兼ね備え、地域社会に加え国際的にも活躍できる専門職業人を育成することを教育の理念とします。

## 3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）

- ・グループワークを通じて、演習科目や臨地実習を振り返ることにより、学修の目的について深く熟考する時間を提供した。
- ・講義、および演習の事前・事後学習では、課題を授業に沿った具体的なものを提示し、自己学習を促した。

## 4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・具体的な課題をテーマにし、学生自身に調べさせ、グループワークにてディスカッションできるよう授業を設計した。
- ・演習科目や臨地実習では、グループワークの場を増やし、学生が主体的に学ぶ姿勢を養った。

## 5. 今年度の学生による授業評価より

- ・概ね学科平均と同様、または高い評価を得ることができた
- ・演習科目の授業内容を担当教員間でブラッシュアップすることにより、昨年度より総合評価がアップした。

## 6. 今年度の成果

- ・応用臨地実習において領域を学生の選択制にした結果、学ぶ意欲があがり、帰学指導やリフレクションでも学生の発言回数が増加、実りある臨地実習となった。

## 7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

- ・カテゴリー I 学生自身がすべての科目で 4.0 を下回った。授業前・授業後を含め、授業以外に学修する時間を増やすことが課題である。そのためにどうすべきか授業内容等を再考したい。

## 8. 社会的活動等

- ・子育て支援施設（モトロク、ときわん垂水）にて歯ッピー相談会を実施する。
- ・放課後等デイサービス「スカイきっず」にて歯みがき教室を実施する。
- ・日の出医療福祉グループあかし虹保育園創立記念講演にて「意外と知らないお口の話」を講演する。
- ・第2回ときわ子育て“縁”カウンタにて「知って得するお口の話」を講演する。
- ・一般社団法人食とコミュニケーション研究所にて「口腔ケアのキホンのキ」を2回に分けて講演。
- ・一般社団法人食とコミュニケーション研究所において理事を務める。

## 9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・ 授業における配布、配信資料等

### ティーチング・ポートフォリオ

教員名	宮澤絢子	所属学科	口腔保健学科		職名	講師
クラス担任	1年Bクラス	クラブ顧問	なし			
委嘱委員・職務	教務委員会委員、国際交流センター委員、学科国家試験対策委員会委員、学科臨地実習委員会委員					

## 1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課（網掛け部分は外部公表しない）科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
○医療英語 I	○	2	前期	必修	演習	対面	65
○口腔衛生管理演習	○	2	前期	必修	演習	対面	65
○ライフステージ別口腔健康支援演習	○	2	前期	必修	演習	対面	63
歯科衛生士論Ⅱ	○	2	前期	必修	講義	対面	65
健康教育法	○	3	後期	必修	演習	対面	65
研究方法論	○	3	後期	必修	講義	対面	62
国際理解	基盤	全	前期	選択	講義	対面	65
○基礎臨地実習	○	2	後期	必修	実習	対面	63
早期臨地実習	○	1	前期	必修	実習	対面	72
応用臨地実習	○	3	前期	必修	実習	対面	62
発展臨地実習	○	3	後期	必修	実習	対面	62

## (2)準正課、正課外の教育活動

- ・ ネパール交換研修生の学外研修引率
  - ・ 国際保健室でのボランティア学生指導
2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）
- ・ いのちに対する温かく豊かな感性と高い倫理観を持ち、口腔の健康を通して、人々の健康で豊かな生活実現を支援できる確かな医療技術と学識を兼ね備え、地域社会に加え国際的にも活躍できる専門職業人を育成する
3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングや ICT 活用等の工夫点について）
- ・ 「医療英語 I」では、来院患者への英語対応についての学修だけでなく、海外の歯科医療や歯科衛生士業務についての情報収集を行うことで、最新の情報を得る方法を実践的に学習する機会を設けた。
  - ・ 「ライフステージ別口腔健康支援演習」では、前期からの作成課題とした保健指導チャートブックを活用し、患者指導のロールプレイや1年生への指導で活用した。
4. 今年度における教育方法改善の取り組み
- ・ 3年次「応用臨地実習」の学生の実習記録の状況が学科臨地実習委員会で共有された。それを踏まえて、今年度の2年次「基礎臨地実習」では、患者対応に必要な配慮を学びながら処置の流れを理解し、診療補助の実践に必要な器具器材を理解できるような記録形式を導入した。また、帰学指導の際に、実習記録の個別指導を実施した。
  - ・ 「ライフステージ別口腔健康支援演習」では、前年度の学生による授業評価で、学生自身が立案した計画に対する具体的なアドバイスを求める意見があった。そのため、今年度は事例展開の課題返

却時により詳細に解説を加える形でフィードバックを行った。また、学生自身が歯科衛生過程を展開し、事例について深く考えることが重要であるため、グループワークを取り入れ、学生同士で意見交換する時間を設け、各自の気づき促した。

#### 5. 今年度の学生による授業評価より

- ・ 歯科保健指導系科目の「口腔衛生管理演習」では、わかりやすかったとの意見があった。「ライフステージ別口腔健康支援演習」では、1年生との合同実習が良い経験になったとの意見があり、実践により学修する機会を設ける必要性が窺えた。定期試験前にレポート課題を課した事について意見があった事は、改善を検討したい。
- ・ 「医療英語Ⅰ」では、歯科衛生士が話している動画の視聴がよかった等の肯定的な意見もあったが、進むスピードが遅いとの指摘もあったため、次年度は個々の英語習得レベルによって調整可能な内容を盛り込むことを検討する。

#### 6. 今年度の成果

- ・ 「ライフステージ別口腔健康支援演習」で、事例に対して詳細な解説をしたことが、各授業での課した課題（事例展開）で、歯科衛生過程の理解につながったと考える。

#### 7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

- ・ 「医療英語Ⅰ」では、歯科診療の場面を想定しやすいよう教材に工夫を加える。あわせて、学生の英語習得レベルに応じて取り組めるような課題を設けることを検討する。

#### 8. 社会的活動等

- ・ 多文化共生に関連する地域住民の歯科相談（2回）
- ・ 子育て総合支援施設 KIT での歯の相談会「歯っぴー相談会」を開催（1回）
- ・ 日本歯科衛生士会 国際協力委員会副委員長として、海外の歯科衛生士の学術研究や関連情報の収集・提供、国際交流や国際協力に関する情報を国内外の歯科衛生士に発信している。International Symposium on Dental Hygiene (ISDH) 2024 の International Scientific Committee member（国際学術委員会委員）として ISDH2024 の演題査読委員、招待講演にて座長を務めた。
- ・ 日本歯科衛生士会 歯科衛生士の研修指導者・臨床実地指導者等講習会 企画運営委員会委員として、年4回開催される2日間のワークショップ型オンライン研修会において支援タスクフォースを務めている。

#### 9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・ 授業における配布、配信資料等

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	伴仲 謙欣	所属学科	口腔保健学科	職名	講師
クラス担任	1年生Bクラス	クラブ顧問	なし		
委嘱委員・職務	教育研究推進センター委員 ときわ教育推進機構委員 入試委員会委員 情報インフラ整備ユニット委員				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課（網掛け部分は外部公表しない）科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
○安全学	基盤	1	前期	選択	講義	対面	69
○教育社会学	N	1	前期	自由	講義	対面	16
地域との協働 A	基盤	1	通年	選択	演習	対面	12
教育と人間	基盤	1	前期	選択	講義	対面	69
まなぶる>ときわびと I	基盤	1	前期	必修	演習	対面	399
学びの基礎	O	1	前期	必修	講義	対面	72
まなぶる>ときわびと II	基盤	1	後期	必修	演習	対面	393
○現代社会学	基盤	1	後期	選択	講義	対面	62
インターンシップ実習	O	3	前期	選択	実習	対面	30
○キャリアパスⅢ	O	3	後期	選択	講義	対面	64
○キャリアパスⅣ	O	3	後期	選択	講義	対面	63
防災教育実践	E	4	後期	選択	演習	対面	30
チーム学校論	E	3	前期	選択	講義	対面	12

(2)準正課、正課外の教育活動

- ・ 口腔保健学科入学前課題の出題（manaba）
- ・ online 全学入学前教育「1<sup>st</sup>step プログラム」ファシリテーターを担当
- ・ 兵庫県受託事業「オーラルヘルスアッププロジェクト」（大学生が若年世代に口腔保健の重要性を伝える活動）を担当

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

- ・ 大学での学び（学修）は、学生の主体性が基盤となることから、主体性の涵養を教育理念の基礎とする。

- ・基盤教育科目においては、その設立理念に則り、以下を念頭に教育を実践する。①自らの内に閉じこもらず「外」に目をやり触れることにより、人間の幅を広げる②大学での学びの「型」を修得し、自己を高める基礎的な力を身につける③ まだないものを自らの「手」で新たに創り、未来を切り開き進んでいく力強さを身につける④ともに学び支え合う「友」を持ち、相乗効果で互いを高め合うことのできる環境をつくる。
- ・教職課程においては、社会の現状や変化が学校教育に及ぼす影響を積極的に理解するとともに、学校安全に関する知識や技能をもった養護教諭育成を目指す。

### 3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングや ICT 活用等の工夫点について）

- ・各担当科目では、学生の主体性を重視するため、個人やチームでの課題解決に取り組むアクティブラーニングの手法を採用している。
- ・Society 5.0 や DX に象徴される社会的要請や、コロナ禍における危機対応の経験から、教育方法としての ICT 活用（LMS や BYOD）や遠隔教育の実践を積極的に進めている。

### 4. 今年度における教育方法改善の取り組み

前年度に引き続き、コロナ禍を挟んで改善してきた manaba を中心とした ICT 活用を取り入れる授業方法を継続した。この目的は、ICT 活用スキルの向上と主体的な学修態度の涵養であり、今後もこの教育スタイルを原則として崩すことなく、中長期的に取り組んでいく予定である。

### 5. 今年度の学生による授業評価より

昨年度、『「安全学」は学外講師による完全オムニバス授業で実施するが、他の科目に比べて授業評価が低かった。』という課題を示した上で自己分析を行った。しかしながら、今年度も全く授業内容を変えることなく実施した結果、全基盤科目平均よりも高い評価となった。このことから、学生による授業評価は、その年度の履修生の属性や質に依存する傾向が強いと考えられる。そのため、授業改善の本質は、時代による学生気質の変容という大きな流れの中で見ていく必要があり、学生による授業評価も、単年度の近視眼的な結果にとらわれることなく、少なくとも数年以上の傾向として評価していくことが大切であると考えられる。

### 6. 今年度の成果

現在の担当科目は、単独担当以外に複数教員によるチームティーチング形態の科目も多いことから、担当教員間の情報共有やディスカッションなどのコミュニケーションを重視している。これにより、継続的な授業改善や業務の属人化を回避することができる。そのためのツールとしてファイル共有システムや manaba などを活用した。

また、新たな時代の局面に対応するために、授業準備や授業を通して生成系 AI の活用を模索し始めた。これはまだ手始め段階であるが、効率的な授業改善や学生へのフィードバック等を可能にするもの

と期待ができる。今後は、教員側にも学生側にもその活用能力が必須になると考える。

## 7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

本学では、ようやく学生の BYOD が実現しつつあり、今後は GIGA スクール構想や高校の情報科目を経てきた学生が入学してくることを踏まえて、さらに積極的な ICT 活用によるアクティブラーニングを進めていく必要がある。その一端として AI の活用があり、今後の教育業務の効率化や個別最適化、教育効果の向上には AI を積極的に使うことが望ましい。これらは、中長期的な課題と改善策である。

## 8. 社会的活動等

計3年間の最終年度を迎えた上述のオーラルヘルスアッププロジェクトに、学生指導の立場で従事した。活動は、学生が主体となり、ふれあい健康フェスタや学外各所の防災系イベントを中心に、様々な世代に口腔ケアについての啓発活動や成果発表を行い、その準備のための多くのミーティングも行った。

## 9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・ 授業における配布、配信資料等
- ・ manaba、Google Workspace、office365
- ・ オーラルヘルスアッププロジェクト報告書

### ティーチング・ポートフォリオ

教員名	川野 亜希	所属学科	口腔保健学科	職名	講師
クラス担任	2年Bクラス	クラブ顧問			
委嘱委員・職務	教務委員 口腔保健研究センター委員 ライフサイエンスセンター委員				

## 1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課（網掛け部分は外部公表しない）科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
○口腔衛生学	○	1	前期	必修	講義	対面	73
○歯科診療補助論	○	1	前期	必修	講義	対面	73
口腔衛生管理演習	○	2	前期	必修	演習	対面	64
栄養指導	○	2	前期	必修	講義	対面	63
○歯科理工学演習	○	1	後期	必修	演習	対面	70
○歯科診療の補助演習	○	1	後期	必修	演習	対面	72

子どもの食と栄養	○	2	後期	選択	講義	対面	61
研究方法論	○	3	後期	必修	講義	対面	67
早期臨地実習	○	1	前期	必修	実習	対面	72
基礎臨地実習	○	2	後期	必修	実習	対面	63
応用臨地実習	○	3	前期	必修	実習	対面	62
発展臨地実習	○	3	後期	必修	実習	対面	62

## (2)準正課、正課外の教育活動

学科教務委員として、学生の履修指導を行った。

### 2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

専門基礎科目では、科学的根拠に基づいた知識を有する学生を養成する。専門科目では、専門基礎科目で習得した知識を応用して、医療現場での実践に繋げられる技術を有する学生を養成する。

### 3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングや ICT 活用等の工夫点について）

- ・ 講義科目では、対面授業で使用した資料や参考資料をオンラインで提供し、学生が繰り返し学習できる環境を整えた。また、授業開始前に参考資料を共有することで、反転授業を効果的に実施できるようにした。
- ・ 演習科目では、演習内容に沿った実技試験とフィードバックを取り入れることで、より正確な技術習得と知識の定着につなげた。

### 4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・ 前年度の学生評価では、講義科目・演習科目ともに授業外の学習時間が少なかった点が反省点として挙げられた。そこで、授業開始時に前回授業に関する小テストを実施し、能動的な自主学習を促すとともに、知識の定着度向上に努めた。
- ・ 国家資格取得に関する科目では、国家試験の過去問題を提示し、授業で学んだ知識をどのように活かして正答を導くのか、具体的な解説を行った。

### 5. 今年度の学生による授業評価より

- ・ 講義科目では、「プリントで分からなかったところをスライドと照らし合わせながら書き込めたので、理解しやすかった」「プリントが整理されていて分かりやすかった」「スライドが見やすく、理解しやすかった」などの意見が寄せられた。特に、写真を多く用いた授業資料の活用により、理解力の向上が図れたと考えられる。また、国家試験の頻出内容を重点的にまとめた資料を提示することで、学生の知識整理にもつながった。
- ・ 演習科目では、「先生の人数が多く、質問しやすかった」という意見がある一方で、「先生によ

って説明が異なり、少し戸惑った」との声もあった。そのため、科目内および科目を超えた教員間での共通認識の確立が必要不可欠である。

- ・ 前年度に引き続き、授業外の学習時間が全般的に少ないことが課題として挙げられる。そのため、学生が反復学習しやすいような課題設定を検討する。

## 6. 今年度の成果

- ・ 講義科目では、学習範囲が広いため、国家試験の頻出項目を抜粋した資料を配布し、学生自身書き込む形式の参加型学習を取り入れた。これにより、理解力の向上につながった。科目責任者を務める科目では、授業方法の評価が平均 4.7/5、総合評価が 4.7/5 と高評価を得た。
- ・ 演習科目では、授業開始前に前回の演習内容に関する小テストを実施し、学生の反復学習を促すとともに、理解度の把握を行った。理解度の低い項目については、再度解説を行い、知識の定着を図った。その結果、科目責任者を務める科目では、授業方法の評価が平均 4.6/5、総合評価が 4.7/5 を得られた。

## 7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

- ・ 講義科目・演習科目ともに、授業外の学習時間が少ないため、学生がより能動的に学習できるような課題設定を検討する必要がある。
- ・ 担当教員が多い演習科目では、担当者間の共通認識が重要である。学生の混乱を防ぐため、事前の打ち合わせや適宜フィードバックを実施し、指導の統一を徹底する。

## 8. 社会的活動等

- ・ 日本歯科衛生学会倫理審査委員会および利益相反委員会の委員として、研究倫理委員会の運営・実施に従事し、日本歯科衛生士会員から申請された研究倫理審査を担当している。また、随時申請される研究倫理審査申請書類の添削や指導を行い、歯科衛生士による研究活動の普及に貢献している。
- ・ 日本歯科衛生学会企画第二委員会の委員として、専門領域別の研究集会の企画・運営に携わっている。さらに、専門歯科衛生士制度の確立に向け、学会委員会活動にも従事している。
- ・ 神戸常盤大学歯科診療所において、歯科衛生士として臨床業務に従事するとともに、臨地実習の場として診療所を活用し、実際の患者対応を通じた教育を行っている。
- ・ 企業の歯科健康診査の計画および運営を担当し、歯科健診と並行して歯周病原細菌数の測定を実施した。昨年度に引き続き調査研究を継続しており、来年度の学会発表および学術論文の執筆を予定している。

## 9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 小テスト問題
- ・ 学生による授業評価
- ・ 授業における配布、配信資料等

## ティーチング・ポートフォリオ

教員名	氏橋貴子	所属学科	口腔保健学科	職名	助教
クラス担任	2年生 A クラス	クラブ顧問	なし		
委嘱委員・職務	入試委員会 臨地実習委員会 神戸常盤大学歯科診療所				

### 1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課（網掛け部分は外部公表しない）科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
歯科理工学演習	○	1	後期	必修	演習	対面	73
機能再建系歯科診療補助演習	○	2	後期	必修	演習	対面	66
成育系歯科診療補助演習	○	3	前期	必修	演習	対面	66
災害時の歯科衛生士の働き	○	3	後期	必修	演習	対面	
歯科予防処置演習Ⅰ	○	1	後期	必修	演習	対面	74
歯科予防処置演習Ⅱ	○	2	前期	必修	演習	対面	65
基礎臨地実習	○	2	後期	必修	実習	対面	
応用臨地実習	○	3	前期	必修	実習	対面	
発展臨地実習	○	3	後期	必修	実習	対面	

### (2)準正課、正課外の教育活動

神戸常盤大学 1st ステッププログラム

### 2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

医療現場において、正確な知識に基づいた行動力のある学生を養成する。また、チーム医療では多職種との連携が不可欠であると考え、コミュニケーション能力や伝達する力をもった学生を養成する。

### 3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングや ICT 活用等の工夫点について）

応用臨地実習では学生が学内で模擬患者（保護者）に対する口腔内および全身の情報を収集した。事前に個別指導、実技チェックを行い、通し練習を行うことで、正確な知識、手技で情報を収集することに繋がった。発展臨地実習では術者役がそれらの情報を補助者役と教員に説明し、施術に向けての情報共有を行った。その結果、模擬患者に対する施術が潤滑になり、術者、補助者共に患者に対する配慮を念頭に置いた施術に繋がった。

問題解決能力を高められるように努力した。また、応用臨地実習で採取した情報を基に

#### 4. 今年度における教育方法改善の取り組み

演習科目：「歯科理工学演習（1年後期）」において、新たな試みとして、学内の歯科診療所で不要となった抜去歯牙を用いて歯面処理の実習を実施した。

実習科目：応用臨地実習（3年前期）と発展臨地実習（3年後期）において、模擬患者実習（保護者実習）を実施した。

#### 5. 今年度の学生による授業評価より

今年度の総合評価も概ね学科平均を上回る高評価(4.3点以上)を得ることができた。しかしながら、成育系歯科診療補助演習は、「学生自身」の項目において、他項目と比較して低い評価（3.7点）だった。

#### 6. 今年度の成果

- ・ 昨年度の課題として「歯科理工学演習」においての実技練習時間を延長し、教員による直接指導の時間を確保した。
- ・ 「歯科理工学演習（1年後期）」において、抜去歯牙を用いて歯面処理の実習を実施したところ、実際の歯牙に薬液塗布を行うことで、歯面の光沢や色調が変化する様子を学内演習で示すことができた。1年生は臨地実習前であり、抜去歯牙を初めて見る学生が多かったため、歯科衛生士を目指す学生にとって、有意義な実習になったと考える。歯科診療所は臨地実習施設としてだけでなく、学内演習においても有効に活用できると考え、今後も積極的に活用していきたい。
- ・ 応用臨地実習（3年前期）および発展臨地実習（3年後期）において、学内での相互実習では修得が困難であった対象者の年代による口腔内の変化を、模擬患者実習（保護者実習）を通して、学修することができた。この経験を通して、口腔が全身の一部であるという理解を深められたと考える。

#### 7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

- ・ 歯科理工学演習において、定期試験後に点数が低い学生と面談したところ、演習後の課題レポートが理解度向上に十分寄与していない様子が見受けられた。次年度は演習後レポートを学生の自己学習を促進するように内容に改善を図る。
- ・ 応用臨地実習（3年前期）と発展臨地実習（3年後期）において、知識だけではなく手技の向上も必要であると認識した学生が多く、1.2年生における学内実習で保護者実習に繋がる、より実践的な手技の練習を望む声があった。これらの意見を今後の演習内容に反映させていく。
- ・

#### 8. 社会的活動等

KITにおいて、乳幼児とその保護者に対し歯科相談を実施した（R7.2/7）

神戸市委託事業 オーラルフレイル（健口トレーニング）（R6.12/19、R7.3/13）

第6回関西口腔ケアフォーラム（R7.2/23）

#### 9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・ 定期試験、小テスト
- ・ 配布資料

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	水村容子	所属学科	口腔保健学科	職名	助教
クラス担任	1年Aクラス	クラブ顧問	なし		
委嘱委員・職務	学生委員会、国際交流委員会、国家試験委員会				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課（網掛け部分は外部公表しない）科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
予防処置演習Ⅰ	○	1	後期	必修	演習	対面	71
予防処置演習Ⅱ	○	2	前期	必修	演習	対面	64
予防処置演習Ⅲ	○	2	前期	必修	演習	対面	64
歯科疾患処置演習Ⅰ	○	2	後期	必修	演習	対面	64
歯科疾患処置演習Ⅱ	○	3	前期	必修	演習	対面	66
キャリアパスⅠ	○	3	前期	選択	演習	対面	35
子ども学	○	2	後期	選択	講義	対面	61
早期臨地次週	○	1	前期	必修	実習	対面	72
基礎臨地実習	○	2	後期	必修	実習	対面	63
応用臨地実習	○	3	前期	必修	実習	対面	62
発展臨地実習	○	3	後期	必修	実習	対面	62
まなぶるⅠ	全て	1	前期	必修	演習	対面	396
まなぶるⅡ	全て	1	後期	必修	演習	対面	393
国際理解	全て	1-4	前期	選択	講義	対面	64

(2)準正課、正課外の教育活動

- ・ 国際理解学生企画の運営、指導、挨拶同行
- ・ FAST（学科内の救命救急講習および駒ヶ林中学校での講習指導）
- ・ ネパール交換研修 朝日病院研修同行
- ・ 国際保健室実施

## 2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

専門科目では、歯科衛生士を養成するために、歯科予防処置の実習をしながら、知識と技術を身につけ、医療現場で対応できる実践力を養成する。特に、歯科予防処置は、歯科衛生士の仕事の中でも重要な役割を占めており、手技と知識の両方を兼ね備える必要がある。そのため、知識に基づいた技術・手技を習得できるよう学生を育成したい。

また、在留外国人の多い長田区において、国際理解や国際交流は非常に重要であると考えている。学生が積極的に国際理解・国際交流の場が持てるよう、自身の経験を伝えながら外に目を向けることができるよう働きかけていきたい。

## 3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングや ICT 活用等の工夫点について）

- ・ 演習では相互実習を通して、より実践に近い形での実習をすることで、学生の理解を深めるよう努めた。
- ・ 国際理解の講義では、ワークショップを通して、国際交流や多文化理解を自分事として捉え、実生活においても共生する力を身につけられるように努めた。
- ・ 国際交流のため、普段から興味のある学生を探し、機をみて声を掛けられるようにした。

## 4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・ 「歯科予防処置演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲおよび歯周疾患処置演習Ⅰ・Ⅱ」では、基本に忠実に実施すること常に学生へ伝え、自身の健康および患者の安全を守るための施術時のポジショニングの重要性および器具の把持方法について、昨年度以上に注力して指導に努めた。
- ・ 「国際理解」の科目では、ワークショップを前年度よりもブラッシュアップさせ実施することで、より身近に国際交流、多文化理解を感じられるようにした。さらに、学生に国際交流企画を実施させることで、企画運営のノウハウや、留意点、実際の運営を通して国際交流に対する学びを深められるよう努めた。
- ・ 応用臨地実習、発展臨地実習では、幼稚園・保育園、子育て支援施設の領域を担当し、学生がより子どもの理解と子どもを取り巻く人や環境の理解ができる視点を持てるよう努めた。

## 5. 今年度の学生による授業評価より

- ・ 演習科目では、おおむね高評価を得ることができていた。教員の配置が難しい中でも、実習室を見渡し学生の様子を観察することで教員が実際に不明点等の見本を見せることで、即時に解決できる点や、相互実習での技術の向上の実感が挙げられていることから、今後も相互実習を通して、実践に即した技術と知識の向上に努めていきたい。

## 6. 今年度の成果

- ・ 本年度から口腔保健学科3年生の応用・発展臨地実習が開始し、幼稚園・保育園、子育て支援施設

での実習領域を担当した。学生の学びをより深いものにできるよう、実習記録にも工夫をした。その結果、学生の子どもを取り巻く人達や物（玩具や設備など）を見る視点や考える力を引き出すことができた。

- ・ 学生企画の国際交流イベントでは、21名の参加があった。今回は昨年度に比べ広報に力を入れることができた点が、この結果に繋がったと考えられる。また、昨年度よりも参加者の出身国は様々で、1歳の子どもから祖父母の世代まで年齢も幅広いものとなった。

日本の文化や日本の大学生と交流したい、また日本の大学に行ってみたいという在日外国人の気持ちにマッチした結果だと考える。

イベント当日は学生19名がそれぞれの役割をしっかりと果すことができ盛況に終了することができた。

#### 7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

- ・ 教員の配置が難しく、演習の指導人数が不足してしまうことがあったが、不足をカバーできるように質問しやすい環境づくりに努めたい。
- ・ 学生達の学びの場として歯科診療所を広く活用し、実際に患者さんの診療を身近な教員が実施している姿を見せることは非常に有意義だったと考える。しかし、緊張感を欠く場合もあるので、しっかりと臨地実習中であるという意識を持てるよう、関わり方も考えなければならぬと感じた。

#### 8. 社会的活動等

- ・ 大学内歯科診療所の診療担当
- ・ 地域（長田区）や KICC と協力しての国際保健室
- ・ 本学子育て支援施設での歯っぴー相談会
- ・ 在日外国人を対象とした、本学学生との交流イベントの企画運営

#### 9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・ 授業における配布、配信資料等
- ・ テスト問題

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	鈴木 志津枝	所属学科	看護学科	職名	教授 兼 副学長
クラス担任	なし	クラブ顧問	なし		
委嘱委員・職務	運営委員会メンバー、学長会議メンバー ときわ教育推進機構委員長 看護学科リカレント教育担当				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課（網掛け部分は外部公表しない）科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
○看護研究方法論	N	3	前期	必修	講義	対面	92
○家族看護学	N	3	前期	選択	講義	対面	59
○法と看護	N	3	前期	必修	講義	対面	92
○看護学研究	N	4	通年	必修	演習	対面	77(4)

(2)準正課、正課外の教育活動

特に記載する準正課、正課外の教育活動はない

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

専門科目（看護研究方法論、家族看護学、看護学研究）では、的確な看護判断と看護実践のための基礎的能力を養い、現代のヘルスケアニーズに応じ得る資質の高い看護専門職業人を育成する。特に研究科目では看護現象に誠実に向き合い、課題を見出し、研究的に問題解決していく態度を育成したい。専門基礎科目（法と看護）では、医療の現場で求められる看護に関連する法的知識を学修することで、看護の対象の基本的な人権を擁護する役割を担える態度を育成したい。

3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）

- 看護研究方法論では、看護実践の問題を研究的な態度で解決する能力を養うために、臨床実習時の臨床上の疑問からリサーチアクションの決定、リサーチアクションに基づく研究計画を立案できるように、知識の提供と共に実際にリサーチアクションの決定、リサーチアクションに基づく研究方法の決定を行えるように授業を展開した。
- 家族看護の授業では、臨床実習で患者家族に出会った経験がなく患者家族のイメージがつきにくかったため、講義と事例のグループワークを組み合わせ、患者家族の理解と援助方法の理解に努めた。
- 法と看護の授業では、看護職の基盤となる法規や関係法規に関する講義を行うと共に、実際に医療福祉の分野でどのように法律が活用されているかの具体例の説明を通して理解を深め、看護師としての職務遂行に伴う法的責任と法を守る意義を学習できるように努めた。
- 看護学研究の演習では、学生の研究課題に基づき、先行文献を活用して分析し、文献研究論文の作成を学

生の状況に合わせて個別に指導した。

#### 4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・ 学生に理解を深めてもらいたい内容に関して、事例を用いたり、グループディスカッションを取り入れたりして、考え方や知識の理解が深まるように工夫した。

#### 5. 今年度の学生による授業評価より

- ・ 「看護研究方法論」の科目においては、昨年度も内容が難しいとの意見があったため、重要な内容に関して、できるだけわかりやすく資料の作成や研究例を用いながら繰り返し内容の説明を行ったつもりであったが、今年度も学生から「難しい」との意見がみられた。昨年度はグループワークを行いながら研究計画書の作成を行ったが、学生にとって研究計画書の作成に関して理解できたというよりも、難しさや大変さにつながった。そのため、今年度は研究計画書を作成するというよりも、研究計画書作成過程の考え方の理解を深めていくように工夫したが、理解の深まりや学生自身の学ぶ意欲にはつながらなかった。(92名中 51名の授業評価、55%)
- ・ 「家族看護学」の科目において、できる限り事例を取り入れて理解できるように授業を展開した。その結果、毎回の学生の意見や感想の中に事例があってわかりやすかったという肯定的な評価が得られた。一方、学生自身の学習参加意欲は学科平均よりも低かった。家族看護学は学生にとってイメージしにくいと考えるので、次年度も出来るだけ、事例展開やグループディスカッションを用いて、主体的に学べるようにしたいと考える。(59名中 13名の授業評価、22%)
- ・ 「法と看護」の科目においては、看護専門職において、なぜ「法」を理解しておく必要があるかを説明したが、その点については理解が深まったと思う。しかし、看護に関連した法律が多く、学生にとっては難しいという評価につながったと思う。次年度は、多くの法律を網羅せずに、重要な法律を絞り、ディスカッションを取り入れていきたいと考える。(92名中 21名の授業評価、23%)
- ・ 「看護研究方法論」「家族看護学」「法と看護」の科目において、パワーポイント作成に関して、自己学習できるように多くに内容を含んで作成しているため、字数の多さや何が重要なのがわからないという意見もあり、次年度にはパワーポイントの作成に関して、わかりやすいパワーポイントの作成を工夫したいと考える。また上記 3 科目の評価分野の「学生自身」の点数が学科平均より低く、授業以外の学習時間が低いことが分かる。次年度には自己学習が時間をとれるように、授業後のレポートや小テストを取り入れるなど、工夫したい。
- ・ 「看護学研究」に関しては、自分が研究指導した学生(3名)の評価が分からないけれど、全体的に学生の満足度は高い科目であった。今年度は、指導学生の全員が文献研究であったため、研究依頼からデータ収集までの過程を経験できていないため、残念に感じている。(77名中 7名の授業評価、9%)

#### 7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

昨年度の授業評価から、今年度は工夫したつもりであったが、授業評価はあまり改善されなかった。次年度は、できるだけ、学生の学習意欲を高められるように、教えすぎや資料の多さに気を付けることやグループワークやプレゼンテーションの活用、授業中のノートの活用など工夫したいと考えている。次年度から 1 年生を対象とした科目(看護倫理、大学道場 miniゼミ)があるため、学びたいという意欲を高められるように留意したい。

## 8. 社会的活動等

- ・ 「神戸常盤大学保健科学部看護学科リカレント教育」：  
認知症高齢者看護研修会 18 時間（企画・運営担当 参加者延べ 24 名）  
看護研究研修会 24 時間（企画・運営担当 参加者延べ 32 名）
- ・ 兵庫医科大学大学院看護学研究科非常勤講師「看護理論」 6 コマ
- ・ 島根大学大学院医学系研究科看護学専攻 非常勤講師「家族看護援助論」 4 コマ

## 9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・ 授業における配布、配信資料等

教員名	塩谷英之	所属学科	看護学科	職名	教授
クラス担任			クラブ顧問		
委嘱委員・職務	保健科学部学部長 すこラボ研究所長				

## 1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1) 正課（網掛け部分は外部公表しない）科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
○看護解剖生理学Ⅰ	N	1	前期	必修	講義	対面	96
○看護解剖生理学Ⅱ	N	1	前期	必修	講義	対面	99
○症候論Ⅰ	N	2	前期	必修	講義	対面	98
○看護病理・病態学	N	1	後期	必修	講義	対面	96
臨床病態学Ⅱ（病態解析）	M	2	後期	必修	講義	対面	91
いのちと共生	基盤	1	後期	必修	講義	遠隔	140
臨床病態学Ⅲ（発展）	M	2	前期	必修	講義	対面	79

(2) 準正課、正課外の教育活動

なし

## 2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

専門科目では医学の基礎となる解剖・生理学を単に暗記するのではなく、しっかりと理解し、臨床現場でその知識を活用できる学生の育成を目指す。

基礎科目では医療従事者として必要な「いのち」の尊さを学ぶことを目指す。

臨床検査学科の学生を対象とした臨床病態学においては臨床上重要な生活習慣病に対して根本的な病態を理解できることを目指した。

### 3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングや ICT 活用等の工夫点について）

- ・ 教育指導法では解剖・生理学ならびに疾病の病態の仕組み及び働きの理解を促進するために効果的な図を作成し、理解を含めた。
- ・ 授業前半の 20 分程度、独自に作成したその日の授業の summary 動画を見せ、その後授業を行う形式を用いた。

### 4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・ 前年度の学生評価では動画 summary を見せ、その後解説する形式は「良くわかる」という評価を受けたので今年度は 1 年生の専門教科はほぼその形式に改善した。  
ただごく一部学生からは同じ内容を繰り返す感じがするとの感想があるため、解説により工夫をする所存である。
- ・ 授業の終わりのまとめをその日学んだ器官の絵を描いてまとめるという形式に変更した。

### 5. 今年度の学生による授業評価より

- ・ 総合評価で各教科概ね 4.3 前後の評価を得た。また授業形式は「わかりやすく、スライドもわかりやすい」と好評であったため今後もこの形式を継続する。

### 6. 今年度の成果

- ・ 解剖生理、病態学などは単に覚えるのではなく、体の仕組み、働きをしっかりと理解することが大切だと強調してきたが、テストの問題の結果などから理解度が深まっている印象を受けた。

### 7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

- ・ 学生評価において授業内容、方法、総合評価などは比較的良い結果であったが、学生自身が授業以外に学修した時間が少なかった。この点を改善するために次年度はレジュメを 1 週間前に配布し、前もって予習ポイントを示し、さらなる学修時間の増加を図る。

### 8. 社会的活動等

- ・ 兵庫県国民健康保険団体連合会データヘルス評価・支援委員会副委員長
- ・ 全国健康保険協会兵庫支部健康づくり推進協議会委員
- ・ 三田市健康審議会会長

### 9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・ 授業における配布、配信資料等

教員名	尾崎雅子	所属学科	看護学科	職名	学科長・教授
クラス担任	なし	クラブ顧問	なし		
委嘱委員・職務	運営委員会委員、学長会議メンバー、 看護学部開設準備、玉田学園評議員				

## 1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課（網掛け部分は外部公表しない）科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
○看護学概論	N	1	前期	必修	講義	対面	96
○基本看護技術IV	N	2	前期	必修	演習	対面	100
基本看護技術 I	N	1	後期	必修	演習	対面	97
○看護教育論	N	4	前期	選択	講義	対面	27
○医療・看護特論 II	N	4	後期	必修	講義	対面	76
○看護学研究	N	4	通年	必修	演習	対面	77
いのちと共生	基盤	1	後期	選択	講義	遠隔	140
IPW 論	R	3	後期	必修	講義	対面	84
臨床技術入門	R	1	後期	必修	演習	対面	87
○看護活動基礎実習	N	1	前期	必修	実習	対面	96
○基礎看護学実習 II	N	2	前期	必修	実習	対面	98
○課題別総合実習	N	4	前期	必修	実習	対面	76

(2)準正課、正課外の教育活動

なし

## 2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

なりたい自分像を描き、それに向かって主体的に取り組もうとする姿勢を持った学生を育成したい。看護に関心も持ち、看護の基礎となる知識・技術の修得と専門職としての役割を理解し、他者から求められる人材を養成する。そして創造性豊かにのびのびとした学生生活を送ってほしい。学生とは対話を大切にしたい。

## 3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングや ICT 活用等の工夫点について）

「看護学概論」（1年次）では考える機会を与えるように発問をする。授業のリアクションペーパーを全体にフィードバックすることで、自分以外の意見も踏まえてさらに考える機会とした。学生自身が成果を実感できるように授業のはじめと終わりに看護についての考えをレポートにして、自

分の考えの変化を確認できるようにしている。

#### 4. 今年度における教育方法改善の取り組み

授業前後の学習を促すために「看護学概論」（1年次）では昨年度に引き続き、授業ノートを作成してもらった。その際、配布している授業資料のまとめではなく、授業中の発問などに対して考えたことや調べたことについてまとめておくよう伝えた。「基本看護技術Ⅳ（看護過程）」では、紙上事例演習ではグループ学習を行い、内容を発表することで他のグループとの意見交換をして、考えが発展するよう取り組んだ。

#### 5. 今年度の学生による授業評価より

- ・昨年度から引き続き担当した科目は、どの科目も学科平均と同等かそれ以上の結果であった。
- ・「I学生自身」のところで授業外の学修時間が低い傾向にあるが、演習科目など事前・事後の課題があるものは1～2時間、2時間以上の学修時間が取れていた。
- ・「看護学概論」（1年次）は全体で発問し考える機会を設けたが、「もっとグループで話し合いたかった」という意見もあった。

#### 6. 今年度の成果

事後の学修についてはノート作成などでまとめることができていた。また授業資料の写しではなく、調べたり、考えたことを残しておくように伝えたと、自分なりに工夫をしたまとめ方をしている学生が昨年より多くなった。

#### 7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

昨年同様に授業への関心や理解に向けては授業の準備として事前学修の充実が課題であるため、次年度にむけて工夫していきたい。また、講義形式でも学生間の意見交換、他者の意見を知る機会をとれるようにする。グループ学習の際はグループ作りを丁寧に行い、学習効果が得られるようにしていく。学生の思考プロセスに注目し、今年度改善できなかった思考に沿った記録用紙などの補助教材の検討も引き続き行う。

#### 8. 社会的活動等

兵庫県看護協会 神戸西部支部「教育委員会」委員

「市民救命士講習」FASTのインストラクターとして活動

#### 9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・ 授業における配布、配信資料等

教員名	庄司靖枝	所属学科	看護学科	職名	教授
クラス担任			クラブ顧問		
委嘱委員・職務	看護学科就職委員（委員長） 看護学科研究倫理委員会（委員長）				

## 1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課（網掛け部分は外部公表しない）科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
○在宅看護学概論	N	2	前期	必修	講義	対面	98
在宅看護特性論	N	2	後期	必修	演習	対面	99
在宅援助論	N	3	後期	必修	演習	対面	92
IPW 論	N	3	後期	必修	演習	リモート	
医療・看護特論II	N	4	後期	必修	講義	対面	76
看護学研究	N	4	前期	必修	演習	対面	77
看護活動基礎実習	N	1	前期	必修	実習		
○健康支援実習 I（在宅）	N	3	後期	必修	実習		
課題別総合実習	N	4	前期	必修	実習		

## (2)準正課、正課外の教育活動

- ・チューター面談
- ・就職相談
- ・就職に関する履歴書の記入指導
- ・就職に関する模擬面接

## 2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

育てたい学生像：自ら考えることができる学生を育てる。

自分に自信が持てない学生や、反対に本心は自信がないにもかかわらず周囲に無理に強く見せようとしている学生が散見できる。

学生自身の強みや弱みを自らが見つけて向き合い、社会に立ち向かっていける学生を育てたいと考える。

## 3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングや ICT 活用等の工夫点について）

昨年からは、健康支援実習 I（在宅）では 2023 年度からパソコンを用いて学生と教員、施設の指導者がクラウドでつながり、学生の実習記録を教員・指導者間で閲覧でき、協同して指導できる体

制を作った。授業の中にも取り入れて学生に慣れてもらい、指導者も少しずつこの体制に慣れてきたのではないかと考える。しかし、看護学科が増え、在宅看護にも注目が集まり、訪問看護ステーションによっては複数の大学の実習を受け、指導時間を保証するのに困難な環境である。そのため、教員は学生指導が十分行われるように、ステーションの指導者との調整を密に取ることがより重要になった。

また、今年度は訪問看護ステーションの1週目、2週目の間に以下の実習を1日取り入れた。学生は病院で入退院にかかわる地域連携室における看護師について学んだり、地域包括ケアセンターの実習を取り入れることで、多職種連携や繋がりを学んだりすることができていた。

#### 4. 今年度における教育方法改善の取り組み

社会の変化と看護の結びつきを学生が考えられるように、授業の中で学生が考えるようにシンキングタイムを設け、そのあと発表してもらい形式や、グループディスカッションを行って考え、発表する時間を作った。そして、定期テストにおいても、ニュースを提示し「看護を学ぶ学生としてこのニュースについてどのように考えるか」という問題をだし、じっくり考えて意見を述べる機会を作った。

#### 5. 今年度の学生による授業評価より

##### 1) 在宅看護学概論について（回収率は約68%）

分野	I 学生自身	II 授業内容	III 授業方法	IV 学習効果	V 総合評価
2024年度当科目平均	3.6 ↑	4.6 ↑	4.6 ↑	4.5 ↑	4.7 ↑
2023年度当科目平均	3.5	4.4	4.5	4.3	4.4

##### 2) 健康支援実習 I（回収率10%）

分野	I 学生自身	II 授業内容	III 授業方法	IV 学習効果	V 総合評価
学科平均	3.9	4.4	4.4	4.4	4.5
当科目平均	4.9	4.5	4.4	4.6	4.8

#### 6. 今年度の成果

##### 1) 在宅看護学概論

学生の自由記述より

- ・概論なので、抽象度が高い内容があるが、身近な週への事例を用いて説明したことが理解につながっていた。
- ・毎回前回の質問に対して、丁寧に答えたことが疑問を解決できた。
- ・看護体験を語ってもらうことで、在宅医療の重要性、そこへの看護師の介入を学ぶことができた。

##### 2) 健康支援実習 1（在宅）

実習に関しては授業評価の内容では評価しにくいいため、学生にアンケートを行っている。

今年度は実習期間が2週間になり、1週目末には病院と訪問看護ステーションをつなぐ役割のある

実習を1日設定した。今後、患者の退院後の療養が在宅に移っていくことを見据え、訪問看護ステーションの役割は大きい。その状況を2週間の実習で学生たちは理解し、患者の意思決定や生活を考えた看護について考えることができていた。また、療養者の自宅を訪問することで看護観を深めることができていた。

## 7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

授業と実習をどのようにつなげて、わかりやすく、学生主体に授業を行っていくかが課題であると考える。訪問看護ステーションの状況を取り入れ、演習をリアルなものに研鑽していくことが重要である。

## 8. 社会的活動等

- 1) 日本看護研究学会第50回学術集会（奈良県コンベンションセンター）、実行委員を担った。
- 2) 兵庫県立こども病院を退院した子どものクリスマス会の準備や支援（実習を行った学生の参加とボランティア指導を含む）

## 9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・ 授業における配布、配信資料等
- ・ 定期試験問題

教員名	魚崎須美	所属学科	看護学科	職名	教授
クラス担任			クラブ顧問		
委嘱委員・職務	教務委員会・委員、研究倫理委員会・委員、国家試験対策委員会・委員（保健師）、保健師養成課程委員会・委員長				

## 1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課（網掛け部分は外部公表しない）科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
看護学研究	N	4	通年	必修	演習	対面	71
大学道場 miniゼミ	基盤	1	前期	選択	演習	対面	98
看護活動基礎実習	N	1	前期	必修	実習	対面	98
公衆衛生看護展開論演習	N	3	前期	選択	演習	対面	11
○公衆衛生看護管理論	N	4	前期	選択	講義	対面	12
○公衆衛生看護学実習Ⅱ	N	4	前期	選択	実習	対面	12
○保健医療福祉行政論	N	4	後期	選択	講義	対面	16
○地域看護学概論	N	1	後期	必修	講義	対面	96
○公衆衛生看護学概論	N	2	後期	選択	講義	対面	15
○健康教育の理論と方法	N	2	後期	選択	講義	対面	16

## (2)準正課、正課外の教育活動

- ・ 保健師国家試験対策
2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）
    - ・ 看護を基盤とした公衆衛生の専門職としての高い倫理観と、専門知識・技能、そして慈愛の心をもった保健師を養成したい。
    - ・ ポジティブな思考で事象をとらえ、柔軟な発想をもって困難を乗り越える力を育む教育を目指したい。
  3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングや ICT 活用等の工夫点について）
    - ・ 学生の興味・関心を刺激する教材を提示し、学生の主体的な学習行動を誘発する。
    - ・ 講義では事例を用いて授業を展開し、机上学習と実践を関連させながら具体的に理解できるよう指導する。
    - ・ 演習ではディスカッションを多く取り入れて、自己の考えを言葉にして伝える力、相手の立場になって考える力、言葉にできない心情にも寄り添う力を育てる。
  4. 今年度における教育方法改善の取り組み
    - ・ 学生の主体的な学習意欲を持続できるように、適当な時期に個別面談を取り入れながら、保健師国家試験全員合格を目指す。
  5. 今年度の学生による授業評価より
    - ・ 学生による授業評価からは、概ね目標を達成できたと考える。
  6. 今年度の成果
    - ・ 昨年度に続き、今年度も保健師国家試験全員合格（100%）を達成できた。
  7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策
    - ・ 保健師課程選択希望者が減少傾向にある。

2 年次後期から開始される保健師養成課程の選択必修科目「公衆衛生看護学概論」、「健康教育の理論と方法」について、魚崎が就任当初は 30～40 名程度が前記科目を履修していたが、今年度は履修希望者が 15 名しかいなかった。

保健師養成課程希望者の減少について、カリキュラム等を分析し、改善が必要と思われる。
    - ・ 2 年次末の保健師養成課程選抜を経て保健師課程の履修を開始したにもかかわらず、その後、履修途上で保健師養成課程を辞退する者（3 年生前期 1 名、3 年生後期末 2 名）が続いた。

当該学生からは事前の相談はなく、結果のみが領域担当者に報告された。

在学中の学生は、担当領域の教員には直接話しにくい場合もあることから、第三者的立場の者が学生（特に辞退した学生）に事情を聞くなどして、原因を分析したうえで改善が必要と思われる。

- ・ 次年度も引き続き、保健師国家試験全員合格（100%）を目指す。

## 8. 社会的活動等

今年度は、兵庫県看護系大学協議会公衆衛生看護実習委員会における実習指導者連絡会の開催当番であった。神戸女子大学と協働して前期連絡会を企画・運営し、無事に役割を果たすことができた。

## 9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・ 「公衆衛生看護学実習Ⅱ」 実習後アンケート
- ・ 学生レポート、実習記録
- ・ 授業における配布、配信資料等

教員名	島内 敦子	所属学科	看護学科	職名	教授
クラス担任	1年Aクラス	クラブ顧問	なし		
委嘱委員・職務	ときわ教育機構、臨地実習委員会、教務委員（副委員長）、高大連携、看護学部構想委員会、看護学部ホームカミングディ準備委員、養護教諭課程委員会、保健師課程委員会				

## 1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課（網掛け部分は外部公表しない）科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
○母性看護学概論	N	2	前期	必修	講義	対面	103
○看護対象論Ⅳ	N	2	後期	必修	演習	対面	98
母性援助論	N	3	前期	必修	演習	対面	92
○母子支援実習Ⅱ	N	3	後期	必修	実習	対面	83
医療・看護特論Ⅱ	N	4	後期	必修	講義	対面	79
臨床技術入門	R	1	後期	必修	演習	対面	87
看護活動基礎実習	N	1	前期	必修	実習	対面	92
課題別総合実習	N	4	前期	必修	実習	対面	77
看護学研究	N	4	通年	必修	演習	対面	77

## (2)準正課、正課外の教育活動

- ・ KITにおける「卒乳・断乳教室」「祖父母教室」の開催
- ・ 神戸大学周産母子センター開催「ハッピーかるがもの会」の協働企画
- ・ 就職活動支援（エントリーシート作成・小論文添削・模擬面接など）

## 2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

看護学科2年生への授業では、概念を学生自ら現象と関連付けて考える一步になるように、と考えて教授している。解答のみを相手（教員）から聞き出すのではなく、経過の中で見いだされる学び方を学生自ら考えるきっかけになるような授業構成にしたい。これは、看護専門職として対象を理解するうえで重要な感性を育てる過程と考えている。引いては、学生1人1人の感性を大事にし、学生各人の個性にあった教育つながることとも考えている。同時に学生自身が自分の感性や自分の持ち味を認め、一緒に学習する学生のそれも認めながら、それぞれの強みを生かして統合して協働する力を養えるようになってほしいと考えている。そのため、グループワークを多用し学生間での困りごととも学生たちが自ら解決することを目指せるような支援をしたいと考え工夫している。

看護学科3年生への援助論の授業では、実習を前に、具体的な看護技術はもちろん対象に対する看護の意義を考えることができるように工夫している。母子支援実習Ⅱでは、臨床における看護の楽しさと知識・技術の統合の重要性、看護専門職者としての倫理感が育てられるように教授する。特に、専門の特性より「母子関係」「父子関係」「家族」に対する看護とともに、学生自身の「母子関係」「父子関係」「家族」を振り返り、人が生まれ育つ過程を大事にできる「人」となれるよう関わりたいと考えている。本学のテーマである「人のための人になる」ためには、学生自身が自分を大事に、周囲の人を大事に、して関係性を構築できるような「人になる」ことが看護には重要であると考え、それが伝えられるように教育していきたい。

看護学科4年生では、目の前にある就職を見据えて、社会人としての準備ができるような社会の中での実践力を見据えて社会性やコミュニケーション力を含め、「ときわコンピテンシー」を学生自ら成長できるように関わりたいと考える。

## 3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）

ディベートや屋根瓦教育・シミュレーションなどを利用して、学生が主体的に授業に関わることができるよう工夫している。これについては、学生からも好評であり今後も続けていきたいと考えている。

## 4. 今年度における教育方法改善の取り組み

学生より評価があった授業の継続しつつ、授業までの事前学習と授業中の学習がつながるような最善を行った。具体的には、グループワークのテーマに関する事前学習をmanabaを利用して提出を求め、授業中はmanabaプロジェクトを使用して事前学習をグループ内で共有しグループワークを展開する。このことにより、グループ内での作業の偏りをできるだけ避け、また、事前学習内容を教員が確認する

したり、グループ内での役割などを観察することができる。同時に学生間にある不公平さをできるだけ避ける工夫を行っている。

5. 今年度の学生による授業評価より

学生からは、主体的に学習する習慣になったとも評価があり、効果があったと考える。

6. 今年度の成果

成果が明確ではないと考える。成績や授業評価も前年度と特に変化がみられていない。今後授業内容についての成果を見えるように検討したい。教員自身が授業成果を見えることで学生自身にも授業の効果を実感できるような成果が見える工夫をしてみたい。

7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

6. で示した通り、授業成果の「見える化」ができていない。「見える化」する工夫をし、学生自身も授業による成果を実感できるような工夫を考えていきたい。

8. 社会的活動等

- ・KITにおける「卒乳・断乳教室」「祖父母教室」を開催
- ・甲子園短期大学 性教育講義
- ・高大連携 福崎高校

9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価

教員名	柴田しおり	所属学科	看護学科	職名	特任教授
クラス担任	なし	クラブ顧問	なし		
委嘱委員・職務	看護学部開設準備室メンバー				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課（**網掛け**部分は外部公表しない）科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
基本看護技術 I	N	1	後期	必修	演習	対面	97

基本看護技術Ⅱ	N	2	前期	必修	演習	対面	98
基本看護技術Ⅲ	N	2	前期	必修	演習	対面	98
基礎看護学実習Ⅰ	N	1	後期	必修	実習	対面	90
看護学研究	N	4	通年	必修	演習	対面	(2)
大学道場 miniゼミ B	基盤	1	後期	選択	演習	対面	6

### (3) 準正課、正課外の教育活動

なし

## 2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

基礎看護技術については、科目の特徴から看護実践の基礎的な能力を培うことを理念とする。看護技術は、知識・技術・態度がバランスよく三位一体となって習得されることが重要であり、そのために必要な省察力を高め、倫理観を養うことを目指した。

また、看護学研究および大学道場 miniゼミでは、探究心の育成及び問題解決力と主体的学習姿勢の養成をねらいとした。

## 3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）

1) リフレクティブジャーナルの活用：リフレクティブサイクルの理解度および、体験の分析状況に応じて個別に対応を続けた。

2) グループワーク・ロールプレイによる演習：チームとしての活動を学生が意識できるように関わり、協同学習の成果が出るよう努めた。

3) plan-do-see のサイクルを意識したグループ学習の運営：計画の意図（根拠）を共有し、十分な思考のもとに実践・評価が必要であることを理解できるように関わった。

4) オフィスアワーでの技術指導：個々の学生が自己の課題に気づくことができるように、行為の意図を確認し、その意味を理解できるように関わった。

5) manaba を活用したミニレポートの内容を、次回の指導に活かすよう努めた。

## 4. 今年度における教育方法改善の取り組み

技術演習科目では、昨年度の経験をもとに、学生のレディネスや学習準備状況の把握に努め、学生の反応を確認しながら関わることに重点を置いた。

## 5. 今年度の学生による授業評価より

どの科目も概ね高評価であったと考える。#17（演習科目）教員間の連携・対応については、他の項目に比してやや低い傾向にあるのは昨年同様の結果であった。共同担当科目に生じやすい評価であるため、次年度以降も留意して臨みたい。

新規担当科目の大学道場 mini ゼミ<快眠のプロをめざそう！>は、評価分野Ⅱ～Ⅴが 4.5 以上と好評で、自由記述からも新たな知見を得つつ楽しみながら学べたことが伺える。睡眠教育が、選択ではなく、教養として身につけられるような科目として発展することを期待したい。

## 6. 今年度の成果

- ・ 基盤科目を担当することで、他学科の学生とも関わることができ、学生理解の一助となった。
- ・ 「基本看護技術Ⅰ」の3回分（2コマ続き）の授業者を担い、研究テーマでもある「動きの支援」の教育方法についてさらに検討することができた。
- ・ 基礎看護学実習Ⅰの学内実習におけるクラス運営において、特にワールドカフェ方式を活用したグループワークが昨年よりも効果的に行えた。

## 7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

技術演習科目は、複数教員の担当であり、主担当者・授業者が変わる科目もあるため、科目の理解・学習のねらいをより詳細に理解するよう努める（授業ミーティング）。

学生による授業評価は授業改善に有用であるため、科目主担当者と協力して回答率を上げられるよう努めたい。特に、自由記載を「書いても書かなくても良い自由」と考えている学生が一定数いることがわかったので、授業評価の意味を伝えることが重要だと考える。

次年度は、看護学部として新カリキュラムがスタートし、正課外科目（看護アラカルト）の担当も始まる。試行錯誤を楽しみつつ、学生の気持ちが動く科目運営に努めたい。

## 8. 社会的活動等

- ・ 神戸看護学会評議員（編集委員会副委員長）

## 9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・ 授業後アンケート（manaba ミニレポート）

教員名	岩切由紀	所属学科	看護学科	職名	教授
クラス担任	2年生	クラブ顧問	なし		
委嘱委員・職務	図書館長/図書委員会委員長、入試委員会委員、FAST 看護学科臨地実習委員会・委員長				

## 1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課 (網掛け部分は外部公表しない) 科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
○成人看護学概論	N	1	後期	必修	講義	対面	96
○看護対象論Ⅱ (成人)	N	2	前期	必修	講義	対面	99
○クリティカルケアⅠ	N	2	後期	必修	講義	対面	99
○クリティカルケアⅡ	N	3	前期	選択	講義	対面	44
看護活動基礎実習	N	1	前期	必修	実習	対面	95
療養支援実習Ⅱ	N	3	後期	必修	実習	対面	87
○療養支援実習Ⅲ	N	3	後期	必修	実習	対面	87
課題別総合実習	N	4	前期	必修	実習	対面	8/76
看護学研究	N	4	通年	必修	講義	対面	2/78
医療看護特論Ⅱ	N	4	後期	必修	講義	対面	76
臨床技術入門	R	1	後期	必修	講義	対面	89

(2)準正課、正課外の教育活動

- ・ 就職に関連して急性期ならびに超急性期施設への就職希望に関する指導
- ・ 学年担任群で担当学生と保護者に対する面談等の対応
- ・ 臨地実習前の予防接種に関する保護者相談への対応
- ・ 臨地実習施設とコミュニケーションを図り、より良い実習指導に繋がるように、臨地実習委員会で臨地実習指導研修会を企画し実施した。「臨床判断モデル」を柱として「思考発話」を考えた。
- ・ FAST 新入生の市民救命士取得の指導

2. 教育の理念 (育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念)

看護者となる学生であるため、看護職者として基本となる看護の知識を体系的に教授し、筋道だった自らの理解に基づいて実践できる学生を養成する。実践では、現象を捉え適切に判断できる能力を身に付けること、人として看護者として倫理的に判断し行動できる人材を育成する。看護を学ぶ上では、看護者の役割を知り、学ぶ楽しさや将来活躍する専門領域へつながるよう教育する。

3. 教育の方法 (2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングや ICT 活用等の工夫点について)

- ・ クリティカルケアⅡなど、専門領域に関する探究では、学生の意欲を喚起し将来像を描くため、課題の中でも自由にテーマを選択しグループワークが出来るよう取り組んだ。
- ・ クリティカルケアⅠは授業科目のため、正課外で心肺蘇生法実技演習を実施した。医療者としての一次救命処置を理論の理解を踏まえて技術の演習を行い、技術評価をした。
- ・ 成人看護学概論では、概念の理解が深まるように多くの具体例を示し説明した。授業内容を振り返

り、理解状況を把握するため授業時間に課題の記述と提出を求めた。

#### 4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・療養支援実習Ⅱ・Ⅲは、本年度より3単位から2単位に変更となった。2週間の臨地実習のみとなるため、学内実習時間を2.5時間過剰に設定し事前学習の時間を確保した。また、実習病棟と連携してできる限りの受け持ち患者の情報を得て、学生に提供し実習前の疾患や治療に関する学修を充足させた。療養支援実習Ⅲでは手術室とICU見学実習の1日実習が設定できなくなったため、受け持ち患者の手術見学ならびにICUでの手術直後のケアを見学できるように調整を行った。
- ・昨年度と同様に関連する科目：クリティカルケアⅠは、臨床看護総論と慢性病看護論の授業構成を連動して繰り返し学習できるよう展開を協働して組み換え、再調整を行った。

#### 5. 今年度の学生による授業評価より

- ・クリティカルケアⅠ（2年生）では、総合評価4.4と昨年度4.5とより0.1低下している。授業内容と授業方法が4.3でいずれも、昨年度より0.1低下している。自由記載にある課題の出題時期を早める希望については、看護展開の課題で授業進行と対応しているため、学習課題を先に課すなど検討する。定期試験の内容からも、本授業で重要とする解剖生理から疾患と治療の特性を踏まえて看護を考える一連の過程が、押さえられていないと捉えられる。授業内容と方法は、この点を注意して授業を組み立てる必要がある。
- ・対象論Ⅱでは、総合評価が4.3で昨年度4.7と比較して0.4低下している。授業内容と方法は大きく変更していない。対象学生が変わっている点から、授業方法を対象学生の特性に応じて検討する必要がある。上記のクリティカルケアⅠと同じ2年生であるが、1回あたりの欠席者数が多い。特にグループワークを組み込む場合は、メンバーが相互に協力できる展開を検討したい。
- ・臨地実習科目は、授業評価の項目が対応しないため、評価を行っていない。実習後の成績自己評価と教員評価の格差、アンケート調査の結果に基づき評価を行っている。療養支援実習Ⅱは、学生自己評価73.4に対し教員評価79.9、療養支援実習Ⅲは学生評価79.7に対し、教員評価82.2と教員の評価が高値である。

#### 6. 今年度の成果

- ・臨地実習科目の療養支援実習Ⅱ・Ⅲは、カリキュラム変更後の実習であったが、実習目的と目標を達成する実習調整と指導ができたと評価する。授業評価は実施していないが、成績は療養支援実習Ⅱ79.9点、療養支援実習Ⅲ82.2点と平均80点を確保できた。
- ・成人看護学概論では、自らが成人期の発達途上にある人と認識することなど一般ではなく、自己を通して学修することを目指している。本年度の授業評価時の自由記述では、自分の両親の生活の実態から成人の発達段階と役割、健康問題につなげて考えることや、障害をもちながら生活する人の実際など、授業のねらいと校正に学生から評価を得た。

## 7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

- ・クリティカルケアⅠでは、他の教科と連動した授業の構成に組み換えたが、看護を考える過程を理解していない学生が多く認められる。基本的な看護を考える過程が習得できるよう授業構成を再検討する。授業1回当たりの欠席者が平均5名で、最大で10名に至る現状がある。本科目は必修科目で、看護展開の基盤をつくる科目でもあるため、授業の出席に関する対策を設ける。
- ・クリティカルケアⅡでは、超急性期の看護実践についてドクターヘリや救命センターで活躍する看護師をゲストスピーカーに迎え、臨床の現状についてリアルな教育を導入する予定である。
- ・療養支援実習Ⅱ・Ⅲでは、実習生個別の問題が実習調整上の大きな課題となっている。基礎的な学習が不足している、実習態度の課題など、全体と個別とに指導を行う。実習期間が2週間となったため、自分が取り組んだ看護援助のみの考察となる傾向がある。受け持ち患者に必要な看護の全体を理解できるよう指導を行っていく。

## 8. 社会的活動等

- ・日本救急看護学会調査研究委員会で活動し、学会への研究助成の審査ならびに研究を推進するセミナーの企画・運営を行った。
- ・上記の委員会が実施した研究「新型コロナウイルスパンデミック時の初療室・救急外来における救急看護師の看護実践の特徴」の結果を第26回学術集会シンポジウムで発表し、交流集会を運営した。

## 9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・ 授業における配布、配信資料等

教員名	中田康夫	所属学科	看護学科	職名	教授
クラス担任	1年生	クラブ顧問			
委嘱委員・職務	教育研究推進センター ときわ教育推進機構 利益相反マネジメント委員会 情報インフラユニット 遠隔授業実施特命チーム 数理データサイエンス・AI教育（リテラシーレベル）実施責任者				

## 1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課（網掛け部分は外部公表しない）科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数

まなぶる▶ときわびと I	基盤	1	前期	必修	演習	対面	396
まなぶる▶ときわびと II	基盤	1	後期	必修	演習	対面	393
○基礎統計学	基盤	全	前期	選択	講義	遠隔	177
○いのちと共生	基盤	全	後期	選択	講義	遠隔	140
○生命と倫理	基盤	全	後期	選択	講義	遠隔	383
○保健統計学	N	2	前期	必修	講義	対面	110
○臨床看護総論	N	2	後期	必修	講義	対面	97
○疫学調査法	N	3	後期	選択	講義	対面	29
看護学研究	N	4	通年	必修	演習	対面	77
医療・看護特論II (医療専門職の動向)	N	4	後期	必修	講義	対面	76

## (2) 準正課、正課外の教育活動

- ・ 4年生の希望者に対する国家試験対策（対面と遠隔）

### 2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

専門科目では、質の高い看護職を養成するために、看護学や看護実践方法の知識・技能の修得とともに、臨床現場で対応できる実践力と職業倫理をもった学生を養成する。また、主体的・能動的に学ぶことができるようにしている。

基盤科目では、大学の学修、研究の基盤である論理的／批判的思考力や、いのちに対する倫理的、誠実かつ真摯な姿勢・態度の涵養を目指した授業を実践している。

### 3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングや ICT 活用等の工夫点について）

- ・ 対面授業では、パワーポイントの資料配布を行わず、ノートテイキングを必須とする授業を実践している。実習前には、事前指導をオンデマンド形式で動画配信を行い、自主学習を行うようにしている。
- ・ 遠隔授業では、単調な一方通行の授業とならないよう、2人の教員による問答形式の動画の配信を実践している。
- ・ 授業中にできるだけ質問を投げかけ、考える機会を増やすように努めている。

### 4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・ 統計系においては、演習問題に数多く取り組めるように昨年度以上に工夫した。
- ・ 遠隔授業では、単調な一方通行の授業とならないよう、2人の教員による問答形式の動画の配信を実践している

### 5. 今年度の学生による授業評価より

- ・統計系の授業においては演習問題に数多く取り組めるように工夫したが、それでも昨年度と同様、難しいなどの意見が見られたため、次年度は今年度に比べ、取り組む問題数を増やしていく要諦である。
- ・学生自身の学修時間が短い傾向が続いているため、課題を増やすことも考えていきたい。

## 6. 今年度の成果

- ・昨年度の授業評価や国家試験結果を踏まえ授業を工夫したが、顕著な成果を出すには今しばらくかかると思われる。一方で、臨床看護総論の授業がわかりやすい、楽しいという学生も散見されるようになってきた。

## 7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

- ・前年度の N 科の国家試験結果を踏まえて、主体的・能動的な学修に努めるよう、授業において再三再四伝えたが、保健統計学、臨床看護総論において 20 名弱の不合格者が出た。しかし、特に 2 年生においては、欠席者の数も今年度は昨年以上に目立ってきていることから、これらについては、学科全体として取り組んでいくべき課題であると考えます。

## 8. 社会的活動等

- ・International Congress on Advanced Applied Informatics, IIAI-AAI, Program Committee
- ・International Journal of Institutional Research and Management (IJIRM), Associate Editor
- ・日本赤十字看護学会評議員
- ・日本赤十字看護学会誌査読委員
- ・すこやか友が丘運営推進委員会座長

## 9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・シラバス
- ・学生による授業評価
- ・授業における配布、配信資料等
- ・テスト問題

教員名	谷口 由佳	所属学科	看護学科	職名	教授
クラス担任	3 年生 B クラス	クラブ顧問	なし		
委嘱委員・職務	紀要委員会・副委員長、ハラスメント防止対策委員会、国家試験対策委員会・委員長、兵庫県看護系大学協議会、兵庫県看護協会神戸西部支部まちの保健室委員会				

## 1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

- (1)正課（網掛け部分は外部公表しない）科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
○生活健康論	N	1	前期	必修	講義	対面	96
看護基礎実習	N	1	前期	必修	実習	対面	
○老年看護学概論	N	1	後期	必修	講義	対面	104
○看護対象論II	N	2	前期	必修	講義	対面	96
○地域包括ケア論	N	2	前期	必修	演習	対面	97
○老年援助論	N	2	後期	必修	演習	対面	99
○療養実習I	N	3	後期	必修	実習	対面	91
○地域看護実習	N	2	後期	必修	実習	対面	99
国際医療動向I	N	4	前期	選択		対面	1
看護学研究	N	4	通年	必修	演習	対面	77
課題別総合実習	N	4	前期	必修	実習	対面	76
因素看護論II	N	4	後期	必修	講義	対面	77

## (2) 準正課、正課外の教育活動

- ・ 就職支援におけるエントリーシートや小論文の添削指導、および面接指導
- ・ 国家試験対策における学生支援
- ・ 全学年振り返りシートの作成
- ・ 学生のボランティア活動支援
- ・ 担任、科目担当者として欠席が多い学生への面談・指導・支援

## 2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

本学の教育理念、および学部・学科の教育理念のもと、“いのち”に対する知性と感性および、豊かな人間性と高い倫理観を身につけた医療専門職の育成を目指す。そのための教育のあり方として、学生自らが考える知的訓練を積む中で、何事にも真摯に自発的に学ぼうとする姿勢を育てていきたい。その上でこそ、責任ある医療専門職として必要な“いのち”への尊厳と倫理観が、真に身につくものと考えている。

## 3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）

- ・ 知識詰め込み型教育からの脱却（教えすぎない、資料は少なく、など）
- ・ アクティブ・ラーニングを活用した授業設計
- ・ 地域と連携したPBL型授業の導入
- ・ 学生同士の教え合い学習授業

## 4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・ 反転授業を取り入れ、授業の中で学生同士が十分に話し合い、教え合える場面を増やした。
- ・ 授業ノートの作成を課し、学んだ内容を復習することで、知識の定着を図った。
- ・ 学科 FD「事例を通して学生指導を考える」に参加し、多様化する学生の状況にどう対応し、どう支援するかについて検討し、より良い支援のあり方や方向性を学科で共有した。

## 5. 今年度の学生による授業評価より

授業評価では、平均して 4.4～5.0 と高い評価が得られている。しかし、全体的に回答率が低かったため、この評価が受講者すべての意見とはいえない。回答率 91.7% の 2 年生科目である「看護対象論Ⅲ(老年)」をみると、【授業方法】の問 8 (スライドなどの使い方) が 4.63、問 9 (聞きやすい話し方) および問 10 (授業の進行速度)、問 11 (質問や意見への対応) が 4.57 と高い評価であった。96 名という大規模な受講生に対し、できるだけ学生一人ひとりに声をかけ、それぞれの理解度を確認した上で授業の進度を調整しながら進めたことが、評価につながったと考えられる。これについては、【学科別質問】においても、問 16 (到達度の確認) 4.61、問 18 (具体的な説明) 4.58、問 19(教員の意見や考え)4.54 と高い評価が得られている。また、【学生自身】の問 4 (意欲的な参加) が 4.61 と高い評価であったことは、「高齢者の方と実際に話す授業は、高齢者に対する考え方などがよく深まり、とても良い授業だと思った」「実際に地域の高齢者の方々とお話ししたり学んだ知識を振り返る場面が多く、とても学びが大きかった」などの自由記述からも、地域と連携した PBL 型授業の成果と考えられる。一方で、【学生自身】の問 3 (授業以外の学修時間) は 2.72 であり、約半数の学生が授業外の学習時間を 30 分未満と回答し、0 時間の者もいた。授業に意欲的に参加した学生が、授業外でも学習意欲が維持できるよう、授業内容や課題をさらに工夫し、自学自習の習慣の定着化を図っていきたい。

## 6. 今年度の成果

- ・ 地域と連携した PBL 型授業の実践では、地域住民や自治体の職員を招聘した授業を設定し、学生の興味・関心を喚起して学ぶ意欲を高めた。神戸市や長田区を巻き込んで実施した認知症サポーター養成講座では、2 年生 94 名の「認知症サポーター」が誕生した。
- ・ 今年度新しく科目責任者を務めた「地域活動基礎実習」では、実習の場を新規開拓した。地域住民が集う交流サロン等で、学生たちが地域住民とのかかわる機会を得ることができた。実習した学生たちが地域活動の重要性を学び、活動の楽しさを知ったことは、学生たちの今後の地域貢献活動の活発化につながると考えられる。

## 7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

- ・ 前年度と同様に、認知症サポーターとなった学生が、今後活躍できる場を作っていくことが課題である。今年度は、認知症カフェの実施場所の確保ができた。次年度は、認知症カフェを新規開設し、学生たちが準正課や正課外で学べる環境を確保していく。

## 8. 社会的活動等

- ・ 長田区の依頼で「長田区地域と進める認知症早期発見システム構築検討会」に参加し、本学の認知症に関連した取り組みと今後の展望について発表した。
- ・ 社会福祉法人りんどうの里評議員
- ・ 社会福祉法人寿光会福祉・サービス向上・苦情対応委員会第三者委員
- ・ 認知症サポーター養成講座の講師（地域でのキャラバンメイト活動）

## 9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・ 認知症サポーター養成講座実施報告書

教員名	堀 理江	所属学科	看護学科	職名	教授
クラス担任	N1	クラブ顧問	なし		
委嘱委員・職務	入試委員会、N科臨地実習委員会（副委員長）、N科学生倫理研究審査委員会、N科リカレント教育、N科学科会議、N科教授会				

## 1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課（網掛け部分は外部公表しない）科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
○緩和ケア	N	3	前期	必修	講義	対面	92
○慢性病看護論	N	2	後期	必修	講義	対面	99
看護研究方法論	N	3	前期	必修	講義	対面	92
大学道場 Mini-ゼミ	全	1	前期	選択	演習	対面	10
家族看護論	N	3	前期	選択	講義	対面	59
看護学研究	N	4	通年	必修	演習	対面	3
○療養支援実習Ⅱ	N	3	後期	必修	実習	対面	87
療養支援実習Ⅲ	N	3	後期	必修	実習	対面	87
課題別総合実習	N	4	前期	必修	実習	対面	4
看護活動基礎実習	N	1	前期	必修	実習	対面	8

## (2)準正課、正課外の教育活動

リカレント研修を担当した。看護研究研修を約6時間/日×4回、認知症高齢者研修を約6時間/日×3回実施した。看護研究研修では4回を通じて、自身のテーマとする研究を深めることができるよう、文献検索の演習やグループワークを取り入れた。認知症高齢者研修では、急性期の現場における認知症

高齢者についての理解が深まるよう、専門看護師・認定看護師の方に専門的な知識を享受していただいた。いずれも卒業生の受講を意図したが、卒業生の受講はなかった。

## 2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

看護職の倫理綱領にみられるような、自己研鑽を積み、看護職に誇りをもち、誠実で基礎知識が豊富な学生を育てたい。そのためには、学生自身が大切に育てられているという実感を得て、伸び伸びと学習に臨めるような環境を整えることが必要であると考え。ヒューマンケアリングは本学看護学科の教育理念にも謳われているが、学生・教員間でもヒューマンケアリングが成り立つように、すなわち、互いに思いやり刺激しあうことで、それぞれが看護職者として、また教員として成長していけるような教育を信念としている。

## 3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングや ICT 活用等の工夫点について）

特に意識しているのは、講義・演習・実習の繋がりである。ただ、本学では私は演習科目を担当していないため、講義科目の中で実習において使用する記録用紙を用いながら一部グループワークを取り入れたり、課題を課したりして、看護過程の展開を行っている。看護上の問題点を考える過程では、自身の看護観や価値観も振り返りながら、優先順位を検討していけるようにしている。どのような考え方であってもその根拠を問い、ディスカッションできる雰囲気を心がけている。

## 4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- 学生が受け身にならないように、5-10分程度の個人・グループワークを取り入れた。
- 定期試験までの間に小テストを2回実施している。途中で、理解度を確認すること、小テスト実施後に小テスト内容を解説することで、知識が定着することを狙っている。また、課題や小テストの総合点が良くない場合は、個別に面談等を実施し、学習方法のアドバイスをを行っている。

## 5. 今年度の学生による授業評価より

- 「緩和ケア」「慢性病看護学」では学科平均より若干高い評価であった。自由記載では、その科目に興味を湧いた、理解が深まったという内容であった。ただ、3で述べたように、合計23コマの中で昨今増加している慢性疾患やがん看護について教授するには非常に厳しく、特に2年生後期の「慢性病看護学」では講義のスピードを速くせざるを得ない。今後、新カリキュラムとなり、「緩和ケア」が「がん看護学」に置き換わることで、講義の組み立てを多少変更できるため、その際にはもう少しゆっくり講義を進めたい。
- 看護研究方法論は、学生が看護研究を実施した経験がない中で教授するため、看護研究をイメージできずに理解が難しい。来年度も引き続き、実際の研究論文を共に読みディスカッションしながら、学生の理解が進むようにしたい。
- 実習系の授業においては、実習施設、担当教員ともに、「丁寧に指導してくれた」「分からないとこ

ろは共に考えてくれたため、良い実践ができた」などの評価が多かった。しかし、一部では、「否定されてばかりだった」「教員間で記録の指導方法を統一してほしい」等の意見もあったため、教員間での指導方法に関する学習会などを実施したり、実習指導に関する研究に共に取り組むことで、学生の混乱がないようにしていきたい。

- 全般的には、学生自身が主体的に学ぶ姿勢での評価点が低いため、取り組みやすい課題を課すなど工夫しながら、少しでも主体的に取り組めるような講義・実習内容にしたい。

## 6. 今年度の成果

- 課題別総合実習の希望調査では、緩和ケア、慢性病看護、クリティカルケア、周手術期看護の希望者が非常に多く、教授した内容や実習時に興味をもてる関わりができたと評価できるのではないだろうか。
- 4年生の看護学研究の学生を対象に、苦手分野の国家試験対策を実施した。学習へのモチベーションが上がるように、1か月に1回程度は国家試験のための学習に関する進捗状況を尋ね、学習計画を共に立案した。
- 自身の研究での成果について説明することを心掛けている。一つの事象について多面的に物事を考え探求する姿勢を身につけることを狙いに行っている。研究テーマが妊娠とがんを同時に経験している方のことなので、学生は興味をもって聞いていると感じる。
- 卒業してからも学生と関わり続ける取り組みを継続しており、卒業研究を学会等で発表するサポートをしている。その際に、卒後1年目の心身のサポートも実施している。

## 7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

- 2年生後期科目「慢性病看護論」の進め方について、検討したい。後期は領域実習中であり、教員は実習を担当しながら講義を実施することになる。講義内で課題を課しているが、課題に関して十分なフィードバックができていない。可能であれば、担当教員である2名が同時にグループワークや課題への取り組みに臨める回を数回設け、学生に個々に関わる時間を設定したい。
- リカレント研修では、神戸常盤大学卒業生の参加がなかった。卒業生が卒業後も大学と繋がり、生涯学習を継続できるために、周知方法を検討したい。周知の時期が遅くなったため、準備期間を早めることを検討する。

## 8. 社会的活動等（学内貢献含む）

- 実習委員会で「臨地実習指導研修会」を企画・運営した。学生に熟練看護師の思考を伝え、学生の臨床判断能力を向上するという考え方のもとに、副学長 鈴木志津枝先生からご講演いただき、その後に実際に実習指導を担ってくださっている指導者から実例を紹介いただいた。実例紹介までの過程では、臨床判断モデルや思考発話について、指導者のかたに説明し、共に実例紹介の資料を作成した。
- 入試委員として、4校の高校生に対して、模擬授業を実施した。対象学年や高校の偏差値に応じて、

内容を工夫し、看護職を志す生徒達のモチベーションが上がり、大学での学習準備に少しでも役立つことを意識した。

- 日本がん看護学会において、選挙管理委員を担った。公平な選挙となるよう、また投票率が少しでも上がるように力を注いだ。
- ヒューマンケア研究学会副知事長として学会の運営に携わった。同会査読委員としても、査読を担当した。

## 9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・ 授業における配布、配信資料等

教員名	藤原 桜	所属学科	看護学科	職名	准教授
クラス担任	2年Bクラス	クラブ顧問	ヨガ・アロマ部		
委嘱委員・職務	自己点検・評価委員会、看護学科就職委員会（副委員長）、看護学科学生研究倫理委員会				

## 1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1) 正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
基本看護技術Ⅱ	N	2	前期	必修	演習	対面	98
○基本看護技術Ⅲ	N	2	前期	必修	演習	対面	98
国際保健医療活動Ⅰ	N,M,R,O	4	前期	必修	講義	遠隔	
○看護対象論Ⅰ	N	1	後期	必修	演習	対面	96
基本看護技術Ⅰ	N	1	後期	必修	演習	対面	97
看護学研究	N	4	通年	必修	演習	対面	77
課題別総合実習	N	4	前期	必修	実習	対面	76
看護活動基礎実習	N	1	前期	必修	実習	対面	96
基礎看護学実習Ⅱ	N	2	前期	必修	実習	対面	97
○基礎看護学実習Ⅰ	N	1	後期	必修	実習	対面	90

(2) 準正課、正課外の教育活動

- ・ ヨガ・アロマ部の活動及びボランティア支援
- ・ 日本アロマ環境協会アロマセラピー検定受験希望者に対する試験対策集中講座

- ・ 新入生の市民救命士取得の指導
- ・ 就職支援（25名のエントリーシート・小論文の添削指導、及び面接指導）
- ・ 担任、科目責任書として担当学生の学習支援（面談）

## 2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

基本的には、本学科の教育理念である「いのちに対する豊かな感性と知性、幅広い人間性を備え、的確な看護判断と実践のための基礎的能力を養い、現代のヘルスケアに応じる得る資質の高い看護専門職業人を育成する」に則り教育を行う。そのための教育の在り方として、主に担当する科目である「基本看護技術ⅠⅡⅢ」では、アリストテレスの思想である「学問的知識：エピステーメ」「技術：テクネ」「実践知：フロネーシス」をもとに看護技術を教授する。また、患者と看護者の関係は「相互主観的な関係」であることを理解し、これらの理念に基づいて看護技術の本質を理解した省察的実践者の育成を目指す。同時に、ケアする人として「いのち」に対する畏敬の念を抱き、人間の尊厳や権利を尊重できるよう、倫理的態度を養うことを大切にしたい。

## 3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングや ICT 活用等の工夫点について）

- 1) リフレクティブジャーナルの活用（主に省察的態度を養う）：自己の行動（看護実践）やその時の感情を客観的に見つめなおす機会は、自己の課題や強みに気づくことができる機会となる。さらに、うまくいったことや改善点を見つけ出すことができれば、より良い看護実践を生み出す思考過程が身につく。これを繰り返すことで省察的実践者として成長することが可能となる。教員は、学生のリフレクティブサイクルが効果的に進むように適切なフィードバックを提供する。
- 2) 体験型学習を積極的に取り入れる（主に知性と感性を養う）：体験型学習は、複数の感覚を刺激することで学習内容をより深く定着させる効果がある。学生が実際に経験し、感じ、考えることで情報の理解と記憶が促進される。教員は、学生が知覚したことを表現できる機会を提供し、（主にはレポートやリフレクション、グループワークでの対話）知覚したことの意味付けを、発問やフィードバックを提供することで支援する。
- 3) シミュレーターを用いたチームベースドラーニング（Team-Based Learning：以下 TBL）を取り入れる（主に倫理的な態度を養う）：主体的な学習者は自らの学びに責任を持ち、他者や社会に対する責任を理解し、行動する能力を持つ。TBLを通じて、主体的な学習やチームワーク、コミュニケーション能力の向上が期待できる。また、リアルな臨床状況を再現することで、臨床推論や臨床判断能力を向上させるためのトレーニングになる。さらに、実際の臨床現場で必要とされる技術を獲得するための準備が整う。教員は、効果的な発問やフィードバックを提供することで学習内容の深化を支援する。
- 4) その他、基本看護技術Ⅲにおいて学修の到達度目標を学生自身に評価してもらう学修成果の間接かつ質的評価方法であるルーブリック評価（中間・最終）を取り入れる。さらに、学生が主体的に事前学習できるように動画を作成し、manaで配信する。また、基本看護技術Ⅲと看護対象論Ⅰにおいて、上級生が授業に参加する屋根瓦教育（Multi Layered Education）を取り入れる。

#### 4. 今年度における教育方法改善の取り組み（科目責任科目のみ記載）

・「看護対象論Ⅰ」では、今年度、講義の単元に短い演習を取り入れるなど、体験学習の強化を図った。さらに、昨年に引き続き、自己理解やセルフコンパッションの一環としてマインドフルネス演習を実施した。また、皮膚感覚を通じたコミュニケーション（ハンドマッサージ）を取り入れることで、看護技術が相互主観的な関係性の上に成り立つことを理解する機会を提供した。加えて、コミュニケーション分析には「交流分析」を取り入れ、昨年同様の内容を微調整し改善を加えた。今年度はさらに、「模擬患者とのコミュニケーション演習」において、本学主催の模擬患者養成講座を修了された地域ボランティア5名の方々にご協力いただき、実施することができた。

・「基本看護技術Ⅲ」では、シミュレーターを用いたフルスケールシミュレーション TBL を実施し、昨年に引き続き、4年生4名がティーチングアシスタント（Teaching Assistant：以下、TA）として参加する屋根瓦教育（Multi-Layered Education）を取り入れた。さらに、事前学習では、単元ごとに解剖生理の知識を問う課題を提示し、学生が断片的な知識を単元全体の学びと結びつけ、より総合的な理解を促進できるよう工夫した。また、単元終了後には、3分程度で実施可能なクイズ形式のマイクロラーニングを導入し、知識の定着と振り返りを促進している。

#### 5. 今年度の学生による授業評価より（科目責任科目のみ記載）

・「看護対象論Ⅰ」（単独担当）：授業評価は、学科平均を上回る高評価であった。特に「模擬患者とのコミュニケーション演習」は高評価であった。

・「基本看護技術Ⅲ」（複数担当）：授業評価授業評価は、学科平均を上回る高評価であった。特に4年生4名がティーチングアシスタント（teaching assistant：以下 TA）として参加した TBL は高評価であった。

#### 6. 今年度の成果

##### 1) 授業（科目は責任科目のみ記載）

・「看護対象論Ⅰ」：定期試験（筆記）の平均点は87点で、昨年度より12ポイント上昇した。一方、提出物の平均点は69点で、昨年度より6ポイント減少した。成績評価（LG）においては、S評価およびA評価の割合が増加し、単位未修得者は0名であった。授業評価に関しては、「学修成果」を問う項目の評価点が4.4（昨年比-0.3ポイント）、「総合評価」は4.6（昨年比-0.1ポイント）と、いずれもやや低下した。しかし、定期試験の結果から、教育内容および指導方法は学修目標の達成に十分寄与したと考えられる。さらに、本科目の学修成果は、次に履修する「基礎看護学実習Ⅰ」の成績評価（LG）においても確認できた。実習Ⅰでは、S評価14名、A評価58名、B評価17名、C評価1名、単位未修得者0名という結果であった。なお、「看護対象論Ⅰ」は本年度をもって終了し、次年度からは内容の一部が「基本看護技術入門」へと引き継がれる予定である。

・「基本看護技術Ⅲ」：定期試験（筆記）の平均点は69点で、昨年度より2ポイント上昇した。筆記再試験を受験した学生は11名で、昨年度より6名減少した。成績評価（LG）では、S・A・B評価の学生が増加した一方で、D評価の学生も増加した。授業評価においては、「学修成果」に関する項目の評価

点は4.5と昨年度と同水準であり、「総合評価」は4.5で、昨年度より0.1ポイント減少した。ただし、昨年度は両項目とも学科平均を上回る高水準であった。また、学生による「学修成果のルーブリック評価」においても、一定の学修成果が確認されており、これらの結果から教育内容および指導方法は学修目標の達成に資するものであったと判断できる。

## 2) その他

・部活動：アロマセラピー検定受験希望者に対する試験対策集中講座を行った結果、3名の学生が日本アロマ環境協会アロマセラピー検定1級のライセンスを取得した。

## 7. 今年度の課題と次年度に向けた改善

1) 今年度の課題として、基本看護技術Ⅲでは、授業内で適宜解剖生理の知識を想起させながら進める必要があるため、授業時間が不足しがちであることが挙げられる。その結果、事前・事後学習の負担が学生にとって大きくなる傾向が見られた。そこで次年度は、学生の自律的な学習をより効果的に支援することを目的に、マイクロラーニングの活用を一層強化したい。具体的には、講義直後の事後学習として「書くピア・ティーチング(=一問一答づくり)」を取り入れ、学生同士で学びを共有・定着させる仕組みを構築する。また、演習直後の学びとしては、「今日観察した正常所見を一つ挙げ、それが異常だった場合に考えられる症状や対応を簡潔に記述する」といったフォームを導入し、解剖生理と看護技術の意味づけを自らの言葉で整理する訓練を行う。これらの取り組みにより、知識の定着と臨床判断力の基礎形成を支援していきたい。

2) 今年度は、2年Bクラスの学生1名が年度末に進路変更を理由として退学する事例があった。このことを踏まえ、次年度はチューターとの連携を一層密にし、学生一人ひとりの変化を早期に察知できる体制づくりに努めたい。また、学生が抱える悩みや不安に対して、迅速かつ丁寧に対応することで、学び続けられる環境の維持・支援を強化していく。

## 8. 社会的活動等

- ・兵庫県消防学校令和6年度救急救命士養成課程にて、救急医学概論/救急救命処置概論「傷病者搬送」シミュレーション：「ボディメカニクス」の講義を行った。
- ・明南高校「医療入門」講座で3回の授業を行った(高大連携)。
- ・神戸市北区のなごみディサービスからの依頼を受けて、アロマ部の部員とアロマハンドマッサージのボランティアを行った。
- ・本学の公開講座にて「模擬患者(SP)養成講座」の講演を行った。

## 9. 根拠資料(資料名のみ)

- ・シラバス
- ・授業資料

- ・ マナバ上に提出された授業感想・レポート
- ・ リフレクティブジャーナル
- ・ アセスメント記録
- ・ 基本看護技術Ⅲ 「学修成果のルーブリック評価」
- ・ 学生による授業評価
- ・ 復命書（社会的活動）

教員名	横山 利枝	所属学科	看護学科	職名	准教授
クラス担任	2年生		クラブ顧問		
委嘱委員・職務	SD委員会 国家試験対策委員会（副） 看護学科FD委員会 看護学科学生研究倫理審査委員会				

## 1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
○看護対象論Ⅴ	N	2	前期	必修	演習	対面	98
○小児援助論	N	3	前期	必修	演習	対面	93
○母子支援実習Ⅰ	N	3	後期	必修	実習	対面	79
○小児看護学概論	N	1	後期	必修	講義	対面	96
看護研究	N	4	通年	必修	演習	対面	77
医療看護特論Ⅱ	N	4	後期	必修	講義	対面	76

## (2)準正課、正課外の教育活動

- ・ 国家試験に向けての学習指導、
- ・ 就職試験に向けてのエントリーシートの指導
- ・ 科目責任者として欠席の多い学生への面談、指導、支援

## 2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

本学の教育理念、学科の教育理念のもと医療専門職者としての「命」への尊厳と倫理観を身につけ、知性、感性、人間性の高い医療専門職の育成を目指す。そのための教育の在り方として、看護は対象の生活を整えることで健康を守る役割がある。そのため看護者の生活の有り様が反映される。看護者としての知識、技術の習得はもちろんのこと生活者として、社会人として自立・自律できる学生を育成した

い。また、主体的に学ぶ、自分で考えることのできる学生を育成したいと考える。

### 3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）

- ・ 事前課題を授業で活用し、知識の定着を図る
- ・ 授業は、受け身ではなく知識を用いて考え、自分の考えを伝える、他の学生の意見を取り入れ考えを深められるようグループワーク、プレゼンテーションなどアクティブラーニングの活用

### 4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・ 事前課題、事後課題、授業での学びのリフレクションを通して学びのつながりを作る
- ・ 受け身ではなく考えながら授業に参加できる資料の工夫
- ・ 演習では、臨床指導者の協力を得てロールプレイを行い臨床場面をイメージできるよう工夫した
- ・ 授業で健康教育の実施を取り入れ、学生の子どもの理解が深まるように努め、実習につながるよう工夫した

### 5. 今年度の学生による授業評価より

授業評価では、4.4～4.7と高い評価が得られている。特に「授業の到達目標」「授業内容」がわかりやすく、「意欲的に授業に参加」できているが高い評価であった。また「自分で調べ、考える姿勢がみについた」についても高い評価が得られている。これらは、授業に向けての事前課題について学生が調べたことを基に考察した内容を授業で活用しながら進めたことで学びが深まり成果が得られたと考える。

自由記載で、進むスピードが速い、PPが見えにくい等の意見もあり、学習環境を整え改善していく必要がある。授業内容・方法を精査し、学生が課題をもって授業に臨めるよう主体的な学習の定着を図っていきたい。

### 6. 今年度の成果

- ・ 講義、演習、実習のつながりを重要視した授業構成にしたことにより、総合評価で実習が4.7と授業での学びを実習で活用し学生の達成感につながった。
- ・ 国家試験対策として、4月から4年生を指導した。外部講師との情報の共有、成績低迷者への定期的な面談等を行った。最終模試では、全国平均を上回りほとんどの学生が合格圏内となり早期の仕上がりが見られ、当初の目的は達成できた。

### 7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

- ・ 講義では、事前課題を活用し知識の確認をし、事例を多く取り入れて知識の活用の仕方、考える機会を増やし理解を深められるようにする。
- ・ 子どもへの健康教育の実際を授業内で演習として行い、子どもの理解を深められるようにするとともに、3年次での実習につながるよう意識した発表会を実施する。

・国家試験対策では、日々の学習が国家試験の学習となることを意識できるよう低学年から計画的に進められるようにする。

## 8. 社会的活動等

- ・公立高校において、看護についての講義
- ・大阪市保育幼児教育センターの依頼で、公私幼保合同研修会の講師を務めた
- ・多文化子育てサロンを開催し、地域に住む外国人家族がつながる場の提供、子育て支援に取り組んだ

## 9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・シラバス
- ・学生による授業評価
- ・授業における配布資料
- ・学生の授業後の学びの振り返り
- ・公私幼保合同研修会参加者アンケート結果

教員名	黒野利佐子	所属学科	看護学科	職名	准教授
クラス担任	4年生学年顧問	クラブ顧問	陸上部		
委嘱委員・職務	国家試験対策委員会 国際交流センター委員				

## 1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
国際理解	全	1	後期	選択必修	講義演習	対面	65
○異文化看護論	看護	4	前期	選択必修	講義	対面	59
基礎看護技術 IV	看護	2	前期	必修	演習	対面	96
ミニゼミ道場	全	1	後期	必修	講義演習	対面	11
看護活動基礎実習	看護	1	前期	必修	実習	対面	
基礎看護学実習 I	看護	1	後期	必修	実習	対面	90
看護研究	看護	4	通年	必修		対面	
臨床技術入門	放射線科	1	後期	必修	演習	対面	89

(2)準正課、正課外の教育活動

- ・ 国家試験対策 成績低迷者用補講 4年生の成績低迷者及び卒業生(国家試験前年度不合格者3名)

に対して10月半ばから一コマ90分×40コマ（一日180分間×20回）実施した。

- ・ M科学生の大学院受験で英語入試のチューターを前期から1月後半まで90分×十数回行った。

## 2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

### 育てたい学生像

- ・ 多少困難があっても表層的な問題にとらわれず、根幹となる知識を積み上げながら応用となる実践を自分で考えていける。必要時様々な立場から意見を求めてベストを考え実行できる。

### 教育のあり方

- ・ 根本的に基礎力のない学生には、学ぶことが楽しく、いろいろの基礎がつながって学習が看護や保健医療の場において大変意味のあることであるということを知ってもらう。演繹法・帰納法両方共から理解できるように、できるだけ学生の身近な現象から事例を使って説明し、問いかける。
- ・ 基礎力のある学生には自分の興味や関心について深く見識や考えが広がるよう問いながら思考力を共に育む。

### 教育への信念

- ・ 教えることは学ぶことである。学生同士が学びあえるような環境と術を得られる教育を大切にする。
- ・ どれだけ成績低迷している学生も 学んだことが生かした体験ができれば、自ずと学習できるようになる。

## 3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）

- ・ 学生と様々な会話をして、少し流行を探しておく。その現象の中で何かの概念や考え方に近づけたり、説明が可能であれば、自分で解説したり、学生に問いかけて演繹・帰納法で解説をさせる。または、そうした原理原則に沿わない事象であれば、それはそれとしていろいろな角度から議論をする。
- ・ 可能であれば、科目内の内容から学生の興味や関心のあることを調べさせ、学生が他の学生に調べた事についてプレゼンテーションをしてもらう。準備に2,3週間かけて行う。発表準備は放置しておく、適当に表層的にしか調べない学生が多いので、そういう学生には一緒にどんな資料やサイトからもっと深層の情報を引き出せるか考えて、一緒に調べて発表まで2~4回面接してサポートしている〔異文化看護の授業において〕

## 4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・ 国家試験対策で現役生の100%合格を上げていた

## 5. 今年度の学生による授業評価より

とくにありません。

## 6. 今年度の成果

もっと教育に関わる機会を与えていただきたいが、割り当てていただいた少ない授業の中で、もしくは

は課外の希望者のみに実施した国家試験対策や英検受験、大学院受験に向けた個別チューターなどでは私の教育理念に沿って、方法も工夫しながら教育成果が得られたと考える。

## 7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

国家試験対策に向けて、どれだけ準備が整ったように見えても、過去問題から乖離したように見える問題で気が動転してしまう学生をどのように準備させるかが来年度の課題となる。学生同士で学びあうとただ単なる暗記ではなく、遠慮なく質問しあえ、思考するということが可能となる。なかなか人工的にこうしたグループを作るのは困難であるし、個別で学習したいと主張する学生の人権を無視することになる。補講も人権を言い出すと強制はできないので大変悩ましい。

授業評価にはなかったが、演習ノートにこれまでの学生と同じように、できていない処を指摘するだけだと、反感を持たれたり、両親に相談したりする精神的に揺らぎやすい学生が増えてきた。同じ内容でもコメントの書き方をできるだけポジティブに受け取ってもらえるよう工夫を始めた。例え教科書通りの抽象論を抜書きしただけであっても、まずその文章を選んで書いたところを大いに評価し、三重〇で印をつけた後、「ここにあなたの体験を具体的に書いておくと、なお素晴らしいレポートになりますね。」などと書いておくと、学生の態度が柔らかくなって、質問に来る学生が若干増えてきた。ただこの指導もパターン化しやすく、助言にそって訂正して持ってくる学生はまだ少ない。

## 8. 社会的活動等

KICC や大黒公園、で開催した国際保健室活動

国際災害看護学会で国際地域看護研究会の取り組みや国際保健室活動の広報を行った。

## 9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・ キャンパスレターなど

教員名	伊東愛	所属学科	看護学科	職名	准教授
クラス担任	1年担任および 1年Aクラス担任代表、 4年担任	クラブ顧問	なし		
委嘱委員・職務	臨地実習委員会、就職委員会、看護学科学生倫理委員会、保健師養成課程委員会				

## 1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課（**網掛け**部分は外部公表しない）科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講 時期	科目の種類	科目の形態	授業 形態	受講 者数
○公衆衛生看護展開論	N	3	前期	選択	講義	対面	11
○公衆衛生看護展開論演習	N	3	前期	選択	演習	対面	11
公衆衛生看護学実習Ⅱ	N	4	前期	選択	実習	対面	12
公衆衛生看護学概論	N	4	後期	選択	講義	対面	15
○健康相談の理論と方法	N	2	後期	選択必修	講義	対面	88
看護学研究	N	4	通年	必修	演習	対面	77
看護活動基礎実習	N	1	前期	必修	実習	対面	96

## (2)準正課、正課外の教育活動

- ・看護学研究担当学生（N4）に対し、看護師や保健師の国家試験模試の結果の見方、模試結果の活用、勉強方法、看護学研究などの他授業とのバランスのとり方などを指導した。
- ・看護学研究担当以外の学生に対しても、保健師国家試験の模試で分からなかった箇所などの質問対応を行った。

## 2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

育てたい学生像は、対象となる患者・利用者・住民などのために、真摯に誠実に考え、取り組むことのできる学生である。看護専門職者としての自覚を持ち、根拠に基づき、論理的に思考し、クリティカルに考えることができる学生である。

そのための教育のあり方は、学生に関わる際には教員自身がモデルとなるべく、思考の根拠・理由や背景を具体的に示し、行動することを心がけていることと、多様な立場の、多様な価値観を伝えるようにしている。また、ある種の答えではなく、学生への問いかけ・対話に重きを置き、学生自身の考えや思いを大切にすることを教育への信念としている。

## 3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）

- ・アクティブ・ラーニングを意識し、授業中は必ず問いかけや質問を行い、学生にマイクを渡して感想や解答など発言してもらっている。
- ・対象者の生活や思い、健康状態がイメージできるよう、実践現場での経験を盛り込み、具体例を説明している。また、事前に保健師活動が分かるような動画を視聴してもらい、次の授業でペアワークをしてもらうなど、反転授業を取り入れている。
- ・グループワークやペアワーク、個人ワークを行ってもらい、授業中に共有のために発表してもらっているが、発表に対しての感想を伝えながら、押さえてもらいたいポイントや根拠、ワークの意図などを伝えている。時には、クリティカルシンキングを経験してもらうために、学生の発表に対して、違った視点・角度からの質問を投げかけ、考えてもらうようにしている。
- ・講義科目では、毎回、感想や理解したこと・質問などを書いてもらっている。良いところを見つけてコメントを記入しているが、学生の捉え間違いや押さえ切れていなかった内容についてもコメントを記入している。
- ・実習では全日張り付き指導を行い、学生の体験を即座に捉え、学生の学びの補強と学生の希望を臨地の指導者につなげ、より学びが深まる体験の追加や臨地指導者からのフィードバックがもらえるように調整している。

## 4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・昨年度の課題を踏まえ、授業中に他の学生が見ている前での質問がしにくいなどを考慮して、授業中に質問はないかと言う問いかけを継続しながらも、質問を感想メモに書いてもらえるように、赤字で示した。学生の誤解や質問内容および回答を次の授業中に伝えるようにした。
- ・学生自身が自身を振り返られるよう、授業の感想メモでは、理解度、事前および授業中の意欲的な取り組みを4件法で尋ねる形式に変更した。

- ・ボリューム過多を避けるため、授業資料の穴埋め分量を減らし、重点はどこかが分かりやすくなるように変更した。
- ・教育改善の示唆を得るため、3/11（火）18時からオンラインで開催された全国保健師教育機関協議会主催の「公衆衛生看護学教育モデル・コア・カリキュラム 2024 改訂版」説明研修に参加した。

## 5. 今年度の学生による授業評価より

- ・『公衆衛生看護展開論演習』では改善を求める声があった。原因の一つには、演習の組み立てを昨年度までと変更した点にあると考える。変更の具体的な内容は、地域診断を後半にしたことと、科目分担者の希望により、地域診断演習の時間を減らして家庭訪問演習の時間を増やしたことである。しかし、他科目の課題との兼ね合いもあって、演習課題としてのボリュームが大きい地域診断が学生にとって負担が大きくなったようである。時間的ゆとりがあれば、もう少し丁寧に学生は演習課題に取り組み、じっくり考えることができたのではないかと考える。
- ・『健康相談の理論と方法』では「グループワークが楽しかった」という声があり、講義科目ではあるものの演習要素を取り入れていることが実践的に楽しく学ぶことに繋がっていると考える。しかしながら、多面的に、そしてクリティカルに物事を捉えるための感想メモへの教員コメントを「否定的な意見」と捉える学生もいた。コメントの意図が伝わっていないからではないかと解釈し、コメントの意図について、説明が必要であると考えた。

## 6. 今年度の成果

- ・『健康相談の理論と方法』の授業評価では、穴埋め分量を減らし、重点ポイントを示すなどの工夫を行った結果、「学生自身」は0.1ポイント下降したが、「授業内容」・「授業方法」は0.4ポイント、「学生成果」は0.3ポイント、「総合評価」は0.6ポイント上昇した。
- ・看護学研究の担当学生に対して、国試対策の指導を行ったが、対象学生は看護師・保健師ともに全員合格した。
- ・保健師の就職希望者に対して、エントリーシートの書き方、面接のポイント、課題提出について何度も面接や添削を繰り返してサポートした結果、希望者全員が保健師就職を勝ち取った。

## 7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

- ・授業時間中の入力を指示するが、変わらずアンケートの回答率が低い。回答率を上げるため、早めにQRコードを提示するなど、新たな工夫を取り入れたい。
- ・『公衆衛生看護展開論演習』の時間配分と順番をもとに戻し、学生が演習課題に時間的にも気持ちにもゆとりをもって取り組めるようにする。
- ・否定されたと捉える学生が減るよう、コメントの意図を伝えることと、クリティカルに物事を捉えることの大切さを学生に伝える。

## 8. 社会的活動等

- ・日本災害看護学会 社会貢献・広報委員として、第26回年次大会 市民公開講座「親子でチャレンジ！防災ナゾトキゲーム&防災工作」を企画（台風10号の接近により、年次大会中止）。およびニューズレター担当。
- ・昨年度まで個人情報保護委員会の委員であったことから、令和6年度個人情報保護委員会の看護学科教員（当時休職中）に代わって4月の新入生への同意書の配付・説明・回収を行った。
- ・魚崎教授の退職および令和7年度教務委員予定であったことから、魚崎教授に代わり3月27日・28日のN2・N3・N4の履修ガイダンス・保健師履修ガイダンスで説明を行った。

## 9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・シラバス
- ・学生による授業評価

- ・授業資料、manaba 配信資料（コンテンツ）
- ・学生が記載した感想メモ、ワークシート、レポート
- ・実習記録、学生が作成した資料（中間・最終カンファレンス・学内報告会の資料）、指導保健師からのメール
- ・就職の実績資料
- ・看護師および保健師国家試験の実績資料
- ・日本災害看護学会第 26 回年次大会ホームページ（市民公開講座、ニューズレター）

教員名	西村充弘	所属学科	看護学科	職名	講師
クラス担任			クラブ顧問		
委嘱委員・職務	図書委員会 委員 看護学科就職委員会 委員				

## 1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課（網掛け部分は外部公表しない）科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
○精神看護学特性論	N	2	後期	必修	講義	対面	98
課題別総合実習	N	4	前期	必修	実技	対面	76
健康支援実習Ⅱ（精神）	N	3	後期	必修	実技	対面	95
卒業研究	N	4	通年	必修	演習	対面	77
精神看護学援助論	N	3	前期	必修	講義 演習	対面	84
災害看護	N	4	前期	必修	講義	対面	82
看護活動基礎実習	N	1	前期	必修	演習	対面	96

## (2)準正課、正課外の教育活動

- ・ 「精神看護学特性論」では、今年度も本学卒業生を招聘して臨地での体験は、学生の興味・関心を引き出すことが出来、精神看護に対して現実感を修得することが出来た。  
昨年度この卒業生は、教育経験がなかったため基本的な授業設計や配布資料等の助言・指導を行ったことで、昨年度より授業の質を担保した授業が出来た。
- ## 2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）
- ・ 倫理感を身に着け自身の行動に責任を持って行動する看護師の育成。

3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングや ICT 活用等の工夫点について）
  - ・ 実習科目は巡回ではなく学生に対して臨地で指導を行い、学生が出会う現象をともに知覚し、感性で捉えた現象の意味づけを発問によって気づき、整理を手伝う役割を担う。
  - ・ 看護師の倫理的基盤の確立のための対象理解や看護実践の根拠となる理論について、ともに考えていく。
4. 今年度における教育方法改善の取り組み
  - ・ 「精神看護特性論」では、本学卒業生を講師として招聘した。また、知識の定着を確認するための確認テストを採用した。また、予習・復習が各学生のペースでできるようにと、第1回授業で全ての授業回の資料を配布した。
  - ・ 毎回の授業内容で感じたことや疑問に思ったことなどを、授業カードとして書いてもらった。これを書くことで、出席の確認も確実に行うことが出来た。また、授業中は質問できなかったことも、授業カードでは気軽に質問することが出来、個別に回答することが出来た。
5. 今年度の学生による授業評価より
  - ・ 授業カードでは、毎回の授業で何が分かりやすかったのか、分かりにくかったのか、素直に書いてもらえ、次の授業へ工夫することが出来たが、疾患についてイメージしやすいようにとの思いで DVD の比率を授業時間の 50～60% くらいにして昨年より比率を増やしたが、学生個人の学習意欲が、授業評価調査で昨年より 0.1～0.2 低くなったのは、DVD の使用比率を工夫する必要性を認識した。
6. 今年度の成果
  - ・ 「精神看護特性論」では、授業資料を第1回授業で配布したことで、欠席をした学生にも資料配布が出来た。また、毎回の授業開始時の資料配布にかかる時間を短縮することが出来た。
  - ・ 「健康支援実習（精神）」・「課題別総合実習（精神）」では、感染症による欠席学生にも、臨地での補講実習を行うことが出来た。
7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策
  - ・ 「精神看護特性論」では、DVD なども活用した、分かりやすい授業の工夫を行う。
  - ・ 「健康支援実習（精神）」では、履修学生の増員に伴い、実習施設への負担をかけ過ぎないように臨地実習の内容の工夫を行う。
8. 社会的活動等
  - ・ 日本病院・地域精神医学会総会 第 67 回兵庫大会 企画・運営委員
  - ・ 兵庫県青少年本部主催 「人とつながるオフラインキャンプ 2024」 アドバイザー

9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価

教員名	武士 由美	所属学科	看護学科	職名	特任講師
クラス担任			クラブ顧問		
委嘱委員・職務					

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課（網掛け部分は外部公表しない）科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
基本看護技術Ⅰ	N	1	後期	必修	講義演習	対面	97
基本看護技術Ⅱ	N	2	前期	必修	講義演習	対面	98
基本看護技術Ⅲ	N	2	前期	必修	講義演習	対面	98
看護活動基礎実習	N	1	前期	必修	実習	対面	97
基礎看護学実習Ⅰ	N	1	後期	必修	実習	対面	94
基礎看護学実習Ⅱ	N	2	前期	必修	実習	対面	
課題別総合実習	N	4	前期	必修	実習	対面	

(2)準正課、正課外の教育活動

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

基礎看護学領域は、看護師になるために看護の基本となる知識・技術・態度を学修する領域である。本校の理念である「人のための人になる」学生が育っていけるように、人としての倫理性を大切にしながら、自身で正しい知識をもって考え行動できる専門職者に育っていけるように関わることを理念とする。

3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）

・授業・演習科目では、数名の教員で関わるので、科目としての目的、授業担当者の授業目標を十分に理解しあい、学生のレジネスを考慮しながらどのような授業方法をとっていくかを担当者同士で十分に検討を行った。授業方法を決定後、演習の担当教員によって学びにさがでないように、中核になると

ころを十分に意見交換や確認を行い演習を行った。

・演習では、学生に自己学習ノートを作成してもらい、学生が自ら考え計画した看護技術を活用し技術の実践が行えるようにかかわった。学生によっては方法だけを羅列してくるものもいたので、根拠が明確にできるようにかかわった。

また演習開始時には、各自考えてきた事前学習(援助計画)の内容をグループ間で共有し、ブラッシュアップした計画を実践し、実践後振り返りながら看護援助も演習を行えるようにした。

(グループ間で計画し、実践を振り返り計画を追加修正する)

・個人のリフレクションの力をつけるためにも、演習の体験をリフレクティブジャーナルに記述してもらい、提出→教員のコメント→コメント返しのサイクルをとり、学生が自らの体験から自己の傾向に気づき実践可能な対策に向かっていけるような取組を行った。

・演習に使用する事例は、一人の患者を想定しその患者の状況からニーズを考え援助計画を立てれるようにできるだけリアルな患者情報を想定した。

・看護を学ぶものの態度として、看護師としての見出しなみ、健康管理、学習の準備、自己練習等ができる環境づくりと声掛けを行った。

#### 4、今年度における教育方法改善の取り組み

・3で記述した方法を学生にかかわっていったが、今年度は特に学生が自ら気づき、考えられるように、自己の行動について声掛けを行い気づけるようにした。

一方的なしおづにならないようにする

・自己で責任をとるということがどういうことかわかるように、事前準備(服装、健康管理、持参物品)、事前学習ができていない学生には、学習の準備が整った後授業、演習に入ってもらった。

できていなければどの範囲やどの人にまで影響を及ぼすかを考え、臨地ではどこまで影響胃が得るかを考えられるようにした。

#### 5. 今年度の学生による授業評価より

基本看護技術Ⅰ・Ⅱ・Ⅲの授業・演習科目の授業評価は、5段階のうちすべて4.2以上である。

学科平均と比較すると、1、授業以外での学修時間が、学科平均3.8or3.9に対して、各科目4.3-4.4であった。これは、授業方法でも記述しているように、事前学習や技術練習の課題を準備して学生が真摯に取り組んだ結果であると考ええる。

授業内容、方法、学習成果、総合評価についても、4.2-4.5という評価であるので、達成感の持てる授業であったと考える。

#### 6. 今年度の成果

授業評価からも、学生にとって達成感のある授業になったと考える。また、看護師としての態度の学修として、服装、忘れ物、提出物、事前学習そして、報告相談についてほとんどの学生がしっ

かりとできるようになってきた。学内のこの成果は、実習においても活かされたと考える。

## 7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

授業に関しては事前課題、事後課題を支持することで学生は学習に取り組むことができたが、ここにとどまらずより発展的にして学生が自ら興味をもって学習できるような授業の仕掛けづくりをして学ぶこと、技術を習得することの面白さを実感できる授業を考えていきたい。

やらされる、させられるのではなく、看護に興味をもって自身の看護師としての目標を明確にして、その目標のために患者のためにどうしていくかを考えながら授業に取り組めるような授業・演習の方法を考えたい。

## 8. 社会的活動等

### 9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・ 授業における配布、配信資料等

教員名	伊東 美智子	所属学科	看護	職名	講師
クラス担任	4年生 A クラス	クラブ顧問	なし		
委嘱委員・職務	就職委員会、国家試験対策委員会、子育て総合支援施設 KIT 連携部 高大連携：入学前教育(リエゾン)、看護学科地域交流活動				

## 1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
まなぶる▶ときわびと I	基盤	1	前期	必須	演習	対面	396
○母性援助論	N	3	前期	必修	演習	対面	92
母子支援実習Ⅱ(母性)	N	3	後期	必修	実習	対面	84
看護活動基礎実習	N	1	前期	必修	実習	対面	96
看護学研究	N	4	通年	必修	演習	対面	77
課題別総合実習	N	4	前期	必修	実習	対面	77

(2)準正課、正課外の教育活動

- ・ 看護師国家試験対策

- ・ 就職試験対策に向けた小論文やエントリーシートの添削、個人面接による志望の明確化
- ・ 学内での心肺蘇生訓練の指導、高校への出張講座

## 2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

- ・ 個々の学生に合わせ、対人援助職に就くための知識と技術の修得に向け、講義や演習、臨地実習において関わる。専門職キャリアを歩む人であるという捉えの下、人として真摯に接することに留意する。
- ・ 基盤科目では、大学における学修の基礎である、言語力や表現力を培うことを理念として取り組む。
- ・ 講義や演習では領域内で緊密に、臨地実習先では先方の管理職や学生担当者の意向も踏まえ、常に報告・連絡・相談しながら取り組む。このやり取りは、学生の教育にも繋がると意識して実践する。
- ・ 日進月歩する周産期医療の最新情報を踏まえ、講義や指導が出来るよう、情報収集に心掛ける。学内／学内の研修会や学習機会を積極的に活用し、学生の教育に反映できるよう心掛ける。

## 3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、工夫点について）

- ・ 講義においてはアクティブ・ラーニングやICTの効果的活用を目指して積極的に取り入れる。
- ・ 演習では、先輩が後輩に教える屋根瓦式教育法を活用し、教え／学ぶ双方の学びの深化を迫及する。

## 4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・ 昨年度の「母性援助論」への要望を反映し、計画を早々に発表して学生自身に見通しを立てられるように配慮した。また、スモールステップ学修を狙い、小テストも取り入れた。
- ・ 実習直前に実習場面の動画視聴を課題とし、具体的イメージを形成した上で臨地に出るようにした。

## 5. 今年度の学生による授業評価より

- ・ 授業ペースが速いとのコメントは例年通りであるが、これは講義範囲が多いため、仕方がない。

## 6. 今年度の成果

- ・ 後期の母子支援実習Ⅱ(母性)に臨んだ学生達の実習欠席は、殆ど皆無であった。
- ・ 実習総括では、臨床側から学生達に向けての苦言等はなく、教員の関わりにも好評価をいただいた。

## 7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

- ・ 次年度は母性援助論で新生児看護を担当する。臨地実習でも対象と出会う、必須かつ重要な内容である。教授方法を工夫しつつ、基礎的事項の理解と看護実践が繋がるように、努力したい。

## 8. 社会的活動等

- ・ 企業との産学連携の一環として、本学子育て総合支援施設で実証実験を開催した。そこで得られた結果をまとめ、学会発表を5つ行った(令和6年度 科研費採択テーマ)。

## 9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス、学生による授業評価
- ・ 実習総括資料

教員名	柳田 千代美	所属学科	看護学科	職名	特任講師
クラス担任	なし	クラブ顧問	なし		
委嘱委員・職務	なし				

## 1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課（**網掛け**部分は外部公表しない）科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
課題別総合実習	N	4	前期	必修	実習	対面	77
看護活動基礎実習	N	1	前期	必修	実習	対面	96
基礎看護学実習Ⅱ	N	2	前期	必修	実習	対面	98
療養支援実習Ⅱ	N	3	後期	必修	実習	対面	87
療養支援実習Ⅲ	N	3	後期	必修	実習	対面	87
看護学研究	N	4	通年	必修	演習	対面	77

(2)準正課、正課外の教育活動

- ・ 看護学科リカレント教育の講座準備と講座の助手

## 2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

専門科目において、特に臨地実習は欠かせない重要な教育場面である。生命倫理の枠組みに含まれる臨床倫理や看護倫理に基づいた知識・技能を習得するために倫理的感性の高い学生を養成する。保健科学部の教育理念にある「病める人とその家族の痛みを思い遣る気持ち」、「深い人間愛に基づくやさしさ」を育めるよう、専門職業人として看護の対象を理解し看護実践に活かすために必要な能力を育成する。

## 3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）

- ・ 臨地実習では、実習前に実習の位置づけを学生とともに理解し、対象の発達段階・発達課題を踏まえながら全体像を把握し、健康課題の抽出が遅れないよう個別に応じて指導した。
- ・ 臨地実習において、授業で学修した理論など授業資料を活用して対象理解が深まるよう促した。ま

た、対象が受ける手術の術式を学べるようを資料となるテキストを提示し、解剖生理学的な理解が深まるよう指導した。

- ・対象とのコミュニケーションによる関係性の構築は重要であるが、学生も医療チームの一員として、実習指導者との関係性の構築も必要である。対象に向き合い問題解決のために、学生自ら実習指導者の看護実践の思考を学ぶコミュニケーションの必要性を指導した。
- ・実習の自己評価と振り返りが円滑にできるよう実習の中間評価を行い、自身の実習到達レベルを見極め、不足の評価項目に対して改善点が見出せるよう助言した。

#### 4. 今年度における教育方法改善の取り組み

学生個々の実習のレディネスによっても、臨地実習に対する緊張感や能動的な行動に影響がある。学生の個別性を理解したうえで、教員として実習指導者との連携を意図的に行い、実習しやすい環境を心掛けた。

#### 5. 今年度の学生による授業評価より

- ・療養支援実習Ⅱ・Ⅲの実習評価において、概ね80点以上の高評価を得ることができていた。
- ・実習で受け持つ患者が2例目の場合の記録について、学生から不安な言動もあり領域で統一できるよう検討する。
- ・実習先の通学が遠方になる学生から交通費や宿泊代などに係る経費について課題である。

#### 6. 今年度の成果

- ・研究では、本学紀要に共著で投稿した。
- ・実習、看護学研究を担当した学生より、がんに罹患した対象をとおしてがん看護に興味を持ち、学生自身の将来像としてがん看護専門看護師を目指したいと目標を立てた学生がいた。
- ・課題別総合実習、療養支援実習で担当した学生が、実習の達成感が得られたことで、実習施設を就職先として検討するためにインターシップや病院説明会に参加した学生が6~7名いた。

#### 7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

実習において、対象の入院期間の短縮化により、看護過程の展開を記録に費やす時間と効果について検討する。また、臨床と教育のギャップの有無を検証するため、実習指導者と連携を強化するためのアプローチをはかる。

#### 8. 社会的活動等

- ・大学公開講座前期「人生会議してみませんか」
- ・はくほう会医療専門学校明石校非常勤講師「緩和ケア」

#### 9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・シラバス
- ・学生による授業評価
- ・授業における配布、配信資料等
- ・実習評価表
- ・実習後の学生アンケート

教員名	尾崎優子	所属学科	看護学科	職名	講師
クラス担任	2年生Aクラス	クラブ顧問	無し		
委嘱委員・職務	臨地実習委員会・委員 就職委員会・委員				

### 1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課（網掛け部分は外部公表しない）科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
看護活動基礎実習	N	1	前期	必修	実習	対面	96
看護対象論V(小児)	N	2	前期	必修	演習	対面	64
小児援助論	N	3	前期	必修	演習	対面	93
母子支援実習I(小児)	N	3	後期	必修	実習	対面	94
看護学研究	N	4	通年	必修	演習	対面	77
課題別総合実習	N	4	前期	必修	実習	対面	

(2)準正課、正課外の教育活動

- ・ 担任する学生の支援
- ・ 就職活動の支援
- ・ テーマ別研究（多文化子育てサロンの実施）における学生のボランティア学習の場の提供

### 2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

看護学科ディプロマポリシーに準ずる。さらに、自ら主体的に学び続ける力、他者と協働しながら自己変容できる力、臨床に適応できる柔軟性を育成したい。

### 3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）

- ・ 小児援助論では manaba を活用した反転学習によって、自ら主体的に学び続けるための習慣づけと学習内容の定着を図った。
- ・ 実際に臨地でよく受け持つ臨床事例を用いて看護展開能力の育成を図った。
- ・ 臨地実習施設の臨床指導者を演習講師とし、臨床のリアリティを追求したグループ学習（シミュレーション演習）を行った。グループで協力して取り組み、指導者の助言を活かしたリフレクション

を行えるようプログラム化したことによって、協働力、自己変容力を高める工夫をした。さらに授業と実習のギャップを埋めることで、臨床に適応できる柔軟性が身につくように工夫した。

#### 4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・ ほかの授業との課題が重なってくると追いついていけない学生も少なからずいた。授業内外で質問対応の時間をとって対応したが、課題の内容やタイミングなどを見直し、学生の負担の軽減を図る。
- ・ グループワークやシミュレーション演習ではメンタル面でのフォローもしていく。

#### 5. 今年度の学生による授業評価より

- ・ 「グループワークがたくさんあるからこそ学生同士でたくさん意見を交換することができた」という意見があった。
- ・ 「課題を出す量とペースが早い。他の科目の課題もあるのに大量にあって間に合わないことが多い」という意見があった。

#### 6. 今年度の成果

- ・ 主に担当した小児援助論は履修者全員単位修得ができた。定期試験結果については例年と大きな変化はみられていない。
- ・ 母子支援実習Ⅰ、課題別総合実習で躓く学生はなかったため、前期授業での準備が功を奏したと思われる。なお、小児とかかわった経験が乏しく実習の緊張度が高いことが実習後の学生の振り返りの中で顕著であり、講義・演習・実習の一連の過程でどのように強化するか改めて課題として明確化された。

#### 7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

- ・ カリキュラム改正に伴い、小児看護学概論・小児援助論の内容を領域教員間の協議により再編し、学生の学修をより適切に構造化する。
- ・ 小児看護学実習に保育施設での実習が取り込まれるため、その効果を検証する。
- ・ 小児援助論の科目責任者として、より効果的な学習方法を検討し実施する。具体的には、臨地実習にむけ、子どもと関わる力を鍛えるための身体知の向上を、講義と演習の両面から図る。
- ・ 課題に対する学生の心理的負担を考慮し、授業進度に照らして提示の仕方を工夫する。

#### 8. 社会的活動等

- ・ ときわ健康フェスタ（子育て支援）
- ・ まちの保健室（子育て支援）
- ・ 令和6年度テーマ別研究として多文化子育てサロン実施（健康支援・子育て支援）

#### 9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価

教員名	板垣紀子	所属学科	看護学科	職名	講師
クラス担任	N1		クラブ顧問		
委嘱委員・職務	臨地実習委員、教務委員、国際交流センター委員				

## 1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課（網掛け部分は外部公表しない）科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
基本看護技術Ⅰ	N	1	後期	必修	演習	対面	96
基本看護義技術Ⅱ	N	2	前期	必修	演習	対面	97
基本看護技術Ⅲ	N	2	前期	必修	演習	対面	97
基本看護技術Ⅳ	N	2	前期	必修	演習	対面	99
看護活動基礎実習	N	1	前期	必修	実習	対面	96
基礎看護学実習Ⅰ	N	1	後期	必修	実習	対面	90
基礎看護学実習Ⅱ	N	2	前期	必修	実習	対面	97
課題別総合実習	N	4	前期	必修	実習	対面	76
看護学研究	N	4	通年	必修	演習	対面	77
まなぶるときわびとⅡ	基礎	1	後期	必修	演習	対面	393

(2)準正課、正課外の教育活動

- ・ 入学前教育プログラムに携わった

## 2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

本学科では、“いのち”に対する豊かな感性と知性、幅広い人間性を備え、的確な看護判断と実践のための基礎的能力を養い、現代のヘルスケアニーズに応じ得るし質の高い看護専門職業人を育成することを教育理念としている。そのために、看護の対象者がよりその人らしく生きていくことを支援できる人、特に、その人への関心や気づかいを持ちその人を尊重できる高い倫理観を持った看護職者を育てたい。

## 3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）

- ・ 演習科目においては、少人数のグループを編成している。毎回の演習において事例患者を設定し、そ

の人にとって必要な看護とは何かについて、事前課題や各演習に先立ち行われる講義内容をふまえて学生同士で討議する時間を設定し、学生の気づきをもとにしながら演習を進めた。各演習終了後には、事前課題で立案してきたその人に必要な看護援助について、演習での実践を振り返り記録し、必要に応じて修正を加えるよう指導した。また、演習後にリフレクティブジャーナルを記載し、教員はそれを読みコメントをして学生自身の振り返りを深められるようにした。

- ・演習、実習ともに少人数のグループを編成し、健康管理や出欠確認、学習状況、身だしなみなど学生同士確認することで、他者への関心や気づき、他者の考えを聴き尊重することが身につけていくようにした。

- ・実習科目では、学内で学んできた内容をもとにしながらも、その人に合わせた看護を自ら思考し実践ができるよう、答えを伝えるのではなく問いかけをしながら関わった。

- ・「看護学研究」では、自身が持つ看護にかかわる関心について掘り下げ、研究疑問を見出すことに重きを置き、同じゼミ生と考える時間を作ったり、教員と一対一で対話しながら考える時間を作るようにした。

#### 4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・今年度より入職したため、前年度との比較はできない。

- ・演習科目では、学生が立案してきた看護の計画に基づき、演習を進めた。実践中での学生の気づきを大切にすることを心掛けた。学生の躓いている点、疑問点について、教員はそれをすぐに答えを伝えるのではなく、なぜうまくいかなかったのかを問いかけたり、学生同士で検討してみるよう促したり、グループで行っている点を活用し、教えあい学びあいがグループ内で進むようにした。

- ・一部の演習科目（基本看護技術Ⅲ）では、演習前に小テストを実施し、演習で必要な知識について問い、その定着に努めた。

- ・実習科目では、学生に躓きや疑問が生じたときには相談ができ解決策を自ら見出していけるよう、臨地においては教員に声をかけやすい状況を作ることを心掛けた。

#### 5. 今年度の学生による授業評価より

- ・「自分で書いた計画をグループワークや先生からの助言を通して深めることが出来る」（基本看護技術Ⅰ）、「援助中での注意点だけではなく、演習前後の指導も細かくして下さり、そこから教わった考え方を援助にも繋げる大切さを実感できた」（基本看護技術Ⅱ）、「先生がグループワーク中や生徒間での意見交換中に巡回して質問しやすい環境を作ってくれたり、質問した時には生徒自身で考え自分なりの考えが出せるように導いて下さり、非常に学びの大きい機会」（基本看護技術Ⅳ）など、少人数でのグループ活動が学生にとっては自身の考えを深めたり、教員からの助言が得やすく満足度が高まる要因となっていることが分かった。

- ・上記のような意見の一方で、「先生によって言っていることが変わることは困る」（基本看護技術Ⅰ）、「先生間の意見を一致させてほしい」（基本看護技術Ⅳ）という意見があった。患者は一人ひとり異なる。そこにかかわる看護師もまた人間でありその考え、看護観は異なる。よって、看護の方針としては

その患者にかかわる看護師間で統一していても、看護師が患者に行う看護の具体的方法は、一刻一刻と変化する患者のその時の状況に応じて変化させており、皆全く同じとは限らない。上記については授業の中で学生には伝えているが、学生には教員の意図が十分に伝わっていないように思う。正しい答えを求めようとする学生の傾向も垣間見える。次年度は、学生からの意見をふまえながらも、上記について引き続き伝えていく必要がある。また、一刻一刻と変化する患者とその看護の現場を目にすることが出来る臨地実習を機会として、学生が実感をもって理解できるように伝えてきたい。

## 6. 今年度の成果

今年度より入職したため、前年度との比較はできない。学科平均と比較すると、演習科目においては1年次科目（基本看護技術Ⅰ）では学生自身に対する評価は高いが、授業内容・授業方法・学修成果・総合評価において低かった。2年次科目（基本看護技術Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ）ではいずれにおいても概ね高かった。1年次では、前期にはなかった専門基礎科目が大幅に増え、学習をどのように進めるか手探りであったことが垣間見える。2年次では、1年次までの学習をもとにしながらすすめることができていることも、高得点につながっていたと考える。実習科目に関しては、学科平均と比較していずれの項目においても高得点であった。

## 7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

- ・学生の質が変化してきており、教員が想定していないようなことで学生は躓いたり疑問を持っているところがあるように感じられる。授業時の学生の反応や授業後のアンケート等より学生の意見をふまえながら授業を行う。

## 8. 社会的活動等

- ・特記すべき事項なし

## 9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・ 授業における配布、配信資料等

教員名	原 希代	所属学科	看護学科	職名	講師
クラス担任	4年生 B クラス	クラブ顧問	なし		
委嘱委員・職務	臨地実習委員会 国家試験対策委員会				

## 1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課（網掛け部分は外部公表しない）科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
在宅看護学概論	N	2	前期	必修	講義	対面	98
在宅看護特性論	N	2	前期	必修	講義	対面	96
在宅看護援助論	N	3	後期	必修	講義	対面	87
健康支援実習 I	N	3	後期	必修	講義	対面	87
看護研究	N	4	通年	必修	講義	対面	77

(2)準正課、正課外の教育活動

- ・臨地実習委員会
- ・国家試験対策委員会

## 2. 教育の理念(育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念)

<育てたい学生像>

看護は、科学に基づいた創造から織りなす実践であるため、創造をはぐくむことが可能な学生を育てたい。

<教育の在り方>

学生が自ら考え、創造したことを自己開示する環境を提供し、その創造を他の学生と共有し、それらを自らの成長につなげることを可能とする教育を行う。

<教育の信念>

自ら考え創造する力を育む

## 3. 教育の方法(2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングや ICT 活用等の工夫点について)

前年度に引き続き、健康支援実習 I で使用する ICT を授業で利用・活用すること、在宅看護の実践動画を授業に取り入れることで、実践に近いリアリティーを感じながら看護展開を行うことができるよう工夫する。

更に、今年度は事例を増やし、学生の看護展開の知見を増加するとともに創造性、柔軟性を養う。

## 4. 今年度における教育方法改善の取り組み

今年度は事例を増やし、学生の看護展開の知見・個性が、さらなる創造性、柔軟性を養うよう取り組む

## 5. 今年度の学生による授業評価より

授業における教室変更、授業スタイルについて、効果的でないことが指摘された。

## 6. 今年度の成果

授業の事例が少なかったことにより、内容の重なりがあった。それが効果的でないとの評価につながったと考

える。また、今年度は、情報からアセスメントを行う創造性に力を入れたことにより、昨年度と比較するとアセスメント内容に深みを得ることができた。

#### 7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

授業の事例が少なかったことにより、内容の重なりがあった。それが効果的でないとの評価につながったと考える。そのため、今年度は、事例を増加してそれらの対応を行う。しかしながら、多様な事例を学習することで、個別性や創造性を得ることは可能であるが、アセスメント力の低下が懸念される。そのため、アセスメント力の維持を事例展開までに実施する。

#### 8. 社会的活動等

医療的ケア児とその家族のための Café を 1 回/月開催する。

#### 9. 根拠資料(資料名のみ)

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・ 授業における配布、配信資料等

教員名	中村由果理	所属学科	看護学科	職名	講師
クラス担任	2 年生 B クラス	クラブ顧問	なし		
委嘱委員・職務	入試委員会、神戸常盤地域交流センター、 広報誌委員会、学部開設準備、入学前課題				

#### 1. 教育の責任(教育活動の範囲、担当科目)

(1)正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
○基本看護技術 I	N	1	後期	必修	演習	対面	98
○基本看護技術 II	N	2	前期	必修	演習	対面	93
基本看護技術IV	N	2	前期	必修	演習	対面	94
看護教育論	N	4	前期	選択	講義	対面	51
看護研究	N	4	通年	必修	演習	対面	81
看護活動基実習	N	1	前期	必修	実習	対面	98
基礎看護学実習 I	N	1	後期	必修	実習	対面	97
基礎看護学実習 II	N	2	前期	必修	実習	対面	98
課題別実習	N	4	前期	必修	実習	対面	81

(2)準正課、正課外の教育活動

- ・ 入学前課題における指導
  - ・ 入学前教育への参加 FAST の活動
2. **教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）**
- 本学科では、看護学に関する高度な専門知識・技術を持ち、“いのち”に対する豊かな感性と知性をもった専門職業人の養成を行う。看護基礎領域として看護の学び始めの学生に関わるため、看護学を学び今後看護師として自己研鑽し続けるためにも学び方も含め、学生が自ら考え判断できる人の育成をしていく。
3. **教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングや ICT 活用等の工夫点について）**
- ・ 講義においては、グループ学習などを取り入れ、考えながら講義を受講できるよう工夫し、双方向の授業展開を行なった。
  - ・ 学習ノートの作成を行い、今後の学習の積み重ねができる仕組み作りをした。
  - ・ 演習においては、グループディスカッションを取り入れ、学生同士の経験から討議することでの主体的な学習を取り入れた。
4. **今年度における教育方法改善の取り組み**
- ・ 学生の主体的な学習参加を活かせるように演習においてもグループでの意見交換などを行い看護について考える機会を設けた。そのため、ホワイトボードなどを活用しディスカッションが活発になるよう環境面からも支援した。
  - ・ 講義や演習が主体的になるよう、自己学修ノートの作成を取り入れた。また、ノート作成が学びにつながるようその都度の学習確認を行なった。
  - ・ 演習に限らず、講義などもグループ学習を意識した授業展開を行なった。
  - ・ 看護技術の習得に向けて、演習室の開放を行い、授業前の技術の確認や、学生が学習した技術を実践しながら学べるようサポートした。
5. **今年度の学生による授業評価より**
- ・ 基本 I、II ノートの活用により学生自身の評価が高いこれは、ノートの作成や事前に技術の確認などの課題があったことが背景にある。これにより意欲的に授業に参加できた。授業方法、内容などに関して評価 4 を超えてはいるが、昨年よりポイントを落としている。しかし、学生からは『グループワークや教員の助言などで理解が深まった』『ノート作成とリフレクションでの予習復習ができた』などの成果が得られている。
6. **今年度の成果**
- ・ 基本看護技術 I は、欠席者が少なくなり、事前学習は全員が行えるようになってきた。学生の看護を学ぶ準備などの姿勢を育むことができたと考える。また、それにより、平均点も昨年より上昇している。
7. **今年度の課題と次年度に向けた改善策**
- ・ 授業で使用したノートを活用できるよう、基礎看護学実習にも役立てていけるようにしていきたい。
  - ・ 実習室の開放を行い事前学習に積極的に使用できるようにすることで、看護技術の習得につながるため、実習室開放に伴い、教員も実習室に在室や担当教員の配置を行い質問をしやすい環境づくりを行

う。

## 8. 社会的活動等

神戸総合医療専門学校 言語聴覚士科、理学療法士科、作業療法士科「吸引」に関する講義を行った。

## 9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・ 授業における配布物
- ・ テスト問題

教員名	江口 実希	所属学科	看護学科	職名	講師
クラス担任	1年生 担任	クラブ顧問	なし		
委嘱委員・職務	国家試験対策委員会 委員 実習委員会 委員				

## 1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課（網掛け部分は外部公表しない）科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
看護活動基礎実習	N	1	前期	必須	実習	対面	
○精神援助論	N	3	前期	必須	演習	対面	84
健康支援実習Ⅱ(精神)	N	3	後期	必須	実習	対面	95
課題別総合実習(精神)	N	4	前期	必須	実習	対面	96
看護学研究	N	4	通年	必須	演習	対面	77
精神看護特性論	N	2	後期	必須	演習	対面	98
まなぶるときわびと1	全	1	前期	必須	演習	対面	401

(2)準正課、正課外の教育活動

- ・ 入学前課題の添削と入学後のフィードバック
- ・ チューター学生への国家試験対策

## 2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

患者と関わることに喜びを見だし、『看護とは本来、楽しくやりがいのある営みである』と実感できる学生を育成したいと考えています。技術的な巧みさ以上に、誠実さをもって看護の対象者一人ひとりに真摯に向き合う姿勢を大切にする教育を心がけています。

3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングや ICT 活用等の工夫点について）

実習前には、ICT 教材を活用して、患者とのコミュニケーション技法の練習を取り入れ、実習で出会う可能性のある看護の対象者を具体的にイメージできるよう工夫しました。また、演習授業においては、ゲストスピーカーによる実際の事例に基づいた学習の機会を設けるとともに、動画教材とテキスト教材を併用した看護過程展開の演習を複数回実施し、学生の対象理解や支援方法の考え方がより深まるよう工夫を重ねた。

4. 今年度における教育方法改善の取り組み

昨年度の授業評価で、「課題の見通しが立てにくい」「自分のペースで取り組みたい」との学生の声が多く見られたため、今年度は授業初回に、講義で演習や課題を行う意味、内容と提出方法、期限がわかる詳細な資料を配付し、予習・復習の計画を立てやすいよう工夫した。また、学生は、多くの講義受講や科目ごとの課題があり、1度の説明では課題への取り組み方やその意味を混合する様子が見られたため、説明を複数回に分ける・繰り返す、各回の授業終わりに締め切りをリマインドするなどの工夫も行った。

また、学生がこれまでの抽象的な知識を具体事例と結びつけられるように、演習授業では動画と紙上事例を連動させた看護過程の展開演習やグループワークを活用した。自己の認知と他者の認知の類似点、相違点にも気づきながら柔軟な視点を持って対象理解を進められるように工夫した。

5. 今年度の学生による授業評価より

精神援助論（演習科目）や健康支援実習Ⅱ（精神）において「対象者の気持ちを考えること」に関して、学生から「正解が分からず戸惑う」「明確な正解が提示されないと不安である」といった意見が複数寄せられた。また、他領域科目との課題提出時期が重なることにより、学習時間の確保が困難であるとの指摘もあった。さらに、講義および実習で配付し口頭説明した内容について、「聞いていない」「説明を受けていない」との意見があった。

6. 今年度の成果

実習では、「今までの大学生活で言われたことがないことを、急に実習でいわれても困る」、「毎日記録を書いて提出するのではなく、自分のペースで実習課題提出の計画をしたい」と要望が多数あった。また、病棟や実習要綱にあるルールに適應していくことに困難を訴える学生が昨年度よりも多かった。そのような状況で、学生の習熟度やニーズに合わせた教育実践と実習要項やルールの遵守の折り合いが取れるように学生と対話し、単位習得を支援することができた。

さらに、臨地実習指導研修会の開催、チューター学生の国家試験学習のサポート（チューター学生は100%合格）を行うことができた。

7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

本年度の実習において学生から「これまで指導されてこなかった病棟で求められるルールや身だしなみ、行動制限、さらには自己の体調管理を急に求められて戸惑った」といった声が昨年度より多く寄せられた。また、実習要綱・要項の理解、指導内容の受け止めにも個人差が大きく見られ、「聞いていない」「説明を受けていない」との意見があった。以上から、次年度の課題は、これまで以上に学生の習熟度や理解の程度、準備状況、生活環境、個々のニーズを踏まえた柔軟な教育方法の工夫であると感じた。具体的には、実習要項やルールの内容を事前に資料を示しながらタイミングを変えて繰り返し伝え、理解を言語的に確認するとともに、ICT教材や動画教材などを活用し、臨地実習での場面をより具体的にイメージし、行動の意味をより理解できるような準備を強化したい。また、看護技術の習得についても、基礎的な技術の習得に重点を置くのではなく、学生が「患者と関わることの楽しさ」「看護のやりがい」を実感できるような体験や、誠実に対象者と向き合う態度を育む支援をより重視したいと考える。

## 8. 社会的活動等

- ・ 看護管理者コース研修の講師：神戸大学医学部附属病院 看護実践・教育開発センター 神戸大学・兵庫県連携事業 神戸大学エキスパートメディカルスタッフ育成プログラム 管理者コース
- ・ 看護教育指導者コース研修の講師：神戸大学・兵庫県連携事業 神戸大学エキスパートメディカルスタッフ育成プログラム 神戸大学エキスパートメディカルスタッフ育成プログラム 教育指導者コース

## 9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・ 授業における配布、配信資料等

教員名	問本 弘美	所属学科	看護学科	職名	特任講師
クラス担任			クラブ顧問		
委嘱委員・職務					

## 1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課（網掛け部分は外部公表しない）科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
看護対象論Ⅳ（母性・父性）	N	2	後期	必修	講義	対面	98
母性援助論	N	3	前期	必修	演習	対面	93

課題別総合実習	N	4	通年	必修	実習	対面	
看護活動基礎実習	N	1	前期	必修	実習	対面	
基礎看護学実習Ⅱ	N	2	後期	必修	実習	対面	

## (2)準正課、正課外の教育活動

- ・ 助産師養成課程進学希望学生の進路相談

### 2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

社会が少子化していく中で、子育ては自然の営みから学習を経て習得するものへと変容した。加えて、核家族化が進み、親族からのサポートが受けにくい環境となり、母親の孤立、産後うつ、DV と子ども虐待等の社会問題が顕在化した。看護学科 DP の「いのちに対する温かいまなざし」とは、病を患う患者に対してだけでなく、子を産み育てる女性と子ども、そしてその家族にも向けられるべきものである。よって、母性看護学の授業・演習・実習を通し、看護学生にはマタニティサイクルにおける女性と家族に対する看護はもちろんのこと、子育て中の家族を支援する視点を身に着けてほしい。

### 3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングや ICT 活用等の工夫点について）

- ・ 看護対象論では DV と子ども虐待の講義を担当した。グーグルフォームを用いてデート DV に関する意識調査を行い、自らの持つジェンダーバイアスや支配関係への気づきを促した。マナバを用いて事前に事例資料を読み授業に参加することで、暴力被害者の心理状態を理解できるよう工夫した。
- ・ 母性援助論では、妊娠・出産・子育てや新生児という学生にとって出会う経験の少ない対象を取り扱う。そのため、図書館で提供されている動画を補助教材として活用し、イメージ化を促した。身近な女性へのインタビューを事前課題とし、産後の母親と新生児の生活や体験を知った上で講義に参加してもらった。講義とそれに対応する演習を組み合わせ、知識を使えるレベルまで向上させるようにした。シミュレーション演習や上級生参加型の屋根瓦演習を演習に取り入れ、目指すべきモデルをイメージするとともに、実習に必要な知識・技術・心構えが具体的にイメージできるようにした。健康教育に関しては、妊娠期の保健指導案作成をテーマにグループワークを課すことで、様々な保健指導を効率的に網羅し、実習につなげられるようにした。

### 4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・ 実習事前学習の見直しを行い、学生が作業的に資料をまとめ書き写すだけではなく、実践を見据えた事前学習となるように配慮した。また、各周産期における重複を整理し、学生の負担感を軽減した。関連科目の授業中から作成を促すだけではなく、実習オリエンテーションにて事前学習を回収し、再度指導を入れることを通して、学生が実習で活用できるように支援した。また、実習経験の浅い各論実習前半期に実習を行う学生には、学内実習にて実習場面の DVD を視聴し、看護の実践と判断に耐えうる内容になっているか、行動レベルで追記を行えるように支援した。

- ・ 母性衛生学会学術集会(@長崎)に参加し、DX を取り入れた母性看護学実習の工夫について、他大学の発表より学んだ。
5. **今年度の学生による授業評価より**
- ・ 病気の対象者と受け持つ他領域と異なり、母性看護学では健康な母子を受け持ち、看護実践を行う。そのため、臨地実習で自分が実際にどのような実践を行うのか、あいまいなイメージで実習に臨む学生も多い。しかし、受け持ち母子や実習指導者との関わりを通して、健康な母子にも様々な看護援助が必要であることに気づくことができていた。最初は「母性って実習でなにしたらいいんやろう。」と首をかしげていた学生が、実習最終日が近づくにつれ「母性って褥婦さんに聞いて確認しないといけないこととか、退院後の育児に向けてやらないといけないことがいっぱいですね！」と話してくれるようになった。母性看護の実践における基礎的能力を養うという、実習目的がしっかりと達成されたことを実感した一場面であった。
6. **今年度の成果**
- ・ 母子支援実習Ⅱにおいて、前年度と比較し S 評価学生が 8→13%、A 評価学生が 35→52%と、全体的に平均点が上昇した。
7. **今年度の課題と次年度に向けた改善策**
- ・ 母性援助論において、GWが学生の主体的な学びにつながっていることを実感する一方で、積極的にGWへ参加しない・できない学生が一部いることも事実である。そのような学生のメンバーシップ発揮を促し、すでに積極的に参画できている学生は評価面でインセンティブを得られるよう、GWにおける学生相互評価の導入を検討している。
8. **社会的活動等**
- ・ 性暴力被害者支援員養成講座の基礎編を受講した。今後実践編の受講を行い、支援員として貢献できるようにする予定である。
9. **根拠資料（資料名のみ）**
- ・ シラバス
  - ・ 学生による授業評価
  - ・ 授業資料
  - ・ マナバの受講票（授業毎の学びの記述）

教員名	住田 隼一	所属学科	看護学科	職名	助教
クラス担任	看護学科 1 年生	クラブ顧問	男女バレーボール部		
委嘱委員・職務	広報誌委員会				

## 1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課（網掛け部分は外部公表しない）科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
まなぶる▶ときわびと I	全科	1	前期	必修	対面 遠隔	演習	396
看護対象論 V	N	2	前期	必修	対面	演習	97
小児援助論	N	3	前期	必修	対面	演習	91
課題別総合実習	N	4	前期	必須	対面	実習	9
母子支援実習 I (小児)	N	3	後期	必修	対面	実習	84

(2)準正課、正課外の教育活動

特になし

## 2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

専門科目では、子どもと接したことがない学生に子どもの特徴や生活についての知識を養い、3年生の実習前の援助論ではより臨床での看護の知識を養い、小児看護とは何かを学んでいただきたい。また、臨地実習では講義や演習で学んだことの意味づけや根拠づけができるよう場を意識して学生に関わった。

基礎科目では、大学での学修や社会に出てからの準備としての基本的姿勢などについて身に付けてもらえるように関わった。

## 3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングや ICT 活用等の工夫点について）

講義では、講義内容に関連した臨床での経験を交えて伝えることを意識した。また、映像から学生たちに何ができるかを投げかけ、グループワークを行い自分たちで考える時間を設定した。

演習では、より臨床に近い経験ができるように学生に場面の提供や質問の投げかけを行った。

## 4. 今年度における教育方法改善の取り組み

今年度、初めての講義担当であり科目責任者と相談しながら講義の内容について検討し、基盤となるものはできた。しかし、講義後のリフレクションで学生への伝え方や講義の構成についても改善点がみられたため、今後はブラッシュアップしていく。

## 5. 今年度の学生による授業評価より

講義系の授業に関しては、事前課題の説明不足の指摘や課題の多さの指摘があったため、次年度はその点を検討・改善していく必要がある。講義の中身としては総合評価 4.2 であったためより学生にあった講義を考えていく。

実習系の授業においては総合評価 4.7 点と概ね高評価であった。実習病院についての意見や学内実習の在り方についての意見も少数であるが寄せられたため、次年度はその点については検討と改善を行っていく必要がある。

## 6. 今年度の成果

特になし

## 7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

実習系の授業に関しては、学生に伝えるべき点と考えてもらう点の区別が難しく、学生に考える時間を設定できていないことが多く、伝えることが主になってしまっていた。そのため、次年度は学生に伝えるべきことと考えてもらう点の区別をつけ、指導していきたい。

## 8. 社会的活動等

KICC での多文化サロンの開催(年×2回)

## 9. 根拠資料(資料名のみ)

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・ 授業における配布、配信資料等

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	大森 雅人	所属学科	こども教育学科	職名	教授
クラス担任	無		クラブ顧問	無	
委嘱委員・職務	副学長、学部長、ときわ教育推進機構長、運営委員会委員、学長会議委員 入試委員会委員、子育て総合支援施設KIT連携部委員				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課（**網掛け**部分は外部公表しない）科目責任者の科目には○印

科目名	開講 学科	開講 年次	開講 時期	科目の 種類	科目の 形態	授業 形態	受講 者数
○保育内容（環境）	E	2	前期	選択	演習	対面	51
子どもと絵本 I	E	3	前期	選択	演習	対面	50
○教育と情報	E	4	前期	選択	講義	対面	26
○卒業研究 I	E	3	前期	選択	演習	対面	87
○卒業研究 III	E	4	前期	選択	演習	対面	76
○子どもと環境	E	4	後期	選択	演習	対面	61
教職実践演習（幼稚園・小学校）	E	4	後期	選択	演習	対面	71
○卒業研究 II	E	3	後期	選択	演習	対面	86
○卒業研究 IV	E	4	後期	選択	演習	対面	79
○教育方法・技術論	N	2	後期	自由	講義	対面	5

(2)準正課、正課外の教育活動

特記事項無し

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

保育・幼児教育や小学校以降の学校教育において求められる普遍的な資質・能力を土台としながら、子どもたちが将来直面するであろう多様で予測困難な環境変化に対して、共に考え、共に乗り越えていける保育者・教育者の育成を目指したい。

テクノロジーの急速な進化、少子高齢化といった社会的課題、地球温暖化をはじめとする地球規模の環境問題、そして複雑化・流動化する国際情勢など、教育現場を取り巻く状況は日々変化している。こうした現代的課題に柔軟かつ前向きに対応していくためには、単なる知識の受容にとどまらず、自ら問いを立て、考え、対話し、行動につなげていく力が不可欠であると考え。したがって、教育においては知識の一方的な伝達ではなく、学生自身が主体的に学びに関わり、思考のプロセスを重視す

る学びの構築を基本とする。こうした学びを積み重ねた学生こそが、未来の不確実性に対応しうる感性と知性を備え、子どもたち一人ひとりに寄り添いながら、共に生きる社会を築いていく担い手となることが期待されると考える。

### 3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングや ICT 活用等の工夫点について）

- ・一方的な課題提示による演習ではなく、「実体験」→「実体験の振り返りと共有」→「振り返りの内容を踏まえての総括的な講義」の順で授業を進行した。
- ・講義科目であっても、少人数での開講の場合には、双方向での対話型の授業やグループワークを積極的に取り入れた。
- ・授業内や授業後の振り返り等で manaba を活用した。学生の記述をチャット GPT の分析機能を活用して要約した上で、次の授業でフィードバックを行った。
- ・manaba の相互閲覧機能を活用して、提出されたレポートを共有して意見交換する授業を実施した。

### 4. 今年度における教育方法改善の取り組み

昨年度に実施した、manaba 上に提出された学生の学びに関するテキストデータの分析においては、個人情報削除したうえで、ChatGPT の分析機能を活用し、従来取り出すことが困難であった集合知を可視化し、学生へフィードバックする取り組みを行った。今年度はこの取り組みをさらに発展させ、抽出された集合知を単なるフィードバックにとどめず、それを活用した「振り返りのプロセス」自体に教育的価値があることを重視した。学生同士の学びの軌跡を共有し合い、自身の理解の位置づけや視点の違いに気づく機会を設けることで、振り返りと相互の学び合いを促進した。また、manaba のコメント機能等を活用し、学生が他者の振り返りにコメントを残す活動も取り入れた。これにより、学びの内容だけでなく、「どのように学んだのか」「なぜそのように考えたのか」といった学習過程に目を向ける姿勢を育成することができた。今後も、AI に代表されるテクノロジーを活用しつつ人間同士の対話による深まりも融合させながら、学びの質を高める教育方法の改善に取り組んでいく。

### 5. 今年度の学生による授業評価より

今年度の授業評価におけるスコアは、概ね高い評価が得られた点において昨年度と同様の傾向を示した。一方で、例年課題となっている「カテゴリー I（学生自身）」のスコアについては、今年度も大きな変化は見られず、引き続き学生の効力感を高める工夫が求められる状況にある。今後も有効な打開策を模索し、継続的に改善に取り組む必要がある。

自由記述に関しては、昨年度に指摘された内容——授業後の振り返り課題の提出期限の設定、演習における準備物の伝達時期等——について、今年度は意図的な対応を行った結果、同様の否定的な記述は見られなかった。そして、概ね授業方法に関して好意的なコメントが寄せられた。以上から、改善の効果が現れたものと捉えられる。

今後も、学生からのフィードバックを丁寧に受け止め、教育活動に反映させていくことで、教育方法の向上を目指していきたい。

## 6. 今年度の成果

学生が自ら考え、他者と対話しながら学びを深める機会を重視したことで、主体的な思考力や協働的な態度の育成に寄与したと考える。また、振り返り活動や ICT の活用を通じて、学びの過程を意識化し、自己と他者の学びを相対化する力を養うことができた。また、AI による分析であることを明示的に示したので、そうしたテクノロジーの活用が教育・保育の実践において効果的に活用できる実践例を例示する効果もあったと考える。

## 7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

今年度も、学生の「カテゴリー I（学生自身）」のスコアが伸び悩んだことから、依然として自らの学びに対する効力感や主体性の向上が課題であると認識している。学生が他者と比較して自己評価を下げる傾向も見られ、個別の達成感を実感できる仕組みの必要性を感じている。しかしながら、このカテゴリーに関しては、学科平均の値も低いため、私だけの課題ではないと考えられる。それだけに、抜本的な改善策の立案には困難が伴うが、諦めることなく取り組んでいきたい。

また、ICT や AI を活用した集合知の活用や振り返りの可視化には一定の成果があったものの、活動の一部が「作業」に感じられ、学びとしての意味づけが十分に浸透していない学生もいた。この点も次年度に向けた改善課題である。こうした課題に対応するために、次年度は、manaba や AI を活用したフィードバックを、より個別化・対話的な学びにつなげる工夫を進めたい。また、学期の初期段階から、振り返り活動の目的や意義を明確に伝え、学生自身が学習の意味を主体的に捉えられるよう支援したい。

## 8. 社会的活動等

- ・ 高大連携事業の一環として、神戸鈴蘭台高校、須磨友が丘高校、六甲アイランド高校で総合的な探究の時間の講師を務めた
- ・ 全国保育士養成協議会理事（令和 6 年 6 月まで）を務めた。
- ・ 社会福祉法人 2 法人（ときわぎ会、坂田福祉会）の評議員を務めた。

## 9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・ 授業で使用したスライド、配布物、manaba 上にあるコンテンツ等
- ・ 理事委嘱状
- ・ 高校で使用した資料や生徒が作成した研究成果の記録等

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	光成研一郎	所属学科	こども教育学科	職名	教授
クラス担任	なし	クラブ顧問	硬式テニス部		
委嘱委員・職務	学科長 リエゾンプラン委員長 運営委員会 学長会議 子育て総合支援KIT 連携部委員				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課（網掛け部分は外部公表しない）科目責任者の科目には○印

科目名	開講 学科	開講 年次	開講 時期	科目の 種類	科目の 形態	授業 形態	受講 者数
○「まなぶる▶ときわびとⅠ」	基盤	1	前期	必修	演習	対面と一部遠隔	396
○「教育と人間」	基盤	1	前期	選択	講義	対面と一部遠隔	68
○「まなぶる▶ときわびとⅡ」	基盤	1	後期	必修	演習	対面と一部遠隔	393
○「教育原理」	E	1	後期	必修	講義	対面と一部遠隔	68
○「教育方法・情報通信技術活用論」	E	3	後期	必修	講義	対面と一部遠隔	91
○「防災教育実践」	E	4	後期	選択	演習	対面	31
卒業研究Ⅰ	E	3	前期	必修	演習	対面	86
卒業研究Ⅱ	E	3	後期	必修	演習	対面	86
卒業研究Ⅲ	E	4	前期	必修	演習	対面	79
卒業研究Ⅳ	E	4	後期	必修	演習	対面	79

(2)準正課、正課外の教育活動

- ・入学前教育の企画、運営
- ・教員採用試験面接対策指導
- ・履歴書の書き方等キャリア指導

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

専門科目では、次代を担う子ども育成にかかわる保育者、教員を育成するために、学生が教育学の理論、教育方法（ICT 機器の活用を含む）を修得し、現場で実践力を発揮できる学生を養成する。

基盤科目では、学習習慣の確立、能動的、自律的な学習態度の育成を意識しながら、専門職業人に求められる論理的思考力を育成する。

3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングや ICT 活用等の工夫点について）

- ・基盤教育では、事前事後学修の習慣をつけることをねらいとし LMS マナバを活用している。
- ・個別学習として、課題についてリサーチを行い、それを協働学習として学生同士で議論し、最終的に発表する授業展開を設計している。
- ・ICT 機器の活用を実践する授業設計を行っている。(ICT 活用の双方向授業、自主学習支援)
- ・AL 授業におけるリフレクションの重視 (グループとしてのふりかえり、個人としてのふりかえり)

#### 4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・演習では、反転授業を取り入れ、事前事後学修の定着を図った。
- ・アクティブ・ラーニング科目では、とりわけリフレクション (ふりかえり) を重視し、グループおよび個人としてのふりかえりの両面を徹底した。
- ・新規科目「防災教育実践」においては、教育現場 (神戸市立蓮池小学校) と企業 (凸版印刷) 連携し、防災教育を小学校で実践した。また JICA 関西で実施された「いざ、美かえる大キャラバン」に参加し、幼児・児童に対して防災教育を実施した。

#### 5. 今年度の学生による授業評価より

「教育原理」、「教育方法・情報通信技術活用論」では、授業評価が大きく下がった。それらの科目の特性として知識の教授が求められることが考えられる。しかしながら昨年度と大きく授業内容および方法を変えていないことから、学生の変化も一因として考えられる。学習習慣の確立、学び方を修得していない学生が増えたことにより、知識教授型の授業においては、これまでの授業方法では、理解がすすまないと考えている。知識の運用が求められる時代であるが、その基礎となる知識の修得が保育士、教員には求められるということ、知識が保育・教育現場でなぜ求められるのかを丁寧に説明していく必要性を感じる。

#### 6. 今年度の成果

教育成果としては、新規演習科目「防災教育実践」を担当し、他の担当者と科目の内容及び方法について検討し実践することができた。「防災教育実践」は、名前の通り実践する演習科目である。それゆえ教育現場での授業実践を学びの集大成にしたが、学生はやりがいや達成感を感じ取れたことが学生の授業評価記述欄から読み取れた。授業評価も 4.9 と高い評価となった。

研究成果としては、科研費 2 年目の成果として、本学紀要に「新入生の初年次科目の学習管理システム上のログと学業成績と非認知能力との関係」掲載することができた。

#### 7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

授業評価が下がった「教育原理」と「教育方法・情報通信技術活用論」においては、これまで以上に AL を授業に取り入れて、学生が調査、ディスカッション、発表する授業回数を増やすことを考えている。もはや学生が一方向的に授業を受講する知識教授型授業の成果は一部の学生にしか通じなくなってきていると痛感している。

## 8. 社会的活動等

- ・「防災教育学会」理事
- ・「防災教育学会」で長田区のフィールドワークを担当
- ・東雲女子大学で「学生と教員がともに主体的になる授業」をテーマに講演
- ・「いざ、美かえる大キャラバン 2025」への参加

## 9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・ 授業における配布、配信資料等

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	松元英理子	所属学科	こども教育学科	職名	教授
クラス担任	なし	クラブ顧問	なし		
委嘱委員・職務	個人情報保護委員				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課（網掛け部分は外部公表しない）科目責任者の科目には○印

科目名	開講 学科	開講 年次	開講 時期	科目の 種類	科目の 形態	授業 形態	受講 者数
○基礎生物	M	1	前期	自由	講義	対面	26
○生命科学	M	1	後期	必修	講義	対面	89
○遺伝子・染色体検査学	M	2	後期	必修	講義	対面	87
○遺伝子・染色体検査学実習	M	3	前期	必修	実習	対面	94
総合医学検査学特論	M	4	後期	選択	講義	対面	71
総合医学検査学演習	M	4	後期	必修	演習	対面	91
○基礎生物学	R	1	前期	自由	講義	対面	61
○現代社会と生命科学	基盤	1	前期	選択	講義	遠隔	140

(2)準正課、正課外の教育活動

- ・ 医療検査学科入学前教育（生物）課題作成および指導
- ・ 医療検査学科 国家試験対策
- ・ 新入生対象市民救命士講習インストラクター

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

医療検査学科の専門分野の教育においては、専門職として求められる理解を伴う知識とともに、今後の科学技術の発展にも対応できる力をつけることを目的としている。そのため講義科目においては、担当分野の臨床検査に必要な知識を表面のみで理解するのではなく、根底の自然科学から繋げて理解できる学生の養成を心掛けている。また実習科目においては、必要な技術の修得だけでなく、実習で得られたデータを講義科目で身につけた知識と結びつけて論理的に考察し表現する力を育成することに重点を置いている。更に、特に低学年開講の科目においては、学習習慣をつけることも目標の一つとしている。

基盤分野の担当科目は、その目的を科学リテラシーの醸成に置き、特に人の健康や遺伝子にかかわる現代の課題について、医療系以外の学生にも、自身のこととして考えるきっかけと基礎的な知識をわかりやすく提供することを心掛けている。

### 3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングや ICT 活用等の工夫点について）

#### <専門分野>

- ・ 授業の予習（＝高校までの学習内容や基礎となる関連科目の復習）と復習を通して、授業時間外学習を促すとともに、臨床検査に関連する複数の科目・分野を結びつけて理解を深めることを目指している。
- ・ 授業中の質問：一方的な知識の伝達に陥らないよう、学生への質問をクイズ形式などで積極的に取り入れている。
- ・ manaba の活用：上記の予習・復習課題の他に、授業で使用したスライド等の掲載や、定期試験・国家試験対策としてのドリル問題などで活用している。
- ・ 講義科目・実習科目ともに、科学技術の発展に対応する力をつけることを目的に、「資料を読み、考え、解を導く課題」を出している。

#### <基盤分野>

- ・ 現代の生命科学に関連する課題について、学んだ知識をもとに自らのこととして考えることを目的として、グループワークを実施している。
- ・ 「遠隔」開講の科目では、予習・復習、資料等の掲載、オンデマンド動画配信、グループワークなどを、すべて manaba を活用して実施している。

### 4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・ 学生間の理解度の差が拡大しているように感じられるので、授業時間だけでは充分理解できない学生のために以下の対策を充実させた。

授業で扱った解析原理や課題の解説を、復習用の動画（スライドショー）にして manaba で公開。課題のなかで正答率の低いものについて、類似問題を作成して配布。

### 5. 今年度の学生による授業評価より

昨年度の総合評価と比較すると、医療検査学科「基礎生物」「遺伝子・染色体検査学」は上昇し、診療放射線学科の「基礎生物学」は低下した。

「遺伝子・染色体検査学」については、昨年度に引き続き、理解が遅れる学生への対応を丁寧に行ったことが功を奏したと考えられる。

診療放射線学科「基礎生物学」については、コメント欄には肯定的な意見しかみられないため、評価が低下した原因は明らかにはできないが、学生の変化に対応できていない可能性がある。

学生からのコメントでは、説明方法、授業スライド、manaba 活用（資料の提示、課題）、自己検体を用いた実習やレポート指導などについて肯定的なコメントが寄せられた。一方、話すスピードや配布資料などについて改善を求めるコメントもみられた。多様な学生の要望に応える難しさを感じる。

## 6. 今年度の成果

2025 年度前期に開講されるこども教育学科「理科実験Ⅱ（生物分野を担当）」については、法改正に伴い授業時間と回数が変更になったためシラバスの見直しが必要となった。そのため、具体的な実習項目と方法を、資料調査と予備実験を通して検討し決定した。これに沿って、実習で必要な器具・試薬類の購入および実習室の整備を行った。また、授業で使用する資料作成にも取り掛かった。

医療検査学科の「遺伝子・染色体検査学」では、昨年度に引き続き、正答率の低い課題について追加の課題や manaba での解説を実施した。その結果、定期試験での類似問題では一定の正答率が得られた。

医療検査学科全体で取り組んだ国家試験対策では、今年度の合格率が 96.3 %と、全国の新卒平均を 2.3 ポイント上回る結果を維持することができた。

## 7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

多様な考え方をもち、授業の理解度も異なる学生たちの満足度と成果を上げる教育の難しさを実感している。個々の学生のニーズに応じた教育コンテンツの開発が今後の課題である。

次年度開講の「理科実験Ⅱ」は初めて担当する学科であるため、学生の準備状況やニーズを把握して、臨機応変に授業を進める必要があると考えている。

## 8. 社会的活動等

## 9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・ 授業における配布・配信資料

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	中田尚美	所属学科	E 科		職名	教授
クラス担任	3 A、3 B	クラブ顧問	無			
委嘱委員・職務	個人情報保護委員会委員長、図書委員会委員、紀要委員会委員 教育推進センター委員					

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
○保育原理	E	1	前期	必修	講義	対面	69
大学道場ミニゼミ A	基盤	1	前期	自由	演習	対面	10
卒業研究 1	E	3	前期	必修		対面	5
卒業研究Ⅲ	E	4	前期	必修		対面	6
○保育内容（人間関係）	E	2	後期	選択	演習	対面	76
○こどもと人間関係	E	4	後期	選択	演習	対面	31
卒業研究Ⅱ	E	3	後期	必修		対面	5
卒業研究Ⅳ	E	4	後期	必修		対面	6
保育・教育課題研究 1	E	2	後期	選択		対面	
保育・教育課題研究Ⅱ	E	3	前期	選択	演習	対面	3 3
こどもと絵本 1	E	3	前期	選択	演習	対面	5 0

(2)準正課、正課外の教育活動

- ・ 就職面接の指導

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

専門科目では、保育士・幼稚園教育教諭を養成するために、保育や保育方法の知識・技能の習得とともに、保育現場で対応できる実践力と職業倫理を持った学生を養成する。

3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングや ICT 活用等の工夫点について）

- ・ 演習では、学生同士がペアであるいは少人数でワークできる時間を複数回設定した。

4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・ 演習では、毎回ミニレポート提出を行い、翌週に返却、双方向のやり取りに努めた。

#### 5. 今年度の学生による授業評価より

- ・ 全般的に学生自身の学習時間が短めであった。授業内容と課題の在り方について考えていきたい。
- ・ 原理系の科目においては抽象的なテーマが多く、興味が持てなかったようである。今後はより具体的な話題を取り上げていきたい。

#### 6. 今年度の成果

- ・ 演習でペアワーク、少人数のグループワークを取り入れたため理解が深まったようであり、定期試験では平均 79 点と昨年度より 4 ポイント向上した。

#### 7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

- ・ 4 年次後期の科目で、実習における学びを言語化する機会を何度か設けたが、言語化が難しい傾向がみられた。次年度は言語活動の充実にも取り組んでいきたい。

#### 8. 社会的活動等

#### 9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	中西 利恵	所属学科	こども教育学科	職名	教授
クラス担任	2年		クラブ顧問		
委嘱委員・職務	紀要委員会（委員長）、E科就職委員会、E科臨地実習委員会、 子育て総合支援施設KIT連携部、保育・幼児教育コース長				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課（網掛け部分は外部公表しない）科目責任者の科目には○印

科目名	開講 学科	開講 年次	開講 時期	科目の 種類	科目の 形態	授業 形態	受講 者数
○保育内容総論	E	1	後期	選択	演習	対面	42
○保育内容（健康）	E	2	前期	選択	演習	対面	51
○保育・教育実践演習Ⅱ	E	2	通年	必修	演習	対面	51
○子どもと健康	E	4	前期	選択	講義	対面	43
○教職実践演習 （幼稚園・小学校）	E	4	通年	選択	演習	対面	72
○子どもと絵本Ⅰ	E	3	前期	自由	講義	対面	50
○子どもと絵本Ⅱ	E	3	後期	自由	講義	対面	49
保育実践演習	E	4	後期	選択	演習	対面	64
保育・教育課題研究Ⅲ	E	3	後期	選択	演習	対面	31
卒業研究Ⅰ	E	3	前期	必修	演習	対面	8
卒業研究Ⅱ	E	3	後期	必修	演習	対面	8
卒業研究Ⅲ	E	4	前期	必修	演習	対面	6
卒業研究Ⅳ	E	4	後期	必修	演習	対面	6
○学校保健	N	2	後期	選択	講義	対面	59
子ども学	O	2	後期	選択	講義	対面	63

(2)準正課、正課外の教育活動

- ・ 保育士・幼稚園教諭採用試験対策として主に私立の面接指導、エントリーシート・自己紹介書の添削指導、および、私立・公立の実技試験指導。
- ・ 「ときわの森おはなしとあそびのひろば」の実施と実施にかかる指導。

## 2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

- ・ 豊かな人間性と理論に裏付けされた実践的な教育力を持ち、新しい時代や社会に対応できる質の高い保育者を養成する。
- ・ 4年間を通して、主体的に学ぶ態度の育成、進路に対する意識の形成、課題を自ら発見して研究する力を養成する。
- ・ まずは、子どもが信頼を寄せることのできる「豊かな人間性」をもった人材を育成する。
- ・ さらに、社会情勢・教育的課題は今後も変動するものであり、新たな課題を掌握・予測し、それに柔軟に対応する力も育成したい。

## 3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）

- ・ 「保育内容（健康）」では、就学前の子どもの発達の実際の姿から理解を深めるため、年齢ごとの発達の様相をとらえた映像教材を活用、その解説ノートを作成している。さらに、「こんなときどうする」ノートも活用し課題に取り組んだり、学習ポートフォリオ的要素を持たせ授業ファイルを作成している。
- ・ 「子どもと健康」では、4年次に実施する最後の保育実習体験を活かした課題設定を工夫している。設定した課題にグループで取り組むことにより、保育者としての専門性を高めるだけでなく、就職先の保育現場で求められる園内研修の疑似体験的な実践教育を行っている。
- ・ 「保育内容総論」では、1年生科目である点をふまえ、実際に園で撮影した子どもたちの園生活の動画を編集し教材化している。また、第3回～13回授業でグループ・ミニワークを導入。グループは毎回異なるメンバーで構成することでアクティブ・ラーニングの精度を高めている。さらに、保育の内容を豊かにするための遊びや児童文化財について実際に遊んでみて、楽しんでみる体験的な学習も導入している。
- ・ 保育内容演科目の模擬保育実践では、学生同士の他者評価（コメントシート）と自己評価（ふり返りシート）を併用した評価方法と、ワークシートを組み合わせた学びの確認方法を実施している。
- ・ 「保育・教育課題研究Ⅲ」は、『令和5年度 こども家庭庁主催 初任主任保育士研修』で講義を担当している「保護者支援・子育て支援」の内容を活用し、最新の統計による授業資料を作成している。
- ・ 「保育実践演習」では、ドキュメンテーションをテーマに「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」をとらえたエピソード動画を教材に、ドキュメンテーションの作成に取り組んでいる。
- ・ 「学校保健」では、あえてテキストを使用せず、毎回授業用スライドとその他資料を配布し、各自が「授業ファイル」を作成、完成させていく過程を通して、復習に重点をおいた学修の定着を図っている。

## 4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・ 「保育・教育実践演習Ⅱ」では、1年次「保育・教育実践演習Ⅰ」から実施するKIT実習の課題設定において昨年度から科目間連携に取り組んできたが、今年度はふり返りの方法や記録の提出方法

でも統一化による改善を図り、段階的な学びの強化・充実を図ることができた。さらに、保護者支援力についても開発したチェックシートを活用し、学生が自己評価を通して課題を意識化しやすいよう改善した。

- ・ 「保育内容総論」でも「保育・教育実践演習Ⅰ」と科目間連携を図り、低年齢児対象の絵本の選定と読み聞かせの実践を導入した。
  - ・ 「保育内容総論」「保育内容（健康）」では、グループ・ミニワークを導入する授業回数を増やした。各回、乱数表によりメンバー編成したが、クラス全員との意見交換を体験でき、学生から高評価であった。
  - ・ 「子どもと健康」では、A・Bクラス混合でのグループ分けによりグループ・ワークの充実が図られた。
5. 今年度の学生による授業評価より
- ・ 以下、主担当の科目について分析する。
  - ・ 「保育内容（健康）」の自由記述に、『模擬保育など実践的な授業を通して、確実に知識や技術が身についているなど体感できている』『子どもがどのように発達していくかを学ぶことが出来た』とあった。昨年度の授業評価より高くなっており、授業内容や方法の改善の効果がうかがえる。
  - ・ 4年生科目「子どもと健康」は、評価5分野のうち特に、授業方法・学修成果・総合評価は4.8であった。『保育所保育指針の内容をよく理解できた』と自由記述にもあり、4月から保育現場で就労するにあたり、指針の内容を徹底的に分析し、理解することが目標の一つでもあったので、達成できたと考える。
  - ・ 1年生科目「保育内容総論」では、毎回異なるメンバーでのグループワークにより『今まで話したことのない人と話すことができた』ことで、様々な意見に触れ、学びの充実につながれたと考える。前年度の授業評価より5分野とも0.1~0.2ポイント高くなっていた。「保育・教育実践演習Ⅰ」と科目間連携を図り、KIT実習で実践する低年齢児対象の読み聞かせの演習を導入した。「実践の現場で役に立ちそうでよかった」や「手遊び、折り紙、素話、絵本、すべてとっても楽しかったし、将来使えるところがとてもよかった」とあり、演習活動の成果がうかがえた。
  - ・ 「学校保健」については、あえてテキストを使用せず、毎回スライド資料を授業資料として配付し、各自が「授業ファイル」を作成し、復習を充実させることができたと思われる。試験の結果、9割の学生が80点以上を獲得していた。
  - ・ 「保育・教育実践演習Ⅱ」は、良かった点として「自分で作った新聞記事の課題を班に分かれて共有して、様々な情報を得ることができた点」「実習で、普段はあまり関わるることができない保護者の方と関わる機会があり、様々な話を聞くことができた点」「実習を通して改善点や良かったことを見つけることができた点」等挙げられており、本科目の4つの到達目標の達成度の高さがうかがえた。

## 6. 今年度の成果

- ・ 「保育内容（健康）」では、評価5分野の平均は4.4であり、学年平均4.2より0.2ポイント高く、

特に授業内容、授業方法、総合評価においては0.3ポイント高くなっていた。昨年度の授業評価からも高くなっており、授業内容や方法の改善の効果がみとめられた。

- ・ 「子どもと健康」では、評価5分野の平均は4.6で、学年平均4.2より0.4ポイント高かった。特に、授業方法・学修成果・総合評価は4.8であった。課題設定とグループ・ワーク実施方法の工夫による成果と考える。
- ・ 「教職実践演習」では、テーマ『実習を伝える』活動への取り組み方法を、各年度からコース別に改善し、大きく授業評価が向上した。本年度も4年生学年平均が4.2、本科目は4.4であったことから、成果を維持できた。
- ・ その他演習系の科目については、「5.今年度の学生による授業評価」で記述したとおり、今後体験する学外での実習や就職に役立つという評価が得られた。
- ・ 「学校保健」の試験結果は、81名受験中、90点以上が64.2%、80～89点が25.9%、70～79点が8.6%、60～69点は1.2%であった。あえて教科書を使用せず、授業ファイル作成による復習を重視した学習方法の成果と考える。
- ・ 「子どもと絵本Ⅰ」「子どもと絵本Ⅱ」は『認定絵本土養成講座』指定科目であり、履修条件が他科目よりも厳しく設定されているが、50名中、前期で履修を取り止めた1名以外49名が単位を取得し、『認定絵本土』資格の認定申請ができた。こども教育学科4年生に49名の認定絵本土誕生を実現できた。

## 7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

- ・ 次年度より開講となる「保育・教育課題研究Ⅰ」は、Energyプランの保育・幼児教育コースの中核となる科目である。学年進行中であるため4年生との学年間連携がまだできない点について工夫する。さらに、2年生「保育・教育実践演習Ⅱ」との科目間連携方法については、次年度は試行的な実施となるため、6名の担当者と連携を密にしながら展開する。
- ・ 「子どもと健康」は、次年度の保育・幼児教育コースの学生が77名と多いため、受講者数も多くなると予想される。今年度の教育方法を生かしながらグループワークや成果発表の方法について検討する。
- ・ 「保育・教育実践演習Ⅱ」と「保育・教育実践演習Ⅰ」のKIT実習で、今年度試行したチェックシート「保育者養成段階において求められる保護者に対する支援を実践できる力に関する評価尺度」について、結果を分析し、次年度でのより効果的な実施と指導につなげる。
- ・ 今年度、新たな学習環境として「ときわの森」の活用方法、教材研究、科目間連携方法等の開発に取り組んできた。次年度は、Energyプランの「保育・教育課題研究Ⅰ」での活用や科目間連携により、より効果的な活用に向け試行する。2年間（2023・2024）のテーマ別研究の研究成果も生かし検討する。
- ・ 今年度「ときわの森おはなしとあそびのひろば」は、本学子育て総合支援施設として新たに加わった「ときわんタルミ」で実施した。「ときわんタルミ」は規模が大きく、参加親子も多かったことによる課題をふまえ、次年度以降も実施に向けてプログラムを検討する。
- ・ 今年度5月に認定絵本土証を授与された4年生で、地域の宮川小学校で開催されている読み聞かせ

ボランティアによる「宮川文庫・おはなしだいすきグループ」の活動に参画し、ベテランボランティアから学ぶ機会を得た。12月には4年生主催で『ときわの森おはなしのひろば』（おはなしだいすき クリスマス会）を企画し、開催した。次年度も社会貢献的な交流活動の場づくりの課題に取り組む。

## 8. 社会的活動等

- ・ 高大連携事業の一環として、神戸鈴蘭台高校「総合的な探求の時間」の授業を2コマ担当。さらに、神戸鈴蘭台高校と須磨友が丘高校の取り組み成果の発表会（探求祭）に参加。
- ・ 兵庫県教育委員会特別非常勤制度により、兵庫県立篠山鳳鳴高校の「発達と保育」の授業を6コマ担当
- ・ 八尾市子ども・子育て会議委員 委員長
- ・ 松原市子ども・子育て会議委員 副委員長、松原市児童福祉審議会委員 委員長
- ・ 高石市子ども・子育て会議委員 副委員長
- ・ 三田市子ども審議会委員 副委員長
- ・ 寝屋川市社会福祉審議会委員、社会福祉法人設立認可等審査専門分科会委員
- ・ 湊川短期大学附属キッズポート保育園 及び ぽるとこども園 第三者評価委員
- ・ 「大阪市子どもの読書活動推進連絡会」学識経験者として助言・講評を担当
- ・ 「令和5年度 こども家庭庁主催 初任主任保育士研修」講師を担当

## 9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス ・ 学生による授業評価 ・ 授業における配布、配信資料 ・ 定期試験問題
- ・ 2024年度テーマ別研究申請書（ブランディング研究）
- ・ 認定絵本土養成講座 修了者認定申請書（令和7年3月5日）
- ・ 令和6年度 こども家庭庁主催 初任主任保育士研修資料
- ・ 令和6年度 大阪市子どもの読書活動推進連絡会」実施報告書

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	牛頭 哲宏	所属学科	こども教育学科	職名	教授
クラス担任		クラブ顧問			
委嘱委員・職務	義務教育コース コース長 教職支援センター センター長 研究倫理委員会 副委員長 就職委員 臨地実習委員 子育て総合支援施設 KIT 連携部委員				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課（網掛け部分は外部公表しない）科目責任者の科目には○印

科目名	開講 学科	開講 年次	開講 時期	科目の 種類	科目の 形態	授業 形態	受講 者数
○総合的な学習の時間の指導法	E	3	前期	必修	講義	対面	10
○教科指導法(国語)	E	3	前期	必修	講義	対面	10
○教科指導法特論Ⅱ	E	4	前期	選択	講義	対面	19
○教育実習指導	E	3	前期	必修	演習	対面	10
○総合的な学習の時間の指導法	N	2	後期	必修	講義	対面	7
○教科指導法特論Ⅲ	E	4	後期	選択	講義	対面	19
○教育実習(小学校)	E	3	後期	必修	実習	対面	10
○チーム学校論	E	3	前期	選択	講義	対面	12
○インターンシップ B	E	4	後期	選択	実習	対面	1
教科指導法特論Ⅰ	E	3	後期	選択	講義	対面	19
保育教育課題研究Ⅲ	E	3	後期	選択	演習	対面	32
保育・教育実践演習Ⅰ	E	2	通年	必修	演習	対面	59
保育・教育実践演習Ⅱ	E	2	通年	必修	演習	対面	16
教職実践演習	E	4	後期	必修	演習	対面	72
子どもと絵本Ⅱ	E	3	後期	選択	演習	対面	49
アカデミックライティング	基盤	1	後期	必修	演習	遠隔	417

(2)準正課、正課外の教育活動

- ・ 教員採用試験対策としての、面接指導・小論文の添削指導・模擬授業対策指導・場面指導

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

- ・ 本学を卒業した学生が義務教育の教員として社会に貢献できるように全面的に支援している。この目標を達成するために、専門科目を通じての知識と技能の習得に焦点を当てている。また、学生が教育現場で遭遇する可能性のある様々な状況への対応力を養うこと、さらには高い職業倫理を備えた行動ができるようにすることにも注力している。

3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）

- ・ 遠隔と対面の両方の授業において、学生の学ぶ意欲を喚起するカリキュラムを構築した。
  - ・ 子育て総合支援施設 KIT の利用児童が増加したことにより、学生の実習の在り方を再構築した。
4. **今年度における教育方法改善の取り組み**
- ・ 学生の期待に応えるためにも今年度は、さらに学生のニーズを掘り起こし、現場で役立つ教科指導法の授業改善に努めた。
  - ・ 実習指導では、ディスカッションを充実させ、授業実践力と評価眼を鍛える構成に改善した。
  - ・ 教員採用試験対策である授業時間外の学修では、Tokiwa's ラーニング(e ラーニング教材)による ICT を活用した基礎学力の定着、学力の維持向上や学習の習慣化を図っている。
5. **今年度の学生による授業評価より**
- ・ 教員免許のための必修科目においては、授業改善の成果によって、学生から「面白い」「ためになる」などの意見が多くみられた。しかし、授業の面白さと、教育現場で学びの成果が生かせることは別問題である。教育実習だけではなく、正式採用後にも生きる知識や技能を伝え、自らが改善し応用できる原理原則を指導していきたい。
6. **今年度の成果**
- ・ 教員採用試験対策として、8 カ月にわたり 3 年生と 4 年生を指導した。その結果、4 年生 19 名が教員採用試験に挑戦し正規教員 13 名 常勤講師 2 名 合計 15 名が小学校教員として4月から教壇に立つ。
  - ・ また、一般就職や大学院進学の支援も行い 4 名の学生が進路を決定し、義務教育コースの 4 年生全員が就職を確定した。
7. **今年度の課題と次年度に向けた改善策**
- ・ 授業 DATA のエビデンスに基づいた授業改善。
  - ・ 令和 4 年度に採択された科研について、最終年度の研究を遂行したが、1 年間の延長を行いさらに深い研究を遂行する。
8. **社会的活動等**
- ・ 成協信用組合において新入職員研修会の講師を務めた。
  - ・ 神戸市立五位ノ池小学校学校運営協議会委員として学校運営に関する指導助言と講演を行った。

**根拠資料（資料名のみ）**

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	橋本 好市	所属学科	教育学部	職名	教授
クラス担任	なし		クラブ顧問	なし	
委嘱委員・職務	ハラスメント防止対策委員会委員長、E 科就職委員会委員長、E 科臨地実習委員会委員、E 科将来構想委員会委員、大学院協定校交渉等担当（兵庫教育大学学部・教職大学院接続部会委員）、社会福祉法人協定交渉担当				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課（網掛け部分は外部公表しない）科目責任者の科目には○印

科目名	開講 学科	開講 年次	開講 時期	科目の 種類	科目の 形態	授業 形態	受講 者数
○社会福祉	E	1	前期	必修	講義	対面	63
○子ども家庭福祉	E	1	後期	必修	講義	対面	48
○保育実習指導Ⅰ（社会福祉施設）	E	3	後期	必修	演習	対面	76
○保育実習指導Ⅲ	E	4	後期	必修	演習	対面	15
○保育実習Ⅰ（社会福祉施設）	E	3	後期	必修	実習	対面	
○保育実習Ⅲ	E	4	前期	必修	実習	対面	
大学道場 mini ゼミ A	基盤	1	前期	選択	演習	対面	20
保育・教育課題研究Ⅰ	E	2	後期	選択	演習	対面	
保育・教育課題研究Ⅱ	E	3	前期	選択	演習	対面	
保育・教育課題研究Ⅲ	E	3	後期	選択	演習	対面	
卒業研究Ⅰ	E	3	前期	必修	演習	対面	
卒業研究Ⅱ	E	3	後期	必修	演習		
卒業研究Ⅲ	E	4	前期	必修	演習		
卒業研究Ⅳ	E	4	後期	必修	演習		
保育教育実践演習Ⅰ	E	1	通年	必修	演習		
保育教育実践演習Ⅱ	E	2	通年	必修	演習		

(2)準正課、正課外の教育活動

- ① 就職委員会 就職ガイダンス（3年・4年）
- ② 就職内定先への挨拶訪問（卒業生）
- ③ 模擬面接指導（保育・幼児教育コース3年・4年）
- ④ 履歴書指導（保育・幼児教育コース3年・4年）
- ⑤ 保育実習指導（保育・幼児教育コース3年・4年）
- ⑥ 保育実習先への訪問指導（保育・幼児教育コース3年・4年）

- ⑦ 見学・体験実習引率（E科1年・保育・幼児教育コース2年）
- ⑧ 保育実習先に関係する各種団体・連盟との関連業務
- ⑨ 就職に関係する各種団体・連盟との関連業務

## 2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

保育者養成のために、専門科目ではその基盤となる社会福祉・児童福祉等の法制度の理解と、その専門的知識・技能の習得とともに、保育・社会福祉の実践現場で対応できる実践力と職業倫理を確立した学生を養成したい。

卒業研究等の演習科目では、社会福祉専門職の一員として主体的に学び続け、キャリアを積み重ねながら取得資格を増やし、資格に応じた業務に貢献できる実践者の育成を目指している。

## 3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）

- ・講義では、法治国家である以上、法律を読み解くことのできる保育者の養成を図り、全ての保育福祉制度と実践が法律に基づいていることを理解させる。
- ・テキストには「社会福祉小六法」を用いて、法律の解釈から関連諸制度の繋がりを把握させることで、専門職としての社会的意義と社会的立ち位置を理解させる。

## 4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・卒業研究では、主体的に学ぶことによる知識の深化に喜びを感じるように、毎週課題を与えてレジュメ作成と発表を課し、議論の場を設定している。
- ・講義内容の分かりやすさと新情報を提供できるよう、常に国内の保育福祉制度の把握に努め、講義内容に反映している。
- ・講義内容を反復できるよう、適宜に講義内容をレジュメ化し、manabaにて掲載することで各自の復習に活用できる体制をとっている。

## 5. 今年度の学生による授業評価より

講義系科目については、概ね高評価をいただいているが、この評価に甘んじ慢心せず、毎年度の講義内容には新情報を踏まえた更新を図る。

## 6. 今年度の成果

- ・県内優良社会福祉法人との良好な関係を維持し、本学科学生の実習及び就職への成果を出すことができている。
- ・学生のニーズに適した教授方法（遠隔講義・資料の工夫）、manabaの活用（資料提供）、最新情報を盛り込む等、学生の理解度と定着への工夫を図ることができたことは、授業評価に確認できる。

## 7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

- ・学生の理解度と定着への工夫を図っているが、今後もmanaba等を活用しつつ、講義内容を精査し、社会的動向に応じた内容を提供していく。
- ・科研の成果を踏まえ、講義等への反映への工夫をしていきたい。

## 8. 社会的活動等

- ・神戸大学 大学院 人間発達環境学研究所 非常勤講師（臨床心理実践演習）
  - ・社会福祉法人 白百合学園 理事
  - ・社会福祉法人 うるま福祉会 評議員
  - ・社会福祉法人 陽気会 評議員
  - ・社会福祉法人 みかり会 評議員
  - ・日本保育者養成教育学会 査読委員
  - ・日本子ども家庭福祉学会 査読委員
  - ・兵庫県施設保育士養成協議会 会長
- 他

## 9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・ 授業における配布、配信資料 等

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	山田 秀江	所属学科	こども教育学科	職名	教授
クラス担任	2年生	クラブ顧問	なし		
委嘱委員・職務	図書委員（副委員長）、保護者のためのオープンキャンパス実行委員 E科臨地実習委員、就職委員				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講 学科	開講 年次	開講 時期	科目の 種類	科目の 形態	授業 形態	受講 者数
○保育指導法	E	3	前期	必修	演習	対面	74
○保育原理	E	1	前期	必修	講義	対面	58
○教育実習指導	E	3	前期	必修	演習	対面	83
○幼児理解	E	2	前期	必修	講義	対面	51
○子どもの表現文化	E	4	前期	選択	演習	対面	9
○保育・教育課程論	E	2	後期	必修	講義	対面	55
○保育者論	E	1	後期	必修	講義	対面	41
教育実習（幼）	E	3	後期	必修	実習		72
保育・教育実践演習 I	E	1	通年	必修	演習	対面	59
保育・教育実践演習 II（保・幼）	E	2	通年	必修	演習	対面	51
保育・教育課題研究 II	E	3	前期	選択	演習	対面	29
卒業研究 I	E	3	前期	必修	演習	対面	86
卒業研究 II	E	3	前期	必修	演習	対面	77
卒業研究 III	E	1	前期	必修	演習	対面	86
卒業研究 IV	E	1	後期	必修	演習	対面	77
教職実践演習（幼・小）	E	4	後期	必修	演習	対面	77

(2) 準正課、正課外の教育活動

- ・ 公立保育所、幼稚園、認定こども園採用試験の2次・3次試験（模擬保育・実技試験等）の指導
- ・ 常盤女子高校 体験授業『保育の魅力～大学で学ぶこと～』
- ・ 神戸鈴蘭台高校、伊丹北高校、三木高校、滝川高校、神戸学院大学附属高校にて体験授業、分野別説明会
- ・ 健康フェスタ あそびの森「ストーンペインティング」での準備と実践に関する学生指導

## 2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

- ・子どもや保護者の思いに寄り添い、子どもの主体性を大事にした保育が展開できる保育者を養成したい。また、幼児期は遊びを通して学ぶ時期であるため、幼児期にふさわしい遊びを知り、その遊びを子ども自ら発展的に展開していくための指導力や援助能力を身につけてほしい。特に演習科目では、何事も積極的にまた前向きに取り組む姿勢やグループで協働的に行動する態度を育成したい。
- ・私自身が個々の学生の特性を理解し、それぞれの願いや考えに寄り添い、学生自ら学びを深めていけるような支援を行いたいと考える。

## 3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングや ICT 活用等の工夫点について）

- ・動画を用いて子どもの行動を観察したり、実践事例を読み解いたりして、子どもの内面や発達の理解が深まるようにした。さらに、グループで事例の考察を行い、保育について考える機会を作った。それにより、自分とは異なる視点があることに気づき、保育を考える上で多様な見方があり、対話を通して協働的に取り組む重要性を感じられるようにした。
- ・保育指導法ではグループでの教材研究や指導案の作成を行い、模擬保育を実践した。模擬保育の後に振り返りと実践内容の研究討議を行った。
- ・講義形式の授業においても、グループディスカッションやグループでの指導案作成などを取り入れ、一方的な授業にならないよう、可能な範囲でアクティブ・ラーニングを取り入れた。
- ・応答用のソフトを使用し、授業中に学生に質問し、スマホで回答を求め、その結果を即座にスクリーンに表示して、学生間で意見の共有ができるように工夫した。学生がそれぞれの意見を共有したり、他の学生の考えを取り入れたたりしながら授業を進められるように ICT を活用した。

## 4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・昨年度の学生による授業評価では、「グループディスカッションの時間が短く、不満を感じた」という学生がいたので、講義とグループディスカッションの時間のすみ分けを事前に明確に伝え、昨年度よりは長めにグループディスカッションの時間をとった。

## 5. 今年度の学生による授業評価より

- ・「保育原理」では学生の授業評価が学科平均より低い傾向にあった。保育・幼児教育コースだけでなく、義務教育コースの学生も履修しているため、保育に関心がもてない学生がいると推察できる。全ての教育の基礎となる保育・幼児教育について、コース関係なく関心をもって授業が聞けるよう、知識の教授とともに、学生間の対話を取り入れ、保育観について自分なりの考えが持てるような授業にしていきたい。
- ・学生自身の学習時間が短い科目が多かったので、授業課題の再検討や manaba を使った反転授業なども検討したい。

## 6. 今年度の成果

- ・ 保育・教育課程論の総合評価が昨年度より、「0.5」ポイント高くなった。学生からは指導案作成や月案作成に関する指導について、よく理解でき、勉強になったとの意見が複数あった。
- ・ 子どもの表現文化の総合評価が「5.0」と高い評価を得られた。劇遊びやペープサートなどを取り入れたおはなし会を附属ときわ幼稚園で実践し、事後の振り返りも行い深い学びが得られたようである。

## 7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

- ・ 昨年度同様、講義科目での授業評価が演習科目よりも低い結果となった。昨年度よりは少し改善したが、次年度はさらに工夫し、学生が能動的に取り組めるようなアクティブ・ラーニングも適切に取り入れ、学習成果が上がるように努めたい。

## 8. 社会的活動等

- ・ 関西教育学会第76回大会 幼児教育B分科会 司会担当
- ・ 兵私幼協 養成校実習担当者意見交流会参加
- ・ 神戸市私立幼稚園連盟 養成校との懇談会参加

## 9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・ 授業における配布資料

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	山下敦子	所属学科	こども教育学科	職名	教授
クラス担任	1年	クラブ顧問	なし		
委嘱委員・職務	SD 委員長、教職支援センター副センター長、ときわ教育推進機構委員 臨地実習委員副委員長、子育て総合支援施設 KIT 連携部委員				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課（網掛け部分は外部公表しない）科目責任者の科目には○印

科目名	開講 学科	開講 年次	開講 時期	科目の 種類	科目の 形態	授業 形態	受講 者数
○保育・教育実践演習 I	E	1	通年	必修	演習	対面	59
○教職論	E	2	前期	免許必修	講義	対面	16
特別支援教育	E	3	前期	免許必修	講義	対面	87
総合的な学習の時間の指導法	E	3	前期	必修	講義	対面	10
教科指導法特論 II	E	4	前期	選択	講義	対面	19
教育実習指導	E	3	前期	必修	演習	対面	84
子どもと絵本 I	E	3	前期	選択	演習	対面	50
総合的な学習の時間の指導法	N	2	後期	必修	講義	対面	7
○国語	E	2	後期	免許必修	講義	対面	16
教科指導法特論 I	E	3	後期	選択	講義	対面	10
教職実践演習	E	4	後期	必修	演習	対面	72
○アカデミックライティング	基盤	1	後期	必修	演習	遠隔	417
教育実習(小学校)	E	3	後期	必修	実習	実習	—
○インターンシップ A	E	2	後期	選択	実習	実習	16
○介護等体験	E	4	後期	必修	実習	実習	19
○保育・教育課題研究 III	E	3	後期	選択	演習	対面	32
教科指導法特論 III	E	4	後期	必修	演習	対面	19

(2)準正課、正課外の教育活動

- ・ 教員採用試験にむけての面接指導、論文指導、模擬授業対策、場面指導
- ・ 進路相談

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

- ・ 将来、教職に就くことを念頭に、教師に必要な資質・能力の育成、実践力の育成を第一に考えている。すなわち、高い倫理観、実践的な指導力、臨機応変に行動できる対応力、人間関係力等を育

成することに注力している。これらの力の育成に関しては、授業だけではなく、教員採用試験対策や日頃の関わりの中でも常に意識し、全人教育として取り組んでいる。

### 3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）

- ・ 基盤科目「アカデミック・ライティング」では、学生にリフレクションを毎回実施し、理解度や定着度をメタ認知させた。その内容を分析し、次の講義資料に反映させた。また、研究の一環として、ライティングに関するチェックリストを開発し、論文化につなげた。
- ・ 「インターンシップ A」、「教育実習指導」では、学生が実際に体験した事例を取り上げながらディスカッションを行ったり、模擬授業を実施したりして実践力が身につくようにした。
- ・ 専門科目においては、アクティブラーニングをファシリテートできる人材を育成することをめざし、学生が探究する活動を多く取り入れた。
- ・ 「教職論」「国語」においては、実際の授業の様子を動画等で視聴し、実践的な思考や指導技術を育むようにした。

### 4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・ 「学校経営ディレクター」（京都大学私学経営アカデミー）の資格を2025年3月に取得。
- ・ 前年度の学生による授業評価では、言語活動を実際に行うことや、教育現場の実際を見聞する授業が大変役にたったという評価が多かった。今年度も、「国語」の授業では、言語活動を実際に体験したり、言語活動を開発したりすることを多く取り入れた。
- ・ 学習者用デジタル教科書（小学校国語）を購入し、学生にライセンスを配布した。この取り組みにより、授業前に教材研究をする学生が増え、より高度な授業内容を実施することができた。
- ・ 「教科指導法特論 I」では、現職の小学校教員をゲストスピーカーに招聘し、学生が教職のライフステージを意識したり学び続ける教師としてモデリングできるようにしたりした。

### 5. 今年度の学生による授業評価より

- ・ 専門科目では、「わかりやすい」「役にたった」という評価が多かった。実践的な指導力を育成することを今後も意識していきたい。
- ・ 基盤科目では、「文章の書き方がよくわかった」「文章の構成の仕方がわかった」という意見が多く見られた。ライティングは、習熟の個人差が大きい分野である。途中で挫折して単位を取得できない学生もいることから、文章表現力や読解力に課題を抱える学生への支援、指導をより一層行っていきたい。

### 6. 今年度の成果

- ・ 教員採用試験対策を教職支援センターとの連携を密にして行った。教科や教職教養の知識の定着を図ること、実践的な指導力を向上すること、教師としての心構え等を育成できたと考えている。

- ・ 各教育委員会との連携を図り、教員採用試験についての情報共有や講師登録、教師育成講座への連携を行うことができ、学生の進路指導、就職につなげることができた。
- ・ テーマ別研究で「大学生の読解力分析に基づく『アカデミック・ライティング』における教授法の開発」に取り組んだ。オンデマンド型の授業と添削指導の教材パッケージを開発し、授業に反映することができた。
- ・ アクティブラーニングを取り入れ、学生主体となる授業を行うことができた。

## 7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

- ・ アカデミックライティングでは、習熟別の教材を開発したり、文章表現のためのチェックリスト等を改善したりする。
- ・ 精神発達症の特性をもつ学生が増加していることから、合理的配慮、ジョブマッチング等の進路指導などのあり方についても研究、実践していきたい。学科のFDでも取り上げることを計画していきたい。
- ・ 授業に関しては、リフレクションとフィードバックに力をいれ、より主体的な学びになるように改善していく。

## 8. 社会的活動等

- ・ 神戸市立駒ヶ林小学校学校評議委員
- ・ 枚方市支援教育審議会 副委員長
- ・ 小学校国語教科書（東京書籍）編集委員
- ・ 明石教育研究所スーパーバイザー
- ・ 大阪市教育委員会がんばる先生支援事業における指導助言
- ・ 大阪市教育研究会国語部教員研究発表会への指導、講演
- ・ 大阪府教育庁研究指定校における指導助言（国語教育、特別支援教育、学校図書館教育）
- ・ 枚方市教育委員会における指導助言（国語教育、特別支援教育、幼小連携）
- ・ 兵庫県播磨町立小学校、こども園における指導助言（国語教育、特別支援教育、幼小連携）
- ・ 高知市教育委員会における指導助言（国語科教育）
- ・ 茨木市教育委員会における指導助言（国語教育）
- ・ 伊丹市教育委員会における指導助言（幼児教育、幼小連携）
- ・ 尼崎市教育委員会における指導助言（幼児教育、幼小連携）
- ・ NPO 法人「ERP 教育研究所 教師力向上研究会」役員

## 9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・ 授業における配布、配信資料等

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	笹井隆邦	所属学科	こども教育学科	職名	准教授
クラス担任	なし	クラブ顧問	なし		
委嘱委員・職務	入試委員会				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課（網掛け部分は外部公表しない）科目責任者の科目には○印

科目名	開講 学科	開講 年次	開講 時期	科目の 種類	科目の 形態	授業 形態	受講 者数
卒業研究Ⅲ	E	4	前期	必修	演習	対面	5
卒業研究Ⅳ	E	4	後期	必修	演習	対面	5
○人類と地球環境	基礎	全	前期	選択	講義	対面	86
MiniゼミA		1	前期	選択		対面	10
MiniゼミB		1	後期	選択		対面	10
保育・教育課題研究Ⅱ	E	3	前期	選択	演習	対面	
○生き物と自然の力	E	4	後期	選択必修	演習	対面	3
子どもと環境	E	4	後期	選択	演習	対面	
保育・教育課題研究Ⅲ	E	3	後期	選択	演習	対面	

\*生き物と自然の力 は受講者が 2名のため、実施しませんでした。

(2)準正課、正課外の教育活動

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

自然に関心を持ち、接することのできる学生を育てたい。

3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）

身近な自然に触れるために、大学の裏山に入って作業をしたり、様々な生き物を連れてきて触れてもらう

4. 今年度における教育方法改善の取り組み

昨年はあまり生き物を持ってこれなかったので、何かしら持ってくるようにした。

5. 今年度の学生による授業評価より

人数の多い 人類と地球環境でみると、昨年度は 3.2・4.5・4.6・4.3・4.6 であったので少し評価が上がった。

## 6. 今年度の成果

自由記述欄に、生き物に触れることができ、興味深い授業であった という記述がみられ、成果があったと感じる。

## 7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

人類と地球環境が、前期の後半に移ったため、補講が入り、授業の後半に集中してしまった。来年度は、定年のためありません。

## 8. 社会的活動等

20240904 六甲藤原台幼稚園 講演会 生き物と触れあう

20240905 北六甲幼稚園 講演会 生き物と触れあう

20240906 六甲幼稚園 講師 藍那里山公園で虫取り

20240910 育英幼稚園 講演会 生き物と触れあう

20240911 米田こども園 講演会 生き物と触れあう

20241206 北六甲幼稚園 講師 ネイチャクラフト

## 9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・ 授業における配布、配信資料等

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	脇本 聡美	所属学科	こども教育学科	職名	准教授
クラス担任	4年Bクラス	クラブ顧問	美術部		
委嘱委員・職務	国際交流センター副センター長、教務委員				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課（**網掛け**部分は外部公表しない）科目責任者の科目には○印

科目名	開講 学科	開講 年次	開講 時期	科目の 種類	科目の 形態	授業 形態	受講 者数
○英語コミュニケーションⅠ	基盤 (M)	1	前期	必修	演習	対面	75
○小学校英語	E	2	前期	選択	講義	対面	16
○教科指導法（外国語）	E	3	前期	選択	講義	対面	10
保育・教育課題研究Ⅱ	E	3	前期	選択	演習	対面	29
教科指導法特論Ⅱ	E	4	前期	選択	講義	対面	19
国際理解	基盤		前期	選択	講義	対面	65
卒業研究Ⅰ	E	3	前期	必修	演習	対面	86
卒業研究Ⅲ	E	4	前期	必修	演習	対面	79
○英語コミュニケーションⅡ（義務教コース）	E	1	後期	選択	演習	対面	21
○英語コミュニケーションⅡ（保・幼教育コース）	E	1	後期	選択	演習	対面	37
保育・教育課題研究Ⅲ	E	3	後期	選択	演習	対面	32
教科指導法特論Ⅲ	E	4	後期	選択	講義	対面	19
卒業研究Ⅱ	E	3	後期	必修	演習	対面	86
卒業研究Ⅳ	E	4	後期	必修	演習	対面	79
○海外研修	E	3・4	後期	選択	演習	対面	11

(2)準正課、正課外の教育活動

・教員採用試験の英語個別指導

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

基盤教育の「英語コミュニケーションⅠ・Ⅱ」及び「コミュニケーションイングリッシュ」では、英語をコミュニケーションのためのツールの一つと捉え、英語を使いながら習得していくという概念に基づき、それを実践することをティーチャー・ビリーフとしている。

専門科目では、義務教育の教員を養成するために、教科の知識や教授法を習得とともに、現場での実践力やコミュニケーション力を養うことを目指す。

「海外研修」や「国際理解」では、グローバル化する社会で必須の多様性を受け入れる姿勢や共感力を養う機会や環境を学生に提供し、実感をともなった学びとなるよう授業設計を行い実施している。

### 3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）

・「英語コミュニケーションⅠ・Ⅱ」では、英語を使って伝えたいことを発信する活動として、一人ずつにパワポを用いた英語発表を行わせている。英語原稿作成では、一人ずつに個人指導を行っており、必修授業であってもテラーメイドの教育を心掛けている。また、英語によるメッセージを理解する活動のために、オーセンティック教材を使用している。各自がICT教材により授業外学習で理解できたことを、授業では教員が作成したガイドをもとに、グループで共有し、理解を深めていくグループワークも行っている。

・専門科目の「小学校英語」では、初等英語教育で活用できる英語の歌、絵本、英語俳句などの教材に触れ、活動を体験した上で、グループワークにより外国語活動を計画し、指導案を作成し、模擬授業を行っている。また、外国語教育の目的の一つでもある、様々な文化を受容する柔軟な考え方や姿勢の育成のために、青年海外協力隊として海外派遣の経験を持つゲストスピーカーによる多文化共生をテーマとする講義の時間を設定した。「教科指導法（外国語）」では、グループでの教材研究や授業計画を行った上で、模擬授業を行う活動を設けた。

・「海外研修」ではシドニーを新たな研修地をとし、小学校1校と幼児教育・保育施設2園で教育実践見学と日本の遊びを紹介する活動実施の研修を行うことができた。ホームステイや教育施設での研修を通して、多様なものの見方や考え方を培う機会を提供することができた。

### 4. 今年度における教育方法改善の取り組み

・グループワークの準備がしやすいように各ユニットでワークシートを作成した。また、基盤教育科目の語学の授業で行っているグループワークの成果物は他のグループのものも見れるようにしてほしいというリクエストに応え、今年度はmanabaで公開した。コメントでは他グループのグループワークの内容が確認できたところがよかったというコメントがあった。学生が授業外でも学習しやすい環境を心掛けたところが今年度の授業評価のポイントアップにつながったのではないかと。「学生自身」の項目ではほとんどの科目で学科平均を上回った。

### 5. 今年度の学生による授業評価より

・基盤教育科目の語学授業では、今年度も英語発表が高評価であった。発表をするのも聴くのも楽しかったというコメントや発表が上手くできたことで自信がついたというコメントが複数見られた。今後も伝えたいことをわかりやすく英語で伝える活動を続けていきたい。また、語学授業でもグループワークで協働学習を行うことがよかったという意見も見られた。

・「小学校英語」「教科指導法（外国語）」の授業は概ね高評価であった。教え込むことより、活動を通して、教育現場で活用できる新しい知識を増やし、それを使っていけるような授業を今後も目指したい。

・「海外研修」の高評価であった。自由記述には「自分の中の考え方や視野が広がりとても良い経験

になった」、「海外の教育施設訪問、ホースステイ体験をしてみて何でもやってみようという考え方がなった」などのコメントが見られた。

## 6. 今年度の成果

・語学授業では、学生が授業外でも学習しやすい環境を心掛けたところが今年度の授業評価のポイントアップにつながったのではないかと。特に「学生自身」の項目ではほとんどが学科平均を上回った。

・コロナ以降初めてとなる「海外研修」では、コーディネーター探しから始め、本学こども教育学科を英語で紹介する資料を作成し、現地のコーディネーターと打合せや調整を重ねた。同時に学生が行う活動や英語の指導も行い準備を行った。現地の教育施設で行った日本の遊びを紹介する活動も子どもたちと接する学生たちの様子も高評価をいただいた。また、日本でこれまで見てきた教育とは違う教育理念や方法を目にすることで学生たちは様々な気づきがあり、教育実践に対する視野だけでなく多様なものの見方や考え方を深めることができた。

## 7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

基盤教育科目の語学授業では、発表などのパフォーマンスでは、教科に苦手意識のある学生でもしっかり取り組むことで高評価を得られるが、筆記テストにおいては難しい様子も見られる。授業外でも学習に取り組むモチベーションを高める工夫を検討したい。

## 8. 社会的活動等

実用英語検定面接委員

## 9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・ 授業における配布、配信資料等
- ・ テスト問題
- ・ 学生とのメールや LINE
- ・ 国際交流センター議事録
- ・ こども教育学科の英文紹介
- ・ シドニーのコーディネーターとのメールや LINE

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	近藤 みづき	所属学科	こども教育学科	職名	准教授
クラス担任	2年主担任	クラブ顧問	テニス部・ダンス部		
委嘱委員・職務	学生委員会 副委員長、国際交流センター委員、				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課（網掛け部分は外部公表しない）科目責任者の科目には○印

科目名	開講 学科	開講 年次	開講 時期	科目の 種類	科目の 形態	授業 形態	受講 者数
○健康スポーツ科学Ⅰ	基盤	1	前期	必修	講義	遠隔	283
○健康スポーツ科学Ⅱ	基盤	1	前期	必修	演習	対面	180
○健康スポーツ科学Ⅲ	基盤	1	後期	選択	実技	対面	192
まなぶるⅠ	基盤	1	前期	必修	演習	対面	399
まなぶるⅡ	基盤	1	後期	必修	演習	対面	393
○体育	E	1	前期	必修	演習	対面	58
○子どもと身体表現	E	2	後期	選択	演習	対面	50
保育実践演習	E	4	後期	選択	演習	対面	59
保育・教育基礎演習Ⅱ	E	2	通年	必修	演習	対面	51
海外研修	E	3・4	後期	選択	演習	対面	11
国際理解	基盤	1	前期	選択	講義	対面	65
卒業研究Ⅰ	E	3	前期	必修	演習	対面	87
卒業研究Ⅱ	E	4	後期	必修	演習	対面	86
卒業研究Ⅲ	E	3	前期	必修	演習	対面	78
卒業研究Ⅳ	E	4	後期	必修	演習	対面	79

(2)準正課、正課外の教育活動

- ・国際交流センターイベント「国際交流フェスタ」の企画、運営指導
- ・新入生オリエンテーション「トキワシンポジウム」の発表指導
- ・新入生オリエンテーション学科プログラム「レクリエーション」の指導
- ・学生自治会の運営や活動の支援
- ・学位記授与式における「答辞」「送辞」の添削指導

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

- ・専門科目では、適切な運動や表現指導ができる保育士や教員を養成するために、運動や表現に関する知識・技能はもとより、保育・教育現場でこどもの内在的運動感覚を見抜くことができる学生を育成したい。
- ・基盤教育科目では、自分自身の健康の基礎となる運動と健康に関する知識のみならず、さらには運動実践力を養成することで、生涯にわたって自身の健康を実践できる力を培うことを理念とする。

### 3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）

- ・体育では、様々な運動を単に運動実践するだけでなく、その動きの構造や含まれる運動感覚等を説明した。また、グループワークや発表を取り入れ、学生同士の気づきを共有できる時間を設定した。
- ・健康スポーツ科学Ⅱでは、運動することによって起こる身体の変化を視覚的に把握できるように歩数計や計算式を用いて測定した。
- ・子どもと身体表現では、中間発表を録画し公開した。そして、各自の改善点を学生同士で共有することで、より良い作品創りへとつなげた。

### 4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・前年度の学生による授業評価では、身体表現の作品創りの時間が少ないという意見があった。そのため、今年度は学生の作品創りの進捗状況や学生の意見を取り入れて発表時期を決めた。
- ・遠隔授業では、一人一人のレポートのフィードバックを丁寧に行った。

### 5. 今年度の学生による授業評価より

- ・担当している科目全ての総合評価を平均すると、4.6点を得ることができた。
- ・今年度も実技系の授業は全般的に学生自身の学習時間が短めで、昨年度より0.1ポイント下がった。授業内容と課題の在り方について引き続き考えていきたい。
- ・子「子どもと身体表現では、「練習や準備などやっている人とやっていない人で差が激しいなと感じた。」という意見がみられた。個人の学生に負担が偏らずに作品創りができるように、引き続き方法を検討したい。

### 6. 今年度の成果

- ・「子どもと身体表現」では、学生自身のポイントが昨年度比較して0.3ポイント向上した。
- ・初めて「海外研修」を担当し引率をした。想定外の事態も発生したが最終的には無事に研修を終えることができた。そして、総合評価は5.0を得ることができた。

### 7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

- ・遠隔授業では「動画の音量を最大にしても音が小さくて聞き取りづらい授業があった」という意見があったので、改善したい。

- ・実技系授業においては、学生から「とてもわかりやすかった、丁寧に教えてくださった」という意見が複数みられた。次年度もこの評価を継続していくよう努力する。
- ・演習系の授業で「ホワイトボードに書いたことをプリントやデータにして配布して欲しい」という意見があったので、次年度から共有方法を検討したい。
- ・海外研修での活動準備に関しては学生に自主性を中心に進めていたが、それでは全体で集まって練習する回数が少なくなったので次年度は日時を決め練習を重ねていきたい。

## 8. 社会的活動等

- ・高大連携としての出張授業（東灘高校）の実施
- ・附属ときわ幼稚園のキッズクラブ「体を動かしてあそぼう」指導
- ・附属ときわ幼稚園の未就園児の親子による「親子体操」指導
- ・「日本スポーツ運動学会」において理事を務める

## 9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・ 授業における配布、配信資料等

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	松尾寛子	所属学科	こども教育学科	職名	准教授
クラス担任	4年	クラブ顧問	なし		
委嘱委員・職務	こども教育学科臨地実習委員会（委員長）、こども教育学科就職委員会（委員）、入試委員会（委員）、子育て総合支援施設KIT連携部（委員）				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課（網掛け部分は外部公表しない）科目責任者の科目には○印

科目名	開講 学科	開講 年次	開講 時期	科目の 種類	科目の 形態	授業 形態	受講 者数
○乳児保育Ⅰ	E	2	前期	選択	講義	対面	51
○乳児保育Ⅱ	E	2	後期	選択	演習	対面	51
○障害児の理解と支援Ⅱ	E	2	後期	選択	演習	対面	51
○保育実習Ⅰ (保育所)	E	3	前期	選択	実習	対面	76
保育実習指導Ⅰ	E	3	前期	選択	演習	対面	76
○保育実習Ⅱ	E	4	前期	選択	実習	対面	44
○保育実習指導Ⅱ	E	4	前期	選択	演習	対面	44
保育教育実践演習Ⅰ	E	1	通年	必修	演習	対面	59
保育教育実践演習Ⅱ	E	2	通年	必修	演習	対面	51
卒業研究Ⅰ	E	3	前期	必修	演習	対面	87
卒業研究Ⅱ	E	3	後期	必修	演習	対面	86
卒業研究Ⅲ	E	4	前期	必修	演習	対面	78
卒業研究Ⅳ	E	4	後期	必修	演習	対面	79
○保育教育課題研究Ⅱ	E	3	前期	選択	演習	対面	29
保育教育課題研究Ⅲ	E	3	後期	選択	演習	対面	30
○保育実践演習	E	4	後期	選択	演習	対面	59

(2)準正課、正課外の教育活動

・3年生のゼミ生を中心として、学外の公立保育所、幼保連携型認定こども園、玩具博物館、児童施設等の見学を6か所実施した。

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

- ・就職してからも使える知識や技術を持ちあわせた保育者養成

### 3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）

- ・授業内にて保育現場で用いられる教材等の作成を行わせた。研究日を利用して実施している保育指導や巡回指導で得た保育の現場での話を行うことにより、現在の保育現場の様子をリアルに語るができる。それにより学生は保育現場のイメージを膨らませることができるようになると考え授業内容を工夫している。
- ・指導案等の保育現場や実習等で作成する書類については、ICT化が進んでいることを踏まえ、提出資料等についてはmanabaでの提出を行っている。
- ・対象とする子どもや利用者をイメージしやすいように、授業の中で視聴覚教材も併用している。

### 4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・学外での取り組みにおいては、保育現場や保育関連施設等の見学を実施し、実際の現場や保育者から保育を学んだり、保育に役立つ知識を享受してもらう機会が得られた。
- ・今年度もmanabaを活用して出席管理、提出物管理を実施した。学生の手書きへの負担軽減や提出物管理に関する軽減もでき効率的であった。ただし、manabaでの出席については、未入力 of 学生もあり、事後に申し出た際には、学生の申し出通りにするしかなく、対面での出席も併せてする必要を感じている。
- ・授業内容については、ゼミの学生を中心として園見学等の活動を昨年度同様に増やして実施した。卒業研究においては、研究内容としては実践を振り返る機会とし、実習経験等を振り返る機会としながら指導を行った。学生には提出目標などを提示し、ゼミの時間だけではなく、それ以外にも来学しているタイミングでも指導を行った。提出はメールで行い、添削もメールで行うなど、ゼミの中では、学生と論文の詳細について口頭で指導を行うことができ、学生自身の時間の有効活用も考え実施することができた。

### 5. 今年度の学生による授業評価より

昨年度に引き続き、前期は講義形式の授業で、学生の学びもまだ浅く、授業内容を理解する土台が育っていないように感じられ、私語をする学生もあり、座席指定を実施した。そのことによる不満があったが、後期には学生も大きく成長をしたように感じられ、特定の数名の学生のみ授業に集中できない様子であった。授業で多くの現場の話を盛り込みながら、教材作成も多く取り入れ、視覚教材も取り入れた授業を実施したため、学生からの評価は高く、自由記述でも、そのことに触れた記載が複数あった。後期の授業はおおむね学科平均以上であった。ただ、座席指定をしたことによる不満を持つ学生が一人いた。私語をする学生がいるクラスに対する座席指定については、授業に集中するために公平に授業を聞く機会であることを今後も周知していかないと感じないと感じた。

## 6. 今年度の成果

・今年度はゼミ生が10名と例年になく多く、ゼミでの見学も少人数の保育現場等は不向きであることを実感した。ただ、今年度もゼミでの施設見学を取り入れ、学生にとっては有益なものとなったと思われる、学生は自分で見学を依頼することもしているが、どの施設を見学したらよいかという迷いもあるように思われる。教員主導で見学を実施することにより、見学の作法も身につけ、いい施設を見学することができるのではないかとということが分かった。ただ、ゼミ以外の授業で全員の学生を対象として見学を実施することは難しいため、今年度までと同様に、学生には就職や実習等でお世話になっている保育施設等の斡旋を積極的に行っていきたいと思う。

・研究活動については、7月に受けた研修にて、ESDM研究に興味を持ち始めた。今年度は不採択であったが、次年度も継続して科研費申請を行い、学内の研究日を活用して研究活動を推進していきたい。

## 7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

今後の課題として以下の4点を挙げていた。

(ア) manabaの活用については、出席管理を行うようにした。次年度も引き続き出席管理もmanabaで実施したい。小テストや簡単なアンケートなどを実施した際には、manabaやGoogleフォームなどを利用して行い、環境にやさしくかつ学生の負担が軽減するような方法を模索したい。

(イ) ゼミ活動としての見学は実施できた。次年度も継続して行い、学生の学外での学びも保証したい。

(ウ) 入試業務の臨機応変遂行については、今年度はかなり充実して行うことができた。社会的活動について、融通が利く業務に限り受けていることが理由である。次年度も入試業務の臨機応変対応ができるように、社会的活動とのバランスを考えながら行いたい。

(エ) 社会的活動から研究テーマに結びついているため、引き続き社会的活動も実施し、研究を遂行していきたいと考える。

・これらについては、おおむね達成できている。manabaの出席については今年度ほぼ実施できた。ただ、これについては、学生が入力し忘れていてもかかわらず申し出がなく、曖昧なまま学生の申し出通りに出席にしたという経緯もある。特に自由席にしている場合は、学生の顔と名前が一致していない時もあるため、管理がしにくいというデメリットもある。次年度もmanabaでの出席管理をしながら、学生の顔と名前を覚えられるよう、授業内容や出席管理について工夫が必要であると考えられる。

・ゼミ活動としては今年度学生の数が多かったため、細やかな指導をするという点では、例年通りにはできたかどうかは不明である。ただ、学生の学外での学びの保証はできたことと、学生が制作活動に取り組むための時間を確保できたため、学生も自ら考えながらゼミ活動に取り組んでいたように思われる。次年度は学生の学びも保証しつつ、学内での活動も充実させていきたい。

・入試業務については今年学科内のリーダーを前リーダーに教わりながら務めることができた。前年度に大きな入試変革があり、今年度入試については多くのストレスを抱えながらの実施であった。

- ・次年度については、今年度行った入試業務が適切に運用できているかの検証を行いながらの実施になるため、入試委員で連携を図りながら、入試業務が遂行できるようにしたい。
- ・研究活動については、ESDM 研究について、文献研究を進め、次次年度以降にフィールドワークが実施できるよう理解を深めたい。

#### 8. 社会的活動等

- ・尼崎市保育巡回指導
- ・八尾市保育巡回指導
- ・川西市保育指導
- ・西脇市保育指導
- ・武庫川女子大学「障害児保育」非常勤講師
- ・神戸親和大学附属幼稚園第三者評価委員
- ・社会福祉法人ときわぎ会理事
- ・社会福祉法人きらら福社会評議員

#### 9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・ 授業における配布、配信資料等

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	柳原 利佳子	所属学科	こども教育	職名	講師
クラス担任	1年	クラブ顧問	なし		
委嘱委員・職務	FAST等企画運営ユニット委員長・自己点検・評価副委員長・教務委員・こども教育学科就職委員・こども教育学科臨地実習委員など、保育者養成コース				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課（網掛け部分は外部公表しない）科目責任者の科目には○印

科目名	開講 学科	開講 年次	開講 時期	科目の 種類	科目の 形態	授業 形態	受講 者数
○カウンセリングの技法	E	2	前期	選択	演習	対面	70
○教育心理学	E	3	前期	必修	講義	対面	90
○保育の心理学	E	3	前期	選択	講義	対面	76
卒業研究Ⅰ	E	3	前期	必修	演習	対面	
卒業研究Ⅲ	E	4	前期	必修	演習	対面	
○教育心理学	E	1	後期	必修	講義	対面	65
○子どもの理解と援助	E	2	後期	選択	演習	対面	51
子どもと絵本Ⅱ	E	3	後期	自由	講義	対面	
教職実践演習（幼稚園・小学校）	E	4	後期	選択	演習	対面	72
卒業研究Ⅲ	E	3	後期	必修	演習	対面	
卒業研究Ⅳ	E	4	後期	必修	演習	対面	
保育・教育実践演習Ⅰ	E	1	通年	必修	演習	対面	59
○教育心理学	N	1	後期	自由	講義	対面	17
子どもの心理学	O	2	後期	選択	講義	対面	64

(2)準正課、正課外の教育活動

- ・1年生の履修カルテの作成、1年生～4年生前期までの期間の履修カルテの運用
- ・ピアヘルパー資格試験対策講座の実施
- ・市民救命士講習の実施（学内オリエンテーション）
- ・リトミック関連事務

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

免許資格取得を目的として入学した多くの学生にとっては、大学での授業が卒後の進路選択のための手段となりがちである。高校時代までの授業科目以外の多様な学びの中から、スキルを身につけることも必要であるが、それ以外に自ら考え、学ぶ楽しさと喜びを見出し、次世代の子どもたちに伝えていけ

るような保育者を養成したい。そのためには、学生自身が基盤教育、専門教育を通して得た経験から、自分がどのような保育者になりたいか、どんな保育をしたいかというイメージを構築できるよう育成する。

### 3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングや ICT 活用等の工夫点について）

- ・講義科目では、特に教員採用試験を意識して、小テストを適宜実施し、理論や研究の紹介を中心として知識の定着を目指すために、小テストを適宜実施した。
- ・manaba のアンケート機能を用いて前回の授業内容の確認を毎回実施した。
- ・manaba のアンケート機能を用いて意見収集したものを、授業内で随時紹介することで意見共有できるようにした。

### 4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・3年生対象の前期の教育心理学における反応が悪かったことを受けて、早速後期のこども教育学科1年生と看護学科1年生の合同授業では配布資料を穴埋めタイプのものに変更した。短大時代は穴埋めタイプの資料を作成したこともあったが、4年制になってからは投影した内容を見て語句を埋めるだけの作業にならないようにと、穴埋めを止めていたのだが、資料の余白や自分のノートに適宜必要事項を記入するというやり方は一部の学生に以外は難しいようだ。

### 5. 今年度の学生による授業評価より

- ・前期の教育心理学と後期の教育心理学とではポイントが大きく異なっているが、前期の反応を受けて後期に配布資料の変更を試みたことも大きいかと思う。
- ・保育者養成コースの学生からは、保育の心理学と教育心理学が同学年同時期開講について、区別がつけにくいという声を聞いていた。次年度よりカリキュラムが変更するため、この問題は解消できるものと考ええる。
- ・午前中の授業において、3限開始前を期限とする manaba アンケートの提出は時間が短いという意見があった。次年度は午後からの授業だけではなく、午前中の授業においても提出期限に余裕を持たせようと思う。

### 6. 今年度の成果

- ・昨年度懸念していた respon 廃止に関わる授業の進め方については、manaba のバージョンが上がり、新機能ができたことで解消され、リアルタイムで意見を投影することでフィードバックを行った。
- ・カウンセリングの技法の授業に加えて、ピアヘルパー資格試験当日午前中に直前対策講座を行い、参加者は全員合格した。（参加しなかった者のうち1名は不合格であった。）
- ・リトミックの事務的業務について、教務課に依頼して manaba に事務担当として加えてもらうことで、コースニュースを活用した学生への連絡、アンケート機能を活用した資格認定に必要な情報収集など、

さらに円滑に行えるようにした。また、資格証授与について、科目担当者である古木先生より直接授与してもらえる機会を設けた。(ただし、古木先生の来学される曜日が決まっているため、都合が合わない者が数名いた。)

- ・FAST 委員長として初めて FAST 委員会業務に携わったが、前年度は委員会が開催されていなかったこともあり、他のメンバーは業務内容の概要しか把握していないことがわかったため、詳細な業務内容を可視化するべく努め、委員会を開催してメンバーに業務内容を共有した。また、インストラクター増員を目指して事務局長と相談を重ね、最終的に運営委員会において、次年度予算として 20 名分の救急インストラクター講習会参加費用を獲得した。これにより、教員のみならず、学生インストラクター養成を行うことにも繋がった。

## 7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

- ・小テストの成績が芳しくない者に対する救済措置を行っているが、後期の 1 年生の様子を見ると、救済措置があるからという理由で、却って小テスト対策をしない学生がいるように感じた。テスト対策ということが習慣化されていない学生がいると思われる。それは、定期試験の時にも同様のことがあった。再試験対象者が手続きをしているのにもかかわらず、複数名が無断欠席だった。再試験直前の学生同士の会話から漏れ聞こえてくる内容から、全く再試験に向けての勉強をしていないことが感じられた。これまでにないような感じであり、複数名いることからどのように進めていけばよいか、この学年の学生だけなのか、今後も同じような状況が見られるのか見極めていく必要がある。
- ・前期教育心理学では、学生からの意見で授業中に指名して答えた学生に対する応答が否定的であったと指摘されていた。後期教育心理学ではそれが気になってしまい、あまり指名できなかったと思う。次年度はもう少し発言を求めることを意識して授業を進めていきたい。
- ・リトミックの資格証授与の際、全員が科目担当者である古木先生より直接授与してもらえる方法がないか検討する。
- ・FAST 委員会業務のさらなる可視化、学生インストラクター養成にむけての具体的方法、中学生への本学での講習方法を構築するべく委員会をまとめる。

## 8. 社会的活動等

- ・市民救命士講習の実施（神戸市立駒ヶ林中学校、神戸市立雲雀丘中学校）
- ・武庫川女子大学へ出講

## 9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・ 授業における配布、配信資料等
- ・ ピアヘルパー認定試験結果一覧表
- ・ リトミック指導資格認定指定校ガイドブック

- ・ F A S T等企画運営ユニット委員会議事録

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	田中達也	所属学科	こども教育学科	職名	講師
クラス担任	3年生	クラブ顧問			
委嘱委員・職務	危機管理（災害）委員会・委員 教職支援センター・委員 教務委員会・委員 臨地実習委員会・委員 子育て総合支援施設KIT 連携部・委員				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課（網掛け部分は外部公表しない）科目責任者の科目には○印

科目名	開講 学科	開講 年次	開講 時期	科目の 種類	科目の 形態	授業 形態	受講 者数
まなぶる▶ときわびとⅠ	基盤	1	前期	必修	演習	対面 遠隔	399
まなぶる▶ときわびとⅡ	基盤	1	後期	必修	演習	対面	393
情報基礎	基盤 E	1	前期	必修	演習	対面 遠隔	58
情報メディア演習	基盤 N	1	後期	必修	演習	対面 遠隔	97
○物理学概論	E	1	後期	選択	講義	対面	23
○教科指導法（理科）	E	3	前期	必修	講義	対面	10
○教科指導法（小中理科）	E	2	前期	必修	講義	対面	16
○理科実験Ⅰ	E	2	後期	必修	演習	対面	13
○理科概論	E	2	後期	選択	講義	対面	16
○生徒・進路指導論	E	4	前期	必修	講義	対面	19
○基礎物理学	R	1	前期	選択	講義	対面	76
チーム学校論	E	3	前期	選択	講義	対面	12
防災教育実践	E	4	後期	選択	演習	対面	31
教科指導法特論Ⅱ	E	4	前期	選択	講義	対面	19
教科指導法特論Ⅲ	E	4	後期	選択	講義	対面	19
保育教育課題研究Ⅱ	E	3	前期	選択	講義	対面	29
保育教育課題研究Ⅲ	E	3	後期	選択	講義	対面	30
卒業研究Ⅰ	E	3	前期	必修	演習	対面	87
卒業研究Ⅱ	E	3	後期	必修	演習	対面	86
卒業研究Ⅲ	E	4	前期	必修	演習	対面	78
卒業研究Ⅳ	E	4	後期	必修	演習	対面	79

## (2)準正課、正課外の教育活動

- ・ 教員採用試験対策としての面接指導及び、教科学習指導（教職支援センター）
- ・ 学生自主学習組織の企画・運営（STEP Project：E科2~4年・N科2・4年）
- ・ 「まなぶる▶ときわびと」の授業コンテンツの作成
- ・ 学生相談への対応（例：授業内容、人間関係、進路等）

## 2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

ときわ教育目標に示された「知性と感性を備えた優れた専門職業人の育成」を実現するため、学生の自主性と協働性を重視した教育を推進している。特に、学生の興味や関心に応じた多様な学びの機会を提供し、実社会で主体的に行動できる力を育成することを目指している。

教育の本質は「発達への助成的介入」であり、教師は単なる知識の伝達者ではなく、学生の学びを促進する支援者であると考え。学びの場においては、学生の思考を引き出し、能動的な学習へと導くことが求められる。そのため、協働学習やアクティブ・ラーニングを導入し、学生同士が議論を深め、納得解を見出すプロセスを重視している。

また、教育の理念として、以下の3つの視点を重視している。

- ・ 主体的な学びの促進
  - ・ 学生自身の興味や関心に基づいた学びを尊重し、学びの意義を実感できる環境を整える。
  - ・ 知識の詰め込みではなく、思考力や問題解決力を高めるための学習を促進する。
- ・ 協働的な学びの実現
  - ・ 学生同士が互いに知識や経験を共有し、協力しながら学びを深めることを重視する。
  - ・ 多様な視点を取り入れ、異なる意見を尊重しながら、共に学び成長する機会を提供する。
- ・ 理論と実践の統合
  - ・ 学んだ知識を実社会で活用できるよう、理論と実践のバランスを重視する。
  - ・ 学習を単なる知識習得に終わらせず、現場での適用や課題解決へとつなげる。

このような教育理念に基づき、学生が主体的に学び、他者と協力しながら課題解決に取り組み、理論と実践を往還しながら深い理解を得ることを目指している。

## 3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）

- ・ 全ての授業において、協働学習を導入し、学生主体の対話的で深い学びの実現に取り組んだ。具体的には、教科指導法や保育・教育課題研究では、知識構成型ジグソー法を導入や、ワールドカフェ形式による課題解決方法の発表、生徒指導や情報基礎、情報メディア演習では、グループでの事例検討や成果物の作成、プレゼン発表準備等を行い、学生同士が納得解を創造するプロセスに多くの時間を設定した。
- ・ 情報の授業では、オンデマンド形式での動画配信や、Teams を活用したオンライン講義を実施し

た。また、中学校理科免許に関する授業では、TOKIWA's ラーニングを活用した授業や、生成 AI の活用や Scratch を用いた教材開発など、ICT を活用した学習を充実した。

- ・ STEP Project では、E 科 2～4 年生、N 科 2・4 年生を対象に、LINE を活用した教員採用試験情報提供や、教員採用試験問題の出題、面接指導、学生の教員採用試験への意欲向上を目指したファシリテーションを行った。なお、この LINE 支援においては、学生が自主的に組織したグループに教員が参与する形であり、学生の主体性が発揮、伸長される仕組みとなっている。

#### 4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・ 昨年度の課題であった「学生の事前・事後学修の取り組み時間の短さ」について、適切な課題提供や、授業内容と日常生活の関連性、教員としての重要な資質である「学び続ける姿勢」を強調することで、学習意欲の向上と自主学習時間の増加を実現した。
- ・ 全ての授業において、個別のフィードバックを実施し、学生の学びの価値づけ、及び、双方向のコミュニケーションの実現に努めた。また授業時間外にも学生からの質問には随時対応した。

#### 5. 今年度の学生による授業評価より

本年度の授業評価では、科目責任者を務める科目において概ね高評価を得た。特に、「生徒・進路指導論」や「物理学概論」では、授業方法や学習成果の項目で高評価を獲得し、学生からの満足度が高かったことが確認された。「理科実験 I」では、演習形式の授業が好評であり、「実験を通じて理解が深まった」「主体的に取り組める機会が多かった」との評価を得た。また、「教科指導法(理科)」では、実践的な授業設計により、現場で活用できる知識の習得が可能になった点が評価された。

#### 6. 今年度の成果

今年度の授業においては、学生の主体的な学びを促すための取り組みが成果を上げた。「教科指導法(理科)」では、指導法の実践的な演習を増やし、学生が実際の教育現場を想定した授業設計を行うことで、より深い理解が得られた。「理科実験 I」では、グループワークを活用した探究型実験の導入により、実験過程の計画やデータ分析に関する理解が向上した。また、「理科概論」の授業において、ICT 機器を活用した教材開発に取り組んだ。その成果を学生が、中学校理科「動物の分類」への理解を深めるゲーム型 ICT 教材を開発し、日本理科教育学会オンライン全国大会にて発表を行った。この教材は Scratch で作成されており、学会終了後に一般利用が可能なように広く公開されている。このように学生指導において、学際的に価値のある授業を展開することができた。

#### 7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

昨年度よりは大幅に改善されたものの事前学修および事後学修の時間確保が依然として課題として挙げられる。特に、講義型科目では、授業中に扱う内容が多岐にわたるため、学生が十分な復習の時間を確保できていない状況が見受けられた。次年度は、オンライン教材や補助資料の提供を通じて、事前・事後学修の機会を拡充する。また、実験科目においては、個々の学生がより深く実験の計画段階から関われるよう、実験の準備段階を見直し、事前の学習活動を強化する。

## 8. 社会的活動等

- ・ 兵庫県宍粟市小学校理科研究会「夏季実験実技講習会」 講師
- ・ 兵庫県学校防災アドバイザー「丹波市立北小学校 防災体制指導助言」
- ・ 神戸市立神の谷小学校「防災教育職員研修」 講師
- ・ 神戸市立神の谷小学校「総合的な学習の時間（防災教育）」 指導助言
- ・ ながた防災のつどい 講座「『デジ防災』で楽しく防災を学ぼう」 講師
- ・ 神戸市立蓮池小学校 出前授業「私だけの避難リュックについて考えよう」 講師
- ・ ひょうご教育フェスティバル（第74次兵庫県教育研究集会） 生きる力分科会 共同研究者
- ・ 神戸市立六甲アイランド高校 総合的な探求の時間「神戸学」アドバイザー
- ・ 令和6年度播磨西地区防災教育研修会 第2回 講師
- ・ 大学連携セミナー「こうべ生涯学習カレッジ」 シニアが輝く防災ワークショップ 講師
- ・ 防災教育学会 第5回大会 シンポジウム「世代を超えた新たな防災教育の地平」 パネリスト
- ・ 石川県能登半島地震に学ぶ防災フォーラム パネリスト
- ・ おいしい防災塾主催「学生ボランティア集合」 ファシリテーター兼講師

## 9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・ 授業における配布、配信資料等

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	大城 亜水	所属学科	こども教育学科	職名	講師
クラス担任	1年 AB クラス	クラブ顧問	軽音楽部、モルック部		
委嘱委員・職務	就職委員・副委員長、臨地実習委員会・委員、子育て総合施設 KIT 連携部委員会・委員、地域交流センター地域貢献事業部委員会・委員、教職支援センター委員会・委員				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課（網掛け部分は外部公表しない）科目責任者の科目には○印

科目名	科目名	開講 学科	開講 年次	開講 時期	科目の 種類	科目の 形態	授業 形態
まなぶる▶ときわびとⅠ	基盤	1	前期	必修	演習	対面 遠隔	399
まなぶる▶ときわびとⅡ	基盤	1	後期	必修	演習	対面	393
インターンシップ B	E	4	通年	選択	実習	対面	1
保育実習指導Ⅲ	E	4	前期	選択必修	演習	対面	15
保育実践演習	E	4	後期	選択必修	演習	対面	59
保育・教育実践演習Ⅰ	E	1	前期	必修	演習	対面	59
保育教育課題研究Ⅱ	E	3	前期	選択	演習	対面 遠隔	29
保育教育課題研究Ⅲ	E	3	後期	選択	演習	対面 遠隔	30
卒業研究Ⅰ	E	3	前期	必修	演習	対面	87
卒業研究Ⅱ	E	3	後期	必修	演習	対面	86
卒業研究Ⅲ	E	4	前期	必修	演習	対面	78
卒業研究Ⅳ	E	4	後期	必修	演習	対面	79
○地域との協働 A	基盤	1	通年	選択	演習	対面	12
○子ども家庭支援論	E	3	後期	選択必修	講義	対面	79
○子育て支援	E	4	前期	選択必修	演習	対面	60
○情報メディア演習	基盤 R科	1	後期	必修	演習	対面 遠隔	87
情報基礎	基盤	1	前期	必修	演習	対面 遠隔	58
海外研修	E	3~4	後期	選択必修	演習	対面	11
家族と社会(看護通信)							

## (2)準正課、正課外の教育活動

- ・ 就職活動支援および進路相談、履歴書や論文等の添削指導
  - ・ 公立保育士・幼稚園教諭および公務員試験の一般教養の学習支援
  - ・ 「まなぶる▶ときわびと」の授業コンテンツの作成
2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）
    - ・ 専門科目では、保育者（保育士・施設職員）と幼稚園教諭の養成のために、子どもや保護者への支援方法や子育て支援に関する知識の習得に加えて、現場での実践力と職業倫理を兼ね備えた学生の養成を目指す。特に演習では、子ども理解だけでなく、子どもの保護者や家庭環境を考慮した保育観や援助観を持つ学生を育成したい。
    - ・ 基盤科目では、対人援助職に必要なコミュニケーション力や社会保障に関するリテラシーを持つ学生を育成することを目指す。
  3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）
    - ・ 子ども家庭支援論では、法律や制度を多く取り扱うため、身近な事例を使って受講生がより実感できるように工夫し、さらに保育実習Ⅰ（保育所・幼稚園）との科目連携を意識し、本科目の位置づけを明確にした。
    - ・ 「子育て支援」は「子ども家庭支援論」を応用した科目であり、学生へのフィードバックを積極的に取り入れるよう心がけた。さらに、この科目は演習形式のため、アクティブ・ラーニングを重視し、実践的な授業内容に焦点を当てた。
    - ・ 基盤科目「まなぶる▶ときわびと」では、前期（まなぶる▶ときわびとⅠ）と後期（まなぶる▶ときわびとⅡ）の両方で、チームビルディングを中心に据え、論理的な考え方やコミュニケーション能力の育成に取り組んだ。
  4. 今年度における教育方法改善の取り組み
    - ・ 専門科目では、毎回の授業の初めに、前回の内容を振り返る時間を確保し、受講生の学習成果の定着を図った。
    - ・ 基盤科目では、受講者が自ら課題を見つけ、実行し、PDCAサイクルを回すことで、より実践的な学びを促す取り組みを行った。
  5. 今年度の学生による授業評価より
    - ・ 情報系の科目では、概して高い評価を得ることができた。「数理データサイエンス」や「AI」、「ICT」といった難解なテーマでも、受講者の理解に合わせた進行を心がけた結果、多くの学生

から「授業内容がわかりやすかった」という声が寄せられた。また、「プレゼンテーションを行う機会があまり無かったのでいい機会になった」などという感想もみられた。

- ・ 専門科目では、受講者から「DVDを見ることで、現在の状況を詳しく知ることができ、他国との比較がしやすく、わかりやすい授業だったと思います」とのコメントもあり、概ね高評価をとることができた。
6. 今年度の成果
- ・ 公立幼保採用試験対策の一環である「STEP Project」で、3・4年生を中心に指導した。その結果、4年生は4名中4名全員、3年生の早期受験では7名中7名の合格者を出すことができた。
  - ・ また、上記に関連して、昨年度同様にプロジェクトの成果を本学の学術フォーラムで発表することができた。
7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策
- ・ 専門科目では、開講時期が実習と重なるため、「子ども家庭支援論」は特に開講日が不規則である。今年度はすべて対面で行ったが、そのために出席率が回によって大きく変動した。この点を考慮し、今後は授業内容との調和を図りながら、遠隔授業と対面授業をうまく組み合わせて改善していきたい。
  - ・ 先述した教育理念の一つである、保護者対応ができる学生を育むためには、学内だけでなく、学外の関連施設での学修が不可欠である。そのため、次年度より「保育実践演習」の科目のなかで、子育て総合支援施設「KIT」での実習を、下級生のスチューデントアシスタントとして指導力をや梨ないながら、保護者対応力も養成するプログラムを実施する。
  - ・ 社会保障リテラシーの普及については、今年度は「卒業研究Ⅱ」で実施した。そこで、次年度は「保育・教育実践演習Ⅰ」のなかで取り入れていきたい。
8. 社会的活動等
- ・ 少子化対策—少子化の動向とワーク・ライフ・バランスなどの政策的課題／大城亜水（神戸常盤大学）／大阪労働大学講座（令和6年度）／2024年12月
  - ・ 指定保育士養成施設における保育実習指導認定取得／2024年8月
9. 根拠資料（資料名のみ）
- ・ シラバス
  - ・ 学生による授業評価
  - ・ 授業における配布、配信資料等
  - ・ manaba のレポート・小テスト課題内容

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	京極 重智	所属学科	こども教育学科	職名	講師
クラス担任	義務教育コース2年	クラブ顧問	ソフトテニス部		
委嘱委員・職務	ときわ教育推進機構・委員、入試委員会・委員、教職支援センター・委員、子育て総合支援施設KIT 連携部・委員				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課（網掛け部分は外部公表しない）科目責任者の科目には○印

科目名	開講 学科	開講 年次	開講 時期	科目の 種類	科目の 形態	授業 形態	受講 者数
まなぶる▶ときわびとⅠ	基盤	1	前期	必修	演習	対面	396
まなぶる▶ときわびとⅡ	基盤	1	後期	必修	演習	対面	393
保育・教育実践演習Ⅱ	E	2	通年	必修	演習	対面	16
保育・教育課題研究Ⅱ	E	3	前期	選択	演習	対面	29
保育・教育課題研究Ⅲ	E	3	後期	選択	演習	対面	32
卒業研究Ⅲ	E	4	前期	必修	演習	対面	85
卒業研究Ⅳ	E	4	後期	必修	演習	対面	85
地域との協働 B	基盤	2	通年	選択	演習	対面	16
卒業研究Ⅰ	E	3	前期	必修	演習	対面	89
卒業研究Ⅱ	E	3	後期	必修	演習	対面	89
教育実践演習（幼稚園・小学校）	E	4	後期	選択	演習	対面	72
○教育の思想と歴史	E	2	前期	選択	講義	対面	72
○教科指導法特論Ⅰ	E	3	後期	選択	講義	対面	10
○道徳教育の理論と実践	E	3	後期	選択	講義	対面	10
教科指導法特論Ⅱ	E	4	前期	選択	講義	対面	85
教科指導法特論Ⅲ	E	4	後期	選択	講義	対面	19
○道徳教育と特別活動論	N	2	後期	自由	講義	対面	5
海外研修	E	3,4	後期	自由	演習	対面	16

(2)準正課、正課外の教育活動

・教員採用試験対策としてSTEP project（チーム作り、筆記対策、面接対策、キャリア意識の形成といったトータルなサポート）

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

今後の教育現場では、知識の修得と探求力の鍛錬という二つの異なるレイヤーの学びがますます求められていく。その意味で、知識を得るだけでなく、それを活用し、また新たな問いが生じ、それに向かうための知識や技能を身に付けていくという、主体的なループが必要といえる。そういったエージェンシー（行為主体性）をもった学生を育みたいと考えている。

### 3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）

2の教育理念を実現するためには、演習科目にせよ講義科目にせよ、学生が自分事として学びを引き受け、知識を獲得したり、その知識を活用したりする場面が必要となる。具体的には、学びの目標立て、課題に応じた協力関係の構築、学びの進展をふりかえる手立てなどが必要となる。

### 4. 今年度における教育方法改善の取り組み

今年度、準正課の教員採用試験といくつかのオムニバス演習科目との連携を強め、授業内でアクティブ・ラーニングの要素（チームづくり、ふりかえり、チーム協働での学習など）を多く取り込んだ。

### 5. 今年度の学生による授業評価より

学生による授業評価を見る限り、4に示した改善の取り組みをおこなった講義に関して、軒並み5.0に近い授業評価という結果がでている。それに対し、従来の講義科目の場合、学科平均を下回る結果となっている。講義科目のうち「道徳教育の理論と実践」は極めて高い評価（総合評価：5.0）となっているが、これは模擬授業の際に、学生が主体的に授業づくりに取り組める工夫（具体的には、内容項目に関する哲学対話）を導入したためと考えられる。

### 6. 今年度の成果

主体的に取り組む授業になるよう改善したことによって、いくつかの授業科目において、総合評価5.0を獲得することができた。また、教員採用試験対策として、3年後期より本年度卒業生を指導し、のべ100%をこえる正規合格を出すことができた。

### 7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

今年度の課題として、純粋な講義科目について、演習科目で取り組んだような主体的な学びにつながる工夫をおこなうことができなかった。次年度に向けて、講義科目に対話やアクティブ・ラーニングの要素を組み込むよう改善する必要がある。

### 8. 社会的活動等

学内の附属幼稚園のキッズクラブにて、年長児との哲学対話を計4回実施した。

### 9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・シラバス
- ・学生による授業評価
- ・授業における配布、配信資料等

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	深川 幹	所属学科	こども教育学科	職名	講師
クラス担任	1年	クラブ顧問	なし		
委嘱委員・職務	入試委員会委員、学生委員会委員、就職委員会委員、教職支援センター委員、子育て総合支援施設KIT連携部委員、神戸常盤地域交流センターボランティア事業部委員				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課（網掛け部分は外部公表しない）科目責任者の科目には○印

科目名	開講 学科	開講 年次	開講 時期	科目の 種類	科目の 形態	授業 形態	受講 者数
保育・教育実践演習 I	E	1	通年	必修	演習	対面	59
情報基礎	基盤	1	前期	選択	演習	対面	59
まなぶるときわびと I	基盤	1	前期	必修	演習	対面	401
いのちと共生	基盤	1	後期	選択	講義	遠隔	136
まなぶるときわびと II	基盤	1	後期	必修	演習	対面	393
情報メディア演習	基盤	1	後期	選択	演習	対面	59
卒業研究 I	E	3	前期	必修	演習	対面	86
卒業研究 II	E	3	後期	必修	演習	対面	86
卒業研究 III	E	4	前期	必修	演習	対面	
卒業研究 IV	E	4	後期	必修	演習	対面	
○野外生物学実習	E	2	通年	選択	演習	対面	45
○生物学概論	E	2	前期	選択	講義	対面	16
○教科指導法（中学理科） I	E	2	後期	選択	講義	対面	6
海外研修	E	3.4	集中	選択	通年	対面	16

(2)準正課、正課外の教育活動

- ・ 教員採用試験対策としての教科指導
- ・ 公立保育士採用試験対策としての教科・面接指導
- ・ 就職対策としての面接指導
- ・ STEP プロジェクトにおける学生の学習集団形成への援助
- ・ 学生相談
- ・ 保護者面談

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

私は、学生時代を通して学生自身が興味関心の幅を広げ、多くの選択肢を持って社会に出られることが重要だと考える。そのために、学校における教育活動では個々の学生の学びに向かう姿勢を引き出し、実践するための技能を身に着ける援助が必要である。ときわ教育目標に示される通り、学生一人一人に対して個別最適な学びを提供し、学生一人ひとりが目指す社会的・職業的自己実現に向けて十分かつ適切な支援を行う。私は、学生時代を通して学生自身が興味関心の幅を広げ、多くの選択肢を持って社会に出られることが重要だと考える。そのために、学校における教育活動では個々の学生の学びに向かう姿勢を引き出し、実践するための技能を身に着ける援助が必要である。ときわ教育目標に示される通り、学生一人一人に対して個別最適な学びを提供し、学生一人ひとりが目指す社会的・職業的自己実現に向けて十分かつ適切な支援を行う。

### 3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）

- ・「ときわの森」のフィールドを活用した自然体験、野外活動を通して、保育者・教員を目指す学生の自然環境意識を高める活動を行った（野外生物学実習など）
- ・情報機器を用いた遠隔での活動やグループ討議、協働学習などを通してICTスキルの向上を目指した（情報基礎、情報メディア演習など）
- ・知識の伝授に終始せず、グループディスカッションや成果発表などを取り入れた（教科指導法（中学理科）Iなど）

### 4. 今年度における教育方法改善の取り組み

今年度から主担当の教科が開始した。特に野外生物学実習では、学生自身の自然体験を充実させるとともにその魅力を発信する技術を身に付けることを目指した。

### 5. 今年度の学生による授業評価より

ほとんどの科目では概ね高い評価を受けることができた。また、通年で集中形式の科目を受け持った中で、フィードバックの方法については次年度検討納必要を感じた。

### 6. 今年度の成果

- ・2024年度神戸常盤大学・神戸常盤大学短期大学部テーマ別研究において、研究課題名「STEPprojectを通して育成される基礎的・汎用的能力の検証」の研究代表者として採択された。
- ・2024年度神戸常盤大学・神戸常盤大学短期大学部テーマ別研究において、研究課題名「初年次教育科目「まなぶる▶ときわびと」における大学生の資質・能力の発揮、伸長を評価する評価シートの開発」の共同研究者として採択された。
- ・日本教育公務員弘済会 教育文化事業 日教弘本部奨励金において、研究課題名「中学校理科教員養成課程のSTEM教育におけるICT活用能力育成プログラムの開発」の共同研究者として採択さ

れた。

- ・初年次教育学会第 17 回大会発表「多様な学生や教員のやる気をいかに引き出すのかー初年次教育における 2 つの集団（学生および教員）に対する組織開発的アプローチの試みー」（共同）
- ・第 12 回 神戸常盤学術フォーラム発表「チームビルディングを軸としたこども教育学科リエゾン・モデルの評価 ～STEP Project は学生のキャリア形成にどのような役割を果たしたか～」（共同）
- ・第 12 回 神戸常盤学術フォーラムポスター発表「カメラトラップにより確認された神戸常盤大学構内の中大型哺乳類相」（単独）
- ・第 72 回 日本生態学会大会ポスター発表「カメラトラップによる大学構内の哺乳類調査：教育と地域連携への活用のために」（単独）
- ・日本理科教育学会オンライン全国大会 2025 発表「保育者・教員養成課程における自然体験活動の実践 学生による企画・実践・振り返りを通じた学び」（単独）
- ・日本科学教育学会研究会研究報告 39(2)「ライブカメラを活用した「天気の変化」の教材開発と実践ー教員養成課程における実践報告ー」（共同）
- ・日本科学教育学会研究会研究報告 39(3)「中学校理科教員養成課程の STEM 教育における ICT 活用能力育成プログラムの構想」（共同）

## 7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

今年度は教員採用試験対策ならびに授業開発に注力した。次年度にはそれらをよりブラッシュアップし、学生へと還元したい。

## 8. 社会的活動等

- ・ 奈良学園高等学校スーパーサイエンスハイスクール活動指導助言
- ・ 矢田の丘里山支援チーム代表
- ・ けいはんな科学共育デザインラボ主催 科学体験教室 講師（独立行政法人 国立青少年教育振興機構「子どもゆめ基金」助成）
- ・ サイエンス Co ラボ 講師（独立行政法人 国立青少年教育振興機構「子どもゆめ基金」助成）
- ・ KIT 夏休み科学教室講師

## 9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 学生による授業評価
- ・ 授業における配布、配信資料等

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	川井 綾	所属学科	こども教育学科	職名	助手
クラス担任			クラブ顧問		ハローベビー部
委嘱委員・職務	広報委員会 委員 臨地実習委員会 委員 認定絵本土養成講座「子どもと絵本Ⅰ・Ⅱ」事務担当 こども教育学科 実習準備室 担当				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課（網掛け部分は外部公表しない）科目責任者の科目には○印

科目名	科目名	開講 学科	開講 年次	開講 時期	科目の 種類	科目の 形態	授業 形態
まなぶる▶ときわびとⅠ	基盤	1年	前期	必修	演習	対面	393
まなぶる▶ときわびとⅡ	基盤	1年	後期	必修	演習	対面	393

(2)準正課、正課外の教育活動

- ・ときわ幼稚園の行事参加。学生のレクリエーション・人形劇上演。
- ・障害者福祉施設での行事参加。学生の人形劇・ペープサート上演。
- ・ふれあい健康フェスタ「ときわの森おはなしとあそびのひろば」の実施。

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

- ・専門職を目指すために必要な、他者と関わる力を伸ばせるように、グループ活動を通して成長しようとする姿を見守り援助する。
- ・支援の必要な学生の環境を整える、教員間で授業や実習の方針を話し合い、情報の共有を図る。

3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）

- ・学生個人の意見や、話し合いによる意見がグループ活動の成長につながるよう、柔軟にグループの進行状況を見守り、必要に応じてグループを超えた意見交換を実践した。
- ・支援の必要な学生の面談をする等、状況を把握し、科目担当者と連携し、授業や実習環境を整えた。

4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・グループワークに集中して取り組めない学生への対応として、ワークの目的を明確に示すように努め、活動が停滞した時には、様々な視点でディスカッションできるようにサポートした。
- ・学生の実習に向かう意識を高めるため、必要書類をガイダンスの際に学生と一緒に確認した。提出物については manaba レポートで確認をとった。

## 5. 今年度の学生による授業評価より

- ・授業終了時の学生評価では、将来の就職とつなげて授業に取り組んだ様子が読み取れた。計画的学習や教えあい学修についての重要性が伝わった。

## 6. 今年度の成果

- ・支援の必要な学生が授業や実習において、スムーズに取り組み学修することができた。
- ・ふれあい健康フェスタでは、先輩から後輩へ保育技術（あそびの方法）を継承する機会を設定し、学年を横断した活動ができた。
- ・施設に訪問し、人形劇などのレクリエーションを通して、交流を深めることができた。  
また、施設実習を経験した先輩と、実習経験のない後輩とのディスカッションの場を設けた。

## 7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

- ・様々な活動において、振り返りや学生へのフィードバックが不十分だった点を見直し、次年度は深めていきたい。

## 8. 社会的活動等

- ・実習先から依頼をうけ、人形劇やレクリエーションなど、課外活動が実践できた。  
実習後のつながりが持て、実習先と大学との理解が深まり、学生の経験の場が充実した。
- ・ふれあい健康フェスタでは、「つくってあそぼうのコーナー」や「おはなしのひろば」を設定し実施し、地域の方との交流が持てた。

## 9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・まなぶる授業終了時「自己評価・総括」

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	金川 治美	所属学科	看護学科通信制課程	職名	教授
クラス担任	なし	クラブ顧問	なし		
委嘱委員・職務	課程長 臨地実習委員				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
看護対人関係論	CCN	1・2	通年	必須	テキスト学習	通信	17
成人援助論	CCN	1・2	通年	必須	テキスト学習	通信	30
成人看護学演習	CCN	1・2	通年	必須	テキスト学習	通信	47
成人看護学実習	CCN	2	通年	必須	見学実習+実習 スクーリング	面接	29

(2)準正課、正課外の教育活動

- ・ 国家試験対策

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

専門分野Ⅰの科目（看護対人関係論）：看護師にとって対人関係の形成は目的に沿った看護行為の遂行に大きく影響する。どの領域においても基本となる対人関係の形成について、看護場面における対人関係、社会的相互作用、対人行動上の技術、自己意識と自己開示など歩の基礎的知識と方法、看護コミュニケーション行為の成立に必要な知識と技術を育成する。

専門分野Ⅱの科目（成人援助論・成人看護学演習）：成人援助論では、健康問題を持つあるいは破綻した成人期の対象に対して主要症状や治療による生活への影響をアセスメントし、健康段階に応じた援助を科学的根拠に基づいて実践できるよう必要な知識を習得する。この成果が、続く成人看護学演習の学習の基盤となる。成人看護学演習は紙上事例演習であり、成人看護学実習に必要な知識と看護師の思考プロセスを理解し、これまでの自身の看護実践場面を振り返り、その意味を考えることで、看護の役割と実践能力を育成する。

実習科目では、既存の知識を済めて統合し、看護師の思考をプロセスを理解し、実践力の育成を理念とする。

3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）

- ・ テキスト科目では、学生が作成する前に学習のポイントを整理した資料を配布し作成に臨めるようにした。提出されたレポート内容から、理解できている又は学習が不足して

いるポイントを抽出し、段階を踏んで学習を積み重ねていけるようにコメントをした。さらに今年度は、レポート作成のための学習の方法から始動するため、学習会を開催した。その後学生の学習進捗に合わせて必要時個別指導の時間を設けて学習に取り組みやすい状況を作った。

- ・ 実習科目に関しては、2日間だけの見学実習では、その後の面接授業で学習する内容としては不側するので、学生の視野をひろげる目的でグループ学習とし、1教材（見学した実践場面）をアセスメントしていく形をとっている。今年度は、令和5年度 厚生労働省科学特別研究授業「護師養成所2年課程（通信制）の入学要件見直しに係る調査研究」において作成した教員研修ツールの記録用紙を活用し、授業内容を組み立てた。そのためグループ発表に時間はグループ内での検討に回し、教員が各グループに対して総評するという形をとった、また、授業の初めにルーブリック評価表に自己評価できる表を配布し、授業が進む都度自分で振り返り到達できているかを確認するようにした。

#### 4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・ テキスト学習では、学生の力に応じて添削内容の難易度を変え、具体的にどこが不足しているのかがわかり、修正の意欲が持てるように工夫した。
- ・ 実習科目では上記3の内容を実施した。また、各グループと、教員間の議論の内容を他のグループメンバーに説明し、共有した。

#### 5. 今年度の学生による授業評価より

該当せず

#### 6. 今年度の成果

該当せず

#### 7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

該当せず

#### 8. 社会的活動等

- ・ 令和5年度 厚生労働省科学特別研究授業「護師養成所2年課程（通信制）の入学要件見直しに係る調査研究」において、コアメンバーとして Good Practice 作成にかかわった。看護師養成所2年課程（通信制）の入学要件見直しに係る調査研究で作成された教員研修ツールの活用のための研修会に講師として参加した。

#### 9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 授業における配布、配信資料等

## ティーチング・ポートフォリオ

教員名	中野 順子	所属学科	看護学科通信制課程	職名	教授
クラス担任	なし	クラブ顧問	なし		
委嘱委員・職務	自己点検・評価委員、臨地実習委員長（課程内）				

### 1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課（網掛け部分は外部公表しない）科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
看護管理	CCN	1,2	通年	必修	テキスト学習	通信	69
看護マネジメント演習	CCN	1,2	通年	必修	テキスト学習	通信	31
看護マネジメント実習	CCN	1,2	通年	必修	見学実習 実習スケージュ	通信	18

### (2)準正課、正課外の教育活動

- ・国試に向けた学習喚起と指導

### 2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

統合分野での看護管理は、准看護師である学生にとって、管理者のものとして捉えている、又は就業先の都合で管理的業務を任せられ、知識のないまま実施しているケースもあり、如何に必要な知識であるかを理解し、身近に感ずることができるかを教育の軸としている。

専門分野Ⅱの看護マネジメント演習については、看護倫理、医療安全、災害看護を中心に学習を進め、マネジメントは組織の一員として必要な知識であり、看護管理と同様、身近なものとして捉える重要性を理解し、広い視野に立って考えることの出来る学生を育てたいと考えている。

### 3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）

- ・改訂された倫理綱領の資料を使い、変更点や追加点を説明し、看護師としての行動基盤であることを、体験を交えて講義し強調した。自由記述で、個々の学びを確認出来るよう試験問題を工夫した。

- ・実習後の対面授業では、グループ討議を中心に、実習施設の概要、看護体制、医療安全の仕組み、人材育成、リーダーシップ・メンバーシップなどの意見交換で理解を深めるようにした。

・

4. 今年度における教育方法改善の取り組み

今年度は、学生が少数であった為、よりきめ細かく、個々の学生の学習環境、家庭状況に応じたレポート添削や指導を心がけた。

5. 今年度の学生による授業評価より

該当なし

6. 今年度の成果

該当なし

7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

該当なし

8. 社会的活動等

ユニセフ、国境なき医師団へのサポート（支援品やマンスリーサポート）  
国連 UNHCR 協会への随時サポート

9. 拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 授業における配布、配信資料等

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	丸岡洋子	所属学科	看護学科通信制課程	職名	准教授
クラス担任		クラブ顧問			
委嘱委員・職務	CCN-臨地実習委員会委員・CCN-教務委員長				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
看護学概論	CCN	1・2年	通年	必須	テキスト学習	通信	2
看護過程演習	CCN	1・2年	通年	必須	テキスト学習	通信	47
基礎看護学演習	CCN	1・2年	通年	必須	テキスト学習	通信	19
基礎看護学実習	CCN	1年	前期	必須	見学実習 実習スクーリング	対面	2

(2)準正課、正課外の教育活動

- ・国家試験に向けての学習指導
- ・教務委員活動：学習会の企画運営、月々の学習進捗状況の把握と指導方針の検討、および教員への指導の喚起。電話、メール、面接等による個別学習指導

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

准看護師としての学習や勤務経験を通して培った知識、技術、態度を基盤に、看護実践に至る思考過程を辿れる能力を身に付けることが重要である。このことを通して、目的、根拠、個別性をふまえた看護実践の意味を理解し、看護の役割を言語化できるよう導く。准看護師としての自己を評価し、更に質の高い看護実践に向けて自己の課題を明確にし自己研鑽に取り組む姿勢へと動機づけることが重要であると考え。

3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングやICT活用等の工夫点について）

- ・対象理解から看護実践に至る思考過程を、テキスト学習の設題を順序だてること、実習スクーリングの対面授業ではワークシートを用いて看護実践の思考過程を意識化させ、それを用いての演習を通して評価の過程までたどれるように導いた。さらに、そこから看護の役割とはなにかを考え、准看護師としての自己を評価し、今後の自己の看護実践への課題を言語化し、共有する場を充実させるようにした。
- ・テキスト科目の学習目標を達成するために工夫している点について、昨年度設題につい

での考え方を、順序性をふまえて思考を進めていく事ができるよう、設題集に加筆した。今年度はさらに思考過程を辿りやすくするために、重要なポイントを示し、的を射た学習につながるように工夫した。

#### 4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・ 机上学習では、看護の対象を映像化してとらえることができないことが、看護実践に至る思考過程を辿ることを困難にしている要因の一つである。スクーリングでの事例検討やレポート添削では、コメント通して対象の全体像を映像化し、対象理解から看護の展開を考えられるように導く。添削コメントでは伝わらないことは、CCNの質問応答や電話を通して指導を行い、また、国家試験対策や面接授業等、直接指導できる機会を活用した個別指導を行った。

#### 5. 今年度の学生による授業評価より

該当せず。

#### 6. 今年度の成果

該当せず

#### 7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

該当せず

#### 8. 社会的活動等

- ・ 丹波市立看護専門学校「看護倫理」講義担当
- ・ 西脇市社会福祉協議会 ふれあいいきいきサロン開催支援
- ・ 兵庫県看護連盟支部役員

#### 9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ テキスト学習レポート学習設題集
- ・ 授業における配布資料 等

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	山岡 紀子	所属学科	看護学科通信制課程	職名	准教授
クラス担任	-		クラブ顧問	-	
委嘱委員・職務	国家試験対策委員会 CCN 委員長、臨地実習委員、図書委員				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講年次	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
○小児援助論	CCN	1・2年	通年	必修	テキスト学習	通信	5
○小児看護学演習	CCN	1・2年	通年	必修	テキスト学習	通信	40
○小児看護学実習	CCN	1・2年	通年	必修	見学実習 実習スクーリング	通信	34

(2)準正課、正課外の教育活動

- ①国家試験対策委員会活動：国試オリエンテーション、模試（自宅受験）、電話相談、既卒者への指導、等。
- ②チューター活動：担当学生の学修進捗確認や学習相談を、スクーリングや学習会等の行事時、メールや電話にて実施。

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

健康課題を有する子どもとその家族について正しく理解し、対象児と家族に必要な援助を全方位的に考察したうえで、優先順位をつけながら適切な方法で実践できる力を養成する。

3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングや ICT 活用等の工夫点について）

- ①レポート作成の要点を提示した講義や指導の実施
- ②学生の生活（仕事や家庭の事情等）を考慮した具体的な学習計画の提案
- ③小児看護・医療の現場の実際や小児や家族を取り巻く社会の現状、法律・制度の最新事情の例示

4. 今年度における教育方法改善の取り組み

小児看護学関連単位全員修得に向けた支援（レポート作成のためのヒントの作成・配布等）

5. 今年度の学生による授業評価より

該当なし

6. 今年度の成果

該当なし

7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

該当なし

8. 社会的活動等

神戸市総合児童センターこべっこランド「極低出生体重児（1,500g未満）と保護者のための子育て教室  
YOYOクラブ」

9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・シラバス
- ・授業における配布・配信資料等

ティーチング・ポートフォリオ

教員名	川邊 玲子	所属学科	看護学科通信制課程	職名	講師
クラス担任	なし	クラブ顧問	なし		
委嘱委員・職務	臨地実習委員会 副委員長				

1. 教育の責任（教育活動の範囲、担当科目）

(1)正課 科目責任者の科目には○印

科目名	開講学科	開講年次	開講時期	科目の種類	科目の形態	授業形態	受講者数
老年援助論	CCN	1.2年	通年	必須	テキスト学習	通信	8
老年看護学演習	CCN	1.2年	通年	必須	テキスト学習	通信	47
老年看護学実習	CCN	1.2年	通年	必須	見学実習スクーリング	対面	29

(2)準正課、正課外の教育活動

- ・ 担当学生（tutor）に対する個別指導

特に学修進捗が遅い学生に対して、電話やメールで現状報告や悩みなどを聴取し、個々の生活様式（勤務形態、家族構成等）や環境（職場の理解度や協力体制等）に寄り添った指導を行った。レポート執筆に関する質問等も積極的にできるように促した。学修が順調な学生においては、褒めと労いによってモチベーションの維持向上に努めた。孤独を感じやすい通信制課程の学生は、教員のメッセージによって「元気が出た」「頑張る意欲がわいた」などの声が聞かれることが多く、電話やメッセージ等、送ることを躊躇している学生にとっても、効果的な関わりであったと考える。

2. 教育の理念（育てたい学生像、教育のあり方、教育への信念）

- ・ 老年看護学領域では、超高齢社会の日本における高齢者の看護の重要性を理解し、尊厳と敬意の念を持ち、発達課題である英知の獲得と化学的根拠に基づく老年看護を臨床で展開できる学生の養成をする。

3. 教育の方法（2の教育の理念を実現するための方策、取り組み、アクティブ・ラーニングや ICT 活用等の工夫点について）

- ・ 見学実習後3日間の対面授業において、老年看護学概論の振り返りとして、老年期にある高齢者の発達課題である「英知の獲得」の理解を深めた。加齢変化が身体面、心理面、社会面にどのように影響を及ぼし、またそれに関連づけた援助計画の実施が行われていた臨床での根拠に基づく援助を深めるために、グループワークを行った。少人数あるいは1人実習となった学生もあり、2日間という短い実習では理解できなかった援助の根

拠について、4人というグループのなかで、意見や学びを共有することで、2日間では得られなかった根拠に基づく援助の理解が深まったと考える。

- ・ 老年期の特徴ともいえる認知機能の低下によって、安全を重視するための身体拘束が優先されることが多くあることの現状から、尊厳と権利擁護について、学生のこれまでの経験や実習先での体験を踏まえたディスカッションにより考察を深めた。
- ・ グループダイナミクスによる個人や集団のパフォーマンスが得られた。
- ・ 化学的根拠に基づいた看護展開においては、既存の臨床経験と新たな学びから「つながる」ことを実感できるように、レポートで指導し、対面ではそれをさらに深められるよう指導を行った。

#### 4. 今年度における教育方法改善の取り組み

- ・ 4人1組のグループ編成とし、司会、書記、発表者を決め、ワークを円滑に進められるように構成した。実習やレポート課題にはない「関連図」の作製をグループで行い、3つの側面との関連性について理解を深めることが出来た。
- ・ 協働や連携は、臨床看護においても重要であるため、グループ内での協働、連携によって討議することで再認識できるように構成した。

#### 5. 今年度の学生による授業評価より

#### 6. 今年度の成果

#### 7. 今年度の課題と次年度に向けた改善策

評価対象の授業なし

#### 8. 社会的活動等

- ・ 大阪ライフサポート協会正会員
- ・ 奈良県救急安心センター #7119 接遇及びメンタルヘルス研修 講師

#### 9. 根拠資料（資料名のみ）

- ・ シラバス
- ・ 授業における配布資料
- ・ 動画DVD（医学映像教育センター）